恐竜文学

東雅夫編



河出文庫

東雅夫編

CO193 ¥950E

定価 本体950円 (税別)

ISBN4-309-40554-1

恐竜文学

¥950



河出書房新社

カバー写真 カスモサウルス(1980) ©1998, William Stout カバー装幀 村上光延 フォーマット 粟津 潔



河出文庫(銅の新刊)

失われた古代の王者

明治の奇想天外な物語から、SFの名作、珠玉のエッセイ・短歌まで〈恐竜幻想〉のすべて!!

定価998円 本体950円



河出文庫

恐竜文学大全

東 雅夫編



河出書房新社

恐竜文学大全 目次

午後の恐竜 星新一 9

危険水域

井上雅彦 33

過去の翳 豊田有恒 40

大相撲の滅亡 小林恭二

123

クラシック・パーク

景山民夫 143

恐竜レストラン 荒俣宏 164

イグアノドンの唄――大人のための童話 中谷宇吉郎 167

水中生活者の夢*香山滋 種村季弘 186

湖上の怪物 W・A・カーティス(佐川春水訳) 196

楢ノ木大学士の野宿(抄) 宮沢賢治 216

沼 吉田健一 238

恐竜展で 清岡卓行 256

トリケラトプス 河野典生 264

恐竜 山野浩一 289

ここに恐竜あり 筒井康隆 317

恐竜と道化 井辻朱美 327 恐竜文学大全

「そろそろ起きるとするかな……」

午後の恐竜

星新一

男は目をさました。 ねどこのなかで軽くのびをする。どこかで、 近所の幼い子供たちの、

夢中になってさわいでいる声がする。

1

「わあ、怪獣だ。怪獣だ」

も、すぐにわかった。 と叫びあっている。そのなかに、 男は手をのばし、枕もとの時計を取る。 幼稚園 カーテンごしの陽の光で時計を見る。午前十時半。 へかよっている彼の坊やの声がまざっていること 午後の恐竜

11

うために毎週の勤めをしているような気になることもあるのだ。 男はつぶやく。彼にとって、日曜の朝のこの寝坊ぐらい好まし いものはない。

もっとも、けさは七時ごろだったか、 妻に一回ゆり起された。

「ねえ、あなた。ちょっと起きてみない。面白いわよ」

と、ささやかれたような気もする。

しかし、男はねむい声、ふきげんな声でどなりかえした。

回復するのだ」 「おれを起すな。 日曜の朝ぐらい、 ゆっくり眠らしておいてくれ。 週間分の疲れをこれで

「のどかだなあ……」

は言ってみた。 めざめと明るさのなかで、 眠りのなかで、なんだかわからないが不安にみちた夢を見たようにも思えた。だが、 そして、 妻も起すのをあきらめたのだろう。男はいま、 毛布を引 つば って頭 すぐに忘れてしまった。さらに、それを確認するような口調で男 の上までか 30 り、 みちたりためざめを迎えることが 3 たたび眠りの国 「へと戻 へった。 でき それも

いるが、 きた。この家。小さく、都心へ通勤するにはけっこう時間が 彼は三十歳ちょっと。 とにかく自分の家なのだ。 努力したか 43 があって、 このあいだやっと自分の家を持つことが か かり、 借金もたくさん残って 7

子だといいな。 のない生活といえた。 家族は妻と坊やひとり。数カ月後には、 男は楽しく空想した。 高望みすればきりがないが、 もうひとり子供がうまれる予定だ。 いまのところ大きな不満 こんどは女の

玄関から子供が、叫び声とともにかけこんできた。

「わあ、怪獣だ。怪獣だ」

男はそれにねころんだまま声をかける。

「怪獣ごっこをやっているのかい」

「あ、パパ。起きていたの」

坊やはあわてて声をひそめた。 パを起さないよう、 母親に注意されていたのを思

たのだ。男は言う。

「ああ、おはよう。 だれと怪獣ごっこをやってるんだい」

「ううん、 ごっこじゃないよ。本物なんだよ。とってもすごいんだ」

る心で息づいている胸。 坊やの顔には、興奮がいっぱいにひろがっていた。楽しさできらきらする目。 手は制しきれぬリズムで休みなく動いている。

けじめなるものを、 男はこのさい、 本物とはなんのことだ、と男は思った。 少しは教えておかなければならない。 坊やの語法のあやまりを直してやるべきだと考えた。来年は小学校だ。 真に迫った遊びとでもいった意味なのだ

だって、本物なんだもの」

「本物の怪獣など存在しない んだ。 テ V ビに出 てくる 0 É な か に人間が入っているぐらい

知っているだろう。 言葉づかいはちゃんとしなさい」

「だって、パパ……」

坊やののどから不満げな文句が、 しかし、 はずんだ声で出た。 男の声は大きく

「だって、なんなのだ」

「自分でみてごらんよ」 坊やに言われ、男はカ

ーテンを引き、 くも りガラスの窓の戸をあけた。

うな形。 くすんだ茶色をしており、体長は二メートル半ぐらいだろうか。

男はうなり、

うなずくばかりだった。ワニのしっぽを短く

Ų

からだをずんぐり

くさせ

のそのそと歩いて

「マストドンザウルスっていうんだって」

の名にくわしいのがいる。 と坊やは言った。 遊び仲間のだれかに教えられ たのだろう。 近ごろの子供には、

的に伸びている。なかには十メー はえている。幹にはウロコのようなものがついており、 男はため息をついた。異変はそばの怪獣だけではなかった。あたりには妙な植物が何本も ١ ルを越す高さのものもあった。 いずれも空へ むかって、

「シダのたぐいだろうか……」

あたりには緑色の光がただよっている。こんなもの、昨夜まで影も形もなかったのに。 葉の形がお正月の飾りに使うそれに似てい た。しかし、 もっとずっと大きい 。そのた

どういうことなのだ・・・・・

坊やはそとへ出て「怪獣だ、怪獣だ」と叫んでかけまわっている。 また男はつぶやき、そこに呆然と立ちつくした。坊やのほうは、少しもじっとし 雪のつもった朝も楽しいが、きょうはそれよりはるかに刺激的な のだ。 V) つのま 7 いられ か

そこへ、さっきのかどうかはわからない が、 またマストドンザウ iv スがあらわれ

気がつき、あわてて叫ぶ。

「気をつけろ、 そのとたん、怪獣は坊やにむかって、大きな口を開いた。体長の三分の一はありそうな口 ノコギリよりとがった、ギザギザの歯の列が白く光り……。 坊や。その変なやつに近よっちゃだめだ。 あぶないぞ。

いらした感情のこもった口調だ。 いている。そのなかで最も年長の、 いコンクリートの壁にかこまれた、大きな地下室のなかで、大ぜいの男女が忙しげに動 制服姿のひとりが叫んだ。青ざめた顔をしており、

「おい、XB8号との連絡はまだとれないの か

「まだです。無電を総動員し、最大の努力はしているのですが……」

壁ぎわに並んだ計器類のランプが点滅し、ピーピーいう信号音や、 ブザーの音。 コンピュ

ーターの磁気記憶装置の回転。

「急げ。 なんとしてでも、 連絡をつけねばならぬ

司令官」

おたがいに話しあうざわめき。 その なかで、 だれかの驚きの叫び。

「おい、なんだ。このワニのお化けのような怪物は。どこから出てきたのだ。

ずらか……」

「きゃっ、こわい……」

女性のかん高い悲鳴。 だが、 それらを押えつけるように、 制服のいかめしい司令官の声。

「ワニがどうした。 くだらんことでさわぐな。 XB8号との連絡をとれ。 それ以外のことは

3

手で目をおおった。 坊やにむかって勢いよく閉じた。それを見て男は、 窓のそとのマストドンザウルスは、 すさまじさの発散する口を大きくあけたかと思うと、 のどに絶望的な声をつまらせながら、

しかし、子供の頭の砕ける音も、苦痛の音も聞こえてこない。 面白くて面白くてたまらないという、心からの笑い声。 響い てきたのは坊やの笑い

「あははは、どうだ、怪獣……」

棒は空を打つだけのように動いた。 きれでたたいた。いや、本人はたたいているつもりなのだが、そこにはなんの反応もなく、 男がこわごわ目をあけると、坊やは無事だった。 目にははっきりと見えているのだが、 坊やは小走りに怪獣を追いかけ、 しているので

男は窓から手をのばした。そこにあるシダの葉をむしってみようと思いついたのだ。 それはできなかった。 なんの手ごたえも、 感触すらもなかった。 葉は鮮明にそこに見え

ているのに。男はむなしく何回か手のひらを開閉してから言った。

供もいる。 「夢を見ているのだろうか。 そうなると、幻覚なんていうものではない。どうしたんだ……」 幻覚だろうか。だが、坊やも同時にそれを見ている。坊やに怪獣の名を教えた子 しかし、 おれはさっき目をさました。眠ってい るのでは

疑問をつぶやく彼の声は大きくなり、それを耳にした妻がやってきて言った。

「あなた、お起きになったのね」

えるべきなのだろうか」 一夜にして立体テレビが開発され、世界じゅうにむけてワイド版の放送を開始したとでも考 おまえか。 自分では起きたつもりでいるが、 とても信じられん。

「あたしにだって、わかるわけがないわ」

いつからこうなんだ」

えてあげようと起したんだけど……」 「けさからよ。だけど、朝のうちは樹もこんなに大きく茂ってはいなかったわ。 あなたに

その記憶は彼にもあった。どなりかえして眠りつづけたことだ。男はうなずく。

なかのほうが赤っぽく、 「さっきまでは、もっと小さいサンショウウオみたいなのがうろついていたわ。 「そうだったのか。あの、ふとったワニのような怪物も朝からいたのか」 ぬるぬるした感じの皮膚の、 なんだか気持ちの悪いやつよ」 細長

「よく悲鳴をあげなかったな」

おれのような男性は、原因や理由を知りたがる。 「でも実在じゃないでしょ、それにそうたくさんはいなかったし、すぐになれたわ」 女性や子供は、すぐ環境になれてしまうもののようだな、 と彼は思った。それにくらべ、

「蜃気楼みたいなものじゃないの、そのうち消えちゃうわよ。あなた、「それにしても、どうしてこんなことが起ったのだろう」 朝ごはんなに食べる

にふさわしい相手ではなかった。 優先させるのは、当り前のことかもしれない。妻は彼にとって、この問題を真剣に論じあう 妻にとっては、 日常的な仕事のほうが重要らしかった。 実体のないものより食事のほうを

トーストとコーヒーだけでい 61 ここへ持ってきてくれ。 そとを眺 8

日々が戻ってきたようだった。すばらしい贈り物の待っていたクリスマスの朝のめざめ。 ないという、うわずった声だ。眺めているうちに彼の心にも、遠いむかしの子供のころの をうんと大きくし、あたりにばらまいたようなのだ。 どこからかまた、一団の子供たちのあげる歓声が聞こえてきた。もう愉快で愉快でたまら

妻は蜃気楼とか言っていた。男は蜃気楼を見たことがなかった。見たくて見たくてたまら

午後の恐竜

19

まりにも鮮明すぎる。 とはちょっと考えられない。蜃気楼とは、もっとぼやけたものじゃないだろうか 一生見ずにすごしてしまうものがあるが、そのひとつだった。 そこに彼は、なにかたまらなく不安なものを感じた。 しかし、 か。これ

かった。 男はトーストをかじり、 そこをとなりの家の主人が通りかかった。中年の人で、犬を連れての散歩のかえり コーヒーを飲んだ。この窓のそとはせまい庭で、 その to こう んは道

一おや、こんにちは……」

声をかけられ、男は返事をする。

「きょうは妙なことが起りましたなあ……」

幻覚 隣家の主人はそれをなだめ、おとなしくさせた。 レをつけた、 ほかにあいさつのしようがなかった。その時、また変な生物があらわれた。 でもないらしい。男は聞いた。 巨大なトカゲのようなやつだ。ゆっくりと歩き、去ってゆく。犬がほえかかる。 犬の目にも見えるらしい。人間だけの集団 背に大きなヒ

「この一帯だけの現象なんでしょうか。 ずっとむこうはどうな んでしょうか

いい気持ちじゃありませんね。 「あっちのほうでは、さっきとても大きなトンボが飛んでましたよ。害はないとい なにか言ってますよ。 要領をえないことですが……」 どうやら、世界じゅうらしいですよ。テレビをつけてごらん っても、

「そうしましょう」

通報したのが最初のようです。 をくりかえしますと、外国の生物学者がプールの底をはっている三葉虫を発見し、 えた原始的な生物で……」 かった。わが国の時間にして、本日の午前一時ごろのことです。 ルを回すと、ニュース解説のアナウンサーらしいのが、まじめな表情でしゃべっていた。 「……この不可解な現象は、依然として世界的な規模でつづい 男はスイッチを入れた。甘ったるい歌声が流れ、若い女性の顔がうつった。 もっとも、発見はしましたが、手でつかもうとしてもできな ております。これまでの経過 三葉虫とは太古の海底 別なチャンネ 新聞社に

ゲストの生物学者が、その先をしゃべった。

「この三葉虫は、いまから四億年以上も前の、 カンブリア紀にすでに発生し……」

化に 要するに、化石にしか残っていない古い古い生物というらしい。それから、この現象は進 関係があるらしいとも言った。幻としてあたりに出現しているこれらの動植物は、 に進化のあとをたどっているという。 学者は図をめくりながら、 11 ろ 41 ろな古生物 あき 0

くりと通りすぎてい 妻の言っていた大きなサンショウウオのような図もあった。さっきのマストドンザウルス しかし、その図は必要なかった。 ったのだ。 その時、 テレビスタジオのなかを、 それがゆ

「進化りで舌はっかりまアナウンサーが言った。

進化のお話はわかりました。で、 わたしの専門は古生物学でして、それ以外のこととなると、どうも……」 なぜこんな現象が起ったのでしょう」

7

白いのだ。 れも外出しようとしないだろう。休日なのだし、どこかへ行かなくても、 注意した。あたりに気をとられ、 と知っているからでもあろう。それからアナウンサーは、なるべく外出をひかえるようにと アナウンサーはそれ以上あまり突っこまなかっ 運転をあやまって事故を起すといけないからだ。 た。 失礼でもあるし、解答が期待できない これでけっこう面

窓のそとの樹は、 種類が少し変ったのか、 より高くなり、 葉も多くなった。

4

おい、NB8号との連絡はまだとれないか。どうだ」

かけても答えません。それに、 「だめです。さっき、 制服の司令官は表情をひきつらせながら、ヒステリックに言った。だれかが答えた。 それらしい電波が入ったのですが、うつろな笑い声だけでした。問 あまりにも瞬間的だったので、 位置のつきとめようがなか

たのです」

たら、どんなにありがたいだろう」 もつんでいるんだ。まちがいがあったら大変なことだ。 「呼びつづけるんだ。あのXB8号という最新原子力潜水艦は、水爆弾頭のミサイルを十発 事故で沈没したとはっきりし こてくれ

「司令官。沈没を期待するようなことをおっしゃっていいのですか」

報復がなされ、それをきっかけに全世界が核戦争に巻きこまれる」 「もし、かりにだ、どこかの外国に発射してみろ。まちがいですむことではない。 ただちに

女の悲鳴がした。 司令官はこまかくふるえ、 そばの者は泣きそうな顔になった。 広い 部屋のどこかで、

「あら、こんな大きな卵が……」

はしない……」 「卵が割れて、黒いコウモリみたい のが出てきたぞ。いや、 コウモリだったら卵からうまれ

司令官はにがにがしげに言った。

「よけいなことでさわぐな。そんな場合ではない。原子力潜水艦NB8号との連絡だけを考 とりかえしのつかないことになるぞ」

「わからん。その方面へ問い合せてみてくれ。 しかし、司令官。さっきからの、この幻覚みたいな現象はなんなのでしょうか 生物学の分野なのか、 心理学の分野なのか、

気象学か地質学かさっぱりわか みたいなさわぎが加わらなくてもい でらん。 į, ああ、 のに……」 なにもこんな非常事態の時に、 こんな子供

ļ

男は午後のひとときを、そとをながめることですごした。

っていた。一羽でなく、いくつもいくつも。翼の裏が変に赤っぽいのも とてつもなく大きい、黒く、三角のような翼の鳥が、どこからともなくあら いる。

なかには、空中でおたがいに激しく争っているのもある。 鋭い歯の並んだく

みつきあうのだ。男は妻を呼んだ。

「おい、きてみろ。面白いぞ」

彼女はそばへ来て、空をあおいだ。

「ほんと、壮観ねえ。あれ、なんていう鳥なの」

読んだことがある」 「知るもんか。あるいは、翼手竜とかいう種類なのかもしれないな。 そんな名前をなにか

「長いしっぽを下げて飛んでるのもあるのね。 すごいわ……

面白い ことは面白い かい しかし、 おれは不安でならない。さっきからそうなんだ。 これ

らどうなるのか……」

しかし、男には、どう不安なのか説明することができなかった。 彼女もまた、そんなけはいを感じたのかもし しれない 0 妻もしばらく沈黙をつづ

遠くから、子供たちの歓声が聞こえてきた。

「わあ、恐竜だぞ。大きいなあ、すごく大きいなあ ····

あ二十メートル以上はあるだろうか。子供たちの叫びにまざる言葉で、ブロントザウルスと いう名らしいとわかった。胴からは長いくびが伸び、その先に小さな頭がついている。 それはやがて、こっちにもやってきた。丸い小山のようなと呼ぶべき感じで、全長は、

ののようだった。地球の王者にふさわしいのは、人間でもライオンでもなく、これ以外にな 0) げで、いやに人間的なところもあった。 ようにさえ思われた。しかし、小さな頭につい 明るい陽のなかの恐竜は、 ゆっくりとゆっくりと歩いている。なにを急ぐ必要があるんだ、といわんばかりだ。 堂々として偉大で、どこか荘厳で、気品すらあり、生命そのも ている目は、 ユーモラスなくせになに

「あら、うちがつぶされるわ……」

のだ。 妻がかん高い声をあげ、彼にしがみついた。 せつかく作った、 この家が……。 恐竜の足が、 屋根にむかってふみおろされた

もちろんなんともなかった。 ちょっと薄暗くなっただけで、 やが てもとに戻った。

わせて笑いあった。 しっぽをひきずりながら、 幻の森のどこかへ消えてい ・った。 彼と妻は、

てしまうだろう。 かったのだ。それに、幼稚園ていどの子供には理解しにくく、見物して面白がるだけに終っ 男はふと思いついた。 しかし、それはやめておくことにした。教えようにも、 ちょうどい い機会だ。 この際、 坊やに進化につい 彼にはその知識があまりな て教えておくとす

男は百科事典があったことを思い出し、ページをくって、それがイグアノドンという名前ら しいとわかった。こんなことで百科事典が役に立つとは、買った時には考えもしなかったな ゴジラのような形の大きな恐竜が通ってい った。 さっきのより動作が 42 くら か す B

つ、 それなのに、 のドラマが展開された。どこか異様だ。 さまざまな恐竜があらわれ、去ってい 時どきそれらが争い、また、巨大な翼手竜も空からおりてきて、争いに加わったりした。 音はしない。静かななかで、音声部分のこわれたテレビのように、激しい争 った。 背中にギザギ ザのついたや つ、 つの

家庭でもそうしていることだろう。 壮大なショーではあった。 彼と妻はい つまでも見あきなかった。 きっと、

6

「XB8号はどうした。 司令官が叫んだ。 声が まだわからんか。 かれかけている。 しかし、 核兵器をつみこんだ潜水艦は 答は変りな

まだです」

電話のベルが鳴り、だれかがそれを聞き、報告した。

経性のガスで、人の意志を麻痺させ、どんな命令にも服従させる効力を持って XB8号の艦長が、 特殊ガスの小型ボンベを持ち出していることが判明したそうです。 いるやつで

精神状態のデータを、担当の心理学者に問い合せてくれ。 行為だ。艦の乗員たちは、艦長の言うがままだ。どう発展するかわからんぞ。 航前に艦長のやつを射殺すべきだったんだ。しかし、もうまにあわぬ。おそらく、 「なんだと。特殊ガスの管理がそんなルーズなことでどうするんだ。こうと知ってたら、 それを聞い て、司令官は思わずすわりこんだ。しかし、 なんとか立ちあがりながら言っ

「あ、壁から恐竜の首が……」

緊張した命令が飛んだ。

そのなかで、

だれかが叫んだ。

幻影のことなど、 気にしている時じゃない」

午後の陽ざしが傾くにつれ、恐竜の数も へり、 植物のようすも変化し てい った。

「もう、これでおしまいなのかしら」

男は言った。

うさ。 祖だ。寒さにたえられる種類だよ」 スというか、小さな小さな鼻の短いゾウといった感じの動物が歩いている。ホニュウ類の先 「いや、そうじゃないだろう。気温の変化のため、恐竜の時代が終ったとい ほら、 変な形だが、羽毛らしきものをつけた鳥が飛んでいる。ぶかっこうで大型 うことなのだろ カリ

「あら、べつにあたし寒くないわよ」

「いや、この幻の進化のドラマ。それが氷河期に入りかけたということさ」

なったからだろう。 坊やがそとから帰ってきた。つまらなそうな、さびしそうなようすだった。 恐竜が

「どうした。 おなかでもす いたのか。 その ^ んにお菓子が ~あるよ

「ううん。まだすいてないよ。小さなお馬みたいなのが歩いていたけど、 だれも名前を知ら

ない パ、知ってる……」

ていった。 ては、百科事典のどこを引けばい 男は教えるべき知識を持ちあわせていないことを残念に思った。恐竜以後の古生物につい 1/2 のか見当がつかなかった。 坊やはまたそとへとかけだし

幻の植物はいつのまにか、枝にくねりのある見なれたものとなりつつあっ

「もう、そろそろ夕方よ。これ、 いつまでつづくのかしら」

「わからんよ……」

しかし、男の背中にはその時、 疑問に答えるかのように、 なにかぞっとするものが走った。

不安が恐怖へと高まったのだ。

「司令官。心理学者から電話です」

「はい、この異常現象について、ひとつの仮説を立てたのですが……」「よし、よこせ。……もしもし、なにか判明したか」

そう聞いて、司令官はがっかりした。

27

こっちの知りたかったのは、 XB8号の艦長と精神状態についてだったのだ。

気の傾向が発見できたかどうか……」

「申しわけありません」

聞いておこう。この変な現象の仮説とやらを」

簡単にいえば、きわめて大規模なパ ノラマ視現象じゃないかと思います」

「それはなんだ……」

です。 ひろげ……」 「人間が死に直面した瞬間、 あっというまに、 すべてを回想するとでもいいましょうか。その規模と範囲をぐっと 過去の人生をごく短時間のうちに、 順を追って見る現象の

司令官は小声で聞きかえした。

「人類のパノラマ視現象とでもいうのか」

時間ほど前じゃないかと思います。 現象の開始した時刻をコンピューターにかけて逆算してみました。それによると、 「いいえ、動植物すべてを含めてのものでしょう。 原始生命で人の目にはふれなかったでしょうが……」 いまの進行のスピードから考えて、

「なんだと。うむ……」

司令官はいやな予感を覚えた。 外部には極秘にされているが、 それはXB8号が 切の連絡を絶ったころと一致し

艦長の狂った頭が、水爆ミサ イルを全弾ぶっぱなす決意を、 その時刻に か ため たため

阻止する方法もない。 い。それは、 もはやなにものを以てしても阻止できない勢いとなった。

るのだろう。 わりながらたどってきた生命の過去。それがこの一日という、 としているので、 その変化を地球上の全生命が感じとった。 伝えあい、この壮麗なパノラマ視現象をくりひろげている。全生命がその最後を飾ろう かくも鮮明なのであろう。地球が太陽のまわりを、何億回、 生命の持つ神秘な敏感さ、 かすかな瞬間に それが微妙に感じと 何十億回とま 再現され てい

話器をにぎったまま、しばらく言葉が出なかった。 たのかもしれぬ。司令官は思った。もはや、いかに努力しても手おくれなのだ。 人間は変に思考する能力があるため、かえってわからなかっただけなのだ。運命はきま 司令官は受 つ

者、じっと見つめる者、品のない冗談を言う者、 し、女性もいる。いずれも裸で、かみの毛を長くのばしている。前衛的な若者の ト大会という感じもするが、もっと素朴で健康的だ。裸の一団を前にし、 部屋のなかがさわがしくなった。どこからともなく原始人があらわれ さわぎは大きくひろが たのだ。 る。 目のやり場に困る 男性も ヌーディス

「おい、静かにしろ。電話中だ……」

木をこすりあわせているのがある。超近代的なエレクト 司令官がどなったが、ちょっとおさまりそうにない。原始人のなかには、 ロニクス設備のそろったこの地下室 火をおこそうと

との対照は奇妙だった。

武器。原始的な火から核兵器へ。矢からミサイルへ。これが文明なのだ……。 また、石のヤジリで矢を作り、弓につがえる原始人もある。人類の持ったはじめ

むかって大声で聞く。 司令官はそんなのに目をとめ、感慨にひたっているどころではなかった。

「いまの調子で進むと、現代まであとどれくらいの時間 があるか」

るかどうか。……あ、 「おそろしい計算なので、 この部屋に長いキバのマンモスが入ってきて……」 やる気にもなれません。手をつけても、 やり終るまでの時

9

ツルのむれが飛び、クマがねそべった。 はかげろうとしている。思いがけぬ日曜日も終ろうとしている。 野生の馬が走り、

あけましょうか。 「晩のごはん、なんにしましょう。買物に出 あなた、お酒を飲む……」 かけるひまがなかったので、 おかずは缶詰でも

妻が聞いたが、男はふるえながら言った。

「そんなことより、坊やを早く呼んでこい。そのへんでシカでもながめているはずだ」

やがて坊やが戻ってきた。

「パパ、なあに」

「ここにいっしょにいなさい。うちにいるんだ」

もうすぐ夜になるからなの……」

「そうだよ。夜になる。長い長い夜にね」

妻が聞きとがめ、口を出した。

「それ、どういうことなの」

「なんでもない。わからなくていいんだよ」

そとのたそがれのなかで、古代人どうしが戦って いた。 戦う人たちの武器は、

「もうすぐ今になるんだね。パパ、それから未来があらわれるんでしょ。早く見たい

改良され、強力になってゆく。近代戦……。

「だまって、もっとそばにいなさい。おまえもだ……」

坊やが目を見開いて言った。

男は妻子を強く引きよせた。

この壮大なパノラマ視現象の最後を見た。自分の楽しかった少年時代、 の音を耳にしてからなにもかにもが超高熱の爆風ですっとぶ、ほんの一瞬のあいだに、男は 空気をつんざく音がした。それがミサイルの音とは知りようがない。 悩みの多かった学生

に健康で育ってきたこの坊や……。 就職、 そして結婚。 子供の誕生、 やっと自分のものになったこの家、 これまで

危険水域

井上雅彦

ごろだ……」 「そうだな……」 引退した灯台守も、 確かに、こう証言している。「……あれがやってくるのは、 いつも今

まるで、誰かの小説のような事の運びだった。

をものにしようという、 きたのは、なぜなのか。 ったのか。 ものにしようという、いずれ劣らぬ強兵揃い。|通信部には特派員など、星の数ほど控えている。 軍の巡視船をこっそり追いかけて、ことの真相を確かめる仕事が、彼にまわって チャンスさえあれば、 ―そのなかで、なぜ、彼に白羽の矢がた ピュリッツァー賞

33 旅支度をしながら、 彼自身にも、 さっぱりわからなかった。 決定が下される直前に局

危険水域

無駄話を思いだしても……である。 長のデスクの前で、 女版ロバート・キャパを目指しているグラマーなカメラマンとしていた

「ジェフ・ゴールドブラムでなければ、いけない理由があるんだよ」

目を丸くする彼女に、 彼は言った。「『ジュラシック・パーク』の、 あの脇役

「だけど、あの俳優ってー

彼女は言った。「何を演っても、 ザ・フライに見えちゃうわ

「そこなのさ」

……だったのさ」 ここぞとばかりに、彼は力説した。「蠅男でなければ おそらく、一九五八年の 『蠅男の恐怖』の初代蠅男デビッド・ヘディスンの身代 ならなかったんだ。 ゴールドプラム

「身代わり?」

史上初の恐竜映画さ。……そう考えると実に、スピルバーグらしい趣向だろう」 「デビッド・ヘディ もちろん、 尊敬にかわりつつある彼女の視線を感じながら、 ヘディスンの出ているのは二五年のオリジナル版ではなく、 スンが、 かつて出演した、 ある映画 彼は言った。「『ロスト・ワールド』 のオマージュ……としてね 六〇年のリメ 1

版のほうだ。だが、職場の女性の関心を引くには成功したようである。もっとも、局長の関 心まで引いてしまったのは誤算だった。あまり根拠の無い――でも、半ば本気で考えた―

珍説を、 あの局長は、 じっと聞 12 てい たに違 ない。 そして……彼を選んだ。

「なんだって、俺が、 こんな取材を一

っていた。あのサイモン・オークランドそっくりの、百貫でぶの局長め。横に、あのグラマ な美人カメラマンが同行していなかったら、とっくに投げだしている取材だぜ。 -小さなヨットのばかでかいエンジン音を、海霧のなかで聞きながら、彼は局長を呪

るのは、問題の海域に入って、まもなくのこと……だった。 局長が、 映画マニアの彼を選んだ理由ー ―それを、彼がすっかり思い知らされるハメにな

「あれがやってくるのは……」

去年のカレンダーの印を見ても……」

引退した灯台守は、凪いだ海面を眺めながら、

話し終えた。

····

つも、

今ごろなのだ。

「まさか」 彼女が、ぶるぶる震える指を突き出した。 「あれ……のこと?」

彼と元灯台守とが、 一斉に舷側を見る。

元灯台守は、 彼の背筋に寒気が走った。 ゆっくり首を振った。「違うよ。……あれは、灯台だ」 白い海霧の合間に見えるもの。 「まさか

パイプをくわえた。 「海の上から、 元の職場を見るのは、 妙なものだが」

35

彼は言った。

「あれをやってるのが、

かなりの恐竜映画マニアであることは、

彼の動悸は治まらなかった。

首の長い灯台は、 ゆっくり遠ざかる。

海霧は、古いミルクのように、 ねっとり濃度を増してきた。 そして……温度も。

寒いわ」

白霧のなかで、彼女が言った。 寒い」

熱い珈琲でも煎れようか。

そう声をかけるより早く、彼女は、 白霧のなかに、呑みこまれるように消えていく。

彼女の名を呼ぶ。……長い沈黙。

ドンの闇を切り裂く怪人の顔。ライオネル・アトウェル……マイケル・ガウ……。 の脳裏を掠める。 一瞬、冷気に襲われる。 ……イーウェン・ソロンだったか、ウェルナー・クラウスだったか。 かつて、銀幕の霧のなかに現われた殺人鬼たちの顔が、 次々に彼 ロン

その瞬間ー 悲鳴が白霧を引き裂いた。

彼女の悲鳴。まぎれもない恐怖の絶叫が、 何を見たのか。 まさか。背後に感じる、 闇をつんざいたのだ。彼は、 ただならぬ気配。 恐ろしい冷気。 足がすくんだ。

彼は、ゆっくり振り向いた。

そして……彼は見た。

殺人鬼の幻想はおろか、 現実の様々な常識も、 一瞬にして、 粉々に砕け散った。

下ろしていたのである。 だのと、同じ叫び声だった。……そう。キング・コングを目撃した時の。 彼の口 想像を絶する巨大な怪物が――首の長い、前世紀の怪物が から、彼女と同じ悲鳴が、飛びだした。 それは、 映画で、 白い海霧のなかで、 フ エ イ . V イ が 弾ん

「こんなに近くで見たのは、はじめてだ」 引退した灯台守は、興奮して言った。

「あれは……恐竜の一種だわ」

彼女が言った。「アパトサウルス?」

「昔は、プロントサウルスといったものさ」

彼が言った。「特に、この映画――『ロスト・ ワ ールド』ではね……」

潮風のように、三人を冷やした。

半透明の恐竜は、白霧のなか、月に向かって、 鎌首をもたげた。

あれが映画だなんて、信じられない……」

女流カメラマンは、ぽつりと言った。「あの霧をスクリー わからないが」 ンにして上映してるの?」

恐竜100万年』の暴竜……。 霧の中で恐竜は、 次々と姿を変えた。『キング・コング』 の雷竜、 『前世紀探検』 の剣竜、

「あれが、やってくるのは」

んな道楽者がやってるんだか……」 は、海に向かって、上映会をやる。 元灯台守が、 言う。「いつも、 今ごろなのだ。 最初は、 本当の海の怪物かと驚いたが……いっ 白霧の出る頃、 豪華 な Ξ " 1 で乗 たい、 n つけ ど 7

しかし、 今年は時期と場所が悪すぎるな」

のヨットの恐竜マニアにコンタクトだ!」 彼が言った。「ぐずぐずし ていると、 軍の巡視船が駆けつける。 その前に、 取材 謎

「なあ とるにたりな い発明じゃよ」

ン……フィル・ティペットや、 など。あのデルガド兄弟の造型した巨猿や恐竜……オブライエンやゼーマン、 どことなくネモ船 長に似た老人は、不思議な笑い デニス・ミューレンの偉大な仕事に比べれば……な」 を浮かべて言った。 「この特殊映写装置 ハリー ハ ウゼ

「いったい、 何のために」

彼は、 訊いた。 「この海で、 上映会を?」

「あいつに、 見せるためさ」

巡視船 つ 7 それ以上の答えは聞けなかった。軍の巡視船がやってきたのである。謎の老人のヨットは 老人は答えた。 12 なかった。 の警告を無視して、逃走した。 「この美しい海に、 軍の監視と周辺諸国の猛反対のなか、 ひとりぼっちで棲んでいる、 危険水域をどこまでも。それから、 核実験が強行されたのは。 あい つにな……」 いくらも時間は経

を襲撃した、 か めようもない。 の老人が まさにその夜だったから。 軍に拿捕され、 闇の淵から、海草と放射能をしたたらせた巨大なものが這い 監禁され 7 64 るとい う噂を、 彼が 一耳に したのは翌晩だっ あがり、

委員会がたてたものらしい、案内板があるから、ここにまちがい 道から左へ折れる地点で迷ったが、 目標の小学校は、 すぐに ない。 わ か ~つ た。 清戸迫町

いた。 れたち二人とも、ほこりだらけのひどい服装をしている。そうなることが判っていたので、 ず微笑んだ。すくなくとも、 ジーン りと降りてきた。わざと、 おれは、車を降りて、助手席のほうにまわった。ドアをひらいてやると、 ズのラフなスタイルで、でかけてきたのだが、 そのゼスチュアにはふさわしくない恰好だったからである。 レディのような身振りで、車から降りたので、 由紀子の頰っぺ たには、 由紀 おれは、おもわ 泥までついて Ø つ

「もう四時半だ。今からでも、開けてくれるかな?」

おれは、 由紀子の手をとって、 ひきずるように歩きはじめた。 小学校の校庭には、

徒の姿は 「東京の なか 仙波と言います。 つった。 宿直室らしいところへまわると、 遅くなってすみません。 中年の人がまだ残っていた。 今からでも古墳をあけてもらえます

「ああ」

いた。 用務員らし 清戸迫古墳を見学したいという申請は、すでに出してあり、そのOKも貰っている。 途中あちこちで時 い中年の人は、そう答えてから、 間をくっ てしまっ たので、予定時刻の三時をとっくに過ぎてしまっ 鍵束を持って立ちあがった。 7

うに踊り場のような形で、 校舎の右側 の崖のところに、 小屋がけした建物があった。 錆止め の赤 い塗料をぬり つけ た鉄 0 階段があり、 その上 一のほ

と、いちはやく保存の手を打ったわけである。 があった。早くから知られていた九州の装飾古墳が、 たち二人も、 コンクリートで、重々しい鉄扉がついている。 おれは、 加湿器が置かれ 用務員のあとから、階段を登っていった。登りつめたところにある建物は、 なかに入った。 てあった。 望みの装飾壁画と、おれたちとのあいだには、 合鍵でキイが開かれるのを待ちかねて、 ガラス壁の ほぼ全滅状態になっているのと比べる むこうには 壁画 無情なガラス壁 の剝落をふ

九州の王塚や竹の塚の装飾壁画が、 なまじ早く知られていたため、 もはやデザインすらも

跡までさかのぼっても、

主たるイベントとしている。確かに古すぎると言われれば、

せいぜい七千年。

それに対して、

フタバスズキリュウは、

七千万年

古すぎるにちがいない。縄文遺

げにはなっていた。 その点、この 装飾古墳は恵まれているわけだが、すくなくとも、おれたち二人 ガラス壁に水滴がこびりついて、壁画がよく見えないのである の観 の妨

「スポット照明は、二分以内」

ておけというつもりらしい。スポットライトをあてれば、玄室内部の温度が上昇する。 の保存のためには、観賞の不便も仕方のないことかも知れない 用務員は、言葉すくなに言い なが ら、スイ ッチに手をか でけた。 ٥ 二分のあ Va だに、 80

「スイッチを入れてください」

突然変異的な例外ともいうべき、高松塚の壁画などと比べると、 巨大な朱色の渦状文があり、その下に、線画のようなタッチで、 なるほど、アンモナイトだわ」 叫んだ。スイッチが入れられると、 玄室 の奥の壁画が はるかに稚拙な手法である。 騎馬の人物が描かれて 、はっきり浮 か U あ が 12 2 る。

由紀子が、うなずいた。

この巨大な渦状文は、 すべて同心円で表わされている太陽が、 ふつう太陽をデザイン化したパターンだと、言われ なぜ東北に限って、 渦巻きになっ てい る。 しか てい る

のか、説明がつかない。

かなり大胆な仮説だが、おれたちは、本気だった。 れと由紀子は、この渦状文を、アンモナイト化石をデザイン化したものだと、 信じ

う理由で、 加している古代史のサークルは、せいぜい縄文時代くらいまでの遺跡しか、対象としていな 流域を、目的地に加えるように主張し、仲間たちの冷笑を買ったことがある。 い。そのとき、 東北地方の古代遺跡めぐりの行事のとき、おれたち二人だけは、いわき市の大久町の大久川 実際、おれと由紀子は、古代史の研究会のなかでも、 仲間たちの誰一人、関心を示してはくれ 由紀子は、古生物学者として大久川流域の重要性を説い なかった。 むしろ異端のほうだった。 たが、古すぎると おれたちが参 まえ

仲間たちは、冷淡だった。古代史のサークルという会の性質上、 名をとどめ、やがて古生物学を志ざす。これは、ひとつのロマンの世界とすらいえる。 八メ った発見者の鈴木直氏は、いま古生物学者としての道を歩んでいる。 すくなくとも、 ートルの日本初出のクビナガリュウの化石とであい、発見者の特権として、その学名に わき市の大久川流域では、フタバスズキリュウの化石が発見されている。 おれと由紀子は、この重大な発見地を見逃がせない気持だった。 古墳や神社仏閣の見学を、 一人の高校生が、全長 当時高校生だ

まえの化石である。 おれと由紀子は、とうとう、会の公式行事をボイコットしてしまった。べつだん、 会の行事は、バス二台を仕立てて、とどこおりなく済んでしまった。 行かなければならない理由も見当らない。折からの古代史ブームで、 タイムスケール が、一万倍もちがうわけである。 会員が増えて

行事のスケジュールに入っていたが、おれたちだけは、 を張って参加しなかった。そして、その機会が、きょう訪れたわけである。 白河市の近く の泉崎古墳や、このいわき市の中田古墳など、一度みたいと思った目的 後日ふたりで行くことにして、

あり、 そのうしろに犬らしい動物がいる。 やや小さな騎馬人物像がある。渦状文の左には、 おれは、スポットに照らされた壁画を、もう一度みつめなおした。中央に巨大な渦状文が それに接して、古墳時代人らしい大きな人物がいて、左手をあげている。その右に、 びっくりしたような身ぶりの人物がい

それである。ヨーロッパでは、トグロを巻いた蛇に似ていることから、蛇、石と呼ばれて のアンモナイトの近縁の種であるオウム貝ー 頭足綱四鰓目は、 白亜紀後期のアンモナイト・パキディスクスは、直径二・五メートルにも達する。こ すくなくとも千年も昔から、知られている。菊石、カボチャ石などと呼ばれるのが、 アンモナイト化石が、発見されたときの様子を伝えているのではな 絶滅種として、いまに子孫を伝えていない。 ーノーチラスは、いわば生きている化石である。 しかし、その化石は、日本 いだろうか?

いは吉兆をあらわす、呪術的なものだったのではないだろうか 古代人にとって、渦状文をもつ石 - つまり、アンモナ イトの化石は、 なに

そう考えると、この壁画も、うまく解釈できる。

としている。そして、左手の下人は、単純に驚きを表わし、 中央にいる貴人は、アンモナイト化石を発見して、 そういう状況を絵にしたのだとも考えられる。 騎馬の武人に、 そのまた後ろで、 人を呼びにやらせよう 犬が吠えてい

な朱一色の壁画は、おれの目の虹彩のなかで、しばらく残像となって輝いていた。 泉崎や中田などの装飾古墳と比べると、はるかに保存状態もよく、 そんなことを考えているうちに、おれの目のまえで、スポットライトが消えた。 収穫というべきだった。

おれたちは、横穴式 白いなが の阿弥陀堂を見るより、有意義だと思うわ の古墳をでて、車のところに戻った。

車のシー トに坐りこんでから、ぼつりと呟くように言った。

解したものであり、平泉の中尊寺を手本としていることが判る。 重要文化財である。藤原の基衡 いわき市にある白水の阿弥陀堂は、古代史サークルの遺跡めぐりの見学コ 平安後期の特徴をよく留めている。白水という地名は、平泉の泉という字を分 の女が、亡夫である岩城の則道の冥福を祈るため建立した 阿弥陀堂の建物は ースに加えられ

十五年に国宝に指定されている。

下にしか分布していない。そして、その装飾古墳のある地域は、 ンモナイト化石をデザイン化したと、おれたちが解釈している渦状文の壁画は、 にみれば、この装飾古墳のほうが、はるか 日本列島では珍しい に重要とい

白亜紀層のある地帯と、完全に一致する。

デザイン化したものだろうか?そのあたりも疑わしくなってくる。 古墳というのは、九州と東北にしかない。 るなど、デザイン・パターンのうえの相違もすくなくない。渦状文は、 ができる。 一見すると突飛な解釈のようだが、 しかし、 関東地方をとびこえて、いわゆる海上の道から、東北地方に伝播したとみること 九州では、同心円で表現されている太陽が、東北では渦状文になってい おれたちに 例外的な高松塚古墳を除外すれば、九州から、近 言わ せれ ば、 それ な りの ほんとうに、 根拠もある。

おれは、車を走らせながら、あれこれと考えていた。

二万人という素人のボランティアが参加して、日本古代を発掘する作業が行なわれ たまたま古代史に興味をもったのは、野尻湖の発掘に参加してからだった。 古生物学の研究者である。現在、 があった。 R大学の大学院 で、研究して Va る。 野尻湖で 0 たが、

オオツノシカやナウマン象の化石には、 二万年前の原日本列島人が、 これら大型哺乳類を狩りの獲物とし、 明らかに人為的な傷痕があった。それは、 それらの絶滅

一役かったことを証明している。

とり自由のような状態になっていた。 そのころ、日本の古代史学界は、折からの邪馬台国ブームによって、よりどりみどり切り 由紀子が、 古事記や日 本書紀に目を通すようになったのは、 それからだった。

傾向さえ現われてきた。 ブームが過熱して、妙な方向へ向か 研究を吸いあげるという功績をもうけたが、 いはじめた。出版ブー そのうち、 ムも、 邪馬台国で一発当てようとい はじめのうちは、 在野の

おれと由紀子は、そういう状態のなかで、地道に日本古代史を勉強した。

あった。 ルポライターである。動物学にちょっぴり興味があり、 しかも古代史にも関心

を通りぬけていなかったことになる。 ったようになり、暗い国道を通ることになる。さらに走りつづけると、 平駅のあたりが最大の繁華街だが、しばらく走りつづけると、 市内を走りながら、あれこれと考えつづけた。 わき市」という標識にでくわす。つまり、そこまで来ても、 わき市は、日本最大の 完全に市街地からでてしま 市街地のようなとこ まだ、 面積をも る。 いわき市 国鉄

かすかな爆音のようなものを聞いた。 飛行機のも のだろうと思ったが、 そのとき

ころだった。 べつだん気にもしなかった。 そして、 帰路を急いでいるため、 前車との距離をつめたと

だろう。おれの車は、かなり速度をおとして、前車のトランクルームに吸いこまれた。 んでいった。おれは、夢中で、ブレーキペダルに足を突っぱった。 まさに、そのときだった。おれの車は、まっしぐらに、そのリアバンパーめがけて、突っこ さきほどの大音響と比べると、きわめてささやかな激突音が起こり、 すさまじい音響と同時に、 前車が、 ブレーキライニングの悲鳴をあげて急停止 咄嗟の判断がよかったの おれの車は前車に追

うに非があると、見なされてしまうにちがいない。 おれは、 とっさに、車からとびおりた。たとえ、 どのような弁解をしようと、 追突し

い。だが、そう見えたのは、一瞬のあいだだけであり、 の尾翼のようなものが倒立していた。あきらかに、飛行機の墜落事故が起こったにちがいな 「上を見て!」 そのとき、おれは、十台ばかり前方をみて、呆然として立ちすくんだ。そこには、飛行機 おれが、前車の運転席をのぞきこんだとき、由紀子も、車をおりて、すぐそばに来ていた。 前方では、すぐ火の手があがっ

のしかかるように、そびえたっていた。 由紀子がわめいたのは、そのときだった。右手のはるか上方に、傾きかけた巨大なものが、 五十万ボルトの送電塔である。 さきほどの飛行機は

そこに激突したにちがいない。

かほどから二つに折れ、こちら側に倒れかかってくるところだった。 鉄塔は、きゅうに傾斜をました。まるで、スローモーション・フィ ルムで見るように、

「逃げるんだ!」

の五、 ボルトの超高圧電流の火花が炸裂した。 おれは、叫んでから、走りだした。車列の左側にまわりこみ、由紀子の手をとっ 六歩も走ったろうか。そのとき、すさまじいショックが襲い、 おれの目の前に五十万 もの

それから、どれくらい意識を失っていたか判らない

ていた。あるいは、海水の冷たさのために、意識をとりもどしたのかもしれない。 目をさましたとき、おれは、海岸に倒れていた。打ちよせてくる波が、おれの右手を洗

なかで、由紀子の髪が風にあおられて、しなやかに舞った。 の姿を認めたので、体をひきずるようにして近づき、そっと頭を抱えおこした。 おれは、のろのろとした動作で、上半身を起こし、あたりを見やった。すぐ近くに由紀子 おれの腕の

|由紀子!

ように、頸をねじまげてから叫んだ。 呼びかけると、 彼女は、かすかに薄目をあけ、 それか ら、 あたりを見まわそうとするか

どこなの?」

いる。 されたのかもしれない。 ろに投げだされたのだろうか? おれたちが辿っていた国道は、海岸に近いところを走って 人の車は、見あたらなかった。あるいは、事故のショックで、二人とも車からはなれたとこ もしかしたら、車だけ、上の国道のところに残され、二人とも崖下の砂の上に放りだ それだけ答えてから、あらためて、あたりを見まわした。近くには、 たち二

おれは、あたりを見廻した。人家は、ひとつも見あたらなかった。

東京都内へ戻ろうとしていた。 あたりは、眩しいばかりの陽光に照らしだされている。 とつぜん、 おれは、妙なことに気づいた。 してみると、 この海岸で、 夜のあいだずっと、 おれたちは、 夜の国道を走っ 気絶していた

ことになる。

ちょうどぴったりの暑さだった。 ながら、早春の陸奥にふさわしくない気温に気づいていた。 そういって、ジャンパーを脱ぎすて、だしぬけに立ちあがった。おれ シャツー枚になってみると、 も、立ち

由紀子が言った。おたがい無事だったことを、 喜びあうべき場面だが、 それらし い感想は

でてこなかった。

きれいな海岸だ」

かっ していない場所があれば、 しかも、おれは、以前には、 おれは、うなずいてから、あたりの様子に、 けて、鹿島灘に沿って、平磯、大洗、大竹、下津など、有名な海水浴場が続いていていたにちがいない。勿来海岸は、海水浴場として有名である。このあたりから、 わき市をでぬけて、 国道六号線を南下してきた。たぶん、勿来の関のあたりから、鹿島国道六号線を南下してきた。たぶん、勿来の関のあたりに、さしかがら、またりがに、 とっくに第一級の穴場として紹介されているはずである。 勿来海水浴場に、一度きたことがある。もし、これくらい俗化 大竹、下津など、有名な海水浴場が続いてい ちょっとばかり違和感をもちはじめた。

「きれいだわ」

のあとも、コーラの空カンも、まったく見あたらない。 由紀子は波打際に立ったまま呟い た。たしかに美しい浜辺である。あたりには、海浜小屋 打ちよせる波すらも、 コバ ルトブル

一方は、 の透明度をたもったまま、砕けて白い飛沫をとばしている。 岬のような岩場になっていて、そこで砂浜がとぎれている

っていた。 とつ見あたらなかった。 れは、海と反対のほうを見やった。そこには、崩れかけた岩石が露呈し 十メートルばかり浜より高くなっているが、 自然のままの景観にな てい 電柱ひ

過去の翳

51 由紀子は、 かがみこんで、 貝をひろい あげた。 砂浜には、 砕けた貝殻が、 打ちよせられ

いて、貝のかけらと砂とで、きらきらした真珠色の光沢が、 の浜辺では、 貝拾いには、たいへんな忍耐が必要だが、ここでは、 つくられていた。きょう日、 完全なままの貝殻

を拾いあげるのも、それほど困難ではなさそうにみえた。

「三角貝!」

節ごとにはっきり口にして言った。 由紀子は、 拾い あげた貝を手に持 ったまま、 教えられたセリフを口にするかのように、

「三角貝だって?」

「三角貝が、いるわけはないわね」りでもアサリでもない、異様な二枚貝の半片があった。 おれは、 由紀子の手から、その貝をひったくるように、 もぎとった。 おれの手に、 ハマ グ

茂した種とは、異なるものである。 て出土した例が多く、 三角貝は、現生しない二枚貝なのである。日本では、中生代ジュラ紀、白亜紀の化由紀子は、熱に浮かされたような目付きで、おれを見ませった

られない気持なのだろう。 古生物学徒である由紀子には、それが判っているのである。だからこそ、にわかには信じ

「三角貝だ」

に張りだしているため、 カイドアナのような種類である。学名のプテロは、翼の意味であり、 おれは、断言した。三角貝のなかでも、岩手県から出土しているプテロトリゴニア そう命名されたのである。 貝殻の両端が翼のよう

れは、 おれは、 次のサンプルをひろいあげた。 海岸にかがみこんで、貝拾いをはじめた。 ~ つだん、 なん の忍耐も必要なく、 お

ビガイということになるだろう。 っていた。おれが持っている断片だけでも、十数センチの大きさがある。 水道のホースを、 五十センチを越えていたろう。 ぐにゃぐにゃに巻きつけたような貝だった。 しかし、それは、 オオヘビガイではありえない大きさを持 常識的に考えれ もし完全な標本な

「ニッポニテス?」

おれは、その貝の名を口にしてしまった。

古生物学マニアなら、 当然それしか思いあたらない解答である。

めのうちは、 化石も発見されている。 は、ジュラ紀の産物として有名であるが、まったく秩序を無視したぐにゃぐにゃの巻き方の ニッポニテスは、アンモナイトの異常巻の化石である。整然とした渦状文のアン あまりにも異状な巻き方のため、 発見された国名をとって、ニッポニテスと命名されているが、 病気の個体が化石として残ったものと解釈さ

そういう形で特殊化していったのだと認めないわけにはいかなくなった。 どである。 しかし、他にもたくさんの標本が発見されるようになり、 アンモナイト

掘され ニッポニテス・ミラビリスは、 ティラノサウルス属に分類される、日本最初の肉食恐竜 たばかりである。 北海道三笠市で発見されている。 ーミカサリュ 三笠市の中生層では、 ウの化 石が、

ッポニテスを生みだしたことが、確認されたわけである アンモナイトは、絶滅する寸前の白亜紀後期に、およそ 法則性を無視した畸形的

おれと由紀子は、 二つの証拠をつきつけられ、 しばらくのあいだ、

5

いた。 海岸で棒立ちにな 7

な飛びかたではなく、 はる か 沖合では、 鳥のようなもの 海中の魚を狙っているようだった。 が宙 を舞って いた。 それは、 à つうの鳥

白亜紀の翼竜のように思えてならなかった。 遠すぎるので、確認する方法はなかったが、 おれには、 それ が、 プテラ ノド

おれと由紀子は、どちらからともなく歩きはじめ

その道は、 海と反対の崖のほうへむかうと、斜面のなだらかなあたりに、 あきらかに人為的なものであり、上方にむかっていた。 ひとつの道が刻まれ 7

おれは、 海岸の丘陵の上に、 国道六号線があることを期待しながら、 砂に足をとられなが

って いった。

然が、はてしなく連なり、国道をおもわせるものは、なにひとつ見あたらなくなっていた。 れは、 のまえには、 丘陵の上で、呆然と立ちすくんだ。目の前には、 羊歯に似た、 人くらいの背丈の草が生いしげり、 まったく人手を加えてい はるか彼方に、 な

どこなんだ?

な気がしたからである。 おれは、 ひとつの問いかけを試み た。 それを知らな 1/2 かぎり、 歩も 先へす b な

「こんな植物相は考えられないわ」

いる。 しい。そして、 のあいだにまじって、 うなずいたきり、 由紀子も、おれの傍らに立ちどまり、 むこうの森のあたりには、 黙りこんでしまった。おれは、あたりの様子を、くわしく観察した。 小灌木が生えている。それは、裸子植物-前方を見つめたまま、上ずった声をあげ 太い幹を直立させて、 針葉樹らし -ソテツ、イチョウの い大木が た。 羊歯 類ら

「白亜紀後期……?」

55

な 由紀子は、 いことなので、 呟くように口にしてしまってから、 なんとかして、 否定しさろうとしてい はげしく頭をふった。 るのだろう。 あまりにも信じられ

物として、たった今ひろってきたばかりだった。 以降には存在するはずのない、三角貝やアンモナイトを、 らが地球上に現われるのは、中生代白亜紀以降のことである。そして、 森を形づくっている針葉樹は、メタセコイアやナンヨウスギの一種のようにみえる。 おれも、 ちょうど、由紀子と同じことを、口にしようとしたところだった。 化石としてではなく、 おれたちは、白亜紀 貝拾い それ の獲

もしかしたら、なにかのまちがいかも知れないと、思いなおしたりし てみた。 メ B

セ コイアもナンヨウスギも、ともに現生している植物である。

民宿舎に白亜紀荘という名がつけられたりしている。 鹿島灘沿岸は、日本の代表的な中生層をなしている。 それが広く知られている証拠に、 玉

はないだろうか?そう考えてみれば、 もしかすると、おれたちは、その種のプレイランド、 辻褄のあわないことではない。 あるい は、 植物 園に迷いこんだので

なにしろ、 すぐ近く の常磐ハワイアン・センターには、ハワイがあるくらいだから、 中 生

代がそっくり復元されていたとしても、なんのふしぎもない。 れは、なかば 冗談めかして、自分を納得させようとつとめた。 だが、

まもなく、

おれは、

その説明が、気休めにしかならないことに気づいた。 あたりには、 人手を用いた形跡がまったく見あたらない。 もちろん、 入園者の通路すらな

なものにすぎない。 さきほどの道は、 羊歯の叢みを三つにわけて続いている。 しかし、 それは、 踏分道のよう

キジの鳴き声のような感じだが、はるかに大きな声である。 おれと由紀子が、 無言のまま、 立ちすくんでい ると、突然、 かん高い 声が湧

から、やや遅れて、羊歯の叢みをかきわける音が、 近づい てきた。

「なにかの群よ、隠れなければ」

えた。 ざわざわという音が近づいてくる。 由紀子にうながされて、 おれは、夢から覚めたように、 羊歯のあいだから、 叢みのなかに這 踏分道をかけて Va 1/2 くものの姿が見 こんだ。

尾を水平に のばし、 二足歩行して、 かなりのスピードで駈けぬけた。

「恐竜だ!」

小声でささやい た

「しっ、黙って!」

由紀子は、口に指をあて て、ささやきかえした。

おれは、 体長は、二メートル半くらいで、 目のまえをかすめて、走りさったものの正体を、 かなり大きな頭部をもち、 ぼんやりと考えてみた。 立った高さは、 ふつうの人間

57 らいだった。

六頭はいたようだが、正確なことは、なにひとつつかめなかった。 うまに走りすぎてしまったため、おれには、 ほとんど、 なにも判らな

「オルニトレステスのようだったが」

かなり思 いきった推測を、 口にだしてみた。

思い おれの古生物学の知識のなかには、 うかばなか ったからである。 あの大きさに相当する恐竜は、 せ 41 ぜ シンニ、

2 ハトンという地上最大の体重をもつブラキオサウルスに興味をもつことはあっても、人間な でない、おれみたいな古生物マニアは、最大の陸上捕食獣であるティラノサウルスや、 の大きさの恐竜には、 つう、 恐竜というのは、 ほとんど関心がなかった。 巨大なものだと思われがちである。 したが 7 て、

だったのかもしれない。 がついたのである。 小型恐竜である。大型恐竜の卵や、 おれが、かろうじて想いだしたオルニトレステスは、 オルニトレステスは、 7スは、生態型からいえば、 始祖鳥などを捕食していた 「鳥の掠奪者」の意味の学名をもつ ていたと考えられるため、 いまのハイエナのような存在 そ の学名

そういえば、 おれの根拠の オルニトレステスは、 ない 、推測を、 もっとヒョロ長い首をして、 一言のもとにしりぞけ た。 小さな頭と団扇みたい

大きな手をもっている。

「コンプソーグナトス、 ストルシオミムス?」

せた。 おれは、乏しい知識のなかから、人くらいの大きさの恐竜の名を、 しかし、 由紀子は、 首を振るばかりだった。 たてつづけ

おれたちは、 動物たちのお気に入りの道路として使われていることは、 あの動物の走りさったあとの踏分道に戻った。 あれ ほぼまちが が何であれ、 1/7 な 67

「これから、どうしよう?」

「海のほうへ行ったわ。戻ってみようか しら?」

っていった。今あとを追えば、海岸にいるはずである。 由紀子は、 言った。羊歯の叢みからおどりでた動物たちは、 おれ たちが来たほうに走りさ

一瞬、おれの心を、恐怖がかすめたが、 好奇心が勝ちをしめた。

そろそろと用心ぶかく、 もときた道を戻りはじめた。

をそっと見おろしてみたが、そこに、 さっきの崖のところに来たときは、 かれらの姿はなかった。 かなり慎重に振るまった。 十メ ル か う下 -の浜辺

なった岩場を迂回するような形で、上へむかっていた。 安心して波打際に下りてみると、 三本指の足痕が、点々として続い 7 V た。 足痕は、

岬のほうへ岩場を登りはじめた

59 れたちも、 浜辺をはなれて、

ら身を乗りだせば、開けることができる。 発見したからである。車は、割れ目に転落していた。ヘッドライトが割れ、 ている。 りつめたところで、 右のドアは、 頭から逆さに突っこみ、割れ目にはまりこんだような形で、 岩層に密着しているから、 おれは、立ちどまった。岬につづく岩の割れ目に、 開くことができないが、 それなりに安定して 左のドアは、 右前輪が宙に浮 おれたちの車を

「持ちだせるものをとっていこう」

さきほどの動物にであってから、身の危険を感じていたので、なにか武器になるものを、と ってこようと思ったのである。さしずめ、ジャッキ・ハンドルなどは、頃合の得物になるに 岩角にとびうつり、左のドアを開きながら、 由紀子のほうを振りむ 7

ドト ッ っプのド アに、 体重を乗せかけ て、 安定を確かめて から、 のほうに身

のを持ちだした。 車内をかきまわ てから、 トランクのほうに、 体をずら ていき、 な n 61 ろい

心のいいほうだから、いろいろなものを、車のなかに持ちこんでいる。 もとの岩場に戻ったとき、 カメラを忘れた場合に備えて、 おれは、 中古で買ったバカチョン・カメラを、車専用にグロー 持ちきれ ない いくらい のものを抱えていた。 おれは、

ぞれ二組ずつ用意しておく。 ている。雪道の脱出用のタイヤチェーンも、 ックスに放りこんであるし、ガス欠に備えて、スポイトとポリタンクを、トランクに備え 常に積んでおくし、 発煙灯や懐中電灯は、

ソリンを移してくることを忘れなかった。 おれは、そういったガラクタを運びだすついで K ガソリンタン クから、 ポリ クにガ

ともなく、そのまま進みはじめた。 由紀子は、おれのものものしい扮装に、 なかばあきれて V2 たが、 ~ つだん文句をつけるこ

くらいだろう。あのとき、車を降りたときの間隔そのままになっていた。 おれたちは、実際は、車からそれほど離れ ては いな か ったのである。 せい ぜい

を持っていた。かれらは、 のまわりには、さきほど、 のあたりも砂浜になっている。そして、その砂浜には、全長十メートルばかりの巨大なもの が乗りあげていた。四つの鰭足をもち、長い首をくねらして、うごめいている。そして、そ るように見える。 岬を越えて、 敏捷に動きまわっていた。宙に浮いた前肢には、白く湾曲した武器のようなも 身長に不似合な大きな頭と、ピンポン玉のような眼をして、 むこう側に降りかけたとき、おれたちは、すさまじい場面にでくわした。 しかし、 その武器を、なんとかして、巨大な動物の腹に突きさそうとして おれたちのまえを駈けぬけた二足歩行の動物が、 関節の形状のためにちがいない、 下から突きあげるような動作 ている。

らしく、 白い武器は空を切るばかりであ

とすだけだから、有効な打撃とはなっていない。 そのうちの一頭は、岩場の上から、 石を投げつけている。 しかし、 両手で抱えた石を、

れないのである。 人類だけの特技である。 考えてみると、オーバーハンド・スローで物体を投げられるのは、ホモ・サピエンス ゴリラやチンパンジーですら、 アンダー スロー でしか、 物を投げら

人間なみの大きさの六頭は、 巨大な海竜を仕留めようとし てい る のだ つ

ぼろげながら判った。 六頭の素姓のほうは、 おれには、 判らないままだったが、 巨大な獲物のほうは、

「クビナガリュウ、 いや、もっと、 はっきり言ってしまえば、 フタバ スズキリ 2 ウに ち かぶ 1/2

で示した。 おれが興奮して叫びたてると、 由紀子は、 はじめてうなずい 7 か 5 左手 0 崖 のほうを目

そこには、 あきらかに撲殺されたものであった。フタバスズキリュウの幼体らし 五頭ばかりの死体が転が っ ている。 それらは、 体長一メー トル 61 に足りな

魚、竜の類では、卵胎生であることが確認されているけれど、首長竜では、「イヘホ*サウラア ったわ。 もし、 かれらが卵生だとすれば、 産卵場所が必要なはずよ。ネッシー よく判って

じように、 ュウ説でも、その点が、いちばんの弱点だった。クビ 陸上にあがって卵を生んだにちがいないわ」 ナガリ ユ ゥ は、 ノト -サウル スと

イング・ドッグに近い生態型の恐竜が、に、そんなことが、できるはずがない。 いる六頭は、いったい何者なんだ。かれらは、 「判った。ここが、 説明してくれた。おれは、 フタバスズキリュウの産卵場所にちがいない。だが、あいつを包囲して もし、 過去に存在したことになってしまう」 うなずきながらも、 それができるとすれば、リカオンー 共同で狩りをしているんだ。知能の低い恐竜 ひとつの疑問にとらわれた。 ハンテ

は、 湾曲した武器らしいものを、 かれら六頭は、明らかに、 判らなかった。 握りしめてすらいるのだ。 共同して巨大な獲物にたちむかってい それを、 どう説明す る。しか も、その前肢は べきか、

おれは、叫びつづけた。

7 いるということである。 駝鳥なみの大目玉である。 れらは、いったい何者なのだろう? ☆なみの大目玉である。視覚が発達しているということは、大脳の前、頭、葉も発達し前方視に適したピンポン玉のような眼球を持っている。体の大きさで比べれば、鳥類 あ の頭骨は、 すくなくとも三十センチはある。

リカオンって、言ったわね。 ない。 哺乳類型の爬虫類では、 でも、 すでに古生代に、 それは、 違うわ。 いろいろなタイプが現われている。 あの体型は、 すくなくとも、

ーとしか見えない。 らは、現在の中型捕食獣のような生態だったと考えられ ずるようなポーズをしているけれど、 ル・タイガー が、それよ。 ソ連で発見されたイノストランケビアは、復元図を見るかぎりでも、 つまり、イノストランケビアは、サーベル・タイガーの先行種なのズをしているけれど、もし毛をはやして復元すれば、サーベル・タイガ スミドロンに、そっくり。両脚を左右に開いて、お腹を地につけて、 ているわ。デ 1 ンのような

リュウ自身の肋骨かも知れない。そうだとすれば、皮肉な話である。 眺めているうちに、おれは、狩人が手にしている白い武器が何であるか、判りはじめてきアンモナイトですら嚙みくだくという鋭利な歯も、いたずらに空を切るばかりだった。 動きまわり、手にもった武器を、巨大な獲物の腹へ突きさすことに、成功しはじめていた。 フタバスズキリュウは、名のとおりの長い首をくねらし、狩人たちを撃退しようとするが、 それは、なにか巨大な動物の肋骨のようである。もしかしたら、それは、 から 説明するあ いだも、目のまえの闘争は、 続けられていた。 小型の六頭 フタバスズキ

「共同で狩りをしているんだ。 横合の一頭が、 たるんだ腹部にずぶずぶと吸いこまれ、鮮血をとびちらせた。 白骨の剣を突きだして、まっしぐらに走りよった。さほど鋭 かれらは、 リカオンのような肉食獣の先行種では、

「ちがうわ。待ってよ。そう、オーストラロピテクスの先行種とみるほうがあたってる」 は、由紀子に否定された、さきほどの問を、 むしかえした。

人類のような生態型をもつ、種が、恐竜時代に……「待ってくれ、オーストラロピテクス――つまり、 恐竜時代に……」 われわれ人類の先祖ということになる。

れは、絶句した。

おれが沈黙を守っているあ いだに、戦いの帰趨は、 急速に定まりはじめていた。

る。長い鎌首は、伸びきって力を失い、ぱたりと砂浜におちる。 らえるだけの力を残していない。 あげて、うるさそうに、狩人たちを追いはらおうとするが、すでに、その力は失せかけてい 白骨の剣を突きさされた海竜の動きが、 目にみえて緩慢になってきた。 もはや、 敏捷な襲撃者をと

すでに終焉に近づきはじめていた。狩人たちが 海竜には反撃する力がなくなっていた。 12 ٤ び 0 り、 自由 を 5

他の五頭も、それぞれ、犠牲に群がり、 肉を嚙みちぎった。おそらく、その一頭が、群のボスなのだろう。 スズキリュウの背にとびのり、白骨の剣でえぐったところに口をつけ、 肉を食いちぎりはじめた。 それを合図のよう 鮮血をす

生きながら食われているのである。 せりあがってくるが、それは、 もはや断末魔のあがきに等 V)

別の狩人が現われた。新手の狩人は、 そのとき、きぇーっというような、 なかば死体と化した海竜のそばに進んできて威嚇の声 異様な咆え声が湧きおこった。そして、 十頭ばかりの

をあげた。この巨大な獲物の屠殺者である六頭は、 とびさがって、身構えた。

た獲物を、横どりするつもりらしい。 明らかに、 二つのグループは、異なる群に属している。新手の群は、 六頭の狩人が仕留め

ていた。 なり知能がたかいらしい。おれの知るかぎりの、 新たな群のほうも、同じ種類である。二つ の群に分かれて戦 いかなる恐竜の復元図とも、 っているところをみると、 まったく違っ

「最初の連中は、 獲物をとられてしまうぞ

移入してしまったらしい。 おれは、呟いた。どうやら、壮絶な戦いを見まもっているあいだに、 はじめの連中

「かれらと接触できないかしら?」 由紀子が、妙なことを言いだした。

お n は、 そ れをきい て、 とんでもないことを、 考えつ

一はじめのや つらを助けてやったら、 どうだろうか?」

「えっ?」

由紀子は、 訊きかえした。

「つまり、 アンドロクレスと獅子みたいなことを、 助けてやって、恩を売るんだ。 そうすれば、 考えていたのである。 やつらと接触できる」

「大丈夫なの?」

こっちには、 これだけ、武器がそろって いる」

放りなげた。即製の火炎ビンは、新手の群のなかにとびこんだ。 ンクのガソリンをうつし、ティッシュペーパーをひねってさしこみ、 おれは、背中のナップザックを降ろして、 なかから、 コーラの空カンをとりだし、ポリタ ライターで火をつけて、

あたりが火の海になり、すさまじい咆え声が湧きおこった。

おれは、岩場の上に立ちあがり、手頃な石をつかんで、投げつけはじ おもわぬところで役にたち、新手の狩人たちに命中しはじめた。 めた。 草野 球 Ď 経験

場に登りはじめた。 ぬ伏兵に、はじめて気がついたのである。 そのときになって、 かれらは、ピンポン玉のような目玉を、 かれらは、 当面の敵をほうりだして、 こちらに向けた。 おも こちらの岩 12 がけ

「来るわ」

身構えた。おれなりに自信もあるつもりだった。 不安そうに、 おれのうしろにかくれ た。 おれは、 ジャ ッキ ハ ンド ルを っ 7

体型からみて、

平地の恐竜にちがい

ない

0

木のぼりを得意とするヒプ

ロフ

t

て、 かれらの岩のぼりは、 あきら かに違っている。 決して器用とはいえない身振りだっ た。 前肢で岩角をつ

かんで登ってくる様子は、なんとなく不ざまな感じだった。 れは、先頭の一頭のまえに、ジャッキ・ハンドルを叩きつけた。 そ 1/2 つは、

すさまじい悲鳴をあげて転落していった。

げた。 つづく一頭めがけて、由紀子が、ひとかかえもある岩を、 そいつは、 胸で岩を受けとめた形で、そのまま仰むけに落ちていった。 Va つ たんさしあげ から放りな

はじめのグループが、行動を起こしたのは、 そのときだった。 敵の背後から、 海竜の腹から抜きとった白 剣を繰りだした。

骨の剣をかまえ、岩場のほうに駈けよった。かれらは、 いり みこんで、 きに繰りだされる白骨の剣を、 頭が失われ、勢力が半減しているにもかかわらず、かれらは攻撃をやめなかった。おがみ突 れがハンドルを横なぐりに振りまわすと、一頭が横っとびに崖下へ落ちていった。 つは即死してしまった。 新手の群は、 そいつの頭上に、 岩場を登りかけた状態で、 一撃をくらわせた。恐竜特有の空隙のある頭骨が陥落して、そ ハンドルで薙ぎはらうと、それは二つに折れた。おれは、 前後にはさみ打ちにされたような形になった。 すでに五

てが終ったとき、 下からの攻撃もすさまじく、白骨の剣を突きさされ、 十頭ばかりの新手の群は、 ことごとく死にたえていた。それに対する味っさされ、つぎつぎに敵は斃されていった。す

方の損害は、重傷を負った一頭だけだった。

なく、 った異なる生物から、なぜ、そんなことが言えるのか、おれにも判らない。 おれが、岩棚の上から見おろすと、群のボスら 本能的に敵と味方を区別していたのかもしれない。 こちらを見上げていた。おれは、その丸い眼に敵意がないことを知った。初めて出あ しいやつが 、血まみれの白骨の剣をもった だが、 理屈では

っと下にむけて持ちかえ、敵意のないことを示そうとしているようにみえた。 そいつのほうも、同じようだった。 やつにむかって、 なにかを言わなければならないと感じた。 なにかの大動物の肋骨から作ったものらしい

こんなとき、 どう言えば、 いいのだろうか?

「おれたちは、 われわれは、 一緒に戦った。 友だちだ。というようなことを口にす おまえたちの敵は死んだ」 べきだろう。

のアクセントがあり、言葉になっているようだっ と話した。すると、そいつのほうも、なにかかん高い声で叫びはじめた。 ジャッキ・ハンドルで、足許に倒れている敵の死体を打ちすえなが た。 おそらく、 お n の助勢を感謝して その声には、 ら、 ゆっくり 12

った。 おれは、 岩棚 の上から、 たっ たい ま同盟し たばかりの友人を見おろしながら、 複雑な気持

な存在だっ ま、おれが、 している生物は、 おれの古生物学の常識を、 足許からくつがえすよう

している。これは、これまでの古生物学の知識では、とうてい説明できないことである。 恐竜が、 もしかしたら、おれたちは、恐竜というものを、過小評価していたのではないだろうか? 共同作業で敵を斃し、 しかも骨製の武器を使いこな Ĺ 12 ま 現 実に、

だろうか? 恐竜の習性や知能について、 現生する爬虫類のパターンを、当てはめすぎていたのでは

食恐竜が、 がって、それら足痕の化石も、肉食恐竜に追われたりして、たまたま、そこに居あわせた草 どから推測して、恐竜は、群棲はするが、群行動をとることはないと説明されてきた。 かし、草食恐竜が、 おれは、 定方向に向けられ いま、 一定方向に逃げたとき、つけられたものであると、簡単に片づけられていた。し かれらが群行動をとるところを、はっきりと目撃している。 いつも群行動をとっていたというふうには、理解できないのだろうか? た草食恐竜の足痕 は、 各地で発見されて 11 る。 2 n ま で 0 した

むかって、 おれは、 岩棚を降りていこうとしたとき、由紀子が呼びとめた。 共に戦った相手に、共感することすらできた。そして、 おれが そ 1/2 つ の うに

「待って、接触をあせってはまずいわ」

おれは、 おとなしく従い、 由紀子のあとにつづい て、 もときた道を戻りはじめ た。

ところだった。 えたところで振 おれ が助けてやった狩人たちは、 ある間隔をおい て、 つい てくる

岬を越えたにちがいない。 しまい、かなり高く登って、偶然に車に行きあたった。 きが起こった。おれたちは、 おれたちが、 岩場にはさまっている車のところに来たとき、かれらのあい かれらの足痕をたどったつもりだったが、 かれらは、 もっと下のほうを渡って 岩場にきて見失って だか ら、ざわ

である。 当然のことながら、 かれらは、 内燃機関をもつ自動車なるものに、 はじめて出くわすわけ

も旺盛な好奇心も持っているらしい。 車を見まもりながら、 かれらは、あきらかに会話してい た。 かれらは、 言葉をも

たいと思った。 おれは、訊いた。さきほどから中途半端になっている疑問に、 いったい、かれらは、 何者なんだ。 すくなくとも、 トカゲの仲間ではない」 なんとしても解答を見

つけ

「ドロマエオサウ ル ス類じ P な 42 か しら? ある 1/2 は、 それ が、 もつ と進化した。種でしょ

K" 由紀子は、 ロマエオサウルス? はじめて、手がかりになりそうなことを、答えてくれ おれの知識のなかには、 含まれていない名だった。 た。

サ

・ ウル

スとい

る恐竜のイメージとは、かけはなれていた。 う学名がつい ているところを見ると、恐竜の仲間にちがいない。 だが、 かれらは、 お

「かれらのほうも、接触したがっているんじゃ ない

「そうね、ここまで、

おれは、とうとう、 かれらと、最初の接触を試みる決心をした。ついてきたわ」

おれは、 アをしてみせた。 車のなかには、 自分で一口くってみせてから、 車のドアをあけて、ランチボックスをとりだし、 遺跡めぐりのため用意したランチボックスに、サンドイッチが残っ かれらのほうにむかってさしだし、 なかから、 ハムサンドをつかみあ 食えというゼスチュ 7 V

でバランスをとりながら、かがみこんでそれを手にとった。 ムサンドを岩角に乗せて、二、三歩しりぞくと、群のボ スらしいやつがすすみでて、 尾

サンドを口に入れた。 おれが、野菜サンドを口にしてみせ、食えというゼスチュアでうながすと、 ボ スは、 25 4

対向性のある五本指の前肢は、おもったより器用に動く。

やはり、 かれらの一頭に目をつけた。そいつは、 ハムサンドを呑みこんでから、なにやら、 かれらは、肉食性というより雑食性にちかい食性をもっているようである。 やや湾曲した大腿部に、傷を負ってい かたわらの部 下に to か って、 る。

敵の なかほどで折れ、 そのまま突きささり、 血をだしている。

その一頭に近よった。 れは、ジャッキ・ハンドルを、そこに置いてから、車からもちだした救急箱を手にして、

ある。 そいつの牙の下におくことを意味する。 おれは、そいつのまえで止まり、 かがみこんだ。 つまり、こちらの敵意がな かがみこむということは、おれ いことを示す意思表示で の頭部を、

繃帯してやった。 いつ の傷 口を消毒し、 サル ファ剤の粉末を塗り つつけ、 ガーゼをあて つ 7

「アンドロクレスと獅 子 といったところだわ」

抜いてやるアンドロクレスのそれだった。 由紀子が、 冷かすように言った。たしかに、そのときのおれの心境は、 獅子の足か

あきらかに穏やかな調子で、なにごとか話しはじめた。 おれは、そいつから、ゆっくりはなれた。 すると、 そい つは、 じ っとおれを見つめ

そのとき、さきほどのボスが、なにやら話しかけてきたので、 おれのそばからはなれていった。 そい つは、 名残り

恐竜たちは、別れの声らしいものを残し、 きょう仕留めた獲物を運ぶ仕事が残っているのだろう。 おれたちのそばから、 立去ってい つ おそら

おれと由紀子は、呆然とかれらを見送った。 由紀子のほうは、 うっとりしたような目付き

古生物学というのは、きわめて地味な研究分野であ いつまでも黙ったままだった。 る。 研究対象は、 もの 61 わ X 化 石ば か

りであり、そこから研究の緒をつかむだけでも、気の遠くなるような忍耐が必要である。 おれたちは、 いま、実際に生きた恐竜を観察する機会に恵まれた。 由紀子にとって、 それ

「あたしたち、どうして?」

夢のような境地なのであろう。

由紀子が訊いた。 いつもは、 もっと現実的なのだが、 Va ま置 かれ ってい る状況に、

じていないらしい。 電流がながれている。事故のショックで、 「よく判らないが、あの事故 0 せ 67 としか思えな ここへ飛ばされてきたんだ。 い。送電鉄塔には、 五十万ボ 強大なエネルギ ル 1 0) i が

作用して、 おれは、自分でも、判ったような判らないような答え方をした。 時空を逆行させることになったんだろう」

「あたしたちは、白亜紀末期の日本にいるんだわ」

由紀子は、確信をもって断言した。

白亜紀末期の日本列島は、アジア大陸の東端をなして隆起し、造陸運動の最先端となっ 北海道では石狩平野以西、 本州では東海地方を除く大部分、そして、 九州北部の僅か

な部分が陸地であり、 そのか つわり、 64 まの日本海や瀬戸内海や玄海灘なども陸地になっ

おれたちは、 したがっ 元いた位置を保ったまま、七千万年前の世界に、落ちこんでしまったことに 動物相、植物相は、 アジア 大陸とまったく同じである。

「さっき、 きみ が口 にした、 ドロ……ナントカサウルスのことだが……」

しまっていた。 おれは、 訊いた。さきほど聞かされた、 あまりポピュラーでない恐竜の名を、 もう忘れ

「ドロマエオサウルスでしょ?」

「ああ」

おれは、ちょっと、ぶっきらぼうな返事をした。

あいだ眠っていたからよ。 ブラウンが、カナダのレッドディア湖で、足と頭骨の化石を採集したきりで、そのまま長い 「ドロマエオサウルスのことは、ごく最近まで、ほとんど判ってい なかったからでしょうね」 当時の古生物学の知識では、 あまりにも異常すぎて、 なか ~ たわ。

由紀子は、話しはじめた。

75

ロマ エオサウルスについ ての報告が出されるのは、 最初の発見から、 半世紀以上もたっ

台

n

77

この獣脚亜目に属する恐竜は、これまでた一九六九年になってからだったという。

る。 をうかがわせるものがあったろう。しかし、この恐竜の一番の特徴は、その巨大な頭脳 のだった。鋭 ぼ同じ大きさの駝鳥などよりはるかに大きく、 い歯と爪と蹴爪によって武装された姿には、小型恐竜 これまでの恐竜に関する古生物学上の常識 哺乳類に近いくらいまでに進化し ながら、 を 完全に覆 であ 7

直径五セ は見られ 発見者のブラウンが、 おなじ獣脚亜目のうちでも、 ていたとすれば、 鈍重ではなかったと考えられる。 化石のサンプルが増えてくると、この恐竜の異様さは、 ない特徴である。また、 ンチという大きな目が、 ブラウンの学者的生命は、その時点で即座に終ってい 発表をためらったの ティラノサウルスなどを含む大型のカルノサウルス類 両足の構造も、 正面を向いてついているという眼窩の構造は、他の恐竜に も当然といえる。 二足歩行によく適応して、 Ł ますますはっきりし し、 軽快 たにちが 研究デ なものであ いな てきた。 のよ 67

狡猾であり、ある意味では、 陸上肉食動物最大の暴 竜より、 ずっと恐ろしい 存在で

ティラノサウルスと同時期に生存したが、

はるかに敏捷で、

ロマエオサウルスは、

この突然変異的といえる、 恐竜族のエリ は 突然に現われたのだろうか?

とであった。 ح まで謎とされてい ジョ たレッド 1 デ 1 ア湖の化 石に研究の転機が訪 れたのは、

期のものと思われ、ディノニクスと命名された。 オ ス 口 L 12 ょ 2 て、ひと つの化石が発見された。 それ 白亜紀初

である。 方にむか ルも持ちあがってしまう。あきらかに、ディノニクスは、尾を使わずに、 ていた。尾のうちの一部が、長く四十五センチにもわたって、棒のようになってい したわけである。 この恐竜は、 後方に延びきった形になり、体を前傾させて走ると、尾の先端は、 さらに、三本ある足蹠のうち地面につくのは、二本だけであり、 って蹴爪になっていた。 発達した脳と、 対向性の手と、 つまり、 タイの闘鶏の足にくくりつけるナイフの 三本の足趾を持ち、 一風かわ 残りの一本は、 二足歩行できたの 地上から一メ つ た尾をそなえ る。 ような役 これ ر ا ا

神経が必要である。 一本足で立ち、 もう一方の足で、相手を攻撃するため 尾を後方へ 頭蓋の発達は、 水平にむけて、 そうい バ う運動機能とも関係がある。 ランスをとりな には、たい がら、 へんなバラン か な ŋ 0 一般足を誇 ス感覚 つ た

る 「駝鳥型恐竜」 のような特徴からみて、 と近縁であることが判るが 同じ獣脚亜目のなかでも、 脳容積と攻撃力が、 スト ル シオミムスによって代表され 格段にちがう

な役人は、

一人もいないことになっている。

79

あきら ディ ノニクスは、 さらに何千万年か後に現われるドロ 7 エオサウル スの先祖

ずばぬけた存在に変っている。 かえしてモデルチェンジした結果、われわれが考える恐竜時代の動物とは、あらゆる点で、 白亜紀末 に な 5 て登場 す るド 口 7 工 才 + ウ ル ス は デ 1 1 _ ク ス を、 何 度もくり

友人たちが、 由紀子は、 このドロマエオサウルス類であることを理解した。 そういうことを、 おれ に判 りやすい ように説明してく n た。 おれ きょうの

「ドロマエオサウルスが、いわき地方にいたのか?」

ばかりも ければならないと、 いられなかったのである。 ひとつだけ質問した。訊きたいことは山ほどあったが、生きのびる方法を考 そろそろ思いはじめていたので、由紀子のように、恐竜天国に感激 な

「もちろん、ドロマエオサウルスの化 由紀子は、まず否定の返事をしておいてから続けた。 石 は、日本では発見されてい ない わ

一九二六年、断片的な化石が発見されたが、戦災で焼失してしまった。 しかし、クビナガリュウが、日本で発見されたのは、かならずしも、それが最初ではない ュウの発見は、ある程度は予想されていたわけである。 いわき市からフタバスズキリュウの化石が発見されたとき、古生物学界は騒然とな したがって、 つ

とい 算にしばられ、長期発掘など思いもよらない。 ュア古生物学者も、 いわき地方の人々の無理解もあった。三角貝やアンモナイトなどを集めている土地のアマチ (?)の骨発見という程度の、次元の低い報道でお茶をにごしてしまったのである。 供を申しでるというような現象は、この国では起こりえない。おおかたのマスコミは、 った狭い郷土愛が、逆作用したのかもしれない。専門の調査団のほうも、乏しい文教予 の反響は、 ひとつの厚い壁になった。あるいは、他所者に手柄をたてさせたくない 冷たかった。 7 メリカのように、 ネギ ー財団が さらに、 怪獣

もし、 出土する蓋然性が、きわめて強い。これは、学界の定説とすらなっている。さらに欲ばれば カモノハシ恐竜の一種ケネオサウルスや海竜モサザウルスなども、かなり期待できる。 しかし、 いわき地方には、 ある予算を投入して調査を続行すれば、すくなくとも翼竜 日本という国では、 三角貝やアンモナイトなど、白亜紀末期の示準化石が発見され 役にもたたない怪獣探しに、国家予算を投入するような ープテラノドンの化石は てい

液底をつ 61 て、 調査団は、 宝の Щ に 入りなが 5 引きあげ な 42 わ け K は 4) か な くな

< わしたのである。 おれたちは、 ここで、 古生物学界のニュー スターともいうべき、 1, \Box 7 工 オサウル 0

いう生物が棲息していなかったという証拠にはならないのである。 の分野がある。 日本では、 外国人学者を締めだしているため、 古生物学界もそのひとつで、化石が発見されてい かえって調査研究のいきとどい ないからとい って、 ていない不

「これを見て!」

ひとつの肉塊がぶらさがっていた。 とつぜん、 由紀子が叫 んだ。 おれ たちが立っている岩棚から十メ トル ば かり下の岩角に

締めた鶏をぶらさげるみたいに、首っ玉をつかんで、それを取ってきた。 長さ一メートルくらいで、 ながい首と丸っこい胴体がつい ている。 おれは、 岩角に降りて

「スズキリュウの幼体だ」

ょう知りあったばかりの友人の一人にちがいない。 言った。誰が、 このプレゼントをこっそり置い てい いったか、 よく判ってい た。 き

棚からまっすぐ登ると、羊歯と灌木の野にでる。おれは粗朶を拾いあつめて、車が ている割れ目の上の岩棚に戻った。 おれは、日が西へ傾きかけているのを知って、 作業を急がなければならないと思った。 なはさま つ

記録しておくのが、 友人たちの絵が、 そのあいだ、スケッチブックにむかっていた。できるだけ記憶が正確なうちに、 鉛筆でスケッチされていた。 科学者の勤めなのだろう。そこには、 フタバスズキリュウと、 あの新し

ナイフがない以上、せめてドライバーが必要だった。 エンスには、 ドライバーをとりだし、狩りの獲物のおすそわけにむかいあった。 れは、岩場を降りて、車のトランクを開け、 あの友人たちとちがって、鋭利な爪は備 工具を持ってきた。 っていない。獲物を料理するためには おれたちー 工具セット 0 モ・サピ な か から、

んだ。 哀れ な幼体をいくつかの肉片に分解し、 さっそく火をおこしてから、 おれは、 由紀子を呼

「バーベキューの仕度ができたぞ」

ざして焼くわけである。 のドライバー、千枚通し、ネジ式ドライバーなどである。 おれは、目のまえに、 五本の串をならべてみせた。 セットからとりだした一文字と十文字 その先に肉片を突きさし、 火にか

「恐竜の御馳走ね」

を示すはずがない。 る。学問のためだから、 由紀子は、べつだん、 比較解剖 ためらい はしなかった。現生爬虫類とのつきあいも、 も経験している。 ありきたりの女の子のように、 じゅうぶんあ

ぶよぶよした白身の肉は、 鶏肉を水っぽくしたような感じだった。

突くかもしれない」 「赤い柄のやつは、 注意したほうがい 61 そいつは千枚通しだから、 がつがつ食べると喉を

が冗談めかして言うと、 やっと、 由紀子も笑ってく

由紀子は、そういって、甲斐甲斐しく立ちあがった。「ランチボックスのなかに、ソースとお塩があったわ」

焼きあがった肉に、塩をかけて口にいれると、香ばしい 味がひろがった。

とさせたような感じで、鶏特有の臭味がなく、 なかなかいける味だった。

えた。 量も確保してなかった。 食事が済むと、あとは、寝る仕度だった。おれは、夜通し火をたいて交代で寝ることを考 しかし、火もちのよさそうな薪木が見つからなかったし、 一晩もやしつづけるだけの

たからである。 安定している。 おれたちは、車のなかで寝ることにし ガラス一枚でも、 なにかの危険から身をまもることができるだろうと、 た。 車は斜 めになっ ては 61 3 が 思っ

リクライ ンさせた車 の助手席で、 由紀子と抱きあって寝た。

一恐いわ

だが、 からだった。昼のあいだは、 あたりまえの女の子のような感想が、 夜になってみると、心細さがこみあげてくるのだろう。 生きた恐竜を見た感激で、すっかり興奮しきっ 由紀子の口もとからも れたのは、 そのときになって てい たのだろう。

シートの下から、 ボロ布のようなバスタオルをとりだした。 窓をふくため、

ふるしたタオルを、 夜は、かなり寒かった。が、 車内におい バスタオル一枚をかぶって、身を寄せあって ておくのは、 おれ の習慣である。 1/2

かしのげそうな気がした。 翌朝、おれたちは、話し声で目ざめた。話し声といっても、人の声ではな Va き っと

いうような、かんだかい声で、はじめて聴くと、 かなり耳ざわりである。

角につきだした、昨夜の友人の顔があった。ボンネットの上に這いあがったやつを、こうし て正面からみると、 おれたちが、 シートからはねおきたとき、フロントガラスのむこうには、丸 ちょっと河童に似た感じで、どことなくユー モラスな顔である。 13 眼をして三

「おはよう」

かれらは、あきらかに挨拶らしい言葉を口にした。 おれは、ドアをひらいて、足をのばして、岩場に渡りながら、 声をかけた。

てやった。 由紀子が、ドアのところに出てきたので、 おれは、 手をさし の 1 て、 こちら 0

である。ただし、かれらのほうも、数が増えていた。十二、 つは、きのうの連中かどうか、よく判らなかった。どれも似たような体つきをしてい れのほうが呑みこんでい きのうのボスと、 繃帯を巻い ない から、 てやったやつだけは、はっきり識別できた。 そのなかに、 きのうの仲間が混じっているかどうか、 三頭い る。 かれらの個体差を、

よく判らなかった。

蹴られれば、大の男でもかるく即死するにちがいない。 ボスは、ひときわ大きいので、 て観察してみると、 ナイフのような鋭い蹴爪が生えていた。もし、 に判った。 由紀子の講義をきかされたあとなので、 あの蹴爪で、

決していれば、おれのほうがやられたかもしれないところだった。 いたから、かれらも蹴爪をふるうことができず、 の敵と戦ったとき、 きのうの行動をふりかえってみて、 おれは、かなり、 慢心していたわけである。こちらが高い おもわず、ぞっとした。 有利に戦うことができたが、 岩場の 位置をしめて もし平地で対

もちろん、由紀子にも判らないらしい。白亜紀の植物について、おれたちが知っていること 果物が積んであった。マンゴスチンのような紫色の果皮をした、名も知れぬ植物の実である。 岩棚の上にでると、 化石となったものだけである。 のも、 むしろ当然といえる。 おれは、またしても、プレゼントを提供された。 軟い果肉が化石となることはないから、 そこ に おれたちが知ら 山 0

用できるということは、 う、おれがハムサンドを提供したときと、逆の立場になっている。その立場を、 ボスは、 その果物を手にとって、一口くってみせてから、 かなりの学習能力を持つ相手とみるべきである。 なにごとか叫びはじめた。 すぐさま利 きの

ただちに、その果物にかじりついた。 溶けるような甘い香りのする果肉だっ

「かれらは、雑食性よ」

ある。 由紀子が、 果物を頰ばりながら、 ささやい た。 駝鳥型恐竜と同じく、雑食性とみるべきで

肉をたらふく食ったあとなので、 朝 の果物は、 たい \wedge h ありが たい プレゼント

アは、見せなかった。 うも前肢を動かした。 トルばかり行ったところで、こちらをむいて止まったので、岩棚の上から手をふると、 歩きはじめ 別れの合図かも知れないが、 たのは、そのときだった。そのあとから、 きのう別れたときには、 群も移動し そんなゼスチュ 7 43 十メー

「ついてこいと言ってるんだわ」

「よし、行ってみよう」

つかったドライバー・セットを、ジャンパーのポケットに押しこんだ。 おれたちは、歩きはじめた。 おれ は ジャッキ · ハ ンドルを手にもち、 丰 ユ 0

をのぼる道になる。途中の急なところには、大きな岩があてがってあり、 おれが、 いったん海岸に降りる。きのう、おれたちが、放りだされたところである。 人工的なものだと感じたのは、その点である。 ステップ になっ そして

85 登りつ めると、 平野がひらけている。 しばらくすすむと、 おれたちが、 羊歯の

か

げ

り歩くと、 台地のようなところにでた。 かれ らを見かけ た地点にでる。 そこから、 針葉樹の森を通りぬけて、

運動によって、 いないが、現在の地形に比定することはできない。このあたりの地形は、 台地の斜面をの めちゃめちゃに、 ぼると、はるかむこうに、 ひっかきまわされてしまうからである。 煙をはく山 が 3 え た。 もちろ のちの新生代造山 N 火山 K ち

った。 台地の上で、 由紀子が でさけ んだ。 確 か K お n たちの 目 0 前 五十戸ば か ŋ 0) から

羊歯の葉で葺 44 たも 0 6 い楕円形 0 1 屋が ならんで 61 た。

したがって、最大多数の線を収容する家を想定すると、 かれらは、尾をふくめて丸くなって寝るにちがい 人間の家とは、まったく違う。 尾のない人間は、 ない。 縦に寝れば、 四角にならざるをえない 本 Ö 線 にな 2 0 7 しまう。 しかし、

恐竜が集落をつくったなんて」 集落のむこうには、 川が流れてい た。家々のつくりは質素だが か なりの大きさが

由紀子は、うめくように言った。 おれたち人類は、 地球上の支配者として君臨し、 たし かに、 これ 唯 までの常識 一無二の万物の霊長として、 では、 考えら ñ U ふるま

な

寵にあずか 7 61 る。 つま った選ばれた種だと、思いあがっている。 り、 カン つて、 いかなる生物もなしとげなかった文化を発達させるべ 神の

冒険をするはずがない。 化をつかさどる大きな力ー (をつかさどる大きな力――あるいは、大文字で始まる主というものがあれしかし、はたして、人類だけが、最初に文化を持った生物なのだろうか? ば、 はじめ の地球の か 進

はえていたにちが これら獣形類は、ペルム紀から、中生代の三畳紀にかけて、適応放散する。おそらく、 類の活躍の場は、 哺乳類というひとつの 類型爬虫類が生まれてくる。 すでに現われている。エダフォサウルスやペリコサウルスのような先祖か 新生代になって急速に拡大するが、そのプロトタイプは、 種を創造するに際しても、進化の神 モスコブス・ディキノドンなどの生物が、その例である。 は、 きわめて慎重だった。 中生代より以前

ランケビアという獣形類において、その試作モデルがあらわれている。さらに、 ドンは、 進化の 仲間が肉食獣化しただけの有袋剣歯虎スチラコミルスも、 いわば最終モデルである。しかし、それより二億年もまえに、ペルム紀のイノスト スミロドンの先行型である。 の慎重さを示す例と L て、剣歯虎をあげることができる。完成型の剣歯虎 テストされてい る。 スミロ

竜はイ ルカの先行型であ り、 三騎竜は、 サ イの先行型である。

たと考えること自体、 われわれ人類だけが、 不自然なのではないだろうか? なんの予告もなしに、進化の神の抜擢をうけて、 だしぬけに出現し

る生物を、どこかでテストしていたのではないだろうか? 進化の神は、ホモ・サピエンスという種をテストしてみるまえに、 人類の先行型にあ

おれたちは、 いま、目の前に、その証拠をつきつけられていた。

すでに権力の座についていて、 まったのは、 中生代のあいだを通して、哺乳類が未来の王者の風格をあらわしたことは、 古生代にすでに出現している哺乳類が、進化の覇権を握るまで、 何故なのだろうか? いっこうに地球政権を譲りわたしてくれなかったからである。 答えは簡単である。哺乳類よりはるかに優秀な連中が 一億 年以 上も 一度もなかっ か か 2

原始哺乳類は、 すぎなかった。 中生代の哺乳類は、 中生代の哺乳類化 一ミリの歯と一 体を矮小化することによって、 石は、ほとんど発見されていない。たとえば、モーガンコドンとい ・五センチの頭骨をもつ、 細々と生きてきたにすぎな 吹けば飛ぶような、 小さな生物に 67 その

理解が、ふつうである。 イメージが、 おれたち人類は、ともすれば、 抜きがたく定着している。魯鈍な巨体と、 恐竜というものを、 過小評価しがちである。 空っぽな脳みそをもった生物とい 巨大な怪獣

7 17 たことになる。 そうだとすれば、 例えようもなく愚鈍で畸型的な生物 かう 億年以上も政権を握

彼らは毎日を強いられて生き、 彼らは町を作らず、偉大な帝国を作らず、 知恵はなく、 あるのは少しば かり

土くれとなった彼ら――人は、それに命を吹き込む友もなく生涯を送り、ひとりぼっちで死んだ。来たるべき明日のことなど気にしなかった。

W E S

なく、 潑に動きまわっていた。 性のナマケモノは、全長六メートルにおよぶ体をもっていたが、 W E 専門の研究者ですら、頭から恐竜を劣等な生物と決めつけてしまっているのである。 おれたちは、 一億年以上も君臨した恐竜には、 .重な特殊化した例をあげつらうつもりなら、恐竜のうちの特殊化した例をあげるま われわれ哺乳類のなかに、いくらでも見つかる。 ・スウィ ボスに導かれて、集落のなかに入っていった。尾のある里人たちは、みな活 ントンの 三角貝やアンモナイトも、 「恐竜」(小島郁生訳) それなりに完成した点があったはずである。 の巻頭の献辞である。 かれらの重要な食料らしい。 たとえば、メガテリウムとい 知能はきわめて低かった。 から、 う地上 か

らの仲間の幼体を食ってるんだ!」

生代にはまだ貝殻から抜けだしていなかったのである。 アンモナイトをとりだす作業を行なってい るやつも いた。 イカ、 タコのような頭足類は、 中

種としての起源は違っても、 われわれ人類と同じ生態型をも つ先行種 なのであ

ちがいない。 おそらく、 待ちうけているはずである。 化石として確認されているドロ かれらは、進化の階段に足をかけた途中にある。その前途には、 マエオサウル ス類より、さらに進化した生物 洋々たる未来

れは、いったん、そう思いかけてか ら、あることに気づい た。

その化石は、 ことになる。 おれたちが、 もちろん、ドロマエオサウルス類も、 一例も報告されていない。 いまいる時代は、 白亜紀の末期である。つまり、 例外ではないはずである。 恐竜の大絶滅の寸前 新生層からは、 う

ひとかけらも持ちあわせていない。 おれの目の前にいるかれらは、 活気にみちあふれている。 絶滅の予兆らし

なりのスピー 集落の中央の広場で、大勢の叫び声が起こったのは、 ボスは、しなやかな動きで、身をひるがえして、走りだした。 全力疾走するところを目撃した。 ・ドで走る。 尾をピンとのばし、 そのときだった。 おれは、 体を前傾させながら、 まは

あたらなかった。 より、巣と呼ぶべきかもしれない。明らかに、ふつうの動物の巣とちがうところは、 それに羊歯の葉をふ いそいで、ボスのあとを追った。 いてあるところだが、 つる葉を編んでしばりつけてある部分は そこには、 小屋が あ つつ た。 小屋とい

ボスよりかなり小ぶりな体つきをして、入口と反対のすみにうずくまり、 るところだった。 ボスのあとにたって、 小屋のなかをのぞきこむと、そこに、 一頭の仲間がいた。 なにかを食って そ つは V)

蹴爪のついた後肢をもっている。 同じ動物が二、 器用に動く両手で、長い尾と首をした三十センチばかりの獲物を、 おれは、そのとき、ある事実に気づいて愕然とした。 それらは、 三匹、まるで、まとわりつくように、そい 四肢を地について、のたくるような動きをしているが、 いま、 つの膝のあたりを這いまわ そいつが手にしてい せ 無細工に大きな頭と つ いってい いるのと

に運ばれている一匹も、 瀕死の重傷を負っているが、まだ生きてい 地を這っている小さなや た。 つらと同じ生物で、 腹を大きく

大きいほうの一頭は、さらに一嚙みして、小さな生命にとどめをさすと、 に放りすて、ピンポン玉のような眼を見開 いたまま、 足許の一匹をつかみあげた。 その

単にそれだけじゃない。たぶん親子でしょうね」 由紀子も、はじめて口をひら

は、由紀子の言葉をきいて、 かなりのショックを受けながら、 ふたたび、

母親の手のな か K 35 らさげ られ、 やが て襲ってくる不吉な運命を予知 する

かのように、キーキー泣き声をあげながら、身をよじった。 母親は、手をさしあげて、幼体を口へ運ぼうとした。 そのとき、 ボ スが、 白骨

哀れな母親は、子供の血で染まった口から、 手から叩きおとされた幼体は、 悲鳴をあげた。 なにごとか声を発した。 ボスは、

声をあげ、白骨の剣を繰りだした。剣は、母親の腹に突きささった。

れかけていた仔の残骸とである。 ボスの命令で、仲間たちが、 わったと思ったのは、 二つの死体を運びだした。 おれたちの早とちりだった。おれたちが、 母親の死体と、その母親に 小屋からでたあ 食わ

い、その肉を三片ばかり切りとり、生残りの三頭の仔に与えた。 四十頭ばかりいる住民に、訴 母親の体が解体されはじめた。なにかの序列があるらしく、ボスからはじま 肉片をえぐりだし、 口へ運んでいく。 えかけるように話 母親の死体は、 した。 そし あっというまに て、 三頭が肉に みず か かじり

袋におさまっ てしまった。

おれと由紀子にひとつの小屋があてがわれたのは、真昼の宴がおわっ 7 から、

た。 ショックがおさまってみると、最初の邂逅では判らなかったことがってからだった。おれと由紀子は、むかいあって坐りこんだ。 64 3 V

はじめにすることは、発見者の名誉ある権利を行使することだった。 おれたちは、 ロマエオサウルスから進化 したらし い種族にでくわ したわけである。

「爬虫綱に属することは、まず、まちがいないな」

はたして、恐竜は、爬虫綱だったのかしら?」そういったとき、由紀子は、ちょっと考えてい たようで、 返事が遅れた。

待って。

「なんだって?」

比喩的に冷 血動物だなん て言う b ね。 恐竜は、 血 動物だっ

たとすれば、 そういえば、最近では、)すれば、とうてい新陳代謝が追いつかなかったはずである。現代人であるわれわれは、だろうか? 身長二十五メートル、体重八十トンのブラキオサウルスが、もし冷血だっ そのひとつである。 古生物学界では、 これまでの学界のアプロー 1/2 ろいろな新説が、 チには、大きな誤まりがあったのでは 発表 つされ て ٧J る。 恐竜温血

93

過去の翳

れら

これほど不可解なことはない。鰐と恐竜との決定的な相違は、化石によって検証しようのな ど入ってしまう上目に、現存する鰐だけが加入しているー な恐竜をふくんでしまう。 なかに、絶滅した槽歯目、 しまう。 ゲの仲間をふくむ鱗竜上目が設けられ、このなかに、 はるかにへだたっている。 恐竜にちかいものを探すなら、それは、 モドオオトカゲを、コモドリュウと呼んでしまったりする。 恐竜を「大きなトカゲ」ととらえやすい。そのため、単なる「大きなトカゲ」にすぎな - つまり、それが、冷血か温血かという点だったにちがいない。 絶滅した槽歯目、鰐・目、翼竜目、竜盤目、鳥盤目など、とかし、双弓亜綱のなかには、もうひとつのようし、はいっていた。 人間と象よりはるかに大きな相違がある。現存する爬虫類のなかから、 すべての翼竜、すべての肉食恐竜、すべての草食恐竜が、ほとん いわゆる双弓亜綱のなかには、喙頭目――現存するんら、それは、むしろ、鰐の類であるが、その鰐ですら、 こま――オーダーがあり、祖竜上目のヘビ、トカゲの類は、すべて含まれてへビ、トカゲの類は、すべて含まれて ―とされている。分類学的にみて しかし、恐竜とオオトカゲ ほとんどすべての有力 ―現存するムカシトカ 恐竜とは、 もっとも

恐竜綱をたてることに、異議はありませんか?」

|異議なし| 由紀子は、 ちょっと、おどけて言った。おれは、たったひとりで拍手を送りながら答えた。

そして、次に鳥綱、 して、次に鳥綱、哺乳綱がきて、おれたちの二人の決定に従えば、 脊椎動物門の分類が完成することになる。 両生綱、爬虫綱の次には、恐竜綱がくるのでは、 かんが 恐竜綱がくることになる。

恐竜綱を爬虫綱から独立させるとして、 おれ たちの友人の扱 いいは、 どうな

血を獲得しなかった鰐・目は、 てもらうしかないわね」 祖竜上目として、 爬虫綱の一部として独立させる鱗竜上目とい 位置づけるしかないわね。 ただし、 その場合は、 つしょに、

「それで、その次は?

むコエルロサウルス上 「竜盤目のなかの獣 あらたに設けるべきだわ」 上、科には、入れたくない。むしろ、ド東でです。 料には、入ることはまちがいないわ。脚・キータ むしろ、ドロマエオサウル でも、ダチョウ型の恐竜をふく ス上科とい

っと、おれの友人の落ちつき先が決まったところで、 - つまり命名の権利を行使することになった。 お n たちは、 名誉ある発見者

名の儀式が終ったところで、おれたちは、きょう一日のあいだに経験したことをもとに、 かれらは、白亜紀末のいわき市のあちこちにいたと思うの。そこで、和名は、 「フタバスズキリュウの場合、 由紀子は、発見の功をおれに譲ってくれ、学名に、おれの苗字の仙波を残してくれた。 イワキリュウの生態のことを、考えはじめた。 学名は、 ドロマエオサウルス・イワキエンシス・センバとすれば、い 化石の発見地の双葉町というのを、 とっているでしょ。 イワキセンバ いと思う」 でも、

らは、群をなして狩りをおこない、集落をつくるほどまで、進化の発展段階を登りつめて 細々と生きながらえている、劣等種族としか思えない。 ワキリュ かれらに比べれば、ネズミのような原始哺乳類は、体型を矮小化することによっ ウは、 これまで知られ た恐竜の常識をはるかに越える、 優れ た生物 ての

てい さん棲息していた。 た草食獣モスコブスなどの乱歯亜目に対して、それを捕食する牙をもった獣歯亜目も、 に到達していた。盤竜目は、背中に放熱用の背鰭のような突起を発達させ、 矮小な哺乳類デルタテリジウムなどは、 2、化していた。大型草食動物の方向にむかったディノケファルスや、 現していた。 たにすぎない。しかし、その先祖は、 爬虫類のうちのある種は、進化の糸にひきずられて、当時すでに、哺乳類にちか 獣歯亜目に対して、鼬竜亜目のような真正哺乳類と呼べる種すら、 すでに古生代のペルム紀に、 卵を強奪することによって、 ある地位を占め こそこそと生 くちばしをもっ 肉食の き リコ てい たく

れていたかのように見えた。ところが、中生代は、 古生代の化石から判断するかぎり、来たるべき中生代は、 なぜなら、 原始哺乳類より、 はるかに優れた種族が、 いわば、 地球政権の座につい 哺乳類の暗黒時代になってしま 類 0 天下になる 1 てしまった < 、予定さ

らである。その優れた種族こそ、恐竜だった。

か

底に追い 哺乳類の起源は、鳥類などよりはるかに古く、恐竜の起源とほぼ等しいとすらいえる。その が な地位を、 類が政権を簒奪するまでには、さらに二億年の星霜が必要になったのである。 やられていたのは、 ていたのは、より強固な、より完成された、ひとつの種――恐、竜によって政権の王座を、ひさしく占めることができず、二億年ものあいだ失意のどん 独占されていたからである。

である。いわば、 かりしかいなかったでしょ」 この集落には、五十戸ばかりの家があったわ。 の哺乳 類の適応放散 哺乳類は、 が起こるのは、地球政権の独裁者である恐竜類の大絶滅のあとから 火事場泥棒のような手段で、政権を強奪したといえる でも、 住民は、 五十人一 五十

った。 するのをやめたということが判る。 一戸に一頭というくらい えなければならなかったほどである。すくなくとも、 っていた。おれたちは、この小屋に住むにあたって、 由紀子は、不意に妙なことを言いだした。 いだ無住になっていたらしく、天井の羊歯を通して、星が見えるという状 五十戸ばかりの家があった。しかし、住民の数は、それほど多く の頭数でしかない。事実、おれたちが、 死んでしまったのか、 台地の丘の上に、イワキリュウたちの集落 羊歯の葉をとってきて、屋根を葺き この小屋に住んでいた住民が、 他所へ移ってしまったのか、 かれらから与えら れた小屋 はな 居住 U

どう考えても、かつては つきりとは つか め ない 今の数倍の住民が が、集落のな か いたことはまちがいない。 12 は、はっきり目だつくら 11 に空家が かある。

つまり、卵を生みっぱ 爬虫類は、群 をつくらない。 なしだからである。 なぜつくらない かというと、 仔を扶養し な

うであったと決めこんでしまっていた。 これまで、恐竜も、爬虫類の一種とみなしてきた学界 たくさん発見されすぎている。 しかし、 それにしては、群行動をおもわせ は、 爬 出類の 例 か 5 2 て、 る足痕化 恐竜も

復元図 ブロ ウル 根拠を失ってくる。 想像にかたくないが、 踏みころされてしまうにちがいない。 たと定義される。仔や牝を群のなかに囲 した学者によれば、 いう都合のい 古生物学界でも、足痕化石について、パニック状態で一定方向へ逃げたときの ント スの大群に対しては、他の肉食恐竜も、なかなか手だしができなかったろう。 サウルスでも、 かなり怪しくなってくる。 い説明にとらわれず、もっと積極的な説明をうちだしている学者もいる。 ブロントサウルスの生態的地位は、 巨大な体重を軽減するために、 あの巨大な体で群をなして防御すれば、 かれらが、象と同じ程度に水浴を好んだろうことは、 こうなると、 いこみ、 大地を踏みならして、移動するブロントサ 水から首をつきだしている、お 水中生活をおこなったという説明 哺乳類における象のようなものだっ たいてい の肉食恐竜などは 草食性の なじみの そう

サウルスですら、例外ではなかった。 竜上目にふ ていたことはまちがいな いくまれ る、ほとんど全ての恐竜は、 い。あの空っぽの脳髄 仔を扶養し、 の代表者のように 群をつくるという段階まで 罵倒 され えるブロ

とした古生物学者たちも、やむなく特例を認めてしまっている場合がある。 仔を扶養しない いという、 爬虫類の性質だけを用 17 て、 す 1 ての恐竜 の劣等性を立証

翼竜 けを例外と ない生まれたばかりの仔は、たちまち餓死してしまう。 大口をあけて受けとめている、 のような生態の生物では、 しか 恐竜より高等だと定義する鳥の生態を参考にして、復元図を描くほかはなかったので 目の場合がそれであり、 L しながら、現存する爬虫類のなかには、仔を扶養するものは一例もない 爬虫類のなかから進化してきた。爬虫類との境界にある槽歯目は、てしまったため、かえって矛盾が大きくなってしまったわけである。 もし親が卵を生みっぱなしにしたとすれば、飛ぶことのでき 有名なプテラノドンの復元図が、ひとつの矛盾を提供する。 上空の親が、 空中から投下する魚を、 その矛盾を説明するためには、 まだとべ な 1/2 翼竜

び鳥綱の共通の祖先といえる。 恐竜は、 あらゆる方面に適応放散した恐竜は、 鳥とならんでいることになる。 西欧流に生物進化を優劣の尺度でとらえることをやめにす 地球上の支配者であり、 すくなくとも、中生代のあいだは、 鳥も哺乳類も、 恐竜 お

99

存在でしかなかった。

過去の翳

101

を示したものである。

か ら姿を消 恐竜が優秀な生物であることは、 まちが Us な 61 0 か か n らは、 白亜紀末に、

おれたちは、 3 7 0 K V2 あ b 世 7 Va る 0

は、犬の遠吠えを、一オクターブあげたような、薄気味わるい声だった。 U ボロのタオルにくるまって、 寝ようとしたとき、 由紀 学は、 ひとつの声をきき つけた。

のところに、一頭のイワキリュウが、 おれたちは、 タオルをはねのけて、 凍りついたように、シルエットになって 起きあがった。小屋の外にでてみると、 台地の いた。

近よってみると、 その体軀の大きさから、 あのボスであることが判った。

爬虫類は、その一生のあいだ、 成長する。鳥類になると、 生殖可能になっ か 5 か

長することはない。 そして、 人類は、 むしろ、 早期成熟の傾向すらある。

まだ自由になっていないのだろう。 おそらく、生きているあいだ成長するという、 爬虫類から受けつ だ形質

ない。 の並はずれた大きさは、そのまま、 仲間うちでの最年長者であることを示して V) るに

見受けられた。 の様子には、新月にむかって、 青白い光を弱々 しく投げつけてくる新月にむかって、 新たな力を賦与し てくれるよう、 咆哮してい 祈っ たのは、 7 いるような仕草すら ボ スだっ

きはじめて おれ いた。 たち二人が目覚めたとき、 イワキリュ ウの 集落 0 な か は、 すでに秩序ただしく

みえた。 けて、ア 白骨の剣をとって狩りにでかけるのは、男たちの仕事のようである。 ンモナイト の貝殻を割って いるのは、 女や成長しきってい ない 幼体の仕事のように そして、 石を打ちつ

ワキリュウは、骨角器文化の段階まで、進化していることになる。 石器文化のまえに、 骨角器文化を想定するのは、 43 まや定説とな つ 7 Va か n

おれと由紀子は、 集落の中央の広場で、ボスと朝の挨拶をかわし

「おはよう」

おれは、できるだけ親愛の情をこめて、ボスに挨拶した。

った。 昨日の惨劇のあとだけに、 おれ の身振りは、 なんとなく、 わざとら Va Ł 0) 12 つ

で、人類は食人の習慣を捨てきれなかった。 うという習慣は、 摘してみせたとき、 きわ ホ かめてポ モ・サピエ 明治人たちは、 ピュラー ン スでも、 なものだった。十九世紀、 ナショナリスティックな、 明治初年、 ネアンデルタールの段階 モースが、 あるい 大森貝塚人の食人 ヒステリー では、 は二十世紀 同族 0) 肉 の風習 を 頭ま

だん驚くにはあたらないだろう。 った。おれたち人間ですらそうなのだから、まして、恐竜が、そうしたところで、 たがって、 らイワキリュ ウが、仲間を食ったことに対して、 非難を加えるつもりは べつ

かの予兆を感じとっていた。 だが、おれは、母親が仔を食っ た事実のうらに、 単なる共食い ということだけ でな Va

で、 途中で車のところまでくると、 やつもいた。 ちを車のところまで、護衛してくれたのだった。そのなかには、 意思がかよわなかったが、 れと由紀子は、狩りの一行に、 狩りにいくとみえた五、六匹の一行は、あきらか 一行は、そこで立ちどまった。おたがいに言葉が通じない 同行することになった。 きの うの おれが繃帯を巻いてやった 海岸 のほ 3 に、おれた to か 0)

ように姿を消した。 繃帯のイワキリュ ウ が、 叫び声をあげ、 白骨の 剣をふるうと、 他のも のも、 示 わせた

か?」 「護衛してきてくれたところをみると、 なにか の危険があるということじゃ いだろう

おれは、言った。

「そうね、 きのう獲物を横どり しようとした、 他の集落の イワ キリ ユ ウを警戒し てい だ

で、 「用心のため、 敵対する他の集落のものに対しては、きわめて排 撃 ぬ田紀子は、答えた。かれらは、一種の社会を持っている。 タイヤチェーンを持っていこう」 的なものとして、 それは、集落国家のようなも 機能するらし V)

有効な打撃になるにちがいない。 地で戦う際、蹴爪の攻撃を避けるためには、 落のイワキリュウと遭遇したときには、まえの教訓を生かして、戦わなければならない。 おれは、 トランクをあけ、 チェーンを一本とりだし はなれたところから、チェー て、ベルト にはさん だ。 ンを振りまわせば ₺ 0

には、 だにちがいない。 ウのものらしい。そして、 おれたちは、 おれが、ジャッキ・ 血と肉片のこびりついた白骨が、ころがっていた。大きい一体は、 た。きのう、あれ きのうの岩場に降り ハンドルで脳天を叩きわった一頭は、岩棚から落ちた位置で、白骨に 十個ある等身大のものは、あのとき斃した敵のものにちがいない。 から、 イワキリュウたちは、 てみた。すると、 血なまぐ 住民総出で、獲物を解 さい 臭 Va が フタバスズキリュ つ Va

古生物学徒として、 つ おれのほうは、 死臭に胸が悪く 稀有の標本をまえにして、 なりかけてい たが、 いっこうに、その場から立ちさろうとしなか 由紀子は、 平気 なものであ る。 いまや、

白骨 0 頭部だけ は、 そのままになってい る。 肉が少ない ので、 食用にならない からである。

103

化現象は、まったく見られない。 度でも生えかわる恐竜の歯は、上下に嚙みあうようにはなっていないから、のこぎりの歯の ところもある。 ように整然としているわけではない。大きいものもあれば、小さいのもあるし、欠けている をみると、同じ大きさの三角の歯が、生えそろっている絵になっているが、 頭部を手にとって、口をひらい 古生代、 すでに、 てみると、不揃 哺乳類の爬虫が獲得していた、 いな歯列があらわれる。 犬歯、 ふつう、復元図など 門歯というような分 あれは違う。何

「この頭蓋骨からみて、脳容積は、二百CCくらいはあるわね

うなずいた。 由紀子は、 感心したという口調で言った。 おれ は、 反吐がでそうになるのをこらえな が 5

頭や手足の部分は、 う話をまえにさいたことがある。仔ワニの死体は、背と腹の皮を財布などに加工したのち、 からスタートすることだけはまちがいない。 てしまうと、 古生物学の決め手は、 由紀子は、 ハンドバッグ製造 群馬県新田郡のスネークセンター 温血である恐竜を「大きなトカゲ」としか考えられなくなってしまうが、 二億三千万年前の三畳紀から数えはじめたとしても、 剝製にして、キーホルダーに加工して、売るのだそうである。 のため、 現存する生物 バラバラになったワニの死体のなかで、弁当を食ったとい との比 較研究にある。 や、 南 伊豆 のワニ もちろん、 園などにも、 新生代が始まる七千万年 それ にとらわれすぎ 実習 に そこ って

「恐竜類は、

哺乳類が経験する適応放散のパターンを、すべて試みてしまっている。でも……」 犀に相当する角竜亜目、アルマジロのようなまえまでは、確実に地球の支配者だったわ。 て、アルマジロのような曲竜亜目、象に相当する竜脚亜目など、「球の支配者だったわ。翼手目コウモリのように空をとぶ翼竜* to のちに 1/2 たし

すさまじい臭気に、気がくるいそうになっていたからである。 由紀子が、 情熱をこめて喋りはじめたのを、 おれは、いささか、 もてあましはじ め 7 11

0 目のような形態に、 ありながら、皮膚に毛をもたない恐竜のただひとつの弱点だったといえるわ。 びることができたのよ」 体温が放散して、生きていけなくなるからだわ。恐竜が適応放散できなかった食虫 矮小な生物は、むしろ例外だった。 原始哺乳類は、 ひたすら体を矮小化することによって、 三十センチ以下の恐竜 が 1/2 ない かろうじ 体型が小さく のは、 て生き 血 7

生きることによって、かろうじて、絶滅をまぬかれたわけだ。 体長十センチにみたない 由紀子のお喋りが核心をつい 原始哺乳類は、王者である恐竜のお目こぼしにあずかった生 てきたので、おれ は、 おも わず、 話につりこまれ た。 に

竜とは双弓亜綱だけを指すわけだが、 そのほかの生態系は、 クビナガリュウの類まで、含まれることになる。これらを恐竜の定義に 0 干パーセント以上を、 すべて恐竜だけでカバ 恐竜だけで占めてしまったことに 広義に解釈 しし すれば、側弓亜綱――魚竜の類、広弓--してしまった。学術的な定義でいえば なる 加えれ 広弓亜綱がえば、恐 中

野イ もつアルシ デルが現わ 三続きのおり 牛あるいは犀の先行型といえるわけである。哺乳類時代になっても、ソン・アルティコルニスという、誤まった学名をつけてしまっている。 な ノイテリウムなど、さまざまな試作品がテストされている。れるまえに、カブト虫のような角をもつブロントテリウム、並行した二本の角を リケラト って現われる哺乳類の全てのパターンは、 プスの化石が発見されたとき、発見者は、野牛とまちがえてしまい、 恐竜ですでにテスト済みである。 犀のような完全モ つまり、 角竜は、

リ、アロサウルスとライオンなど、先行種と後発種との関係を示す例は、 いうこと つまり、現存哺乳類の適応放散のパターンは、 魚竜とイルカ、ブロントサウルスと象、 である。 プラコケリスとセイウチ、 すべて、 恐竜の形を借りて、テスト済みだと プテラ) くらでもある。 ドンと J ウモ

長月よ」 「ただし、 ひとつだけ、 これ までの古生物学の知識では、 説明できなかった目が かあるわ。

由紀子は、言った。

おれは、由紀子の分析に、ぐいぐい引きずりこまれた。

をつくり、は 霊長目人科人属人種-かなる種も、 ては科学技術文明とやらまでつくりあげる、 そういった方向に進化することなど、 ホモ・サピエンスというのは、 ありえないはずであった。 選ばれた種のはずであった。 地球上はじめて言葉や文字や文化 かつ

も侵犯されたことのない、聖域のはずであった。 能性は無限であり、 乗せられ 知恵の光によって、 種族でなけれ てい サピエ るため、外観上の分化を行なうことはなかったが、 ばならなかった。人類のもつ進化の形質はあらかじめプログラムされ ンスは、 水に潜り、 社会、言語、道具の使用などの能力は、 神の御心によっ 空をとび、地を走るまでの段階に達した。人類の獲得した可 て、地球の政権を担当すべく か 0 人類は自からつくりだした 7 43 創造さ かなる地球上の生 た軌道に なる

の目で見てしまった。 おれは、 ここで、 おれたち人類の増上慢な考えに対する、 は つ きり

集団で狩猟する-球上を制 ち人類の神聖をけがす第一歩を踏みだしていたことを、すでに知らされ まで、 5 イワキリュウ べき存在であった。 覇した恐竜のなかには、 魯鈍な巨大な図体をもてあまして亡んだとされ という方向に適応放散をとげた種が、すでに存在してい ードロマ エオサウ 雑食性で小柄な体軀をもち、仔を扶養し、道具を用 ñ ス . イワ 丰 エン てい シ ス・ た「大きなトカ セン バ は たのである。 てしまった。 霊長 ゲー 類 型 恐 お Va

この地球の進化を司どる大きな存在 ぬけに、神自身の姿を模倣した選民として、 七千万年まえ、 ひとつのモデルを試行し -神と呼 てい んでもい たのである。 人類を創造し 13 ある た いは大文字ではじまる主 のではなか った。

であった。 現存人類の先行種にあたる、 そのイワキリュウは、 洋々たる将来を約束された選ばれた

なぜ、かれらが絶滅してしまったのだろう?」

おれは、 おれたちが、 歩きながら言った。由紀子が、ようやく 惨劇 の場から百メートルばかり進んだとき、 標本の検証を終 由紀子が答えた。 えたか らで

「白亜紀末、 ドロマエオサウルスばかりでなく、 すべての恐竜類が大絶滅したわ」

あたりまで足をのばしてはい れたちは、 なにかが舞っていた。 岬のむこうにつづく砂浜を、歩い なかった。 砂浜を歩いていくと、 ていった。異変のあと、おれたちは、 つぎの岬があり、 その先の海

をとらえてくる。 それは、はじめて目撃したときに この先の岬に 巣があるのだろう。 は、 海上を舞いながら、ときどきダイブして、 は っきりとは 確認でき な か った。 プ ・テラノ 海面 K* の魚 で

すことも、難しかったにちが 翼幅十五メートルと予想され プテラノドンは、 その巨大な翼竜が冷血だとすれば、 翼 福 八 X る翼竜の化石が発見されている。零戦よりも、 ない。 トル にも およぶ、 地を這うだけの生体のエネルギーをつくりだ 巨大な翼竜 である。 最近アメ 大きい リカ ことにな で

由紀子は、 目で見るプテラ ノドンの生態に、 う か n 7 Va た

いる。 後頭部に突出した舵のような部分は、 飛行に際して、首がねじれるのを防い ジェ ツ でいる わけ の層流安定板 である 0 ような役割をは たし

プテラノドンは、ときどき、岬の上に戻っていく。海から吹きつける風 が中空になった、 コウモリほどの飛翔力も持っていない。 やわな骨格しか持っていないからである。 巨大な翼幅 のわりに、 体重はきわめ に乗 5 てとぶ て軽 77 かれ

したがって、 から雛の口 めがけて、魚を投下して戻っていくわけである。 雛の口に餌を押しこんでやるような微妙な飛行は でき な 61 とちが つ て

れらは、い のである。 つ たん翼を休めたら最後、 うまく 気流に乗れるまで、 風待ち

忍耐づよく、 プテラノ 彼女の作業が終るのを待った。 K" ーンをス ケッ チし、 メ モをとっ てい た。 お n は、 死臭からは な n たの

友人たちの集落に戻れなくなるかと思ったからである。 おれたちは、 むこう側にでる道が見つからなかったし、そろそろ、 プテラノドンの巣のある岬のところから、 また岩場を登りはじめ ここらあたりで戻らな

景色にもどった。ここは、 たらなか りつめると、羊歯の下生えの叢みのところどころに、 った。 友人たちの通路になっていないらしく、 針葉樹が茂って 踏分道のようなもの いるとい

て、羊歯 のほうにむか の葉がなぎたおされ、巨大なものが出現した。 って、五分ばかり進んだとき、 行手の針葉樹の林 が、 ざわざわと騒

るからに醜悪な生物だった。 本の指しかつい 無細工に大きな頭部をふりたて、おれたちの行手に立 ていない。巨大な頭部には、不揃いな乱杭歯が、 傷を受け ているらしく、 上体 が血まみれ むきだしになっ ち à になっ さが つ てい た。 てい 前 肢 る。 には二

「逃げろ」

おれは、由紀子に声をかけて、走りだした。

れば、七、 現したら、 そいつは、 八メートルにはなるだろう。イワキリュウとは比べものにならない、巨大な体軀 二階の窓に首をだすような恰好にちが 頭のてっぺんまでの高さが、 四メー 67 1 ない。 ル を越え したがって、頭から尾 てい た。 t Ľ 現代 の先ま の東京 で計 に出

あえぎながら言った。 しばらく走りつづけ、 その \$, のを引きはな したとき、 由紀子が、 だし ぬけ に立ちどまり、

「ミカサリュウよ」

「なに、ミカサリュウだって!」

おれは、大声をあげて、訊きかえした。

カサリュウというのは、 北海道三笠市から、 化石が発見されてい る、 日本最初の肉食恐

これまで、日本では、 る。 発見され たのは、 旧日本領サハリンのニッポンリュウなど、 頭骨 だけ で、 七六年の 暮であった。 草食恐竜の化石は発掘

なら、 のある発見である。 ミカサリュウの発見は、世界的な大ニュースというべきである。もし、これが、 ているが、 カーネギー財団あたりが出 調査が行きとどいていないためもあって、 資して、 探検隊 が 派 遣 され 肉食恐竜の化石は、出ていなかった。 るくらい、 ニュ アメリカ バ IJ

とんど興味を示さず、 しかし、 日本の大新聞 簡単な 隣国 「怪獣発見」の記事ですましてしまった。 の汚職には興味が あ っても、 古生物学上の大発見 ほ

な体軀をもつ、 ずれも、 ティラノサウルス科の化石は、 、ティラノサウルス・レックス タルボサウルスと命名されている。名前はどうであれ、体長十五メートルという巨大 白亜紀末の内陸地帯で発見されている。 史上最大の陸棲肉食動物であることに変りは ほとんど、北米とモンゴルで発見されて ――暴君竜の王者と命名されているのに対して、 ない。 しかし、 Va る。ア これらの化 X 石は ソ連 力

白亜紀末には、 れに対し 同 津軽海峡をへだてるプラキストン線はなかったから、 て、ミカサリュウは、当時のアジア大陸の海側にちか 物相 をも 日本列島は、 つ地域だっ まだ島ではなく、 アジア大陸の東端を占めていた。そのこ 北海道も東北も、 1/2 ところで発見され 7 V2

個体の化石が、 ラノサウルス科の矮小化した地方亜種とも考えられるし、あるいは成長しきっていない たまたま発見されたケースとも解釈できる。 頭骨の大きさから推定して、六メートルの全長をもつものと考えられた。

物になりそうな動物と見れば、情け容赦なく襲いかかる肉食動物である。 を燃やしはじめたのだろうが、おれのほうは、そうは行かなかった。なにしろ、 してみれば、生きたティラノサウルス科の標本を、観察する機会に恵まれ、 由紀子が止まってしまったので、まもなく、ミカサリュウは、 おれたちが出くわした奴は、七、八メートルの体長を持ってい た。 追いついてきた。 おおいに学究心

由紀子に

おれたち二人の生命のほうが、問題だった。

体重を機能的に生かせるだけの関節形状をもたなかったため、 適応におちいってしまったという。つまり、大きくなりすぎたわけである。 白亜紀末になって、 たと説明される。 ティラノサウルスについては、 大腿部の関節に、奇妙な病痕がある。その病痕は、 体長十五メートル、体重十トンというような大きさにまで達し、捕食動物としては過 ベルトからタイヤチェーンをとりはずし、振りまわしはじめた。 巨大化するという定向進化をとげたメガロサウルス上科に属する肉食恐 ひとつの異説がある。 関節炎のためだと説明されている。 北米やモンゴルで発見され すべて関節炎をわずらってい かれらは、 た化 その

の肉を食っていたのではないか、という疑問が提出されるようになった。 挙に屍肉食のハイエナの生態にまで、おとしめられたのである。 ぶみをこらえながら、他の動物を捕食するわけにはいかない。かれらは、死んだ恐竜 肉食恐竜の王者は、

ちついたのかもしれない。 でいるとは、とても思えない活潑な動きを示した。海辺にちかいところに棲むミカサリュウ だが、おれの目のまえにいるミカサリュウは、決して、鈍重ではなかった。 あまりにも巨大化しすぎる進化の過適応を回避し、地方亜種として頃合な大きさに、 関節炎を病ん

子をみせなかった。まるで、痛みを感じないかのようにみえた。 かなりの打 撃を与えたつもりだった。しかし、巨大な肉食動物は、 鎖り鎌の分銅のように、タイヤチェーンを振りまわし、 いっこうに、 ミカサリュウの右手 ひるんだ様

けではない。しかも、 事実、かれらの退化した二本指の前肢は、捕食行動には、たいした役割をは 哺乳類ほど神経組織が発達していないから、 少々の打撃 には たして ひるまな いるわ

うだった。 ちどまり、 と由紀子は、 巨大な口をひらいて咆哮した。 一本の針葉樹の幹のかげに逃げこんだ。ミカサリュウは、 木のどちら側から廻りこむべきか、 迷って 木のまえ 1/1 るよ で立

おれは、 幹の右側から顔をだし、 チェーンをふりまわしながら、 P つの足めがけ 吅

113

「走れ、由紀子!」

リュウをひきはなすことができた。 おれは、はねおきながら、由紀子に声をかけた。ふたたび、二人して走りだすと、 ミカ +

ているミカサリュウを牽制してくれたことは、まちがいない。 羊歯の叢みのなかを逃げながら、おれは、ときおり振りむいた。 イワキリュウの群である。かれらが敵か味方か判らないが、 ミカサリュウは、五十メートルばかり後方で、止まっていた。その前後に動くものが ともかく、 何度目かに振りむ おれたちを追

由紀子に声をかけて、もときた道を戻りはじめた。

をしたやつがいた。 巨大なティラノサウルス属は、敏捷に動きまわる連中を、もてあましているようである。 ミカサリュウのまわりには、五、六頭のイワキリュウが群がっていた。そのなかに、繃帯 さきほど、おれたち二人を、護衛してきてくれた友人たちにちがいない。

るわけではない。 しかし、友人たちのほうも、 白骨の剣で仕留められるような、 なまやさしい相手と戦っ 7

た。だが、剣はまっぷたつに折れ、はねとばされた持主の上に、三本趾の大きな足が、振り 横側からまわりこんだ一頭が、ミカサリュウの脚めがけて、白骨の剣を突きたてようとし

三歩さがりながら、鼻面めがけて一撃して、とびのいた。 と、血がとびちった。反対側を向いていた首が、こっちへ向きなおったので、おれは、一、 よった。さきほど、すこしばかり傷つけた左足首めがけて、横殴りにチェーンを打ちつける 友人たちのうちから犠牲者がでたのを見て、おれは、チェーンを振りまわしながら、

撃にはならないが、すくなくとも、強大な顎を、引きつけておく役にはたっ おれは、足首の同じ個所めがけて、くりかえし、チェーンを叩きつけた。 巨体がのけぞったところで、むこう側から繃帯が、 三歩ふみだしたミカサリュウは、あきらかに、片脚をひきずっていた。 攻撃をかけた。白骨の剣は、 ている。 足首のところ

合から、 ンは、アキレス腱に命中したが、まだ、それだけでは、打撃になっていない。そのとき、横 皮も肉もそげおちて、白い骨がむきだしになっていた。 一頭がとびだして、白骨の剣を突きだした。チェーンの打撃で、 やや横にまわり、足首の裏側にまわるように、チェーンを振りまわした。チェ 厚い表皮が剝がさ

めちゃ チェ さな前肢は、まったく助けにならない。巨体が、倒れたまま円を描きはじめたので、 巨体が平衡を失って、左側に倒れてきた。ミカサリュウは、右脚で地をか めちゃにチェーンを振りおろした。 ンの射程内に入った。チェーンを振りあげて叩きつけると、片眼がつぶれた。 だが、バランスをとることができず、もがくばかりである。退化した二本趾の小 いて起きあ

「横から狙うのよ」

何度めかの攻撃で、チェーンの先が、側頭部にめりこんだとき、巨大な体が、大きくそり頭部が、こちら側にむきなおったので、横なぐりの攻撃にもどった。 ろで、ミカサリュウは、ぐっと頭をもちあげた。おれの友人の一人が、その背にとびのった からである。おれは、チェーンを持ちかえて、前面から叩きつけて、牽制した。ふたたび、 おれは、チェーンを横なぐりにして、攻撃しはじめた。側頭部の外皮をぶちやぶったとこ 由紀子が叫 びたてた。そうだ、恐竜の頭蓋骨には、側頭部に二つの穴があ 12 7 12 3

かえった。 ているようで、 太い尾や、まだ健在な片脚などの動きが、きゅうにチグハグになった。まるで極い もはや反撃してはこなくなった。

を突きさし、内部をかきまわすように、こじりあげた。 おれは、 動かなくなった頭部にまわりこんで、側頭部 頭部が、はねあがったように起きあ の傷めがけて、 ジャ ツキ

なくなった。それでもまだ、 ンドルは、おれの手から、もぎとられ 後脚と尾は、ひくひくと動きつづけていた。 た。だが、その頭部は、ぱ たりと落ち、 動か

るりと身をぬけだし、巨大な頭部に近よった。 由紀子は、血だらけになったおれのほうに近よってきて、 いったんしが み つ 61 7 から、 す

と見まもっていた。 おれが破壊した側頭窓から、脳漿が流れだしてい た。 由紀子は、 そこに立ったまま、 つ

「チッポケな脳ミソの神話が崩れたわけね」

由紀子は、そう言ってから、説明してくれた。

スフェノドン(ムカシトカゲ)や、ワニの脳腔には、その容積の半分 から、恐竜もそうにちがいないと、 恐竜 の脳のメカニズムについては、ほとんど判ってい その二分の一が、脳容積だと決められていた。なぜ、二分の一かというと、現存の 推定されたからである。 ない。 化石からみ L か 脳が て、 つま 脳腔の容積 つ 7

もし、ティラノサウルス属が、冷血で、脳腔の半分の脳しか持っ ーモーション・フィルムのような緩慢な動きしかできなかったはずである ていなかったとす

ちとの再会を、喜んでくれているようだった。 ともかく、おれたちは、ミカサリュウを斃すことができた。繃帯を巻いた友人も、 おれた

うだった。

すくない岩屋になっている。 岩壁の下に、大きな岩が張りだし、羊歯がおおい 二十分ばかり歩くと、ひとつの岩山の下にでた。繃帯は、そこで立ちどま かぶさっているところがある。 らった。

ほうを見まもった。 繃帯は、岩屋のなかに入りこんで、 ピンポン玉のように目をくるくるさせながら、 n 0

血の臭い おれと由紀子は、 が鼻をついた。 岩角を乗りこえて、 岩屋のなかに入りこんだ。 そのとたんに、 ふた たび

まえた。そこには、一頭のミカサリュウの巨体があった。 岩屋のなかにうずくまってい るものを見て、 お れは、 タ イ ヤチェ に手をか

きく破られ、内臓がどろりととびだし、おびただしい血潮の溜りができあがってい 小さいやつも、すでに死んでいたのである。巨大な体の横にまわりこんでみると、 っているのを認めた。そして、それらは、 おれは、おそるおそる近づきながら、巨体のそばに、小さな体が、三つ四つ、 おれの手を押しとどめるようにして、ミカサリュウのほうに、 いっこうに動こうとしなかった。大きいやつも、 歩ち 横たおしにな か つ

そこここに死んでい る二メー トルばかりの死体をあらためながら、 由紀子が叫 h

サリ それを上まわる体軀をもつ、 「さっきのやつが……」 ュウの仔どもたちは、一嚙みで絶命したにちがいない。巨大な死体のほうも、 らの死体には、巨大な顎によってつけられた傷が、 同じミカサリュウによって、嚙みころされたにちがいない ついていた。 おそらく、 やはり、 このミカ

ミカサリュ 身ぶるいしながら、さきほど、 ウのことを思いだした。 血まみれ の姿で出現し、 おれたちの手で斃された

「一家心中とでも呼ぶべきかしら……」

高度の知能をもつイワキリュウのあいだで、その行為が、死に値する反社会的行為とされ ワキリュウの母親も、自分の子を食っていた。その突発事件に驚いたボスは、母親を殺した。 由紀子が、そう呟いたとき、おれは、 もうひとつの例を、思いだして いた。

大絶滅が完了するのだろう。 たちの知る恐竜絶滅の時代だった。 車もろとも、タイムスリップさせ、 恐竜という種のうえに翳りがではじめてから、 なにかが、つかめはじめていた。五十万ボルトの高圧電流は、おれたち二人を、 岩屋をあとにして、集落のほうへむかって、ゆっくりと戻りはじめた。 もちろん、 白亜紀末期へと、吹きとばした。そして、それは、 それは、 おそらく何万、 一年や二年で完了するような現象で 何十万年もかけて、

は、勢いこんで、言った。 いによって、亡びたん

期に裸子植物から被子植物への植生の転換が起こる。 ている。 寒波襲来説などが、ポピュラー カロ ドの中毒のため絶滅したという説もある。しかし、 恐竜絶滅 であるが、 の原因に ほかにも、いろいろな説がある。中生代末 つい 被子植物にふくまれるストリキニーネ ては、 さまざまな説がある。 V ずれ の説 to. 造山運

毛がなかったから」 ン帯に亀裂が生じて、宇宙線が濾過されずに地上に降りそそいだ。その宇宙線は、進化の頂 があるはずよ。宇宙線による遺伝子異変かもしれないわね。地球をとりまく、 「そう単純には割りきれ のぼりつめた種族にかぎって、 な 1/2 わ。 遺伝子のバランスを崩したとも考えられる。 t 共食 61 をは U 8 るきっ か でけに な つ た ヴァ なに ン・アレ 力 0

うなずいた。

極度に発達した種 0 種と 7 の自壊作業にもとづく、 退嬰現象だ つ 1/2 え

巨大な頭脳を発達させたが、すきまだらけの頭蓋骨の限界いっぱいまで、脳容積をふやして、それ以上は巨大化できない限界にきていた。ドロマエオサウルス類は、人類の先行型として、 ウル ス類 P ブ U ント サウル ス類は、 巨大化 す 3 とい う定向進化 0 頂点 派に達

進化の袋小路に入りこんでしま ったのである。

伝子の形質が固定化されていた。 7 ・チェンジをしたくらい では、 次の段階に飛躍進化 できな 11

子に狂い 二など、それこそ「ちっぽけな脳みそ」をもった連中は、宇宙線の照射をうけてたとえ遺伝 そこに、なにかの要素が、 毛や羽毛のある鳥や哺乳類は、生きのびた。 ヴァン が生じても、 ・アレン帯の割れ目によって、おびただしい宇宙線が、 どちらの方向へも適応していく潜在力をもっていた。 引き金の役をはたしたのである。 毛のないものでも、ヘビ、トカゲ、 超新星の爆発 地上にふりそそい 12 ょ つ カメ、ワ て、

分な能力をもたず、 恐竜だけは、違っていた。温血という体組織を獲得しながら、 遺伝子の構造の限界ぎりぎりまで、 無理な進化を重ねてきた。 それを維持 す

つった。 れらに対する影響は、大きかった。仔を扶養するという、鳥類に先がけて獲得し まっさきに 狂いはじめた。 かれらには、 仔を暖かくつつみこむ毛も羽毛も、 備わ た習性 っ 7 V

を存続させることは、 きらめたにちがいない。 地球の生物の 進 [化をつかさどる大きな存在は、恐竜をマ 不可能だと知ったからである。 もはや、 どのようなマイナー・チェンジを行なっても、 1 ナー ・チェ ン ジすることを、 このモデル

もの年月、 ようという気になったにちがいない。 そして、 お倉にしておい あるいは神とでも呼ぶべ た哺乳類とい うモデルに、 き何かは、試作品のまま、 フルチェンジをほどこし、 なが いあいだー 市販してみ -二億年

産タイプにおちついたときには、さまざまな欠陥が、目につきはじめた。 哺乳類というモデルも、 何度もモデル . エ ンジを < 'n か え 人類という最終量

「人類にも、 爆発する人口、自然破壊、戦争、公害など、 さまざまなマイナス面を、 生みだし

ずきあった。 「そう、二十世紀は、 十世紀は、その翳りが現われた、絶滅するときが来るんだな?」 はじめじゃ ない か しら おれと由紀子は、

大相撲の滅亡

小林恭二

王立相撲研究所名誉所長、 サー トーマス・リプトンの挨拶

分そらせ気味に咳払 手ととも いをひとつすると、鷹揚に話しはじめる。 マス ・リプトン卿が登壇する。リプトン卿はその恰幅のかっぷっと 41

ります。 抄しました。そして、今やそりというにもかかわらず、この研究は毎年おそるべきスピーたのは、近々二十年のことです。にもかかわらず、この研究は毎年おそるべきスピーたのは、近々二十年のことです。にもかかわらず、 それはひとえにここにお集りの研究者及び、 「皆さんも御存知の通り、このレスリングに似たスポーツについて本格的な研究が しました。そして、 ここに政府を代表してあつくお礼を申し上げる次第です。 今やその全容が明らかにされるのも時間の問題と言われております。 民間の篤志家の皆さんの御努力のたまものであ はじまっ -ドで進

n

7

う。その期待の それぞれ専門分野においても確固たる地位を有する碩学ばかりであります。幸いにして、今回のパネラーの皆さんはいずれ劣らぬ第一級の相撲研究者 ついて、おそらくは従来の相撲研究の枠を超えた新しい視座が提出されるものでありましょ 切なることを語ってこの第五回相撲研究者学術会議の開会の辞とさせ の相撲研究者である 大相撲の滅 とも てい 亡に

大きな拍手に送られてリプトン卿、 下手へ と去る。

イオワ州立大学理学部クレア・ コーフマン博士の演説

とするも、 すかさず「ワシュウヤマ!」の掛け声がかかる。 て登場したのは白衣姿のクレア・コー すぐ気をとりなおして大学ノートを開く。 フマン博士である。 会場がどっとわく。 博士はたい そう小柄で痩せ 博士は一 つ

たしは、 どうか御静聴願いたい。 大相撲の滅亡につい て、 主として生物学的な見地から述べさせて いただこうと

ずうずうしくなるわ、 てる人間をバカにするわ、汗はかくわ、大食いだわ」 なんぞできる筈がないのだ。 すぎなのであります。皆さんは実に簡単なことを見落としておる。あんなに太ってスポ ったことの方が問題なのだ。そもそも人間、太ってロクなことがないのであります。やたら わたしの結論は実に簡単なものであります。 意味なく偉そうにするわ、声はでかいわ、 むしろ、あんな不健康なスポーツが何年にもわたって隆盛を誇 彼らの滅亡の原因はただひとつ。 デリカシーはな つまり ーツ n

落とす。 鏡で野次の方向をにらみつけるも、 会場から今度は「イシンリキ!」のかけ声。 スポットライトに目を射られた様子で、 聴衆げらげら笑う。 男、 その度の強そうな眼 すぐ草稿に目を

でしょう。 わたしは真実を語るだけだ。

五五〇ポンドから六〇〇ポンドあったと見られる。 撲界最古の巨漢力士です。発掘された骨及び当時の記録を照らしあわせてみると、 大相撲への巨漢力士の台頭は一九八〇年代の小錦の登場を嚆矢とする。 これでも日本人の目には脅威に映ったらしく、 後の巨漢力士からみるとかわい 当時のマ スコミには、 皆さん御存知 最大時で いも の相

技が未熟だ』

『醜怪だ』

『元寇以来の国難』『気持わりい』

『シコふまにゃシコを』

った反小錦的あるいは反巨漢力士的意見が散見されます。

績をあげてもすぐに致命的故障を負うのが常でありました。 力士は例外なく内臓疾患やら、膝関節の摩耗やら、 花に 大型力士はほどなく長い低迷期を迎えることとなる。彼らの肉体と精神が、 即応することができず、あちらこちらで悲鳴をあげはじめたのです。当時の 腰椎 の変形やらに苦しみ、 一時的 その急速 に好 巨漢

たと思われます。 力士の食性が 《士の食性が変化したのです。わたしの研究によると、二〇〇二年頃から再度力士この事態が一変するのは二十一世紀に入ってからです。どう事態が変化したかと じまるが、 それ は食性の変化と相前後して起こっている。 それはこんな具合にはじま の巨大化 Va う

が 『大型力士がうまく育たないのはひょっとして食べもんのせ できるか、日頃ない知恵をしぼっていたが、 ある親方、 そう仮に山登親方とでもしましょうか ある時ふとグッドアイデアを思 彼はどうやったら力士たちの体質改善 いと違うか』 41 . つく。

あります。 ツ ñ りの栄養素が、当時の最新スポーツ医学にのっとって、バランスよくしかも ツァンデスとか ており、 まで の力士の食生活は非常に 栄養的には最上のものとされ 呼ばれるシチュー料理を常食としていましたが、 バランスのとれ てい ました。 たも 山登親方はこれに疑問 のでした。 これにはおよそ思 彼らは チャ を抱 ンコ鍋 大量にぶちこ た つく か 0

か うのが身体に悪 て、 もん食っとるが風邪ひとつひかん。ライオンは肉しか食わん、 「動物園の象は んな元気にやっとる。 あれやこれや食いまくって、 あ 11 n んと違うか。 だけ大きな身体で草しか食わん。 それが人間だけは、健康のためにはい 毎日同じもんばかり食っとった方が それでもって身体壊しとる。 食わん、海豹は魚し鯨はプランクトンと ひょっとしていろんなもん食 ろんなもん食わないかん は魚しか食 相撲 強く カン 42 なるんと わん。 う 7 でもみ た いう 1/2 3

な力士には肉ばかり食わせたのです。 それを試し ツマ ンら てみました。すなわち、 しくきわめて単純な精神の持ち主である山登親方は、早速自分の部屋 野菜の好きな力士には野菜ばかり食わせ、 肉の VZ 老

康なまま巨大化 結果は親方の目論見通りでした。野菜ば 肉食竜はともに、 しました。 山登親方はこのふたりをそれぞれ草食竜、 その後に横綱にまで昇進し、 かり食 った力士も、 肉ばかり食 特に草食竜は八十 肉食竜となづけました。 った力士 to 莧

ざわつく 0 て後に神としてまつられたことは皆さんも御存知 の通りです」

ちょっと待 0 てく ださ Va

会場の中ほどの紳士が手をあ げた

いが科学的とは く同じも しか食べなかったという記録はどこにもない。 言いかねる」 肉食竜という力士が存在したことは我々も知 あなたの推論はお話としては面白 2 てい るが、 その名のごと

「そういう意見がでることは予期 てい ました。 む ろ Ĺ 実証はちゃ んとしてありま

これを見てください」

博士が壇上においたのは、 二個 0 頭蓋 骨 一型であ る。

関節 「こちらが草食竜の、 の幅が異常に広い。しかも歯よりもずっと低いレベルにある。これは上下の歯をすべて 肉食竜。 接触させ、えさを押しつぶすために最適な構造です。 こちらは草食竜とはまったく違う。 こちらが肉食竜の頭蓋骨模型です。 巨大な肉塊を切り裂くため まず、 草食竜 の方。 顎き は 覧 はさみ 0 涌 n

ように それから、 です。更には草食竜の場合、 なっています。顎の関節の位置も高い。これは肉食動物に多く見られる顎構造です。 歯にも注目してください。草食竜は臼歯中心だが、肉食竜の方はかくのごとき 骨と一緒に多くの小石が出土している。この 小石は胃中

どの量の植物を摂取してい 植物繊維をくだくため、 た傍 彼が 証となります」 のみこんだものと考えられ る。 これなども彼が

会場はしんとする。

「よろしいですか。では話 を続 けさせて いただく。

力士はみな単一の食物 ごはみな単一の食物から栄養を摂り、しこうして、ますます個性的に巨大化この山登親方の成功はあっという間に相撲界に広がったと思われます。そし ますます個性的に巨大化し てそれ 7 1/2 きまし

ありません。 と首が長くなりました。これは相撲で言うフトコロが広くなる効果を持ったのは言うま 恥骨がはりだして内臓を受けとめるかたちとなりました。足は短くなりましたが、その分手 ユニー たとえば二十一世紀中 クなものでした。巨大な内臓器官を支えるため骨盤が下さがりとなり、それば 更には、 莫大な体重を支えるため、足裏が象のごとき円形となりました。 ·葉の横綱琴馬場は、九〇〇ポ ンドの巨漢 で した が、 その 骨格 かりか でも

木の高いところにある新芽でした。 ブラキオサウルスは重量七〇トンほどもあった大型恐 のビルディングにも匹敵しました。 ラキオサウルスは重量七〇トンほどもあった大型恐竜。で、首をのばした高さはて言えば、この琴馬場の体型は白亜紀前期に栄えたブラキオサウルスに酷似して 彼らが常食としていたのは、もっぱら木の芽、 四階 いま

129 ここからが重要な のですが、 そこから類推して琴馬場はも っぱら木の芽、 それ

も新

芽を常食にしていたに違 67 ない とわたしは考えるのです。

状を徐々に古代の恐竜どもにもとめていったというのが、 つまりです。食性を単純 した力士たちは、その理由はは わたしの推論な かりかねるもの のです。 の

たとえば、記録に残る沢山錦の風貌は間違このような例は他にも多く見られます。

抜群山は生の魚しか食わなかったと言われ たとえば、 ていますが、アサガヤ 42 なく肉食恐竜のそれ から出 を示 L 土し て 12 た彼の骨を見

ると、両手はほとんど魚のひれのようなものに変貌しています。 わたしの推測によれば、 二十一世紀後半にはほとんどの力士が ?恐竜 化 Ū 7 1/2 た 7

の話、平均体重が六〇〇ポンドにもなろうとする者たちが

人間であり続けられる

b

n

筈がありません。

とすれば当然のことなが なんとなれば、 人間太ってロクなことがない 5 精神面 におけ る退 行も からであります。 並行 して著し 進んで た筈であ n

獰猛になるわ、 のであります。そうですとも、体重八〇キロを超えた人間はすべて、能なしの、 無神経になるわ、借金ふみたおすわ、人のこといじめるわ、威張るわ、 どてかぼちゃの、 人間太るとずうずうしくなるわ、暑苦しくなるわ、 色魔になるわ、 ポンポコプーの、 人非人になるわ、とにかく太った奴らは恐竜みたいなもんな ヘナヘナパ しの、 とにかくアロサウルスにも劣る 声はでかくなるわ 頭悪く おたん ず ぼらに なるわ、

ようなやつなのです

Va わたしの見るところ、 つば 博士はそう言って聴衆をひとにらみすると下手にさがる。 というわけで、大相撲の滅亡の理由は ない。 Va いる。 あ、 この会場にも肥満のしすぎで滅亡を間近にひ せいぜい気をつけることですな」 なすべ てい まわしき肥満に起因し 聴衆はあっ かえて け 7 61 47 にとら るの るような御仁が ñ た様子で ります。

1) 第二大学ジ t . ポ ル . ブ ル ジ \exists P 3 0 演

教授は大儀そうに演壇につくと、体格に似ぬかぼそい声で話しはじめる の男に かわってあらわれ たのは、 今度はうっ 7 かわって でつぶりと 太 つ

デブは生きる資格がないなんて平気で言う。自分を何様だと思ってるんでしょうな。 質だし、ちょっとのことにもすぐ怒るし、人のことをあしざまに言うし、 間がいるから我々肥満者は生きにくい。実際、 れはそれとして、 ああ いう予断と偏見に満ちた人間がいるとは、困 コ フマ ン博士の意見には基本的か 痩せている人間ときたら意地は悪 つ決定的な事実誤認が ったも のです ひどい な。 4) のに 1/2 つかみら なると 42

ます。

ですが)したということ。 そのひとつは二十一世紀に入ると、 ほとんどの力士が巨大化 (まあ彼に言わせると恐竜化

も達したと言います。 りました。 l言います。しかしながら、一面小兵力士もまた大相撲の全歴史を通じて存在し続わたしの調べたところの最重量力士は沼王という力士で、晩年には三五○キロに 二〇〇キロ台の力士も多くなりま L たし、三〇〇キロを超す力士も珍 、なく

たものであります。 の富士は金星を五個あげていますが、 とめましたし、 こめましたし、猫の富士は実に九八キロの軽量で関脇を七場所つとめました。たとえば沼王と同時代に活躍した自棄嵐は一一○キロ台で三十五場所にわたたとえば沼王と同時代に活躍した自棄嵐は一一○キロ台で三十五場所にわた そのうちの二個は先ほど話にあがった草食竜から わたっ ちなみ 7 奪っ っ

では何か? わたしは大相撲滅亡の原 ずばり言ってそれは大相撲の極度の繁栄にあります。 因は、 力士の巨大化とはまったく無縁だと

広告料が当時のカネで三億円とも四億円とも言われます。 それから背中にまわって、 たとえば、 御存知の通り、大相撲は二十一世紀中葉、日本の国力を背景に極盛期を迎えま 大相撲は全世界の注目するところとなり、ゆくところ巨額のカネが動くようになりました。 このユカタを見てください。右胸のところに小さく Shell と書いてある。この 『ナボナはお菓子の横綱です』。 これが驚くなかれ三十億円だ 左胸に Coke。これも同様の値段。 つった

と言われます」

会場から「ほーつ」という声。

どの大相撲グッズを合わせると、 とまで言われました。 キ、せんべい、フンドシ、鬢付油、「これだけでもすごいものですが、 大相撲一場所で動くカネは、 ブロマイド、キーホルダー、ジャケット、まんじゅうな これに加えて百億単位の放映料、 小国の国家予算を優に 更には湯呑み、

これだけカネが動いて堕落が生じない筈がありません。

多くは貧しい農家の出身で、食うためなら何でもするというのが、力士のプロトタイ っていました。 二十世紀の半ばまで、大相撲はハングリースポーツの一面を濃くもっていまし プとな 0

億の収入を得るようになりました。それでもってちょっと顔がいいとかになると、 なカネがころがりこむ。相撲をやめた後も後援会が何かと面倒をみてくれる。 それが二十一世紀に入って一流の力士はおろか、十両になるのがやっとの力士でも年間数 更に莫大

ちょっとふりかえってみましょう。 世の親たちが、こぞって子供を力士にしたがったのは当然と言わねばなりません。 たとえば、ここに栃蒲鉾という二十一世紀のはじめに大関になった力士の記録があ ります。

栃蒲鉾はものごころつくとともに父親から相撲のてほどきをされました。 父親は若 Va

133

士をめざして 彼は繰り返し言いました。 1/2 たのですが、 おまえは将来横綱、それも名門春日野部屋の横綱となるのだ、怪我ではたせず、息子に夢をたくしたのです。

リトル相撲に入った頃には、栃木に栃蒲鉾ありの声がきこえるようになります。 蒲鉾は十年にひとりとい う才能 に恵まれ 7 いたため、 英才教育は見事実を結び

をもたらしませんでした。栃蒲鉾はこのために、凡庸な教師たちの嫉妬の的となり『相撲が とか『大耳野郎』とか言われていじめられるようになったのです。 つよけりゃいいってもんじゃない』とか『この父親の操り人形が』 地元紙の記者がはりつくことになりました。が、これは栃蒲鉾にとって必ずしも幸せな結果 中学に入ると、 こうなればマスコミがほうっておく筈もなく、栃蒲鉾が所属する中学の相撲部に 栃蒲鉾の強さに磨きがかかり、近郷の力自慢の大人でもかなわなく とか 『のぼせやがって』 な りま

この経験は栃蒲鉾少年をひどく懐疑的にさせました。

をよせたのです。 地方は甲子園でおこなわれる全国高校相撲大会で長らく優勝しておらず、 校進学後、栃蒲鉾の動向はその地方では社会問題にまでなりました。 天才栃蒲鉾に期待 というのも、

栃蒲鉾と他の相撲部員の実力の差がありすぎたのです。 一年二年と栃蒲鉾の属する馬力高校は甲子園にゆくことができませんでした。理由は マスコミは、馬力高校が負け

栃蒲鉾は今度は他の相撲部員の憎悪の対象とされました。るたびに、栃蒲鉾以外の相撲部員がふがいないからだと責め ないからだと責めたてま

と決意します。 ミの攻撃にさらさない 栃蒲鉾はここにおい ため、自分の力のすべてを出しきっても甲子園相撲 てマスコミを深く恨みました。それと同時に、 他の相撲部員をマス 大会に出場 \exists

ところとなり、 いじめたことを後悔するようになりました。 この栃蒲鉾のスポ 彼らは大いに感動するとともに、 ツマ ンらしからぬ爽やかな決意は、ほどなく他の部員たちに 今まで自分たちがひがみ根性から栃蒲 つた わる

その年の夏、 馬力高校相撲部は驚異的な強さで県予選を勝ち抜き、 甲子園

国の相撲ファンの目を釘付けにし、彼は当然名門春日野部屋に入門する夏の全国大会では、けっきょく馬力高校はベスト4どまりでしたが、 部屋に入門することになると思 栃蒲鉾の投げ技は全 われ

いところの敷波部屋から指名されたのです。しかし、その年から導入されたドラフト制は 思考放棄して藪波部屋に入ることをのぞみましたが、 制は栃蒲鉾 マスコミは栃蒲鉾がバカなスポー の夢をはばみました。 彼は藪波部屋に入るのを拒否し、 ッマ は

大学相撲に進みます。

が大相撲に集中した結果、

大相撲はその

前の

時代に滅

びたベー

スボ

ル

0

ように動

B

が

٤

ノます この時には相撲に は世紀のスキ かける情熱は完全に擦り切れてしまった後でした。 p ン ダル 「空腹 の一日』を経 て、あこがれ の春日

の店、自由が丘にアクセサリーとギフトの店をオープンさせました。 莫大な契約金で、マイクロソフトの株と国債を買う一方、原宿にクッキー と ク プ

るだの、 当時の人々はそれを見て、やれ精神力がな もあるでしょうが、 栃蒲鉾はその後、大関にはなんとか昇進しましたが、横綱にはなれませんでし 金の亡者だのと批 大事な試合で必ずふが 判しました。 42 1/2 だの、 なく負けてしまうのを常としていたからです。 手抜きだの、 細く長く生きようとし た。

カネとマスコミにとことん嫌気がさしていたのです。のです。いや、相撲自体は嫌いでなかったかもしれま しかし、実のところ真相は別にあったと思 でなかったかもしれません。 わ n ます。 栃蒲鉾 しかし、 は徹底的に相撲に 彼は相撲界をとりま 飽 3 7 Va た

若い入門者たちは、 結局のところ、栃蒲鉾 その後の相撲界に大いなるニヒリズムの影をおとすことになります。 栃蒲鉾を見て思いました。 は凡庸な成績を残したまま早々と大相撲を去りました。 0 0

『あれだけ才能があっても横綱になれないのだろうか かったのではなく、ならなかったのだ。 稼げるカネは大関とさして違わな いのを知ってて、 苦労して横綱になったところで、責 ? 栃蒲鉾関はわざと横綱になら 42 や、 違う。 栃蒲鉾 関 任ば は横 かり大 K な

生きるぞ』 削って横綱を張るよりは、 たのだ。 これぞコ 名誉のためじゃない ースト というナウい パ フ オ そこそこやって大関、苦労して関脇になるよりは適当にやって小 もんね。同じカネがもうかるなら楽な方がい 7 生き方! ンスにひきあう二十一世紀 そもそもオレたちが相撲をや 0 相撲取 の生き方だ、 る Va 0 いはカネ に決ってる。寿命 0 ため だも

名勝負が失われてゆき、大相撲はどんどん空疎 この考えは相撲取 ファ シ のみ 層を広げるという皮肉な結果を得ました。 ならず、 _ 般の青年 たちにも なも のとなってゆきまし 力 ッ J 12 が、 12 Ł そんなわけで土俵 0 として受け入れ からは 6

親方たちは口々に、

『これというのもみーんなあの手抜きの栃蒲鉾 から 悪 1/2 0 がだ」と

をくりひろげていたわけですから、若い力士に示しがつく筈もありませんでした。 ましたが 『ワシらの若い ~、その舌の根もかわかぬうちに、 頃はカネのことなんかこれっぽっちも考えなかったもんじゃ より大きな利権を獲得するため、 暗闘に とか 5 Ħ < V 關 42

結局のところ、 大相撲は 大相撲滅亡の原因は 減亡へ 0 道を歩みはじめまし カネとマ スコミにあ た。 その後 りま す。 のことは皆さんが御 あ まりに 专 力 ネ 7 ス コ

大相撲の滅亡

139

当の力士は緊張したとお思いでしょう。

なく なっ 大相撲滅亡の原因のすべてであります」 たのです。 力士が恐竜化したのではなく、 大相撲とい う組織が恐竜化

でっぷり太った男、 軽く一礼して下手へと去る。

成都 工科大学諸葛愚昧博士の演説

西 条凡児のごとく自ら拍手を しな がら登場する。

抜きにしてどうして正鵠を射た結論を導き出すことができましょうや。 しかし惜しいことにブルジョアジー教授は肝心のことを忘れておられる。大相撲は日本で 日本で滅亡したスポーツです。 面白い 御意見でしたな。栄極まれ それを考えるにあたって、日本の特殊性への考察を ば自ら衰う。まったく世の中うまくできて

我々 インド人もカンボジア人も理解 解できません。 西洋の人々はよく、 というわけで、 中国人は実に合理的な民族です。我々には、日本人のあの不可思議な行動様式は到底理 の神秘とい った具合に。しかし、これはとてつもなくおおざっぱな考え方です。実際、 おそらく韓国人もタイ人もフィリピン人もインドネシア人もマレーシア人も わたしは日本という国の特殊性から大相撲の滅亡を考えてみました。 我々東洋人をいっしょくたにして考えます。あれも東洋の神秘これも しかねるものと思われます。 (もっとも我が中国の宿敵であ

ナム 人には理解できるかも しれ ませんが

その神秘な日本の中でも特に神秘なのが相撲であります。

ムで競うのでしょう。 本来スポーツは一個の完成された美であるべきです。 なのになぜ相撲は醜悪な J

あるいは、 スポーツは平等であるべきです。 なの E なぜ相撲には あ N なに 階級 が あるので

世紀にかけて日本の中心にあった。これを我々はどう考えたらい 相撲は、 決して大袈裟な表現でなく近代最大の謎 なのです。 その謎が二十世紀から二十 Įλ のでしょう。

すなわち、相撲は日本民族のあらゆる近代へのアンチの意思表明であり、 ここでわたしはひとつの仮説をたててみました。 それ

族からあれだけ熱烈な支持を得たのだ、という仮説です。 ゆえ日本民

かつて相撲界でよく言われた言葉に

『武士の

情け

と

Va

う

0

から

あ りま

下手をすると十両落ちをします。 で勝ち越しとなり、 れについてちょっと説明しましょう。 ここに千秋楽を七勝七敗で迎えた力士がいるとします。 次の場所での昇進が約束されます。反対にここで負けると地位が降下 この差は甚大なものです。 彼は、 皆さんはこういう場合、 ここで一勝すると八勝七敗

さぞや

俵にのぼりました。 しかし、事実はまったく逆でした。千秋楽を七勝七敗で迎えた力士は皆、鼻唄まじりで土

りあえず道を譲る。これが武士道なのです。 対戦相手は絶対勝ってはならないのです。自分も七勝七敗ならともかく、そうでなけれ なぜでしょう? この答こそ 『武士の情け』に他なりません。 日本の社会ではこういう時

千秋楽、 我々ガイジンには絶対理解できないものなのです。 うに彼をみつめます。この三者の呼吸の中に日本の美の心があるのです。そして、それは 日本の観客たちは、決して七勝七敗力士が負けないことを知っていますが、それでも心配そ れに対して、 えば、わざと負けた力士は絶対そのことをもらしてはいけません。自分は全力を尽くしたけ れども、 ゆけません。なぜなら日本社会は武士道にそむくものは絶対受け入れないからです。 万が一、七勝七敗の力士に勝ってしまうとその力士はもはや相撲界、 七勝七敗の力士と対戦する力士は、いつも必要以上に闘志満々をよそおいます。 それよりも相手が強かった、ということにしておかねばならないのです。ですから、 七勝七敗の力士はいかにも心細気な演技をして土俵にのぼらねばなりません。 42 B 日 本では生きて

シューの美』というのもあります。 我々が理解できない相撲をとりまくメンタリティーと言えば、 『武士の情け』 の他 に ___ ユ

これは引き際のきれいさとでも訳すべきものですが、これがまた相撲においては、 たい

なウェートを占めています。

の名に恥じない引き際を見せるかということを心配しているからなのです。 親方たちは、その力士がいかに横綱にふさわしい相撲をとるかということより、 力士が横綱になると、翌日から親方たちは彼の引退時期を考えはじめます。 Va かに横綱 うのも、

るや電光石火で引退した者は、名横綱と呼ばれます。 りしてない力士は決して大横綱とは呼ばれない反面、どんなに凡庸な横綱でも力の衰えを知 そんなものですから、横綱在位中いかに素晴らしい記録をうちたてても、引き際があ うつさ

たというのが真相のようですが。 時スター不足に悩んでいた相撲協会が、 相撲取なら屋島関』と歌われました。もっとも後に明らかにされたところによりますと、 しながら、体力の衰えを理由に引退しました。彼はその潔さから『花は桜よ、山は白富士、 実際、二十世紀末の横綱屋島などは、横綱在位三場所で、 窮余の一策としていやがる屋島を無理やり引退させ しかもその三場所をすべて優勝

そろそろ結論にいきましょう。

はこのようなスポーツが、 それはまったく日本人の不可思議で反近代的なメンタリティーによっているのです。 史上もっとも不可思議な、そしてもっとも反近代的なスポーツだということです。そして、 わたしはこれらの事実を調査してつくづく思ったことがあります。それはこの相撲こそは ひいてはこのような人種が、 二十一世紀まで生き伸びたこと自体

方ねえとしてもよ、

なして『ジュラシック・パーク』っていう風に、作品まで指定したんだ

とうございました」 寿命がきたからと考える方がリーズナブルであります。彼らは、 が奇跡だと考えます。となれば、その滅亡は外的もしくは内的な原因によるよりも、 亡していったのです。 それ以外に滅亡の原因はないとわたしは確信します。 自ら引退の時期をさとって 御静聴ありが しろ

盛大な拍手。 堂々と胸をは って退場。

マス・リプトンの挨拶

の挨拶を述べたトーマ ス ・リ プトン卿が再び登場する。

は皆さん、日本民族の滅亡と世界の平和を祝して乾杯!」 とを祝って乾杯したいと思います。皆さん、お手元にシャンパンはお持ちでしょうか? ものなのです。では恒例にのっとり、 ましょう。大相撲の滅亡の原因は、日本民族の滅亡の原因と同じく、 「三人の御説を皆さん、どう思われたでしょうか。わたしにはいずれも真相らしく思わ おそらく、いろいろな要素が複雑にからまりあった結果、大相撲は滅亡したのであり 聴衆盛大な拍手。 リプトン卿満面の笑みで退場。 不可思議な大相撲と不可思議な日本民族が滅亡したこ もっともっと総合的な

乾杯のあと、

クラシック・パ

景山民夫

映画館を出て、野蒜準あー、おっがねがった 三が最初に口にしたのは、そういう言葉だった。!!」

同僚の藁火仁志も、 八仁志も、目を瞬かせながら同様の感想を述べた。おっぱなかったなや」と、野蒜につづいて映画館 野蒜につづいて映画館から真夏の太陽の下に出てきた

「にしてもよ」と、 駅に向かって歩きながら、藁火は首を傾げた。

ック・パーク』観てこいなんて命令出したんかな」 「その点がな、 ってから一軒の映画館もねえんだから、 あのドケチの町長が、 俺にも納得い なし かねえ点なのよ。 て映画代から電車賃まで公費使って、俺たち二人に まあこの霜尻 うちの町 には、 の町まで観に来るっきゃ 四年前に銀 映座 カジ ねえのは仕 つぶ 『ジ n ユ ラシ 2

「そんなに文化的な映画とも思えねがったしなあ

らいつつ、 自分たちの町までの電車の切符を自動券売機ではなく窓口で買い、 藁火はまた、 首を傾げた。 しっかりと領収書をも

すだろうしよ」 町役場の鑑賞指定出すかどうかの判断なら、 俺たち観光課ではなくて、 教育課 の職員よこ

「いぐら何でも、あんなおっがねえだけの映画に、 後ろの席の小学生、ティラノザウルスが人間喰ったとこで泣いたべ」 町の教育委員会の指定が出 るわ

「俺の隣のガキんちょは小便チビッて、 おっ母アに殴られとった」

「わがんねえな?」

「なして『ジュラシック・パーク』なんだべな?」

麦畑の中をガタンゴトンと走って行った。 廃線の憂き目を見ずに運行がつづけられている、ディーゼル車輛二両だけのロー 腕組みをして首を傾げた二人を乗せて、第三セクターの運営に移行したおかげで、何とか カル線は、

に勉強になったんでないか」 「おお、野蒜課長補佐に藁火主任、帰ったか。 どうだった映画は ? 参考にな つ たべ、 大

町役場に戻った二人に、 町長の膳舞源次郎は、 ″発展″ と自筆の金釘流で大書した扇子を

タバタ音を立てて使いながら声をかけた。

「勉強といえば、 ま、古生物学の勉強にはなったと思いまっし」と、 野蒜が渋々答えた。

「だけんど」と、藁火がその言葉をうけて言った。

ては、 手招きした。 説明してねえんで、 「いや、とにかく観てきてもらって、 一うちの町は、 あまり勉強の成果を仕事に生かせるとも思えねぐて、ちょっと申し訳ねえんですが」 福島県のいわき市みてえに恐竜の化石が出るわけでもねえし、観光課員とし それは仕方ねえ。 話はそれからと思ったもんだから、 実はな……」と言って、膳舞町長は、 詳しいこと、 二人に向か って 何も

「君たち二人に、折入って話がある。 ま、 町長室さ入って」

ても六畳ほどの古ぼけた板の間の部屋であるが、そこへ通じる引き戸を開い 顔を見合わせた野蒜と藁火を尻目に、膳舞はそう言うと、 さっさと自分の執務室、 て入って行って つ

「折入って話が、だと」

言ってたもんな」 「あのフレーズが出ると、 町 の財政赤字が二割増 えるっ て、 前の 観光課長だっ た築紫さん

「築紫さんて、あの、 蟒蛇谷のゴルフ場開発の件で失敗して、責任とって投身自殺したっちゅう、 猿崩しの崖から身を投げて死んだっちゅう、 あの人か?」

か

Ã

かね」と、

膳舞町

長が大声を出したので、

二人の会話はそこで打ち切りとなっ

から六年になるけんど、 いまだに遺体は見つかっとらんけどな」

「俺は、まだ死にたぐねえな」

まだ死にたぐねえ。 一昨 自 母ちゃ h から 四回目の妊娠を告げられたば

てこい」という言葉が飛んで、野蒜と藁火は仕方なく町長室に足を踏み入れた。 ソボ ソ語り合っている二人に、 町長の「お 12 なして来ね えのか

「んじゃ、そこ閉めて。 折入って内密の話があるから、 そこ閉めろって」

ちら側のパイプ椅子に座るように命じた。 立て付けの悪い引き戸を、グリグリギギギと藁火が閉め終えると、 町長は二人に、

「ま、諸君も既に知っておるようにだな」

はじめた。 扇子をパチンパチンと、閉じたり開いたりしながら、 膳舞町 長は Va つも の説教 で 喋り

て、 非常に逼迫しておるわけです」 蔵敷町の経済の状態というの は、 15 ブ ル 崩壞 のあ おりをまとも K < 5 つ せ 4) あっつ

場合は適切でないんでない ているわけでして、 ちょっとお言葉を返すようですが、 その、逼迫という言葉は、 かと ゆとりが無い状態をいうわけです 町 の予算の赤字は 既に十億円 から、 に この

對蒜がそう言うと、藁火もうなずきながら後に従った。

ちまった資金の、 もそもの発端だったん うちの町の赤字はバブルとは何の関係もなくて、見切り発車のゴル 金融機関からの借入金の利子が積りつもっただけで」 でないんでしょうか。 後はその、買い手も決定してな 64 のに フ場開発が つ

手はいくらでもあった筈です」 ブル崩壊だっちゅーとるん です。 バブルさえ崩壊せんだったら、 あ 0 J" ル フ場の

そう言い切られてしまっては、 二人に返す言葉は なか っ た。

U 「そこで儂が考えついたのが、起死回生の経済立て直し案というわけでね、 ジェクトを町をあげて推進したい」

「猿崩しの崖、 何メートルある?」と、 野蒜が小声で藁火に訊 ねた。

なく死ねるかもしんね」 十五、六メー 「普段なら五十メートルはあるだけどね、今年は夏前の長雨で、崖の上から川面までが トルってとこかね。 でもその分、 切り立った岩が水没しとるで、 んまし痛く

昨年一年間で、 しかもだ、 これは単に観光客を誘致するだけのプロジェ 我が蔵敷町を訪れた観光客は、 たったの百八十余名。 クト ではない それも大半は、 のです。

挙に三得の計画となるわけであります」 プロジェクト従事者を若い女性中心にすれば、 う勘違いしたのか、岡山県の食敷市と間違えて来た人たちだった。しかし、これ 増えることによって、過疎化の防止どころか、Uターン現象が確実に起こる。それもです、 ます。このプロジェクトにより、観光客は来る、 農家の嫁不足の解消にもつながるという、 プロジェクト関連の仕事に従事する人間 からは違

で、 何をどうするですか、具体的には?」と、 藁火が 3 Ξ ホ プ に火をつけ

日の下に明らかにしましょうず」 「よかろう、 儂が、ここ二年間にわたって練りに練り上げたプロジェ クトの全貌を、 1/2 ま白

式の図面を引き下ろした。その図面には、 ものが描かれていた。 妙な物言いをして、町長は自分の机の後ろ、杉板張りの壁に吊るしてある、 何やらアミューズメント・パークの地図のような 口 ル T ッ プ

ズに理解してもらうためです。 ク・プロジェクトなのです」 「君たちに、今日わざわざ映画を観に行ってもらったのも、 これぞ、 蔵敷町が日本に、 いや、 このプロジェクトをよりス 東洋に誇る大テーマ 4

「つまり、 出来れば日本語で説明してもらえると、判りやすい えかくデカい遊園地を作ろうと、 町長はそう言うとられるんだと思うよ」 んですけ んど

野

観光課長補佐は藁火主任に言った。

「そういうことでよろしいんでしょうか」

「そういうこと」と、膳舞町長が嬉しそうにうなずいた。

伐採も終っているから、後の工事の進みも早いちゅうことです」 「場所はこの図で判るとおり、蟒蛇谷の元ゴルフ場計画地。あそこは既に六割がた、

出ました」 「そのせいで、去年の台風十九号のときに鉄砲水が出て、 谷の下の滑子村で十三人の死者が

「そういった尊い犠牲に報い 町長は胸を張った。 るためにも、このプロ ジェクトを成功させねばならんのです」

の街並みを満喫出来るところにある」 わけがない。 「とはいっても、これは単なる遊園地ではないよ。それでは東京ディズニーランドに勝てる このプロジェクトの凄いところは、蔵敷町の特徴をフルに生かして、 の日本

「まあ、 小さな声で言った。 いうことしかないから。 うちの町の特徴といえば、 町営水道も鹿落し し川の水をそのまま引いとるだけだし」と、 電話、 電車以外は百五十年前とほとんど変らんと

クラシック・パーク

それはつまり、 日光江戸村みたいなものですかのう?

野蒜の問いに、 膳舞は「チッチッチッ」と顔の前で人差し指を振って みせた。

ってもらえるものにしようというのが儂の考えです」 「もっと大スケール、もっと壮大。江戸時代はおろか、 奈良、 飛鳥から神代の昔までを味わ

どういう関係があるんだろか?」 「それでその、俺たちが今日、映画を観に行かしてもらったのと、 このプ ロジ エ

藁火がそう訊ねると、町長はここぞとばかり胸を張った。

のトータルなイメージが、 「実は今日、君たちに『ジュラシック・パーク』を観に行ってもら 映画になる前の原作、読んどったんじゃがねえ」 あの映画によってつかめると思ったからです。ま、儂の場合はね ったのは、 口 3)

上下二分冊になっている翻訳本を指さした。 そう言うと、膳舞町長は、これ見よがしに窓の脇にある本棚 の 7 イケ ル ・クライ

をパッと開き〝発展〟の二文字を自分の頭上にかざして見得を切った。 「しかし、ま、概念つかむだけじゃったら、映画でも充分かと思ってね。 このプロジェクトの名前、遊園地の名称は、その名もズバリ!」と言って、 そう、 ズバ 町長は扇子 リ言っ

「クラシック・パーク』といいます」

野蒜と藁火は、その一言でガクン、と顎を落とし口を開いてしまった。

称を考えついたとき、 「蔵敷町のクラシクと、昔の街の再現の意味をひっかけて、クラシック・パーク、。 儂は自分の才能が怖しいと感じた」

確かに怖しい」と、野蒜と藁火が同時に言った。

「そしてだ」

町長はそれも耳に入らない様子で説明をつづけた。

商品も考えてあるわけです」 があるから近県はおろか、日本全国から観光客が押し寄せてくるという、 「名前だけではねえですぞ。あの『ジュラシック・パーク』に勝るとも劣らない企画、 とっておきの目玉

「それはどげなものなんですか」

野蒜が訊ねると、町長は机の前を離れて引き戸の方へと歩を運んだ。

「それを説明する前に、このプロジェクトの成功のために、どうしても必要だった人物を紹

介しとかにゃならんだろね」

開衿シャツを内側から脂肪と肉が押し広げてパンパンにはちきらせているという異様な風体 の男だった。 は身長が百八十センチを超えている大男で、 火は、また思わず顔を見合わせた。 こっちさ入ってこ」と事務室に向かって声をかけた。 そう言って、膳舞は引き戸を、またガリボリベキベキと音を立てて開き「おーい、ゴンゾ、 ヌッ、という音を感じさせて町長執務室に入ってきたの 背丈だけでなく横幅も相当にあり、 町長が口にした名を聞いて、 汗まみれの 野蒜と藁

151 「儂の甥っ子の鱈野目権造は知っとるよな。 ここんとこずっと、 東京の大学に行っとっ たか

てきてもらった」 町から離 れとったが、 このプロジェクトのために、 大学の研究室を辞めて蔵敷町さ戻っ

小学校の理科 の鶏が間 ___ で蛙十四匹解剖 したゴンゾ かぎ ?

したゴンゾが、東京の大学に行っとっただがね」 「馬芹の爺さまんとこ 科学の実験だちゅうて生んだ卵をケツから押し込んで皆殺

君たちは」と、

権造は二人を見下ろしなが

B

東京の言葉で冷やかに言った。 「ロクでもないことばっかし覚えてるんだね、

財政立て直しのために、一肌脱がせていただくことになりました。ひとつよろしく」 ゴンゾさえいてくれたら、今回のプロジ 「ま、 「ちゅうわけでだな、このゴンゾは遺伝子たらの研究では日本で五本の指に入るエリ いまでは日本の遺伝子工学の若手 ホープと言われて ェクトの成功は、 1/2 まず間違いなしっちゅうこ る僕です が 今回、 0 んだ 0

その目玉商品は何なん んですか」

を机の上 藁火がそう訊ねるのを待っていたかのように、 で開き、 何本 かのカプセルのような物を取り出して見せた。 権造は手に提げてい たアタ ツ 3/ エ ス

辺の様々な土地をフィ 「これが僕の研究の輝かしい成果というわけです。町長の依頼を受けて以来、 ルドワー クしてサンプルを採取してきました」

は答えた。 「そげに運動したわりにゃ、 1 ル K. ヮー クとフィ 相変らず太っとんな」と、藁火が野蒜に向かって囁い ルドア スレ チッ クを取り違えてるんで ねえか」

7 "クラシ ック パ 0 構想を現実のものとすることが可能とな たので

権造は二人の会話を無視して言葉をつづけ

「あの、何度も同じようなこと聞いて、 町長さんにも申 し訳ねえと思うんだどもね」

蒜がおそるおそる口をはさんだ。

んだろか」 一そろそろ、 目玉商品ちゅうんがですね、 どっ たらものなの か、 教えてもらえねえも

「よろしい、 まずこのサンプルは何のDNAかというと……」 言った。

権造が一本のカプセルを目の前まで持ち上げて

「鬼です」

「鬼?」と言って、 が

鬼の角が寺の宝として蔵の中に入っとってよ、 もらえるっちゅう話はよ」 「諸君も子供の頃に聞いたこと、あるべが。板取の家が代々住職や「鬼?」と言って、また野蒜と藁火の顎がガクンと落ちた。 年に一回、秋の大祭のときにご開帳で見して っとる上新田の陰能寺に、

クラシック・パーク 154 果か 増やす なサンプル うて、 ったという反応が出ています」 ねども、そういった存在の角であるどいう結論に達しとるんでよ」 という風に古代に呼ばれておった、 「これこそ、まさに、クラシック・ 「上半身は 「これは人魚です 一少くとも、 「ゴンゾは、 野蒜は藁火の耳元でそう呟い「次も大体は想像がつくなや」 二人がボソボソと耳打 黙らっ て採取して、DNAを検出することに成功したものです。 四番目のカプセルを頭上にかざして、権造が声を張 たら れも だな、 らも判っていることです」と、 は です。 時代の違うもんを強引にくっつけたのに呆れ返ったちゅう話よ」 て二番目のこのサンプルは……」 のに宣伝で鬼の角だって言ってるだけだって……」 本当は鬼の角ではねえ、 V いう研究家 有名なやつだな 一目で、 んでした。 嘴は てい に亀の甲羅をニカワで貼っつけて、 ちゃ これは、 生物の肉体の一部であることは、この角の角質をコン 5 鳥だろうって、 昔どこぞのテキ屋が見世物ネタ も小学生のときに見た覚えがあるけんどもね、 そして次は、これです」 ふの人が、 んと科学的な検査さ繰り返してだな、これ /が! 作りもんと判る代物だべ」 五本松の尻子家に や。 だをし 」と、町長が大声を出 三十年ぐ 俺の父っちゃが言うとった。 てい た。 まあ、 権造は誇らしげに言った。 る n 間 フル え前に が何 区 代々伝わ 原始人なのか先住民族な の目玉中の大目玉。 権造 か 『少年 の化石で、 で持 は三番目 る、 った。 河童 7 つ ・ガジン て回 角み のカプセ のミイラの嘴 これからも、 胴体は毛を刈り取 つとつ 」が取材 が てえに見える 連れて 7 Va ル たんを、 ٣ 0 Š か宇宙 42 J ってく つ

明らか 部分をサ

~に生物

であ

シプ

ル

0

カタ

タ

た生物、

ま

り鬼

か ら寺

が

n

た先

人な

0)

か つ

は判

な部分は、体よりずっと古いそうだで、鱗なんぞは、ほとんど石みえてになってるちゅ 明らかに哺乳類のDNA、そして下半身は魚類のそれを持つとい 体はやっぱり猿でねえかって言っとったそうだ。下半身の魚み 頭の皿も亀の腹んとこを丸く切っ を取 に来とってよ、 ŋ う、 たも た猿 まさ のミイ

5

飛び回るっちゅうと、つまり、それから生まれる生きものっちゅうのは……? をクロ わば平面的 です。 き 回り飛び回り、 ーン培養 それもカラス天狗です。 な動きしか期待出来ない生きものでしたが、 して、 大人の個体に まさにパ クのシンボルともなるのです」 このサンプルは、 育て上げれば、その生きもの 鷲糞ヶ峰 これは違う。 ままでの、 の金剛神社 は、 鬼 のサ も河童 の御神体 ン プル も人 中を

たらしいけどもな」 「そういう話は聞いたことがある。正式調査は、 の歯だっちゅう結論が、戦後すぐ に新聞に載 東北大がアホらしくてやんねって断って ったや う では な か った 1 か ? 老

実在のものとして、生まれさせることの可能性に、ついに到達したのです」 技術を駆使して、これらの伝説上の生きものと思われてきた生物たち、即ち、 「以上の四点のサンプル 天狗を、この二十世紀末の日本に於て、再び肉体を持った生物、動き歩き考え行動する から採取したDNAをベースに、僕はですね、 最新 0 クロ

もうそれは作っちまったんですかね、 河童とかカラス天狗とかは」

野蒜の質問に、権造は首を横に振った。

うという現象が起こって、パークの中での活発な活動が期待出来なくなってしまうんだな」 檻に入れておかなけりゃならないようだと、クローン特有の、そっちの環境に順応してしま 「いや、 いつ頃、作るんですか」 それはまだです。大切なのは、まず環境の整備だからね。個体が出来ても、ずっと

「パークの完成から逆算して、オープニング時には成体となっているように作るつもりなん ね。それまでは実験をつづけて、 どの生物がどのぐらいで大人になるかのデータを取る

作業が重要だ」

「とにかく」と、 膳舞源次郎町長は誇らしげに胸を張って言った。

りもんだでねえ」 をつづけてもらう。蔵敷の町ん中、 や鬼や天狗が、実際に作れる段階になったならば、 施設を作り、さしあたり、そこでクローン培養の実験に入ってもらうことにしてある。河童 「諸君には当面、蟒蛇谷の工事に専念してもらいたい。ゴンゾには、 鬼や河童が歩き回るようになっても、 蟒蛇谷の方に施設を移して、そこで研究 町役場に隣接して研究 こりゃちょっと困

そう言って、 町長は ″発展* の扇子で顔に風を送りながら「デヒャヒャヒャヒャ と笑っ

「こんな費用、 町長はどっから引っぱり出してきたんだべ

ターに前倒しで仕事を受けてくれた建設会社の好意ってことになってるだども」と、 ながら、ヘルメットに安全靴という姿の藁火仁志は溜め息まじりに言った。 「表向きはな、プロジェクトに賛同してくれた金融機関の融資と、施設工事の請 数十台のブルドーザーやパワーシャベルが間断なく動き回っている蟒蛇谷の 斜面を見下 質い とバ

「どうも町長、 谷を鳥瞰出 例の竹下総理のときの 来る丘の端の岩に腰かけて、缶コーヒーを片手に答えた。 ″ふるさと創生一億円″を、 かなりプ ル

だの五つ子だので届け出して、 人口を無理矢理、 ねえってんで、町役場は死亡届を半年間まったく受理しねがったしよ、新生児は全部三つ子 「あれも強引な金の引っぱり方だったも 一万人にデッチ上げたんだもんな」 後から当人以外は死亡したことにしちまって、 んな。 人口一万人以上の市町村にしか一億円が 下り

ケットに残したみてでよ、それを今回、建設会社にバラまいたみてえだなや」 ってるども、 「その金は、 役場と町議会への報告では、ゴルフ場開発の損失の補塡に当てたってことにな 実態を知ってる築紫課長は消えちまってるべ。どうも、五千万以上、 町長のポ

「それよりな」と、藁火は野蒜と並んで岩に腰を下ろし、 から取り出した。 ショートホープを作業服の ポ

「ゴンゾの研究、本物だと思うか?」

「本物なわけがねえっぺ」と、 野蒜は一蹴 した。

だって、 な偽物だっちゅうことは知っとるだろうがよ。化石だの作りもんだってことはよ。 「鬼の角も、 それは知っとるんでないのか」 河童のミイラも、人魚の鱗にカラス天狗の嘴も、 俺たち子供の頃から、 町長自身

「ちゅうことはだよ、俺たちは一体、 眼下の工作機械の動きを眺めて、藁火は煙草の煙を吐き出しながら、頭を抱えた。 こうやっ て何をやっとる わけ なんだろ

「施設が出来ても、 町長としてはよ、 目玉商品が作れ とにかくこうやって金が動 なが ったら、 客なんか来っこね がば、 ゴ ルフ場開発の借金の えべ

埋めにはなるって考えてんだべな」

いつかは責任とるときがくるんだべ」

「そうさ、でな、前回は行方不明になった築紫課長が責任とった形に……」

ってことになるでないの」 そこまで言って、野蒜蔵敷町観光課長補佐は、自分の言葉の意味にようやく気が付いた。 非常にまずいんでない かい。 前回は築紫課長が責任とったちゅうこんは、 今回 旧は俺

「だから危ねって、俺、言おうとしとんのよ」

りの権造の研究所に向かって放り投げた。 「どうすべえ」と、野蒜は立ち上がって、 Ė の空き缶を、 眼下に見える完成し

「告発するしが、 ねえんでねえの」

「告発って、 駐在さんに言うだか」

特捜部が動いたべ。 「そんなことして何になるって。検察に訴えるだよ。仙台のゼネコン汚職だって、 証拠揃えて、 検察にタレ込むしか、 野蒜さん、 あんだの生き残る道はね

拠って、 何を揃えるだね」

もしれねえよ」

パークの建設計画を中止させるなり、 融機関も考え直すんでないか」 サンプルのDNAあったべ。あれを盗み出して、東京のしかるべき研究所で分析してもらう ゴンゾが言ってるような、鬼だのカラス天狗だののDNAでねえってことが判 一番はゴンゾの研究がインチキだってことを立証するだね。 変更かけることが出来るべ。検察が動けば、 あの、 カプセ 業者も金 つった

「それ だな。『ジュラシック・パーク』の映画で、 サンプル盗み出 したのは

恐竜に喰われちまったけども、俺たちは正義のためにやるだな」 「正確に言うと、 正義と保身のためだけんどもな」

そう言って、 藁火は腕組みをすると、権造の研究所を ハ ッタと見据えた。

翌日の 朝に 野蒜と藁火は、 第三セクター のディ ゼル車輌 の座席に座って、

いまもって納得い 一それにしても、 がねえな」 なしてこんなに簡単に、 D N Aの入ったカプセルが盗み出せただか、

野蒜は膝に置い たボストンバッグを両手で抱えながら、 小さな声で藁火にそう言った。

「研究所の鍵が、 ヘアピンで開く南京錠一つってのもよ」

ゴンゾの研究がインチキだっていうことの証拠でねえか」

「んだな。研究所の中、 「本当に貴重なサンプル なら、 の空き瓶だらけで、酒臭えったらなかったもんな。 あんな杜撰 な管理はいくら何でもしねえべ」 2 つ 7

着いたのは、その日の夕方だった。藁火が前日に連絡をとっていた、国立大学の遺伝子工学 遺伝子の研究やる奴もいねえもんだろうし、やっぱしゴンゾと町長、 しやって、 で助手をやっているという又従兄弟が、東京駅まで迎えに来てくれていたので、 第三セクターのローカル線からJRへ、そして新幹線へと乗り継いで、 どこかの段階で金かき集めてトンズラさ、こくつもりだったに違えねえだよ」 グルになって資金転が 二人が東京に辿り 早速、

体格で理知的な顔立ちの、藁火の又従兄弟の青年は言った。 れないんで、相当に時間がかかるかもしれませんよ」と、その、 「これの正体っていってもねえ、DNAのあらゆるパターンと照合しなきゃ 権造とは正反対に ならないかもし スリムな

NAのカプセルを渡して検査を依頼することにした。

「下手すると、 俺ら、 三 四ヵ月はかかるんじゃ ない かな。 研究の合い 間に か I ユ

体 時給六百円で働いている、野蒜と藁火の勤め先のコンビニエンス・ストアに「DN 判りました」 という電話がかかってきたのは、 ちょうど二ヵ月後のことだった。

もして、のーんびり待ちますで、とにかくそのサンプルの正体を調べて下さい」

町役場に辞表置いてきてるで、

喫茶店のボー

イ

でも、

コンビニ

の店員で

ちょっと問題が ありますんで、 出来れば電話ではなく直接にお話を」

聴講生までが待ちかまえていた。 国立大学まで二人が出かけてみると、 助手の又従兄弟どころか、 研究室の教授、

といった、 伝説上の生物のDNAではなく、 まず申し上げます。どのサンプル れっきとした実在の生物のものでした」 \$ 調査依頼のあったよう な、 鬼とか河童など

言ったとおりだべ」と、藁火が野蒜の肩を叩い

「これで町長は一巻の終りだなや」

「それもですね」と、又従兄弟は言葉をつづけた。

「遺伝子学上、 サウルスの、そして天狗の嘴といわれるものからは空を飛ぶトカゲであるクエネオサウル DNAが検出されたのです。 ものも同様に、 ティラノザウルスの歯の化石で、 非常に貴重な発見といえるものなのです。 河童の嘴からはイグアノドンの、 これはまさに画期的な発見なのです」 そこからティラノザウル 人魚の鱗からは魚竜の仲間テム つまり、 スのDNAが検出され の角とされ てい ノド たも ました。

恐竜のものだったってことけ?」 「そうです」と、 又従兄弟が答えた。

っと待ってくんねが。

つまり、

その、

それから検出されたDNAは、

どれもが本物の

「ということは、 それを元にクローン培養をすると……」

日本全国はおろか世界中から本物の恐竜 で帰ると、 ていた。 そこには映画の 『ジュラシック・ パークの噂を聞 パ ーク』そっくりの大施設が完成して いてつめかけた数万人の客が開園を

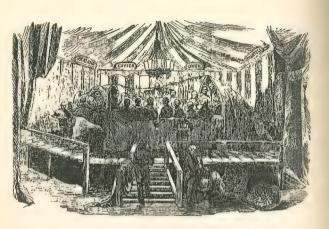
顔を見合わせた野蒜と藁火が、

大あわ

てで大学を飛び出

電車

を乗り継



1851年に行なわれたイグアノドン・ディナーの情況。

らな瞳をもつシカの絵は後年ウォルト・ディズニーのバンビにも影響をおよぼしたとい 博物学絵師には奇人が多い。 -ド・リアとともに「ノーズリーホール」の私設動物園つきの絵師となり、史上名高い ズ (一八○七—八九) ほど奇妙な人物はいなかったのではないか。ノンセンス詩人エド ホ ール動物誌』の出版に際してはシカやアンテロープの類を描いており、 しかしそのなかでもベンジャミン つぶ

てクリスタル しかしホ て制作されることになっ ンズが手がけた仕事のうち最大のものは、 ス内につくられた「イグアノドン」の復原模型だろう。この万博の た恐竜模型は、 ロンドン市内にあったホ 当時イギリス最高の比較解剖学者と謳われたリ 一八五一年のロンドン万博に キンズの作業場でつくられた。 自王

イグアノドンの唄

167

彼は模型を制作する途中、 かと思いつき、ひとつのアイデアを実行に移した。 恐竜の模型を題材にしたショ ーを考案できたら話題を呼ぶのでは

5 八五一年ロンドン万博の数多い逸話のひとつとして、 してしまった。 を起こし、一八七一年のある日暴徒を煽ってホーキンズ邸を襲わせ、完成間近の模型を破壊 を設置し「恐竜レストラン」を開催する企てに着手した。 迎え、図のような大晩餐会を催した。科学者のオーエンだけはさすがに「不謹慎だ」と批判 したイグア にはいったかれに対し、 もとに殺到した。 したが、この趣向は こで晩餐会をひらくことだった。 アイデアというのは、 晩年は無名の博物画家として淋しい日々を送ったという。 ノドンと「奇怪な晩餐会」のエピソードは、 傷心のホーキンズは、 ホーキンズは力を得て、ニューヨー 1/1 っぺ できあがったイグアノドンの模型のな ヒルトン某という判事が「反宗教的」なる理由をかかげて反対運動 んにロンドンじゅうの話題となり、 ホー 以後プリンストンに住んで恐竜の壁画などを描きなが -キンズはオー エンをは 永久に語り継がれていくだろう。 クのセントラル クリスタル・パ しかしニューヨー じめとする招待客をアト しかしこのショ 恐竜晩餐会の開催依頼 かにテー . レスに代表される一 ブル を据 クで模型の クに恐竜の模型 7 えつけ ンが制作 が彼の リエに 制作

イグアノドンの唄――大人のための童話

-谷宇吉郎

カインの末裔の土地

あった。 な食糧危機におびやかされた。 終戦の年 豊作でさえ米の足りない北海道のことであるから、 の北海道は、 十何年ぶりの冷害に見舞われ、 米は五分作か六分作という惨めさで この年 -の冬は、 誰も 彼も皆深刻

つより仕方が に埋れた不安な生活の上に、 もなく粉雪が降りつづき、それが人々の生活の上に重苦しくおおい それにこの冬は、例年にない なかった。 陰鬱な日々がただ明け暮れて行くのを、 珍し 42 大雪であ っった。 毎日 のよ らうに、 かぶさっていた。 じっと我慢して春を待 暗 42 空か 5 この雪 Ł

て木という木は魔女の髪のように乱れ狂った」というのは、有島さんの有名な描写である。 雪のためにへし折られる枯枝がややもすると投槍のように襲って来た。 ている人間 の荒涼たる吹雪の景色は、今日も少しも変らない。そしてこの無慈悲な自然の力に虐げら の土地であって、 1の姿もまた、往年の名残りを止めている。 この冬を、羊蹄山 北海道の中でも、 麓の疎開先で送った。 とくに吹雪の恐ろしいところである。 此処は有島さんの 吹きまく風にもまれ 「吹きつける 『カイン

なれば」と、人々は遠い春をはるかに望んで、力弱い溜息をもらす。 ひしひしと人の心に迫る。 全然見られない。この一点の緑もない世界、満目ただ灰色一色の世界では、 ような灰色である。葉の落ちた闊葉樹はもちろんのこと、雪に蔽われた針葉樹にも、 いた。見 終戦の年の冬は、この自然の猛威の他に、今一つ食糧危機という恐ろしい脅威が加 渡す限りの土地は雪に埋もれている。吹雪の日には、雪までも白くはなく、 「雪が解けて、たらの芽でも何でも、青い ものが出て来るように 食糧の不安感が、 緑のは 死ん わ つ 7

うような夜が、 あったので、 北海道の長い冬休みを、子供たちとこの疎開先で過した。遊び道具も本も とくに連日の吹雪の夜など、子供たちはよく私に話をせがんだ。幸い 戸外の激しい風の叫びをわずかに押えて、生命の営みを辛うじて表象しているとい どんどんストーブにくべて、その周囲に皆が寄りそっていた。 毎晩つづいた。 電灯はもちろんうす暗かった。 凄じい風の音につつまれなが ない 勢よく燃える薪 薪だけは豊富 疎 開 先 0 12

、それは妙に気の滅入る沈黙の世界であった。

失われた世界

コナン・ドイルの『失われた世界』の廉価本である。ところがどうしたはずみか、荷物を片づけているうちに、 かった。 子供たちは、 それに本も手近にはない もう浦島太郎の時代をとっくに過ぎていたので、 ので、すぐ話の種につまって、大いに弱らせられていた。 妙な本が一冊ころがり出て来た。 話といっても、 そう種はな

そのデ 物理学者であるが、理研でしばらく一緒にいたことがあるので、その後も親しくしていた。 これはもう二十年も前に、ロンドンでディーケ博士から貰 んでみて、 イ なに、丁度読み終ったこの本を、私に残して行ってくれたのである。その時はすぐ ーケがロンドンの学会へやって来た時、 敗戦後 たいへん面白かったのであるが、それなりに忘れてしまっていた。それが二十 の北海道の僻地で、 わずかな疎開荷物の中から、 ホテルのロビーでこれを読んでいた。そし った本である。 ひょ っくり現 オランダの われ たので

これはまことに大助かりであった。 た世界」 に、 ジュラ紀時代から生き残っている巨大爬虫類が棲んでいる世界がある。に大助かりであった。南米アマゾンの秘境、人界から遠く隔絶された た「失わ その

よりの贈り物であった。 秘密を求めて、英国の科学者たちが、 ンの末裔の土地で、連夜の吹雪にとじこめられている敗戦国の子供たちにとっては、 敢然魔境に踏み入って行く。 この 「探検記」こそは、

た時の報告なんだ。 ころ、もちろん、 「この本は、 で て、そういう古代の生物ばかり住んでいる世界が、 いたことがよくわかっているんだ。化石になって残っているからね。それが今でも生きて もある大怪物もいたんだが、それがのそっのそっと歩いていてね。イグアノドンな 今夜からこの本を一節ずつ読んでやろうか」というと、 見たでしょう。ディノザウルス いたんだよ。ああいう龍は、 英国のチャレンジャ 人間など一度も行ったことのな 古代の恐ろしい龍だの、 ジュラ紀とい (恐龍)なんて 教授という先生が 怪獣だのが其処に本当にいたんだよ。 って、 い秘密 いう龍 アマゾン河の上流にはあるんだ。どう の世界 南 一億年以上も昔の時代には、たくさ 米の の中には、 もちろん子供たちは、 P なんだが、そこへ探検 7 1/1 このおうちの三倍くら シ河 のず っと上 歓声をあ んて つか雑 0

頰を赤くしながら、眼を輝かせて、「本当? 本当?」と、覗き込む。 から、写真や図などはない。 たので、それを説明してやると、この方は簡単に承服してしまった。 まだ小学校 へ行っ ている下の男の子などは、 幸い秘境に到る道順を描いたスケッチ地図が、 もうそれだけで、 すっかり上気してしま もちろん小説である 一枚だけつい 5 7

岩壁でずっと囲 さ。ほら此処に印をつけてあるだろう。此処で初めてプテロダクティ まで来ると、 種がところどころにいてね、道など一本もない恐ろしい密林の奥から首切りの祭の太鼓の音 もちろん普通の人間は誰も行ったことのないところさ。それでもこの辺までは、まだ人食人 もっともこの断崖 かすかに聞えてくることもあったのさ。 の船は行 だからこういうところに、古代の生物 カヌーも行けなくなるんで、みんなで荷物をせおって歩いて行ったんだよ。 ルって、 人食人種だっていなくなって、人間なんて、 かないところなんだ。これからこの支流を小さい丸木舟でのぼって行くんだが、 [まれているんで、この崖の上は、外の世界からすっかり切り離されているん へ行くまでが、たいへんなんだ。これがアマゾン河の上流で、 翼のある龍なんだ。戦闘機くらいもあるかな」 いところで千尺、 高 が生き残っていても、誰も知らなかったわけだよ。 いところは三千尺もある。真っすぐにつき立 しかしこの細くなっているところね、 全然いないところになっちゃうの ル を見たんだよ。プテ ここだって これ もうここ から

か承知しない。 をしている。そして眼を光らせながら、 ここらあたりで、 生意気なことをいう。 な本があったね」という。ただ一人、 「小説でしょう。 下の子供はもうすっかり興奮してしまって、 小説みたいな本じゃないの」と、 身動きもしない。二番目の娘も「本当らしい もう女学校にはいっていた長女だけが、 すうすうと寝息の 英語がわかりもしない ょ な

きさの動物で、 いって っ 細な ているのかもしれないと考えた方が、 記録は残って 時々実際に しかしまだ何が隠されているかしれたものではない。 脚が六本ある怪物の屍体が い進歩によっ さすがにその現存の可能性は考えられない 起っ いないが、そういう怪物が、 て、 ている。少し昔の話でよければ、南米の海岸に、 人間 はもう地球上のことは、 漂着したことがある。 かえって科学の心に通ずるであろう。 まだ神秘の大洋の何処か が、それに類する事件 何もかも ロスト・ワー 大部分腐 知り尽く 5 てい 牛くらい ルド したように ひそ たの 0) 近代 泌龍 の大 で、

一億年前の怪魚

自分で漂流をしてみたのである。そして南太平洋の大洋の真ん中で、 いってい ンテ している。 1 たのと、 キ号漂流 全く同じ筏を造って、この若い探検家は、南米からタヒチ島 記』の著者は、 まことに巧いことをい っている。 古代 ķΣ ろい イ ろ不思議な生物 ン 力帝 の近くまで、 玉 0

洋を隈なく調べ の文明人は、 船体も大きくまたスクリューの音も大きいということである。 つくしているが、 大きいそ Ũ 7 ただ一つ大切 強力な汽船を造っ なことを忘れている。それはそうい て、 即 ち科学の巨大な力を利 近代の探検船では遭 用 う立派な て、

生物が 太平 す 12 の真ん のところに、じっと坐り込んで、 たとしても、 った怪物を、 かもこの冒険は、今度の大戦後に行われた、ごく最近の話である。 中を漂ってみた人は他にはいない。 別に不思議ではない。この漂流者は若い考古学者であって、 の漂流者が目撃することがあって 二カ月以上も潮流と風だけに送られて、あの広大な そういう人間だけにその姿を見せる怪異な 別に不思議 ではな

リカ 姿で出現し べ得るところは、海の面積からみたら問題にならない。 海はあ での海底 0 でい まりにも広く、船が通るところは、 心から、 るか、 た異常な事件を挙げるべきであろう。 は、 海面からごく近いところの水中だけに限られている。深海探測とい 少なくも五千万年以上、多分一億年くらいの太古の怪魚が、 人間の想像の及ぶところではない。その一番良い例とし その極めて僅 大洋のただ中、その深所には、 かな部分にすぎない。 ては、 本当に生きた っ か ても Ł フ 何

方数マ たような怪異な恰好になっ イル か光っていた。 目方七十五キロ は昭和十三年十二月二十二日のことであった。 の海底から、 英領南アフリカ喜望峰 頭は西洋兜のような形をし、胸及び腹の鰭は、 の大きい魚で、 トロー ている。 ル網にかかって、不思議な魚が揚って来た。 の近くに、東ロンドンという小さい漁港がある。 全身は青色に輝いた金属光沢を帯び、 さらに著しい特徴は、 即ち日華事変が最高潮に達 脊柱がず 赤児の腕の先に羽 つと尾鰭 全体長一 の真 して 中を X そ ぎ · た頃 つ 0 7 7 1 西

た曲者であった。この怪魚こそは、 き抜けて伸び出ていることである。 いて、既に地球上からその姿を消していた、総鰭魚類の空棘魚科に属する化石魚であったの 中生代の白堊紀、即ち少なくも五千万年以上の太古にお 如何にも古色蒼然として、一見古代生物の異風をそ

は匿名の紹介であったが、 当時この話は日本の新聞にも載り、また翌年の『科学』には、詳しい紹介がなされた。それ はあったが、現にこの太陽の光の下で、その生命を見せてくれたのであるから、この方面の の怪物たちが、 生代のデボン紀であって、それは現在の知識では、現代から、二、三億年も昔のことと推定 ったのである。少なくも昭和十三年の十二月二十二日までは、そう信ぜられてきてい おいて、既に地球上に出現していたものである。最初にこの魚類の化石の現われるのは、古 スなどが この種類の化 ところがその五千万年ないし一億年以前の魚が、突如として南阿の一角に出現し、 ジュラ紀の次の時代まで、太古の海中に種属の繁栄をつづけて来た。そして巨大爬虫類 学者たちはもちろんのこと、世界中の人々をあっと驚かせたのも、当然のことである。 ている。それからずっとこの異魚は、たいした体形の変化もなく、中生代末の白堊紀即 その怪異な姿を見せていた時代、即ちジュラ紀よりも、さらに一億年近い 地球上からその姿を消した次の時代には、この魚たちも完全に絶滅してしま 岩 一魚は、 古代生物としても、 原著よりもわかりよい立派なものであった。しかし丁度その時期 非常に古いもの で、 巨大爬虫類 のデ 1 太古に

れた奇魚などに、かかわりあってはいられなかった。 漢口陥落の提灯行列を過ぎて間 もない頃であった。 日本人の大多数は、 南アフリカで獲

されたまま、 れでも確かに五千万年以上の昔に絶滅したはずの空棘魚であることは、確認されたのである 時には、残念ながら、魚体は既に腐敗し、外形だけが劖製となって残っていたのである。 以上の日子を要した。そしてことの重大さに驚愕したスミス博士が、折返し電話で連絡した ために、手紙の配達がおくれ、僅か四百マイルを隔てたスミス博士の手に入るまでに、十日 ンの大学のスミス博士に手紙で報告した。ところが時たまたまクリスマスの季節にあたった かったが、その怪魚の異風に驚き、標本のスケッチに簡単な説明をつけて、グラハ 東ロンドン博物館の主事ラチマー女史の手許に送られた。同女史はこの方面の専門家ではな 学問的に最も重要な部分、即ち内臓その他の軟体部分は、遂に神秘のベ の話は、コナン・ドイルとはちがって、本当の話である。その標本は、漁獲後間 闇から闇に葬り去られたのである。 ル

を記述したスミス博士の第二報が、 大きかっただけに、その重要部分の喪失は、甚だしい失望感をもって迎えられた。 誌上で知って、驚愕と歓喜との念に打たれ、この発見を「今世紀における動物学界随 世界中のこの方面の学者たちは、 」とした。まさに文字どおりの奇蹟であったのである。この発見の意義が、あまりにも スミス博士の第一報を、英国の科学専門雑誌ネーチ 同じくネーチュア誌上に出た時は、 世界各国の学者 その詳細 一の大

激越な批判の手紙がたくさん来たそうである。これは突如冥界からの通信に接して驚愕した いざ話しかけようとした時に、その通信が切れたような感じである。 またそれでよいのだという気もする。それほどの異常事件なのである。 惜しい

いし一億年前の太古の怪魚の話を聞いている子供たちは、戸外の吹雪も、 寸他に類がないであろう。それで第一夜は、子供たちにこの現世化石魚の話をすることにし すっかり忘れたようであった。 ストーブに薪を追加しながら、南アフリカの海底から突如として出現した、五千万年な ルドの話の前置きとしては、 この「化石魚の蘇生」の話くらい巧い話は、一 乏しい食糧のこと

ころを見ると、 写真を見せてやった。剝製にされた怪魚の写真と、 幸いこの詳しい紹介の載っている『科学』が手許にあったので、一通り話をし 両者は全く一致している。これにはさすがの長女もいささか驚い ジュラ紀の空棘魚の復原図とを並べたと たとこ たようであ ろで、

断片的な材料をもとにして、 て残るのは、たいてい硬骨部分の一部と、その他の部分のかすかな痕跡とである。 った生きた証拠が出て来たのであるから、その点だけでもまさに驚くべきことである。 復原図の方が、もちろんこの現世空棘魚の出現以前に描かれ わば「小説」をつくるのである。 化石学者たちは、原体制の復原という困難な仕事をなしとげる。 しかしこの場合は、その「小説」にぴったりとあ 7 いたものである。 そういう

て行けるわけである。 んとにねえ」と、最後に長女が陥落する。 これでロスト・ ・ワー ルドの話に、 安心しては つ

アマゾンの秘境

とし 暴性を発揮する人物である。 も残されている。 さんの支流に分れてい ては、 ン君の手記から成っている。 かつて単身南米アマゾン上流の秘境を探検したことがある。アマゾンの上流は、 独創的な考えを持ち、 チャ て、その中には、まだ白人の足を踏み入れたことのない支流 v 学界からもロンドン人からもひどく嫌われているが、 ンジャ かつ甚だ実行力に富んだ人である。そのチャレンジャ チャレンジャー教授は、癇癪持ちで、 ー教授の探検隊に参加したデイリー・ガゼットの記者 人間嫌いで、 力等 動物学者 時々狂 たく < 7

この白人は、 つ詩人であるこのホワイト君は、アメリカの物質文化に飽き果てた挙句、 チャレンジャー教授は、カヌ アマゾンの秘境を放浪していた男であるらし アメリカのデトロイトの市民ホワイトという人であることを知る。 丁度今息を引きとったばかりの白人の遺骸にあう。 ーに乗っ て、その支流の一つを遡航した。 い。「疲れ切った姿で、クルプリの棲む その僅かな遺品を整理して、 そし 新しい霊感を求 てイ 画家であり ・ンデ 1

177

イグアノドンの唄

紀の その次に、 あるが、終りの方に、平原の彼方に、 ケッ 恐龍の ワ イト君は、 トの下 一種ステゴ 巨大な怪 から出て来たこの写生帳が、 死ぬまで肌身はなさず、 物の写生 ーザウル スそのままの姿なのである。 一があって、それ 切り立 話 一冊の写生帳を持 でおしまいになっ った断崖に縁どられた高台の絵があ の発端である。 そ 3 7 の中には、 7 いる。 1/2 た。 そし 12 1/2 3 してそれ 3 13 42 3 る。そ ろな写生が に な はジュラ つ た 7

発見 ランケスター チ ヴァ の話は、 P 7 めてチャ ノドンの生きた姿を見ることになるわけである。 ンジャ ることに このコナン・ドイルの小説を、 氏の著書に出ているステゴザウルスの復原図とくらべ レンジャー ひどく 教授を首班とする探検隊が 、驚い 教授を訪れ たのである。 た時、 これ マロ まさに地で行ったものとい この失われ が始まりで、いろいろな経緯 ン君は、 南アフリカにおける現世空棘 た世界に出かけ、 この写生帳を見 て見て、 えよう。 せ での末、 ステゴ られ 両者が完全に る。 けっ ザウルス 7 きょ L 0 7

の幕、 ___ 時新聞紙 英国 [のエベレスト 上を賑わしたことがあった。 遠征隊が、 ヒマラヤで奇怪な人獣の足跡を発見し その時、 食卓の話題に上ったのは、 たとい この五年 う記

Va カヌ 61 0 出 りば が ス たのは、 もう行けなく として頭の底に残っていたらしい。「ほら、 7 ワー しまって そんなことなどとても憶えていそうもない二女であった。 いたが、 なるあたりね。あの細い川のところ、あそことても綺麗だったわ」と 0 話である。 人界を遠く離れた、アマゾンの秘境がもつ特異の もう大きくなった子供たちは、 あの失われた世界への入口のところ、 「おやじさん の嘘 61

カヌ 茂 しさである。 12 流 っ 探検隊を乗せた二隻のカヌーは、 さつつ た葦叢 これこそ失われた世界への入口なのである。 れに出 る光によって異常な色調を帯び、 ものであ て、 であって、 一櫂ごとに、 る。 の中を、 自然 その青緑 水は驚くほど透明で底は美し つった。 の天蓋を作 両岸の 数百ヤ 数千の漣 のトンネルの下を、緑の静 ードば 植物は、 b, が伝 かり無理に 自然 隠された細流の入口に達する、浅黄色の葦が わ の葉をとおし 不思議な美しさを呈している。 つ 7 の豪奢の限りを見せている。 ゆく。 い砂になっている。 カヌーを押して行くと、 それ か てくる黄金色の日光は、 繁り誇った熱帯の草木は、水面の上に な流れ は 神秘 が行く。流れ 0 国 川幅は二十ヤードくら ^ の通路 それはまさに仙境 突如として、 その輝く水面の の美し 黄昏を思わせる美 とし て、 さは、樹間を 面に まことに か 生い であ Va な 生 1/2

ナ ・ドイルもこのあたりの描写には大分馬力をかけてい 口 ス ワ N K" にあこが れて 42 るらし いところが大いにある。 るようである。 彼は、 どうも御本人 1/2 つまでも

を食ったことは忘れるが、 を失わなか った人なのであろう。子供というものは、魚粉と稲茎の粉とのまじっ そのとき聞いたアマゾンの秘境の情景は、 なかなか忘れない

ヒマラヤの人獣の足跡

させたり、散々あばれ廻った挙句、再び山中深くその姿を消し になっていた。 しても、何も今度突然出現した話ではない。昭和十一年に、立教大学のナンダ・ 似た形であったという。 たのであるが、 身の丈四十フィートの怪物が現われ、土地の住民はもとより、全印度人の間 印度に遠征し この怪物は、汽車をまたいだり、大きい樹木を踏み倒したり、 それは長さ二十二インチ、 た時にも、たいへんな騒ぎが起きていたそうである。ヒマラヤ も、多かれ 少なか れ、この童心は残っている。 幅十一インチもある巨大なもので、 てしまった。その時足跡 ヒマラヤ 婦女子を気絶 の怪巨人 に コ が残 一麓の の足

ちばかりでなく、 ン氏の手記によると、 マラヤの山中に巨人かゴリラか 印度人の中でも信じている人がかなりある。 ヒマラヤの住人たちは、 b カン でらな い怪物が棲んでい この怪人をヤティ 昨年の るという伝説は、 エベレスト登山隊長シ (縁起の悪い雪男) 土地の人た

た栗色の毛で蔽われ 7 いるが、それは半人半獣の怪物で、背丈けは五フィート六インチくらい、 でいるそうである。 ていたが、顔だけは毛がなかったという話である。 シプトン氏の案内人の一人は、 二年前にこのヤティに遭ったと 全身赤味が

は非常に広かった。詳しく調べると、三本の幅広い足指と、別に横に張り出した大きな親指 入り乱れた足跡によって確認された。その大きさはわれわれの山靴の跡よりは幾分長く、幅 とが認められた。 上に奇妙な足跡を発見した」「奇怪な生物は少なくとも二頭以上が打ち連れて通ったことが した部分を抜萃してみるのも、 一月八日のことで、 に蔽われた場所で、 プト プトン氏が写真に撮った奇怪な足跡を、動物学者たちは、ラングール猿だと鑑定 ン氏は大分不服のようである。朝日新聞に連載された氏の手記の中から、これに関係 の向う側の氷河に達し、南西の方向に下って行った。丁度午後四時、行く手の雪の われわれはその足跡を追って一マイ エベレストに近いメンルンツェの氷河の上である。「われわれは午後三 はっきりと切れていた」 興味あることであろう。この足跡を発見したのは、昨年の十 ルあまり氷河を降ったが、 氷がモ

意見には、 少しちがった意味がある。 もっともなところがある。 ラングール猿ということになったのであるが、 写真撮影もされ、また観察者がちゃ 従って動物学者たちも、 h とした人だけに、汽車をまたいだ怪巨 これに対するシプト 放っておくわけには行かない。 の反対

るので、 ないはずである。 があるのだろうか。 それらを常食として生きて行けるが、 ル猿は菜食動物であるが、高度一万九千フィ 肉食動物ならば、 氷河の下部にはモルモットもチベット鼠も棲んでい 菜食動物は、 こういうところでは、 ートの氷河の上で、

かし氷河の氷の上に積っていた雪は、 も多くの足跡は形が崩 今まで知られてい からみて、雪が 第二に、 既知のラングール猿よりは、遥かに大きい生物にちがいない ラングー 解けて大きくなったとしても、大したちがいはないはず ない iv れてい 0 ところが問題の足跡は、 の足形は、 るので、 سل きわめて薄く、 雪解けのために、 N なに大きい 十二インチ以上と実測されている。 ものでも、 かつ足形がはっきり残っていたところ 幾分大きくなったと考えられる。 長さ八 7 っである。 ン チを越えるも それでこの もつと

は異論があると言った、そのこと自身の中に、 私はこの問題については門外漢で、嘴を入れる筋合のものではないが」動物学者の鑑 議論の当否は、 ここで論議すべき問題でない。 彼の童心が認められる点である。 ただ一つ確かなことは、 シ プト ・ン氏 定に が

九十フィートのこの怪物は、ジュラ紀の恐っ龍に似た形をしていたといわれてい ヒマラヤでは、 身のたけ二十フィートの怪獣が出現して、住民を震え上がらせたという話がある。 ワールドの夢は、 この前年、 原子力の世界にも、 即ち一昨年にも、 なおその生命を保っているのである。 アッサム州の密林の中に、 体長 十フ 体長 ロス イ

代の錯誤と早ま と対面をしてい ロスト・ グアノドン と為 ワー るのである。 象の皮膚のようなその皮の上に、 であった。このジュラ紀の菜食性巨大爬虫類を、コナン・ドイルは原始人類 ルド ってはいけないので、 の話の中で、 一番子供たちに人気のあったのは、 同じ時代の空棘魚が、喜望峰州の住民と、 粘土のマークをつけさせた。それを地質年 大きいくせにおとなし 先年ちゃ

イグアノドンが、 子供たちの間 で如何に人気があったかは、 次の唄でも充分うかがうこと

お猿 イグア ゴリラの背中に 0 リラが乗っ が乗ってった が背中に が乗って ノドンの背中に っ 7 た つ 乗ってっ た 乗っ 7 0 7 つ った

蚊とんぽが乗ってった鼠の背中に

艦載機が飛んでった 飛んでった

蚊とんぼの頭の上を

乗ってった

た娘たちは、今はきわめて元気である。 栄養低下が禍いして、仮りそめの病気がもとで、急に亡くなってしまった。しかし生き残っ アノドンの唄」をうたって、 の栄養低下も、 栄養低下も、実感としては何も知らなかった子供たちは、カインの末裔の土地で、「イグこのイグアノドンの唄を作ったのは、下の男の子である。自分の国の敗戦も、自分の身体 至極御機嫌であった。しかしその男の子は、その後間もなく、

るK博士の手術を受けるのであるから、何の不安もなく、経過もきわめて順調であった。 この暮から正月にかけて、 二十年来の懸案を片づけるためである。この道では、日本一の名国手と称えられてい 私は扁桃腺の除去と、蓄膿症の手術とのために、K病院

でぼんやりしていた。時々一寸目をやると、長女は夢中になって、 汰のようであった。 時々妻と交替に付き添いにやって来た長女は、何も用事がないので、初めは少し手持無沙 夜早く寝つかれなかった私は、十二時頃まで寝つこうとしないことにして、ベッドの上 それで或る日、 ロスト・ワールドを持ってやって来た。昼寝をするため 読みふけっている。「ど

をほてらせている。 面白 いのかい」ときくと、「うん、 とっても」と返事をするのも億劫なように、 頰

もう夜中近いらしい。それでよいのだ、 か引いていられないのよ。今失われた連鎖がやって来るところよ」と、受け付けもしない。「わかるのかい。大分むつかしい名前があるだろう」といっても、「そうよ。でも辞書なん つぶって寝入ることにした。 生きる者はどんどん育つ方がよいのだと、私は目を (昭和二十七年三月)

者だったわけで、 すでに読んでいた記憶があり、指折り数えてみれば二十数年前、紅顔の中学生の頃からの を読むのは今度がはじめてだが、次作『海鰻荘奇談』や『蜥蜴の島』あたりからは私も当時 第一次「宝石」懸賞募集に入選したのは、戦後も間もない昭和二十二年のことで、この小説 表をくってみると、 思えばこの作家とのつき合いもずいぶん古いことになる。 この作品集の冒頭に収録され ている『オラン・ペンデクの

ほとんど時代錯誤的といっていいほど無縁であったということであり、 いうことだった。 ない。 マにヴァリエーションがなく、 小説といえば風俗小説や社会派だけが大手をふってまかり通っている現今、 二十年ぶりに読み返して私が端的に得た感想は、 といって、私はそのために香山の作家的評価を貶しめようとしているので 彼の夢想の世界がかなり限定された狭い世界である、 第一に、香山滋が時代の現実か 第二に、思ったほど いささ ح 5

小説の大道を行く作家ではなかったかと私自身はひそかに考えているのである。 逆説めく か ない かぎ お のれ の夢想を純粋に夢想とし て追求した彼のような人こそが

生十蘭において現実を潔癖に排除するよすがとなったのは、あの禁欲僧のようにストイック る役割を果したのだった。 な無邪気な美質をそなえてい な文体の習練であり、橘外男では、そのシャルラタンな大道香具師めいた大言壮語癖が 人がまことしやかに述べ立てれば立てるほどなにもかもが壮大なハッタリだと思わせるよう 同時代に香山と同じようにおのれの夢想に忠実であった作家とし が思い浮ぶ。 そうはいっても三人の間には判然とした個性的懸隔があって、たとえば久 て、それが薄汚れた現実にたいして作家を無垢のままにとどめ ては、久生十蘭や橘外男

ど底抜けに放胆ではない。 な言い方をすれば、香山の文体には、なにやら特定の一人物(それもたぶん 香山の場合はそれぞれこの二人とは明らかに異質である。異国趣味に訴 のである。 基調としては咏嘆に流れかねない華奢な抒情家の面影をのこし えないこともない つめたように綿々と訴えかきくどく風情の、 ども、 その意味では、 久生のように極度に知的な計算に立脚した演技的スタイルとはまたちがっ ので、 エンターテイナーとしては類例を見ないこまやかな文体の持主 香山の全作品がたった一人の女性にあてた長大な口説であっ 先に私が 香山の世界が 熱っぽい 狭い とい 憧憬の感情 つ た本意もそうい ている。 がひときわい えはする 女性) もう一つ下世話 うことな にたい が ちじる 橘ほ L 0

それでは もしくはそれ 香山 一滋が 綿々とか にかわる近親者の きくどい てい 女性ではない たとい う、 その当の女性とは何者か。 かと思う。 私の見当で

0) 殻を形成すべき苦土が欠乏しているために、この特殊な海流のなかでは、すべ 底の一室にこもったまま、 が裸になり、あまつさえしだいに軟体化していく。そして石上学士ことヨハン・ るために、 到達すべき島はその海流の行きつく涯に浮び上ってくるはずなのである。 なかに、石上学士ともその エル・ドラドオ』と並んで収録作品のなか そこに棲息するプランクトンや海老は甲殻が欠如したものとなる。 この海流は炭酸石および炭酸苦土の溶解のきわめて稀薄 海中の生物の分布変化から隠された未知の海流を推論 双生児兄弟ョハ > の白眉と見られる『オラン ^ イステルともつか な特異な水質 ない . 仮面 ン すなわ ての海中生物 0 デ ヘイ のも ク後 てゆく件 -ステル ち、 のであ が H 甲

るあの若返りの水 甲殻類が軟体化していくこの逆進化論的潮流こそは、幼年時への退行の願 いまや滅亡寸前にさしかかっている。 は幼年期退行の兆候を示すのである。 ではなかろうか。この小説では甲殼類ばかりではなくて人間も、 オラン . ペンデク族は代を重ねた近親相姦の 1/2 を か なえてく

極度に血の清らかさをのみ追ってきた彼等は 7 の終末に到達しかかって 44 る。男は男同士、 狭隘な土地と、 限られ 女は女同士、 た人口とのために単 年齢 の差の

の結婚季節に於てのみヨハン・ヘイステル氏達と性生 あって個人差を持 二百歳の、九十歳の、二十歳の、 彼等は通常の結婚生活を持たない、年に二回限られたる日数の結婚日を持つ。 明らかに人類としての退化現象だ。」 たな 12 0 すべ ての 男はヨハ 十六歳の、 > ヘイステル氏 三歳のヨハン・ヘイステル氏 活に入る。 であ 個人差の り、 す 欠如と結婚季節 1 7 の女は であ ŋ E T 0 モ 0

妹相愛となり、その結果生殖がおこなわれて子供が生れても、万人が子供なのだから親子関 とたりるようなヨハン・ヘイステル氏とモアでしかない。したがって、すべての性生活は兄 らは固有名詞で名づけられるような個人を形成せず、たんに男、 いわけ が 界に閉ざされ 成立するはずもなくて、生れた子供も兄か妹か、 ではないらし 三百歳のヘイステル氏やモアがいるからには、オラン 永遠に幼年期を脱しないこの退化種族では ているように静謐である。 い。年齢はとるが、 いくら年齢をとっても「子供」なのだ。い つまりヘイステル氏かモアかのいずれ エディ プス的葛藤も 女という普通名詞 . ~ ンデ なく、 ク族は年 す 1 だけ わば彼 7 をとら でこ が

ときには衒学的なまでにきらびや ションとして追求してやまないのである。 在に駆使しながら、 に世界は氷河期 香山 新 一滋は かに見える生物学 に逆進化する。 右のような退化的ユートピアの諸相をさまざまなヴ 失われた世界や秘境への彼の偏愛は、こ人間はしだいに軟体化して胎児に近くな (とりわけ古生物学) VZ た Va す 博大

とごとくこうした退化願望に、 あるい はむしろ母胎還帰衝動に結 びつくものであろう。

う。 もなく駆り立てられているのである。 蛾』のカメレオンのように環境に超適応して滅形してしまうファーギァニ公爵夫人や冬にし ばらに解きほぐしてぐにゃぐにゃした骨抜きの肉塊となり、 た高等生物が解体し分解しつつ同化してしまおうとする逆進化論的一元化の熱望に抗い じめる。また『怪異馬霊教』の地下王国の住人たちは、活動するとき以外は四肢の骨をばら く膨れたり縮んだりしながら、不断に変形する奇怪な生き物となって沼の水のなかに漂 軟体動物の棲息する魔の沼にみずから跳び込んで軟体動物に変身し、ぶよぶよと小止 これらの場合には明らかに羊水のなかを漂う胎児の至福状態が志向されているが、 前進化段階にある流動的で無定形な下等動物にむかって、個体の明確な骨骼をそなえ て爬虫類に酷似した女と同性愛に耽る『月ぞ悪魔』の女主人公にしても、 ドラドオ』の結末でも、滅び行く種族の女王ラアラ・サラアドは二千 胎児のような姿勢で蹲ってしま 冷血 いいは 白

う魔力に抗しきれずに、 たはずの世界をふたたび眼のあたりに見て、その一切を溶解して一元的にエロス化してしま とく失われた母胎への無意志的追想から生れてきた場所であろう。そして文明人は、 ほどロスト・ワールドで、 人間の大部分が退化人間であるばかりか、香山滋が描く その音の死に絶えた原生林とか地下世界とか洞窟とかは、 地に足を踏み入れたまま二度と帰ってはこない。 秘境魔境もかならず ځ 65 形あるも つ 失われ ことご 7

こうしたものであろう。 にエロチックな)回帰衝動に駆られている。 にも自分の骨骼や殻を破ったり溶解したりして始源の混沌に向って流出しようとする(まさ 形の無いものに、 文明は未開に、 進化した高等生物は退行に、たえず憧れ 香山滋のファンタジーの内的構造とは、 ていて、 およそ

産物であることを指摘しておきたい。直接の着想はたぶん谷崎潤一郎の『人面疽』あたりか 許婚の男を縫 スクさにもかかわらず、兄妹愛の甘美な戯れを隠しているのである。 たる挽歌のうちに水底に引きずり込まれて消亡していく件りなどに、私はまさにトリスタン ワーグナー的な激情にまで昂まることもある。 ゾルデ のこの流出しようとする回帰衝動は、 の楽章を髣髴とするのである。ことのついでに『月ぞ悪魔』の自分の腹の い込まれた両性具有者的な娘スーザもまた、香山好みの兄妹愛的な愛の観念の いないが、この自我愛的に閉ざされた不毛な畸型美の世界は、 ときとして父権の禁止に遭遇するような場合に わけても『海鰻荘奇談』の兄妹愛が暗澹 グ ロテ

(本名山田鉀治)は明治四十二年東京に生れ、法政大学経済学部を卒業後、長らく大蔵省官 あたり私は信憑に足る資料をもたない。中島河太郎氏の『探偵小説辞典』によれ このような香山滋を一体どんな文学的系譜の上に位置づけるべきかとなると、 先にも述べたように、 かたわら筏井嘉一の短歌雑誌「定型律」で作歌活動をつづけていた。 昭和二十二年「宝石」懸賞入選の 『オラン・ペンデクの復 作家として ば、香山滋

探偵作家クラブ新 がきっ かけで 人賞を得るや一躍評価を固めた。 かなり遅い 『海鰻荘奇談』 (昭22·宝石) が翌年早くも第一

成や八犬傳の馬琴以来、 杏花なる人物が紹介されている。 唐突な連想かもしれないが、 らかだが、そのほかに香山にいちじるしい影響を投げかけていると私に思われるのは、 ているといえる。 気迫る結末を読むと、 らあの迷信深かった鏡花の面影が浮んでいたのではないかと思う。 (おそらく当時の爾光尊事件にヒントを得たのであろう) とともに、 一目瞭然であろうが、 の無数の情人たちが慕い寄ってくるどこか甘い戦慄に満ちた件りがおのずと鮮明に思 した旧家臣に守護されながら、みずから軟体吸血動物となって昔の情夫の生血を吸 『怪異馬霊教』の地下王国に集った「選ばれた人びと」のなかには、双葉山らしき青葉山関 雌伏の間に蓄積 『高野聖』一篇を読んでもよくわかる。ちなみに『エル・ドラドオ』の数千 戦前の「新青年」作家の作風が完全に自家薬籠中のものとされ した彼の生物学的・地質学的知識がどれ 『高野聖』の女主人公の裸身の周囲に、蛭や猿や鳥に 文学的にも歌人らしいこまやかで華麗な筆致は同期 から推測するかぎり、久生十蘭や小栗虫太郎の秘境物、 鏡花が香山の得意とする動物変身譚の近代における巨匠で あの明治大正昭和三代に亘った幻想作家泉鏡花ではあるま 物故年時はいささか食いちがうが、香山の念頭にはどうや ほど博大なもの 「先頃物故した大家 「夢応の の新 か 7 · の 軟 あったこ の上田秋 いとる鬼 つて 61

てくるにちが Va ない のである。

たちまち察知されるであろう。 して りか生涯を通じて近親女性(姉)思慕の作家でもあった(『照葉狂言』)。この暗合は偶然で 思えば鏡花も旅と驚異博物誌の作家であった 『アッシャー家の崩壊』の作家でもあったことを思い合せるなら、驚異博物誌見 の作家エドガー・A・ポオが、同時に近親相姦コンプレックスの濃厚な『リジェ の旅行文学と近親相姦願望の間にはなにか密接なつながりがあることを、 『アーサー・ゴードン・ピムの物語』や『ハンス・プファール (『高野聖』、『眉かくしの霊』) 大方の読者は 冒険旅 イア

きはずの永遠の睡眠である。そしてほかでもない、 さらに現代のSF宇宙旅行小説 遭遇するホメーロスの『オデュッセイア』以来、 驚異博物誌と旅行文学がもともと密接な関係にあることは、途上さまざまの妖怪や異習に そもそも変身と旅とは相互にアナロジカルな関係にあって、旅行者はさまざまの事物や の行方である死 いに見開きながら死の世界を垣間見ようとするのである。 かな 包 13 その迂余曲折した旅程の彼方に驚異の博物誌を手掛りにして、好奇の につつまれたある女性の胸のなかにあえかに保護され のまどろみは、 まで、 円環的にそのまま誕生以前の原記憶の再発見となるべ すでに大方の解説者によって指摘され シラノ・ド 誕生以前のまどろみとは、 ・ベルジュラッ しかし、最後に てい クの さだか いたあの至福 る通りであ 月世界旅行 到達す

「その心地の得も 包まれたやうな工合。」(『高野聖』) が いた、徹底的 の、さらに鏡花 なくなつて気が遠くなつて、 て気が遠くなつて、ひたと附つついている婦がわれなさで、眠気がさしたのでもあるまい の作 受動的な態度しか示さない 中 人物が女性にたいするとき、 0 も右の消息から説明できると 漁色家というには 人の身体で、私は花びらの中 が、うと! する様子で、 ほど遠い、

た。 やぴしゃという裸足の足音がきこえて来た。 まともに ファ な重量感を覚えて息ぐるしくなった。 とたんに、 こふりか ーギァ ましがた袋猿が下りて行ったテラス 彼は かる。」(『白蛾』) 二公爵夫人に違い 彼のからだに何者かが ない。 顔が彼の のしかかるような、 …… (中略) 彼は の階段を、 額に寄せられているのであろう、 本能的に警戒意識を呼び覚され 逆に登って来るあわただし ……その声はまさしくイッポ むしろ彼が抱きかか て跳 はは えられる ね 起き 息 リー カジ

学的次元に ちた生と意識の旅路を往く旅行者をかき抱いてくれる。 もうお 引き裂か えない母、 わかりかと思うが、 おきかえたのが、 n 見えない姉妹は、甘 もせず、 直接のあらわな接触はあらかじめ断念してい この近親相姦願望にもとづく受動的な内包状態へ Va わゆる秘境魔境の類であり、 12 息や花 び らの なか だが彼を引き裂きもせず、 に包み込む 民俗学者たちなら「隠れ里」 ような気 るか のようである。 能で、 の憧れを地理 またお 12 ٤ 0 7

薄で、 処に 挽歌を主導底音として 逆ユー 1, ナ 'n この隠れ里が通常はスタティックに俗世間と併存 に のみ 『沈ん っそりと戻っていく。 ならず たちが ŀ の復讐に一時はやむをえず赴きながらも、 傷つけられるや一瞬復讐鬼として波立ち騒ぎ、 が ピアであっ 棲息する世紀へと総体的に地球を逆戻りさせてしまうような攻撃的 だ世界』のように、 復 山間 」という形式をとることである。抑圧の大洪水の波間 たようだ。 ノスタルジー や離 島の忘れ 同じく逆進化をテー 熱帯が永続的に叛乱して文明を破壊しつくし、 られ を誘う落日の世界こそが、 た隠密な共同 マにしたSFでも、 むしろ終始一貫滅びゆくもの していて、 体である。 目的を達するとまたし 香山のつ 万一俗世間 香山に たとえば」・ ね お に埋れ に愛惜し Va て特徴 と交渉す ても元 トカゲや の嫋々たる な悪意は稀 た隠れ里の G 的 . 0 る な 隠れ バラ こと 1

湖

197

る一帯の巉巌

磊

々ら

7

横たわるが中に、

塊が

巨石

危く

水を瞰う辺り

往る

らず、 わり居り候。 聞き及び候。 小生は新高の山、 遇せし出来事の 到底現代にありては、 日誌 此湖水に就きては諸説紛々として一ならず、 を記 し候事は小 時ち、鳥ならでは得も通うまじき険峻の地に、怪しき湖水あいまで、鳥ならでは得も強さない。 順を逐うて御披露仕候様、取揃え候ものに御座候のではまを、順を逐うて御披露仕候様、取揃え候ものに御座候のではまっ 見る能わざる動物数多棲めりなど、 順を逐うて御披露仕候様、取揃え候ものに御座候。久しき以前 生年来の習慣に有之、弦に封入致置候部分は、 化石と成りて掘出さるれば 信じ難き風評 過ぐる三ケ年間 のみ、 りと、 多く伝 いざ知

射するかと思わるる如き、大々的震盪を起こし候は、左迄恠むべき義には無之と申す事に候い。 心部に於いて、恰も絶大なる噴水井が、幾万仭の地底より、奔龍の上半、此湖水は、其周囲の山形より見るも原と火山の作用にて成り一切、此湖水は、其周囲の山形より見るも原と火山の作用にて成り 此大震蘯の起るに方りては、 湖水忽ち暴漲し て、 岸辺を囲む磊塊たる赭岩を浸し、 勢、 しも ものなれば時々、其中ものなれば時々、其中 濁浪の

若し又好奇の人ありて、 0 せざるは固より、 なけれ 見も馴れぬ樹木の幹、 頓なて ありて、暗濁なる水中に糸を垂るれば、全身刺に蔽われたる奇魚鉤に繋ると、石炭坑か石層中の他にては、見る事すらも叶わぬ、異様の物横わり候由、 震盪の遏むと同時に、 さては珍らかなる羊歯科植物など、到底地に、退き行く水の脚早きに取り遺されて、 到底地上には生育

茂し居る事 以上は往昔黒 一大洞穴を成し其処には、地上にては遠き昔日に絶滅したる、動植物の上は往昔黒姫の翁のものしし記録中に相見え候が、更に翁は一歩を進め さては、此湖水は、 即ち此大洞穴に到る通路なりと主張致居候 動植物の今 て、 Ł 生育 の中

不断日光を、 益々確実と相成候えば、充分信拠すべき事と存じ候。 北両極に巨口ありとの末松氏の説は、 地球の中心部に注射 しつつある事に御座候 兄の熟く知らるる処にして、諸家の説を綜合する 斯く て、 太陽は両極の巨 n

き折々には、 友人深見規矩雄と共に、双影寂しく、草茂る山路を踏みしだきて、笻をここ黒姫 斯かる清純 てより、 覚束なき望より出でしものに有之、まこと、氏は胃弱に悩む 殆ど狂者に近き挙動さえ有りし次第に御座候 純なる山野の空気を呼吸し、指摟うれば、早や三年と相成が ざれば、早や三年と相成申候。氏の同行せしは学術研究と云わんよりは、 親しく自然に接しなば、幾分の保養ともならん 事年久 しく、 0

湖上の怪物

199

御承知有之度候、 隙漏る風い と頼み、 の住 玆に両人、 は防ぎ難く候えども雨も稀なる此地方の、 み しも 0 か と思わ の紐を解き申候。 るる、 石造の小屋を見出 其後 の出 殊に暫時の仮の宿なれば、見出し申候。素より粗造云 は、 封入致置候日記 はれば、此上なきり粗造云わん方な の抜萃にて、

明治三十二年

大学教授 四月一日

年 四月二十九日

釣魚をして居た時、三本結合わ 頻に得意になって居る。唯一心に釣魚をして居る って来て、 れれぬ 一心に釣魚をして居るが、遂々地球の中心部と湖水との通路と見る可き物を発此珍らしい湖の岸辺に打上げられて居る植物の採集で、四五日以来殊の外忙し ので 有りっ ある。 たけ の糸や、 又実際通じて居るのであろう、 した、 縄を繋ぎ合せ、 約三百尺程の糸を下げたが、 五百尺計りにして、 此間深見は湖水の中 底に達 下げて見たが かぬので、 央に舟を浮 1/2 見したと、 まだ底は 岸へ戻 べてて

五

月二日夕

吟く態は、実に見るころがる。これの一時の事であったらしい。 業なの れ返って居る。気候が変ったので、 実に見るに忍びぬ。先ず些なりと快く 暮れ行く日影が怨め B 間 植物の採 集や しい 柔かな枯草を布い 5, 、大層身体に宜い様に見えたが、矢張思った程程であった。今朝は、深見が、例の胃弱が良く 本を作るやら な た辱の上に横になって、 っ たら、 で、忙しくもあるが、 早速人里へ伴 矢張思った程でなく、 n 独り淋 て行か 又太だ有益な作 ない ね しげ ば に呻う ので なる

烈しく 思議である。若し又風が無いとす 7 たところで、 如何にも残念な事なので、 突然、恐ろしい 、なる。 な小天地を、 風は中々強 深見は…… いや、 そればかりでない、 浪の音が 17 まだ録 に相違ない 寧って 聞えて来た。 ń 探検 て来た。今迄眠れるが如く静穏であったのに、俄深見を同伴しなければよかったなど返らぬ事を悔 ば、 のに、兹では隙漏る風のそよともしな to 仮か、 せぬ内 濤波は立たな 南から吹い 区 立去らなけ 64 筈であるのに、 て、 此処は巌 n ば ならぬ 怒号の の除が とは、 で当ら いとは、 古 自 刻 に荒 な N 愈々不 で居る VA K とし れる つ

月三日朝

然とした。 ヤー 夜は、 という音がす 実に怖 初は蛇か何かだと思ったが、 3 うるので、 11 晩 であった。 下を見ると、 夕方であっ よく見ると何時の 土間に長 たが、 何時の間にか、一条の水が流れて居る物があるので、 丁度自分が 日誌を記 7 居ると、 n 込んで 思わず

さとなっ 予なく入って来て、 て仕 舞っ n 0 水等何と手 は N の付け な鋭 秒毎 67 に増 . 音を ようも 出 す ば たの かりである。 61 付かぬ間に のである。 と見る間 早や土 間 に諸 面 芳 に、 の間が 三寸 隙 か 5 ほ E" 0

かり 来て、 突当るので、石小屋 以は何 る様 響と変じ 暫く 3 になった。 ŧ た様な勢で水は西 て、斯うなって見れ なく 頓て な なにし 0 としたものであろう。 12 っ て朧げ 0 水は東に 7 て戸口へ出で、 で から、 遠く湖心 が 0 て、 燐寸 語や静な 畔 ながら月影 自分は燐寸を擦った。で 向 は今 くような音が聞えると思うと、 吹き荒ぶ嵐 は に復した。 の方へと流れ にも の ば、 直に点火いた。 畳み上 巻に捕ら 壊れれ 今迄聞 さえ宿す の音に伴 足の下僅か一尺計 は げ そうである。 削りた て居る。大小の樹木が絶えず え た波 放装れ り成 石 Z 7 見ると、 0 7 たる濁 れて 可能高 べせる 隙間 放浪の ば震蕩の名残と見ゆる大渦巻は今しも中行く樹の幹も家の傍を流れ去って、水舎 地は 音の 一時 へ手足を懸け 小屋の半は既になるなが、此程の震荡 水を深 四隣次 りのと 間許 忽ち仁王の鼾も あるが、 手足の を圧し、 り経 点迄来た水は B は既に水中に浸って恰なれの震蕩にも拘らず、 翼無き身の つと 掛け様もあらばこそ。 て家根 つ 流れ 湖水は再び動 の上 くやと思わるる囂 増しも減りもせぬ の響は、 て来て恐ろし 見 の達する術 へと攀じ登 幾千 って恰ら大河の 漸く 揺を始 空気は 0) 右も左もき った 窪は 静 61 めた。 まっ 勢で、 減 の圏か るば 々た が 決など 7

手に取 るように見える 0 であ 3

昨夜の そう言えば 7 折角兒 も 不 木の な椿 株や枝であろう、 水も最早 処を あ 事 ずがある た標 の大渦 立たちの 本も 心かねば の捲 水に復した。 昭道具も、 斯ういう時は、 き収め とは思うが果し なら ぬか、 悉く た湖水 如何にも 水害を蒙 さて、 0 中央に、 て、地 て何物だか 残念で かって、 馬は溺 から何 種談 堪な かられ 只看たばかりでは分らない 7 の物が浮 て、 加えて、 った物を噴出 黒姫翁の紀行中に 居る。元来の樹 63 て居る。 深見は は 「する事が有る 大病。 る、 其中の多く も、 は 何うあ 力 (リフ は 度 は

尺許りと見 オーニヤ産 る考えで が運好 遠鏡 7 で見ると素敵 3 た。 n の大木位はあったに違 岸に から突き出 自分は深見 n に太 付 て 42 てで の病気が少し快く 67 けむ も呉れ K の幹、 水面に い無い と云うよりは寧ろ切 n ば有 横たわ 。主な部分の長さは三丈、 なり次第、 1/2 2 が、 て居るのは、 さも 出発する心算であるが、 株が浮て なくば筏を造 根か枝か、 幅は一丈許りもありそう つ 長さ一 てでも 是非 発足前 丈五 兄経三 行 って

五月匹日夕

201

65 元来あ は、 の様 実にぬ n は、 な湖水の中央に 珍 他の浮木よりも Ust 不 -思議 は、 版な目に 少し 昨日の儘に 漕 離 遇 れ った日である。 たただるが にあ 浮んでいるが つ 9 たのであるし、 朝起き出 か、あ の黒 でて、 其後別 Va 眼鏡は 切株は影も見えな 隻手に に風も 吹か 眺 め渡 ず

沈んで了う方の質 かぬ のに で 0 でも 0 ある に隠れる筈は のだろう 6 0 思うに元来が重い ので、 少し水に浸れ ば 直

たまま、 見るには見たが を曳く者がある。 で、それ以来持 採集に出懸け 時頃、深見はすや して居るから、 自分はよろよろと間近の浅瀬へ倒れ込んで、 実際何物であるかは夢中で、突然小刀を揮って、其物の頭同時にばくっと云う音がしたので、振り向いて見ると……にち、早速一箇拾い上げようと、身を屈める途端に、突然背でのて居るのだが、洋刀の様な形をして居る。岸辺には奇妙 た。 す 此小刀は自分が三年前すやと眠込んだので、 刀は自分が三年前、南米ブラジルへ漫遊を試みた時、 洋刀の様 自分は 殆ど気絶の体であった。 本入 、と南 米製 岸辺には奇妙な 0 大小 突然背後からぐ 刀とを 頭を痛 ·何物 ながらぐいる草や貝が 役に立 ?……いや かた え り付 と袖 一面 った

見えぬ うとすれば、 の様な音は聞えない かのよう、顎長の古の怪物。洋門 でもした日には、何とも取返しが就かぬ。そこで自分は心を励まし震える手先に、とすれば、全く死に切る前に再び力を回復し、死に際の苦し紛れに身を搔いて水中 の怪物。洋刀を並べ植えた様な歯を剝き出し、皿り兼な良を引水の中央に見えた、彼の大きな黒い樹の正体は今此処に居る。 て手早く怪物の脳漿を抉り出し、 斯かる動物は、 の首を自分の頭上高く巉巌 0 屹度、突然頭脳を斬られた為に、 **っと、どうぜんずのう。 ** 其身体から、 絶えず異様の音 先刻斬り取られた頭蓋骨を以前の通り結合 の上から出して居る。身体は、 ら出して居る。身体は、巌の向側、皿の様な眼を見張って、宛ら自は今此処に居る。大鰐と蛇の混種 際の苦し紛れに身な昏睡の状態に陥っ 響を発するものであるが に身を搔 ったのであろう。 て水中 自分 侧为 種で 小 見 12 たに様 小ない。 しもそ n 7 7 to な

此巨大なる捕虜の検査に 取り係った。

軀幹。頭は比較的小さくて丸く、そして、家鴨の嘴のような長い顎が突出して居る。 発育不十分な手足とも謂うべき四っの鰭、怖ろしく長い蜿蜒した頸、と都合是れだ鶏脊不十分な手足とも謂うべき四っの鰭、怖ろしく長い蜿蜒した頸、と都合是れだ軀幹の丈は正に二丈八尺、太さは一番太い個処で側から側へ、直経八尺、背から腹 様な皮膚は黒くて光沢がある。 には相違 色が有って、 船幹の丈は正に二丈八尺、太さは一番太い個 からた 64 が、 じっと視詰るよう。 眼は褐色を帯びて実に大きいが、其底には一 即ち『エラスモソーラス』と云って世界の大洪 には一種陰鬱な温和し突出して居る。繁革の突出して居る。繁革の ら腹 水前 0) 動

居らぬ。 に怪物を見たがるので、 前世界の溢 し鯊の心臓は、 ずでは 自分は急い なかろう れ物 一時間を経ったのに、 切断され ! 斯んな話をしたら、如何な病人でも、起き上るだろうと、彼の骨となって近頃現われた物と同種類か如何かは分らぬ。 で深見を呼びに行った。見ると、 間 ŧ 連れ立って来て見ると、 跳び廻る てから、 身からだ 事も 数時間鼓動を止めなかった例 明支かとこうにようによりである。 の諸機能は平常と異ならず行われて居るのである。 見ると、驚いた事には、怪物の心臓の鼓動は停んで あるのを見 ñ ば、 今朝よりは幾分苦痛も減じたよう。 此れ ٢ 7 しもあれ 左まで珍らし ば、又、 検査 頭を切られ いと云う程 が 7 頻常む

7 往こうとし 67 て、 て居るのである。 に過度の出血をした個い、検めると、再び驚い 検s め^t 骨っ処った。 0 も見えぬ。 内部を見るに 刻隐 0 創 確 口袋 か は に彼は、 段 人間のと 々 癒 つ と酷似て、大さと脳は無くとも、 7 来る。 大さと云い、 内 部 0 立派に生存 色は健全で 形と云

る。尤も、繊維や皺襞は少ないが、 先ずし |8の帽子を被る男の頭位。 不思議にも人間に類似して居るのである。 又 脳髄を調べると、 これも普通の人間 大さであ

五月五日朝

自分は百方慰めて見たが其甲斐も無く持合せの二三種の薬剤は何れも無くなれば善い、さもなけれや、寧そ自殺をして仕舞おうのと情無い 深見の容態は非常に悪 さもなけれや、寧そ自殺をして仕舞おうのと情無い 1/2 、今にも死ぬような心地が 争 る Ď, 早く 寿 の効験が無 事計り言うの 命が尽きて此 の苦悩 である。 が

五月五日夕

無理の事とは思うが 兎も角も斯様して置い 随分雲を攫む様な話だが、真の深見は未だ死んでは居らぬと、自分は信じて居るからである。 深見 の死骸を今、 其時此の土饅頭の上へ石碑を建ててやろう。 湖辺の砂中に埋め て明朝になって見たところで、 た。 が併 別 自分の手術が、 併しあんな実験の成功を望むのは勿論 に何 の儀式も行 いよいよ無効と定った わな 1/2 と云うの

たらば、全快するだろう。爬虫類の疵業機能に何の異状も無い。頭部の傷は昨 怪物を見に出懸けた。 話は前に溯 の殻を剝いたのを六七斗ばかり、 るが、今朝の十 怪物は、 時 昨日の儘の場所に位置も変えずに居るが、呼吸は行われ、 頃であった、 夜の中に著しく の治り方の迷 怪物の口中へ注ぎ込んでやると、 深見の病苦も稍薄 のは、実に驚く可きものである。 癒って居る。 らいだので、 此調子なら一週間も経っ 二人伴れ立っ 痙攣るような喘 自分

ぎと共に嚥み下 『此の動物を何時迄生かして置く心算かね』ぎと共に嚥み下して、静かに口を結んだ。

と深見は聞

分剝製にでもする事になるだろう て、此怪物に一定の食料を与え、 最寄の人里へ、君を伴れて往って、其処から方々へ手紙を出し、僕は再び此処へ引返して来。 『友人の理学者連中に通知したら、 友人たちの来た上で、 定めし、観に来るだろうから、それ迄は、生かして置く。 最後の処分法を決する積りだが

脳漿を取り去られても、身体に異状が無いと云う斯様な怪力を備えた者もあるのに……噫、了っては何にもならないしさ。嗚呼僕に此の動物の活力が有れば何の事は無いのだがなあ。 『然し、傷を付けずに、 し僕の自由に出来たら嘸善かろうに』 か僕の身体だけ奪って呉れないかなあ。有っても用の無い此奴の力の幾部分でも宜 殺すのは中々容易じゃ無 いぜ君。 そうかと云 って目茶 々々に 41 切 から、 って

『君は精神上の活動が激し過ぎて、それが肉体 強健であ した物が出来上るだろうね』 つったら、 脳を使うのが過度、 面白かろう。 だが、 と云うのだから、病気も起る理さ。若し君が、 此 の怪力に の害になるのだ。 君の智力と来たら、 肉体の運 それこそ鬼に金棒で 動は殆ど皆無であ 此動物の様

と思って居ると、 つつ自分は怪物の方へ行って、 突然、 深見が呻く声がするので、 持て来て居た外科器械で、 振り向い て見ると、 其 の傷口に手当を加えよう こは 如何に、 彼は今、

最も って四苦八苦の状態 な小 刀を取り出 ! T て、 飛んで往ったが既間に合わぬ。 己れの耳から耳へと、 美事に喉を切り離して仕舞ったの 彼れ は器械箱 から、

める。 たと云う、例の仏蘭西の医者の事だ。 『深見、 偶然思い浮んだのは、 と声 を 限 りに 叫 ぶと、 断頭台で首を切られてから数分間 不思議や彼は眼を見据えて、意味ありげに、 の後に、 瞬で談話 自分を眺 を

せた。 開いて、水晶の様な歯を露出した状は宛然微笑して人を誘うかのよう……人間の脳力、 ……不思議にも此動物の頭蓋骨が、 の体力……動物 『僕の言う事が聞えたら瞬をし玉え』と自分が叫ぶと、 肉体は死んでも、脳髄は生きて居るのだ。ふと怪物の方を振向くと、事が聞えたら瞬をし玉え』と自分が叫ぶと、彼れは右の眼を閉って、パ の心は死んでも、体は活きて居る、深見の身体は死ん 人間に似て居るのを思い出して、 自分は覚えず胸を踊 でも、心は活きて居る 動物 口を

『未だ生きて居るの か、 深見君、』

小刀を取った。遽いで手荒い事をして悔を遺すかも知れぬが、猶予したら尚更駄目なのは知れの眼は之に応じて瞬をした。今は器械を択んでなど居る場合じゃない。唐突自分は大 の頭 って居る。直様、 の傷を披いて、 見事、 深見の頭蓋を披いて、脳漿を取り出した。幸い傷は付けぬ。 深見の脳を詰め込み、繃帯をして置いて、 家へ取って皈し、 突自分 そこで怪 は大き

の脳交換という技術は、たけの刺激剤を持って来 激剤を持って来て服ませた。

切開さして其幾分を取らせるなどと云う危険な手術を甘んじて受けよう。 功するだろうとは云うものの、何故思う様に行かぬかと云えば、実験せぬからである。 の死したる人から脳を取っても役に立たぬし、又生きて居る者なら、誰れが他人に、 Z 長年の間、我が医学協会の大問題となって居 3 0) で、 頭蓋を

あるが 云って其様な事は輿論が許さぬ。 の材料にとて、 怪我などで破れて出たとか云う場合には、脳は度々検査され、 脳を寄附する様な人も無いと云う訳であるから、死刑の宣告を受けた罪人を学術研究 、その部分へ他人の脳を詰めた例は、 学者の手に渡されるようにでもならぬ内は、 未だ曾て無いのである。又怪我もせ 脳交換と云う事も出来ま 又幾部分は切取 如 6 0 るるる ٢

える事受合い。実際、 今や自分の実験を本式にやるには万事好都合である、 近世の動物中に在って怪力彼れ に及ぶ者は有るまい 天気は涼 しく て平穏だ か 5 は

得るものであるとすれば、此の体力豊かなる怪物は無論其働が有るに違い無い。 し果して肉体が、 世界の 歴史に一新紀元を画するに至るかも 他より移し入れた脳の主となって、之れに栄養を供し、 知 n 之れと調 或は之に依 和

207 五月六日午

今少し実検 の結果を見るのを延ばそうと思う

五月七日午

淀みを持って、 最う決して徒らの想像ではない。 空行く雲の影の様に薄らとはして居るが。促らの想像ではない。今朝怪物の眼を見ると、 確かに表情がある。

五月八日午

怖に悩む状が眼ざし 今日は昨日より確かである。 Ď 裡にありありと見える。 例えば、 眼を開い た儘、 襲わ n たとでも云う様 恐

五月十一日夕

るには好都合であろう。 病気して三日間と云うも の彼の様子を見ぬが、 暫く離れて居る方が、 却て実験の結果を見

五月十二日

許へ行って見ると、鰭のあたりで微かに水が揺くので、多分今頼りない姿に横って居る彼を、斯る大成功を得ようとは予期しなかった。思えば我ながら怖ろしい気がする。今朝怪物の 正しく彼が鰭を動かして居るためである。 魚共が餌食にしようと、突ッついて居ることと思って熟視るとそうではない。水 の騒ぐ のは

だ五体と十分の脈絡が通じないのか、 い。此怪物の脳髄は、否寧ろ深見という方が適当であろうが、 「深見深見」と叫ぶとその巨大なる身体は微かに動 無論、 彼はまだ其体軀を支配する迄には行かないので、 いた。 極微かでは 今熟睡って居るのか、 あるが分らぬ 程で 或は未

在を知ろう筈が無い。深見も同じく未だ彼れの新しい身体と脈絡が通ぜぬのである。 熟睡も同様、 ここ両三日を経過しなければ何れとも分らぬ此の身体へ、 無感覚になって居るのである。性来五官の作用を有せぬ 従来通りの食物を当てが 人ならば 我身の存 して自

五月十七日夕

上げると思わず慄然とした。 思い、直様食物の用意に取り掛って頻りにやって居ると、 物は依然として動かない。死んだのかと思ったが、 三日前から又も病気なので今朝迄は外出も為なかったが、 やがて呼吸をして居る様子を見て占たと 微かに喘ぐ様な声がするので、 今、 湖の辺に行っ て見ると、

の姿が、 ふらとして落付かぬ。口を歪めるのは何か言おうとするのであろう。 は谺に響いて一層気味が悪い。 置いて一層気味が悪い。声に伴れて怪物は長い頸を遺憾無く延ばしたが尚首筋はふら思い設けぬ当面に現われた様な気がする。堪えられなくなって自分は絶叫した。声半信半疑の祈禱の効験が見えて、顔は見たいが、さりとて見るのも悔いした。声 或は憐を乞うが如く、 絶えず自分の方を眺めて居るのである。 両の眼は或は恐れ

『僕の言う事が分るかね』 『深見!』と自分は叫んだ。 彼は急に口を結んで、 丁度犬の様に熟と情を含んで自分を見詰めた。

209

『分るなら頭を下げ給え』

気の狂いでもないと合点した上で、 初めた。 |儘暫時この不思議な事件を回想したが、ともすい。 頭は垂れて来た。自分の言葉を解するに相違無 さて、 彼れ ともすれば夢かと疑われるのを、夢でも無け が自殺未遂以来今迄に到った経過を徐ろ 67 実験 は 成 功したのである。 自分は無言

一通り話が済んでから僕は言った。

体力偉大な動物の身体を君の物にしたのだから、其筋骨を左右する力を得た暁には、 志を通ずる方法を考えよう。何れにしても、君はもう人間の身体を捨てて、君が羨んだ此の 新肉体を支配する事 合著として天下 を動かす事が出来るかね。ウン出来ない。そうだろうと思った。 『僕の考えでは、君の身体は半身不随症に罹 口は利ける様になるかどうか分らぬが、多分出来るだろう。 の中心との聯絡を発見して探検に尽力し 一献が出来るか、君まあ考えて見給え。 の地質学者を驚嘆せしめようではないか』 が 出来ない 先ず何うか斯うか、頭だけは動かせる様になったが って居るようなものだ。 僕は君の発見した事を記述して、 て貰 いたいのだ。そうなったら地質学上に 然し今に出来るように 出来なければ何か二人の意 君の新 は未だ 深見増山 なる の湖

話に身が 入って我知らず両手を振って深見を励まして居ると、 彼の ・眼は 言うに言わ

悦びの光を放った。

六月二日夜

の怒号と相和 である。今も現に「橋弁慶」を謡って居るが、 従い、先きの怪物に劣らぬ動作を為し得るのみでなく、 も無いから、 深見は今物も言 して、 別に日々 う、 一種物凄い音楽を成すのである。 の事を取立てて記す必要も無い。 身体も自由に使 い得る。 張のある太い くなる迄の径路は余りに緩漫で際立 詩吟をする、 今や彼れの身体は全然彼れの意志に 声は、 夕方から吹き 唱歌をやる、 初めた 実に奇妙 一った処

此間の様な大噴蘯 悩まして居るのである。 で塞が 尚此処に留って居る考である。 そうなったら彼れは っているので、 彼は地球の中心部に大遠征を試みようとしたのであるが 一が起ったらば、 併し何で自分が彼れを見捨てよう。否、そればかりではない、 孤独に堪えかねて焦れ死をするであろうと、始終それば 何の得る所も無かったとの事。 の中心部との通路が開くかも知れぬと思うので、 彼れは自分に置き去りに為れ 湖の下に ある 噴出 かりに心を はせぬ

ぬかと云う事で、若し彼れを捕えようなどとする輩一つ彼れの心能となるのは、誰かに発見され、捕 猶一つ彼れの心配となるのは、 有に帰する事を免れ 飽迄抵抗を試みる心算であると意気込んで居る。 ない。 尤も自分は、 誰かに発見され、 彼を養い馴らしたと云う点で、 があらば、 われ 勿論、 て見せ物や博物館で晒物にされ 動物として見れば彼 残念ながら其奴等の 命を取

湖上の怪物

213

すれ んばする だ

鋸の歯を並べた様な口を大きく開いて居る者がある。 返し候え』と羽衣の曲を謡う声が起った。見ると彼方の入江に墨の様な太頸を高く 見える、と続い の辺へ来るからには理学者に相違無い。丁度この時、 て来るのを眺 の心 め たのも空事 ながら、自分が丁度湖の方へと峠路を急ぐ折柄、岡の向うにちらりと掬網だのも空事ではなかった、どんよりと雨を持った雲が、重そうに頭上に垂 て持主が現われた。湖水の方を眺めて居るので自分には熟くは見え どんよりと雨を持った雲が、重 山に鳴り水に響いて『早や々々其衣を の主は深見である。 延し上げ、 ぬが が

へと山彦が伝 茫然と斯の有様を眺めて立って居た今の理学者は、持って居る掬網の落ちる 面に立ち騒ぐ波の音、ワッハ……という高笑いは百鬼の一時に笑うが如く、 深見が謡を遏め、 わる。哀れな理学者は気も魂も身に沿わず、 身を跳らすよと見る間に再び大きなずう体をざぶんと水に落すと、 宙を飛んで逃げ去った。 のも が か

ケ年間は、 余り必要も無之候えば玆に省き申候

* * *

三十年六月三十日 近来確かに深見の様子が変って来た。 尤も暫く前から気は附かぬでもなかっ たが、 気の所

場合となった。 墓標を樹てて、 噫さらば、 の鏡も昏濁 如何なる事 葉で繰返し繰返し話すばかり、 どと云って居る。 為とし る彼の精神が読める。最早彼れは学術上の研究に興味を有たない。 その後身として残虐な怪物が残った。その語る処の野卑下劣であるのを見れば、 脳の肉体に及ぼす力よりも大なるものである。病人の深見、蒲柳の深見、脳の肉体に及ぼす力よりも大なるものである。病人の深見、蒲柳の深見、 の智力を併呑 て努めて信じない 友深見は已に世に亡きものである。彼れの人としての遺骸を埋めた跡へ一 なる湖水に汚れて、あわれ、深見規矩雄は、 か果てしが知れぬ。 するのである。この例 自分は此住み馴れた、 何時も吾々の閑散な湖岸生活中に起る些々たる出来事を、 ように 物質は竟に精神に勝つのであるか。 苟も教育ある者の耳を傾けるに足る事柄は一つも無い。 て居た。 は沢山 さりとて今は名残も惜しからぬ、 ある。 ところが、 人にしても、 今こそ只事でな 竟に獣類に堕落し了るのであるか。 肉体の頭脳に及ぼす力は、 神の面影玆にぞ映る良心 学術なんて痴人の夢だな 67 黒姫湖畔を立ち去る 風雅の深見は逝き 下品な冗漫な言 の身体 刻々堕落す 基を 将来き 頭

Δ

到る処に蛮民を駆逐して、 いて、 騎兵若干、及、 兹に御手許まで御送附申上候。 別紙書翰並に封入の原稿、意外の機会に依り小官の手に入り申し候に付、 山砲一門を率いて、 其第七日には路も知れざる、 二週間以前小官は、 新高山脈に踏み入り申候。 山谷狭隘の地に迷い入り候処、 生蕃追討の命を受け、 険峻なる山嶺を踏破し 歩兵一個 其宛名に 彼方

て見も馴れぬ動物、 急ぎ小高き丘に馳せ登り、彼方を見下ろし候に、水色昏濁にして物凄き湖水有之、其諸汀に急ぎ小高き丘に馳せ登り、彼方を見下ろし候に、水色昏濁にして物凄き湖水有之、其諸汀に の巌陰より、何者とも知れざる怪しき吼り声に続いて、救を求むる人の声相聞え候につき、

致候小官は憤激に堪えず、 に所謂悪魔なる者なるべしと怖気立ちし兵士も相見え候え共、 する処に候。吾等は末だ曾て斯かる人語を操る大怪物を見聞したる事無之、 余りに不可思議なれば、真偽の御疑もあらんかなれども、 さまに発砲致し候処幸いにも命中、彼れは苦悶の声を揚げて、 かず候えども、兎に角、朧げながら人語に似通い居り候事は確実に御座候。 小官等を認め候や、 で、怪物は、紅に染みたる頤を開き、からからと打笑い一人の男を捕え、無残にも嚙み裂き居るを発見致候。 山砲発射の用意を為さしめ候処、彼れ怪物は何やらん絶えず からからと打笑い申候。此事たる、 全く事実たる事小官の誓って証言 眼前彼の残忍なる行為を目撃 水底に没し去り申候。 やがて二回続け 一時は是れぞ世

致し、一際哀悼の情を切なと怪物の餌食となりし人物の、 何等かの手段を以て彼の怪物を捕獲致さば、 際哀悼の情を切ならしめ候。即ち同博士の着衣並に一括したる書類等取纏め御送 著名たる増山博士なりし事遺骸の傍に落ち散り候別紙にて分 博物館裏一奇宝を加え候事と存候。 草々敬具。

明治三十二年四月十五日

医科大学教授

中 Ш 進 ども多分はそんな工合に参りませうか。」

かし Va

か

ゞでございませう。

ある晩大学士の小さな家 ノ木大学士は宝石学の専門だ。 ^

貝の火兄弟商会」の、

「先生、ごく上等の蛋白石の注文があるのですがどうでせう、お探しをねがへませんでせう赤鼻の支配人がやって来た。 成金ですから、ありふれたものぢゃなかなか承知しないんです。」 もっともごくごく上等のやつをほしい のです。何せ相手がグリー ンランドの途方もない

雲母紙を張った天井を、 斜めに見上げて聴いてゐた。 大学士は葉巻を横にくはへ、

そこで楢ノ木大学士は 「たびたびご迷惑で、 まことに恐れ 入りますが `\ 13 か 7,, なもんでございませう。

にやっと笑って葉巻をとった。

は、一種の不思議な引力が働いてゐる、深く埋まった紅宝玉どもの、日光の中へ出たいといそれからちゃんと見附かって、帰らうとしてもなかなか足があがらない。つまり僕と宝石に りるのに、 ふその熱心が、 嘱を受けて、紅宝玉を探しにビルマへ行ったがね、 もあるよ。 のある山へ行くと、奇体に足が動かない。直覚だねえ。 「うん、探してやらう。蛋白石のいゝのなら、 一ぺんさがしに出かけたら、きっともう足が宝石のある所へ向くんだよ。 そいつはどうもとんだご災難でございました。 たとへば僕は一千九百十九年の七月に、 十一時間もかかったよ。けれどもそれがいまのバララゲの紅宝玉坑さ。」 多分は僕の足の神経に感ずるのだらうね。 流紋 アメリカのヂ やっぱりいつか足は紅宝玉の 玻璃を探せば いや、それだから、 その時も実際困ったよ。山から下 ヤイアントア 42 > してやらう。 却って困ること そして宝石 山へ向く。 ム会社の依

なやうな事情から、 「それはもうきっとさう行くね。 れてゐるとか、狼に追はれてゐるとか、 ふっとその引力を感じないとい たゞその時に、 あるいはひどく神経が興奮してゐるとか、 僕が何か ふやうなことはあるかもしれない。 の都合のために、 たと へばひどく そん

219

しとにかく行って来よう。 「それでは何分お願ひいたします。 二週間目にはきっと帰るから。」 これはまことに軽少ですが、

当座の旅費のつもりです。」

身の赤いその支配人は、具の火兄弟商会の、

上着の内衣嚢から出した。ねずみ色の状袋を、ねずみ色の状袋を、

「さうかね。」

大学士は別段気にもとめず、

自分の衣囊に投げこんだ。手を延ばして状袋をさらひ、

そして「貝の火兄弟商会」の、「では何分とも、よろしくお願ひいたします。

次の日諸君のうちの誰かは、

変な灰色の袋のやうな背嚢をしょひ、途方もない長い外套を着、きっと上野の停車場で、

をな灰色の袋のやうな背嚢をしょひ、

1/2

でそっちへ歩いて行

っ

た。

には低い

崖があり

蛋白石などを、二週間でさが (どうも少し引き受けやうが 軽率だったな。 してやらうなんてのは、実際少し軽率だった。 グリーンランド の成金がびっくりする程立派な

いゝが、 どうだ、 かなか、 鼻の赤い連中などを相手にして、 どうも斯う人の居ない海岸などへ来て、つくづく夕方歩い 三晩となっちゃうんざりするな。けれども、 流紋玻璃にも出っ会はさない。それに今夜もやっぱり野宿だ。 この頁岩の陰気なこと。 面白い夢でも見る分が得といふもんだ。) 全くいやになっちまふな。おまけに海も暗くなったし、 いゝ加減の法螺を吹い まあ、 たことが全く情けなくなっ 仕方もない てゐると東京のまちの 野宿も二晩ぐらゐは 300 ビスケット ちまふ。 まん 中で のあ な

衣囊に両手を突っ込ん例の楢ノ木大学士が の楢ノ木大学士が

るうちは、歩い

て野宿して、

もう夕方の鼠いろのかがみ 少しせ中を高くして 頁岩の波に洗は れる 0

それ 煙草を出して火をつけた。 眺めてゐたが、又ポケットから かふに浮ぶ腐った馬鈴薯のやうな雲を ぴたっ しばらく黒い海面と だめだと学士はあきらめて 列 そのほのじろい波がしらだけ いよいよ今日は歩い 全く海は暗くなり 海岸を大股に歩い の方をじっと見定め からくるっと振り向い と岩に立ちどまり 何かけもののやうに見えたのだ。 てゐた。 ても 7

削ら 0 脚には多分は濤で たらし 小さな洞 が であっ たのだ。

221

大学士は

つって 7

からま つくらなとこで

ずうっと向ふで一列濤が鳴るばかり。 もしゃビスケットを喰べ

う一服やって寝よう。 大学士の吸ふ巻煙草が 「ははあ、 どうだ、 いよい あしたはきっとうまく行く。 よ宿がきまっ て腹もできると野宿もそんなに悪くな その夢を今夜見るのも 悪くない 63 さあ、

ポツンと赤く見えるだけ、

闇の向ふで 見ると、 我輩もさながら、 洞熊か、 洞窟住人だ。 ところでもう寝よう。

も啼かなきゃ がぼとぼと鳴る か n

をのぞきに人も来ず、 と。 Š N んなあ んばい か。 寝ろ、 寝ろ。

大学士はすぐとろとろする す 2 れば夢も見ない かり夜が明け 7

昨夜

の続

きの頁岩

青白く

ぼんやり光ってゐた。

で洞を飛び出した。 士はまるでびっくり

んだが。 ひます、 目的があるのだ。 えゝと、 それ 物館の方から頼まれてあるんですがいかゞでございませう、 あわてて帽子を落しさうになり 夏岩だ。もうこゝでおれは探し出すつもりだったんだ。 さあ探せ、恐竜の骨骼だ。 「すっかり寝過ごしちゃ 斯うぢゃなかったかな。斯うだ、斯うだ、ちがひない。 忘れたぞ。こいつはいけない。 を押へさへもした。 いや、もっと前 よく思ひ出せないぞ。 誰か云ったやうだ。 近云ったやうだ。いゝや、さうぢゃない、白堊紀の巨きな爬。化石ぢゃなかったかな。えゝと、どうか第三紀の人類に就 から歩いてゐたぞ。 5 恐竜の骨骼だ。」 た。 たしかに昨日も一昨日も人の居ない処をせっせと歩いてゐた ところでおれは一体何のために歩いてゐるんだっ 目的がなくて学者が旅行をするとい もう一年も歩いてゐるぞ。その目的はと、 なるほど、 さあ、 一つお探しを願 はじめてはっきりしたぞ ところでこゝ ふことはな 虫類の は 類の骨部 n は白堊系の ま た すまいか **船を博** か 必ず はて

泥に吸はれてゐるやうだ。 なんだか足が柔らかな

頁岩の筈だったと思って

たい それ

へん足が疲れたのだ。 に太陽の光線は赭く

どこまで行くかわからな

67 0

どうもをかしいと思ひながら

ふと気がついて立ちどまったら

楢を堅

ノ木大学士はうしろを向いた。

たら全く愕いた。

225

巨きな、いから一心に跡けて来たさっきから一心に跡けて来た

蟇の形の足あとは

大股に歩いてゐたな無く頁岩の上に落ち 海は 踊っ 直径が一 平らな奇麗な層面に その灰いろの頁岩の まばゆくそこに浮いてゐた。 空はそれより又青く かくれてゐるが足裏の 所々上の岩のために 五本指の足あとが 幾きれかのちぎれた雲が 「おや出たぞ。」 3 もの凄 てゐるやうに見えた。 米ばかりある てゐたから いほど青く ち

まではっきりわかるのだ。 木大学士が叫び出した。 喰ひ込んでならんでゐる。

足跡はずゐぶん続き その足あとをつけて行く。 大学士はまるで雀躍して 巨きな骨だぞ。 「さあ、 見附けたぞ、この足跡の尽きた所には、 まづ背骨なら二十米はあるだらう。 きっとこい 巨きなもんだぞ。」 つが倒れたまゝ化石してゐる。

なるほどずうっと大学士 の

足もとまでつゞい てゐて

それから先ももっと続くら しかっ たが

も一つ、どうだ、大学士の

銀座でこさへた長靴の

あともぞろっとついてゐた。

どもそれでも探求の目的を達することは達するな。 「こいつはひどい。 我輩の足跡までこんなに深く入るとい 少し歩きにくいだけだ。 ふのは実際少し恐れ入った。 さあもう斯うな

け n

ったらどこまでだって追って行くぞ。」

学士はいよ 12 いよ大股に

どかどか鳴るものは心臓 その足跡をつけて行った。

ごのやうなものは呼吸、

そんなに一生けん命だったが

又そんなに あたりもしづかだっ た。

大学士はふと波打ぎはを見た。 ですっ かりしづまってゐた。

寄せ て吠えて砕けてゐた濤が か にさっきまで

つかすっかりしづまってゐた。

「こいつは変だ。

おまけにずるぶん暑いぢゃ

大学士はあふむいて空を見る。

太陽はまるで熟した苹果のやうで

そこらも無 に赤かった。

ろにあの途方もない爬虫の骨がころがっ けれどもそれだからと云って我輩のこの追跡には害にならない。 山が爆発をやった。その細かな火山灰が正しく上層の気流に混じて地球を包囲してゐるな。 「ずゐぶんいやな天気になった。 それ にしてもこの太陽はあんまり赤い。 てるんだ。 我輩はその地点を記録する。 もうこの足あとの終るとこ きっとどこかの火 もう一足だ

大学士は 12 ょ 42 よ勢こんで

その足跡をつけて行く。

ところが間もなく泥浜は のやうに突き出した。

227

「さあ、 こゝを一つ曲って見ろ。 すぐ向ふ側にその骨がある。 けれども事によったらすぐ無

すぐ 、なか ったらも少し追って行けば 47 > それだけのことだ。

ちどま って巻煙草を出

つ て煙を吐 く。

からわざと顔をし か 80

ごく おうやうに大股

がある。 いたころがどうだ名高い楢っ ところがどうだ名高い楢っ けに され たやうに立ちどまった。 、木大学士が

その は空しく大きく開き

煙草 その膝が Va は堅く つか 泥に落ちた。 なってやがて ふるへ出し

青ぞらの下、 向ふ の泥の浜の上に

足跡の持ち主の

汀の水を呑んでるる。 途方 もな い途方もない 雷竜

47 123 太 ろの皮の雷竜 い足をちゞめ かう

6 しい長 頸をのたのたさせ

小さな赤 チ ュウチ ュウ水を呑んでゐる。 眼を光らせ

頭 あまりのことに楢ノ がしい んとなってしまった。 木大学士は

0 か。 一体これはどうしたのだ。 て来る。大学士も魚も同じことだ。見るなよ、 ああ、どっちでもおんなじことだ。 中生代に来てしま とにかくあすこに雷竜が居て、 いけないよ。」 ったのか。 見るなよ。 中生代がこっち 僕は いま、 こっ の方 ごくこっそりと戻 ちさへ見れば へや つ 7 来た

そろりそろりと後退りいまや楢ノ木大学士は 3 から。どうかしばらく、 こっつ ちを向いちゃ

7

の眼はじっと雷竜を見 八へ遁 げげ て戻る

の手はそっと空気を押す。

まっ黒なほど居ったのだ。

長い

頸を天に延ばすやつ

をゆっくり上下に振るやつ いで水にかけ込むやつ

びちょびちょ水を呑んでゐる しまひ黒い舌を出して のやうな胴がかくれ づ見えなくなりその次に 1 て雷竜の太い尾が

汀に濤も打って来るし遁げてさへ行くならもう直きに 足あとももう泥に食ひ込まな 空も赤くはなくなるし その足跡さへずんずんたどって いきなり来た方へ向いた。 b)

大学士はまづ助かったと 蛇に似たその頭がかくれると

崖にはゆふべの洞もある堅い頁岩の上を行く こんなあぶない探険などは そこまで行けばもう大丈夫 い真岩の上を行く。

うじゃうじゃの雷竜どもなのだ。 見たまへ、学士の来た方の その膝はもうがたがたと鳴りだした。も一度ぎくっと立ちどまった。 泥の岸はまるでいちめん 赤い鼻の連中などを ところが楢ノ木大学士は それもまるきり電のやうな計算だ。 大体こんな計算だった。 相手に法螺を吹いてれば 東京のまちのまん中で 今度かぎりでやめ へも断わらせて てしま ひ ۷

大きさ二尺の四っ角な大学士は観念をして眼をあ

いた。

ったら新生代の沖積世が急い つたよりになるのはこの岬の上だけだ。そこに登っておれは助かるか助からないの号も一所になくなる。雷竜はあんまりひどい。前にも居るしうしろにも居る。 の号も一所になくなる。雷竜はあんまりひどい「もういけない。すっかりうまくやられちゃっ で助けに来るかも知れない。 そこに登っておれは助かるか助からないか、 た。 いよいよおれ さあ、 も食はれるだけだ。 もうたったこの岬だけだ まあたゞ一 事によ

崖にもじゃ あんまりい そこらの景色は けれども折角登 そこには雷竜が居なかっ そして本当に幸なことは まるで蕈とあすなろとの 学士はそっと岬にのぼる の右も左の方も の子みたいな変な木が ンとい もう一めんの雷竜だらけ もじゃ生えてゐた。 つ ても ふでもない る。 た。

その厭や 頸をくるっとまはしたり 頭をもたげて泳いだり 実にもじゃ 自分の鼻さきがふっふっ ところがい 大学士はもう眼をつぶった。 水の中でも黒い白鳥のやうに 「たうとう来たぞ、 12 のに気がついた。 らし もじ つか大学士は いこと恐いこと p 喰は てゐたのだ。 鳴って れるぞ。」

鼠いろのがさがさした胴までその頭は途方もない向ふのその頭は途方もない向ふのその頭は途方もない向ふのまで眼の前までにゅうと突き出されまっ黒な電竜の顔が

眼がさめたのだ、洞穴はもう喰はれたのだ、いやさめたのだ。大学士はカーンと鳴った。まるで管のやうに続いてゐた。まるで管のやうに続いてゐた。

一つ小さなせきばらひをしそこで楢ノ木大学士は十二時にもならないらしかった。まだまっ暗で恐らくは

つくづく闇をすかして見る。まだ雷竜が居るやうなので

「なあんだ。馬鹿にしてや外ではたしかに濤の音

「なあんだ。馬鹿にしてやがる。 火をつける。 もう睡れんぞ。 寒いなあ。

その大学士の小さな家楢ノ木大学士は宝石学の専門だ。

「貝の火兄弟商会」の

赤鼻の支配人がやって来た。

ふれたものぢゃなかなか承知しないんです。」 をお見あたりでございましたか、 「先生お手紙でしたから早速とんで来ました。 何せ相手がグリー 大へ んお早くお帰りでした。ごく上等のやつ ンランドの途方もない成金ですからあり

大学士は葉巻を横にくはへ

雲母紙を張った天井を

斜めに見ながらかう云った。

僕がその山へ入ったら蛋白石どもがみんなざらざら飛びついて来てもうどうしてもはなれな は断じてない、 「うん探して来たよ、僕は一ぺん山へ出かけるともうどんなもんでも見附からんと云ふ ぢゃ な背嚢の中に納めてやりたいことはもちろんだったが、それでは僕も身動きもできなくな 此度なんかもまったくひどく困ったよ。殊に君注文が割合に柔らかな蛋白石だらう。 けだしすべての宝石はみな僕をしたってあつまって来るんだね。 それが君みんな貴蛋白石の火の燃えるやうなやつなんだ。望みのとほりみ いやそれだ

た分はいづれでございますか。 のだから そいつはどうも、 気の毒だったがその中からごくいゝやつだけ撰んださ。」 大へん結構でございました。しかし、そ 一寸拝見をねがひたう存じます。」 のお持ち帰りにな りま

こくっと息を呑みながら鼻の赤いその支配人は見の火兄弟商会の「なるほど。」

大学士の手もとを見つめてゐる。

下等な玻璃蛋白石が背嚢をあけて逆さにした大学士はごく無雑作に

三十ばかりころげだす。

楢ノ木大学士は怒り出した。 困るぢゃありませんか。 先生、 これでは、 何でも、 あんまりぢゃありませんか

それでよからう。さあ持って行け。帰れ、帰れ。」

「何があんまりだ。僕の知ったこっちゃない。

ひどい難儀をしてあるんだ。

旅費さへ返せば

雲母紙を張った天井を大学士は葉巻を横にくはへ 赤鼻の支配人は帰って行き たうとう貝の火兄弟商会の 「先生、 「帰れ、 上着の内衣嚢に投げ込んだ。 出していきなり投げつけた。 すばやく旅 「先生困ります。あんまりです。 の火兄弟 80 ろの 紙を張った天井を の支配人は云 に見ながらにやっと笑ふ。 士は上着の衣嚢 困ります。あんまりです。 帰れ、もう来るな。 商会の 費の袋をさらひ < ちゃになった状袋を ひ な から が À

沼

光景が眼に映つた。 にといふ考へに別にこだはる必要は 沼と言つても、 もないことは勿論で 藻が影を落してゐるのを縫つて目高が泳いでゐても、その為にここは泥沼の筈だつたのないことは勿論である。沼の澄んだ水の底が、その辺だけかどうかは解らないが、砂地 の下は泥ばかりといふことはない。 な 47 のである。 岸に立つて下を見た時に、 その泥で水がすつかり濁 度そうい 0 てる る

あるものと思はずにはゐられなかつた。その印象が余り強い くりで、そこも下が砂地だつたし、椰子の森林が拡るアフリカの西海岸辺りの景色がそこに 子供の頃に、北支の草原の中に建つた家に住んでゐたことがあつて、よく見ると、 く群生し ものを眺める気持といふ てゐる小さな草が、 も のは、 細い茎の先から五、六枚の葉を出してゐるのが椰子の木にそつ その場合の尺度がどれ位か ので、五分ばかりの高さの瀬戸 でどうにでも なるも 家の軒近

た。 だつた。 理が付かない妙な感じがした。 で出来た象の玩具を持 併しその草原では、 実に鮮かな一つの世界の出現で、自分の眼に見えることは疑へず、 知識に従へば自分が住んでゐる家の廻りの草原だつたのだから、 もつと つて来て草の根元に置 遠くには、山海関に迫る山に万里 面妖なことが起つた。 いたら、そこは確かにもうアフリカ 一の長城の それ 塩き 大人の頭でも整 が でうね でゐ の西海岸 てそこ 0 7

その端から長い尾が突き出てゐる。頭から尾の先まで二尺位あるが、 といふ一種の甲殻類に一番似てゐて、鱟魚は埴輪の兜の形をした頭の次に胸当風られなかつた壮観を呈した。三葉虫がどんな虫かと言ふと、今でも瀬戸内海にゐ 越えた怪物で、その甲羅の所が日光を射返す有様は、恐竜が這い廻る先史時代 れて四、 ない三葉虫だつた。 ね て、 たのか、変つた形をした虫が水の底を泳ぎ廻つたり、浮き上つて来て宙返りを打 亀そこのけの動物が 雨 そして砂地だから綺麗な水が椰子の雛型の葉辺りまで来てゐる中に、どうい品が降り続いて、そこ一面が水浸しになり、天気がよくなつてからも方々に水 それがどう見ても古生代の海に住んでゐた、それまでは化石でしか付き合つたことが 五分のものだつたが、 或はその北支の得体が知れない虫だつたら、 勿論、二、 丸太の太さの尾で梶を取りながら水の底から浮んで来ることに 三寸の深さの水溜りにゐるのだから、これも大きさは尾を入 草が椰子の木になれば、五分の虫も古生代の三葉虫を遙かに 甲羅だけでも何畳敷 椰子の木の半分もあ こるるあのか 水溜 の世界で の胴 à つたりし 訳で りが 気が 見 ń 7 0

虫ではないだらうか。 具合になつてゐる二つの爪に似たものを、これも秤と少しも違はない風に上げたり下げたりが立つてゐるのに気が付いて、それが秤の桁に当る体の部分と、その両端に皿が吊つてある は更に色々な奇妙なものが附着してゐるらしい。 してゐた。さうして水を搔き混ぜて、流れ寄つた微生物を爪で取つてゐたのだらうと思ふ 藻そのものは、泳い 海水を入れて浮かせて見た時、暫くすると藻の細い枝に丁度、秤と同じ形をした生色々な奇妙なものが附着してゐるらしい。沼ではなくて海の藻を少し持つて来て、 でゐる人間に絡み付いて溺れさせる位のことし それが秤の桁に当る体の部分と、その両端に皿が吊つてある 秤と同じ形をした生物 か出来なく 7

を漁るのだから、 からだとも考へられて、沼はもつと無表情に空の下に横たはつてゐる。 つたブレイクの詩が身に染みる。併しそれが身に た海水の中でも、そのやうに 一粒の水の中にも天地があり、 て何も知らずに、 染みたりするのは、精神の緊張が足りな 主人の家の前で餓ゑ死にする犬のことを歌 或は知つても 何で

似て、日常との区別が付かなくなるのではないだらうか。 る藻が緑に光を滴らせて揺れてゐる中を、全身が光つて肋骨まで透けて見える鯨が通つて の影が砂の上に落ち、 るから、 の影が海の底の砂地に落ちて来て、人魚の王女の一人がその形に海の花で花壇を作る所 に違ひ この伝で行けば、目高は怪魚である。同じアンデルセンの人魚の話では、 それが目高の早さで、群をなしてのことならば、 併し枯枝を巨木に見立てる要領で目高を眺めるならば、これは全身が半透明で光 ない。 つて、 茶碗位の大きさの泡が時に茎から離れて水面に向つて昇つて行き、さうすると砂に半 鯨よりももつと素晴しい動物に変る。密林の蔦にも似た、 そして後はどうか。水で霞む遙か上の方まで、形からは藻と言ふ他ない植物 やはり片側が蔭になつてゐるのは、 夕焼け雲が真昼の空に乱舞してこの世のものではない眺めが得 余りにも普通の大木が朽ち掛けて 辺り一面に光が走つて、その光るも 茎が電信柱程の太さがあ 鯨が通ると、 るる られ つてる があ 0) 0

起させて、 水は透明で、それが層をなすに従つて視界を遮るのは、 それが我々を水に引き入れる作用をし、 更にそのことから水の下に拡つてゐる空のは、我々に眼が届く限り進みたい気を 我々に眼が届く限 い気を

煙になつて消えるのに、酔ふのは古代の人間である。 ふのは、沈んだまま、 リスタンとイソルデの話に出 りして、 の世界がそこに眠つてゐるのであり、教会の鐘の音が聞えて来ることもあるとい である。竜が夜光珠を守る竜宮でも、 のことを思はせる。 一つであり、セント・マ 幾重にも重なつた水の遙か底の方にこの王国の森や、 眠りに似た安穏な存在が続けられてゐるに違ひない。そこに注い 今でも伝奇的な感じが強 英国 そこにまだあると信じられてゐるので、天気が のコオン イクルの て来るリオネツスの王 ワル 1/2 山といふ小島 釣り気違ひがガイガア計で追ふ大魚でもな セント・マイクル のは先住民 にフランスのと同じ様子をした城が 国 」が沈 教会の塔が僅かに見えるといふで、天気がいい、波が静かな日 0) 0 んでゐること 山城 が見降し だ葡萄 になって 7 0 ゐる 一滴が ζ ふことだ 0 て、 底 0 人 と つ

世紀に恋愛と呼ばれてゐたも 物語を読んでゐ 寝室に入つて来て、ランセ 遠慮会釈もないものだつたかといふことを感じさせられる。グイネヴィ トリスタンとイソルデの悲劇 した女の生首を自分の首に括り付けて、ロオマまで懺悔をしに行かせられたりする。 ツトは気が違つて森 ると、何よりも先に、 の中を荒れ廻る。 ののは ロツトの情婦のエレナが裸のまま寝台から飛 が海の底で静まつたとい 確かにさうい 中世紀の恋愛が 或は、情婦を殺した騎士がその罰 ふ荒つぽ 如何に粗野 のは、 いものだつたのに違ひない。 42 で、 12 血なって び出し アがランセロ れ に、自分が切 であると てひ き、 U ツト 同 そ ラ

だけでもなか つたことを、 リスタンとイ シル デ 0 示 7

延び ただイソル 違つて飲ん ンはトリスタンで放浪し続けて、 が語る限り、 はい ただの情 て来て絡み合つたと、それだけのことしか書いてない。そしてそれが恋愛であることを ク王はイソルデを癩病患者の群に連れて行かせたり、焼き殺さうとしたりし、 の話を終りまで支配してゐるのは、イソル 着いてからマ や応なしに納得させられて、これに比べるとグイネヴィ デはトリスタンのことを思ひ、トリスタンはイソルデのことを思つて、 で以来、 事ではないかといふ気がする。 露台での別れも、 もうどうにもならないことになつて ルク王と飲む筈の イソルデも、 露台に立つて日が早く 秘薬を、 トリスタンも死ん バデが船 イソルデを迎 でアイ 暮れないのを嘆くイソルデもなくて、 るるのだといふ感じである。 へにやらされたトリスタンと間 ルランド アとラン でから、 からリオネツスに セロ 二人の墓から蔦が ツト の話 その為に 1 リスタ 7 来る ロリ

恋人同士、 そして中世紀には確 くまで、 たくても離れ 銀の鎖で手に手を変することであるに違ひない。併しプロヴァンスの貴矢室ま女の心よりも体の方が大事だつたからに違ひない。併しプロヴァンスの貴矢室ま女の心よりも体の方が大事だつたからに違ひない。それ以上の手段に出なか 銀の鎖で手と手を繋ぎ合せて宴会に出た。 恋愛から他の 5 n かにこの二種類のものが恋愛で通つてゐ ない 観念で置き換へられる凡てのものを取り去つた後に残る とい ふことだけなのである。 そし それに気が付いて、 て恋愛といふ たやうである。 のは、 女が さうい 恐らく 0 言 Š は 3 もの こと

7 したのだらう。 が出来るならば、 が含まれてゐることか。 のやうに華 8 ることがない人」 の気持で眺めたに違ひ 引きちぎらうとすれば、女の腕が一緒に付いて来る。それでも引きちぎる の鎖 自分の状態を苦労し といふ言葉には、 で自分達を繋いでゐ そしてそれ故に二人は地獄にゐるのである。 ない。ダンテがフランチェスカに言はせる、 て恋愛と考へることはないので、恋人達は 自分の宿命に対するどれだけのさういふ たプロヴァ ンス の恋人達は、何と優雅なこと 「私からもう決 を半

てその底の静寂に包まれてならば、 壮大な狂態は晴らしてくれていい筈である(それ故にタイモンは海辺に墓を選んだ)。 が直ぐに結び付 けば水の重みが大気よりも堅固にその辺一面にあつて、凡てをただ静寂に誘ふばかりである の木になつて墓に の音がまだ聞 リスタンとイソルデは、 なるからである。 てゐるだけでも、自分はただそこに立つてゐる自分だけになる。死人の妄執も、 つが 恋愛に付き纏 てゐるのが我々までをその中に取り込んで、 1/2 7 えて来ることがあるならば、二人の墓にも苔が生し続けて、蔦 被 海が荒れ狂つてゐれば、 恋愛詩に始終出て来たりしないのは、海に向つてゐると、海が空の下 はれて死んだ人間を埋める場所の条件を見事に満してゐる。 ひ被さ コオンワル州の湾の底にゐる。 つてゐるかも知れ パオロとフランチェスカも眠れる。 波は船の檣よりも高くなり、 ない、 微妙に人間的な感情など持つ余地が 海の表面は荒れてゐても、 し岸に立つて それ る るも は 恋愛と海 今は 0) ける音 腕の で行

ゐて、 く平原 リオネツスの王国も、そんな所にあるのだらう 言葉であるが、 過ぎて、 ひらしながら到着 音といふものの観念自体が三マイルも、 彼等にとつてはそれが唯一 我々を残して向うに泳ぎ去り、 0 かな砂で蔽はれ、 なことは 要するに、又しても砂地であつて、 た平た た墓場どころでは アンデ い魚 ル 余り細 0 セ の新聞なのである、 ンの 兄! 尾 かな砂なので時々遠方から自由の旗と言つた恰好 の煽 鶯が ない。どこまで行つて それを砂の外に僅かに現れてゐる大きな眼が 支那な りを食つて砂煙が立ち、 ママ か。 の皇帝の 水の堆積の下にあるものが砂の堆 イルも上の水面に忘れて来たものに ……といふのは、他所から借りて も沈黙であつて、 で死神に その魚は我 つた、 果てし この 々 の前を通り 世 眺めて でひら K 来た であ 쑿

どことも系統が違つた文化の遺蹟 てゐる反世界の存在が確認されて、この二つの世界が初めは一つだつたのが 熔岩が一直線 そこには、それ以上のものがあるかも知 ス大陸に就て言つたことも、 行くと、 引き離されたのだと考へられるに至つたことは、 にな 探検家は色々な奇妙な事実にぶつかるら ログネの説を裏付けるものであり、それならば彼が大西洋に没したアトラン うて 海に向ひ 本当でい が発見された島に火山の跡があつて、 海底に没して沖まで続 れな い筈である。 61 我々 プラト しい が住ん ただそれだけでは いてゐるのが海岸 0 例へば、 でゐる世界と凡 ンの八本の手足と 南北 噴火 なく たから見 ~或る時 ア 「から流 て、 7 メリカ大陸の 両性の える。 代に 逆に 西イ 特徴 猛烈 シド な

とはシュリイマン以来珍しくなくなつたが、北アフリカの海岸では、晴れた日には海中に没 られずにすむかどうかは解らない。砂も、泥も、 我々は見ることになる。沙漠よりも、泥沼と言つた方が事実に近いだらうか。プラト れたのも、海中からである。 いてあつたりした光景を、プラトンは確信を持つて語つてゐるやうに受け取れる。 トランティスの描写は華麗であつて、大理石の神殿に黄金で出来た四頭立ての馬車の像が置 したギリシヤの植民地都市の廃墟が海の底に見える。そしてミロのヴィイナスが引き上げら が梢を風 さうすると、 凡てのものを隠してゐるといふことだから、深くなればなる程、その沙漠が続 が吹き渡る有様はもう見られないが、この大陸とその文化のことが永遠に人間に知 それが取りのけられる日が来たらどうだらう。地中の都市の廃墟を発掘するこ 砂は何を埋めてゐるか。 海の底は微生物の死骸が 石材や器物を保存するのに絶好のも 際限なく降り積 つ そこの木 て、 くのを のであ

そのモデルも海から現れた。 併しそれはどうでもいいとして、 水圧だとか、 呼吸困難とか

我々は恐怖よりも、 カルミデスとか落書きがしてあつたら、それはもう懐しさですむものではない。 に住んだ人々がギリシャ語を話したことが解り、壁に、 行く途中に石段も崩れずに残つてゐたら、それが明かに人間 埋まつて、 に横たはつてゐるのを眺めたら、 にゐた都市は、皆が鎧戸を締めて昼寝をしてゐるので何一つ動かないイタリイの午後の こで想像したい。ポムペイに行つたものは感じた筈であるが、死んで長い間、日の目を見ず 場はまだはつきり円形を描き 一に妙にひつそりした空気を漂はせてゐるものである。それに包まれて、 トランテ もまだ色褪せてゐないかも知れない。その白い大理石の廃墟が神殿を中心に並び、 外気から更に四マイルの深さの海水で距てられてゐれば、大理石はまだ純白で、 ィスを守る凡 懐しさを感じるのではないだらうか。そしてもしその都市を築き、 ての条件が克服された時に、大西洋の底の随所に見られる光景をこ 街の次に街が続くのが郊外に向つて延び、丘の上の祠まで どんなだらうか。 砂か、 美しいアルキビアデスとか、 泥か、 の世界だつたものであるだけに、 微生物の死骸の綿か 一都市全体が砂原 の下に 42

馬はもつと後になつて中央アジアから入つて来た。 ドンの絵も現に残つてゐて、そしてポセイドンはオリュムポスの山上に集つた神々の間で の神で、牛とともにエジプトから海を渡つて来たから、海の神でもあり、牛に乗つたポセ 併しプラトンが言つた馬の像は、実際は牛だつたかも知れないのである。 から近東アジアに掛けて最初に人間に使用された家畜は馬ではなくて牛で、 ポセイドンも、初めは馬の神では 石田英一郎 なくて

は、常に外来神として扱はれた。 領分である海に追ひ返したのだとも解釈出来る。併し神話によれば、ゼウスはポセイドンと はその土地が海に沈むことを予感してのことだつたのだらうか。 も祀られてゐて、黄金で出来た像が置い の或る一部を我々に覗かせてくれれば 仲直りして、ポセイドンをもと通りの地位に戻してやつたことになつてゐる。神話は、 反逆したのもポセイドンで、 それならばアトランティス大陸の陥没は、ゼウスが弟神をその そのポ いいのである。 セイドンが、プラト てあつたのは、確かポセイドンの神殿だつた。 ンによれば、 他の神々を率ゐてゼウスに アトランティ 何がスれで

塊が大河の真中から突き出たりしてるる所がラマニランに、海中の大陸を襲つたものと考へられてゐる。南アメリカには、 ば日本列島が次第に北アメリカに近づいて行くといふ風に徐々にではなしに、急にこの今は 大西洋上の、 西洋と南アメリカは我々の想像を絶する天災によつて出来たものらしい。アンデス山脈 ルテツク文化の神殿の柱が倒れてゐるのも有名な話であり、現状から判断した限り 南アメリカ大陸 それから先日、英国が念の為に占領して英国領であることを宣言したロツコオルといふ 海底に聳える高山 大河の真中から突き出たりしてゐる所が方々にあつて、アンデス山脈の湖水の中にト はれてゐて、 島とは呼べない程の岩も、 の地質の調査などから、 藤壺がその根元の岩肌にしがみ付き、魚が寄つて来るのは海 の頂上で、その麓もアトランティスになる訳である。海面 もアトランティスになる訳である。海面の近くは海のれも、この天災の産物かも知れない。この岩は勿い アトランティスが海中に没したこの変動 最下層にある筈の玄武岩 の中 では、 自体 大 0)

光線が届かなくなり、 馴れてゐるから、 の岩と変りはない。 さういふものを想像することで大体の見当は付く。 完全な暗黒に包まれた海底の、 もう少し下まで行くとどんな生物がゐるの ロツコ オルの麓がアトランテ 付く。そして愈々水面のか、我々は深海魚の写真 イスス

る町に差すのである。 寄せられ 並んでゐたといふことであるから、そういふ市街も、大体の原形を留めて石で出来てゐて、それが中央の神殿や宮殿がある広場に向ふ幾つかの るものと同様に、何本かの柱が されて来たならば、 原を照す金色の夕日とは違つた光が、 でい 。そこで作業する以上、その辺がもとの暗黒のままで置かれる訳もなくて、 て集つて来た怪魚の群も、都市そのものに恐れをなして泳ぎ去りはしないだらうか。 い程の照明が行はれるならば、その異様な光を受けて都市は純白に輝き、 都市 が発掘された所を勝手に考 地震が来た時に崩れ 或るポルトガル人が南米で偶然に発見した都市の廃墟では、 蛇腹と台輪を支へたままなのがその姿を現すとい 欲望を満す船が集つて来る港とは別種の美しさが た神殿も、まだギリシヤや南部イタリイに残つてゐ へて見たい。砂か、 泥 か、 微生物の死骸の綿 の道路に面して何千と て残つてゐるに違ひ 人工太陽と ふこともあ 民家も凡 光に引き で保護

し沼は、 その大部分が泥である。 海に比べれば陸も同じであつて、少しばかりの砂地が岸から見えても、 章の根元は確かに泥で、それが向う岸まで続い てゐると この沼

こるるが 道 ひがが ント・マ 代にも幾 が敷 ま が あつた。 0 7 12 他所で イクル らも てあることに くことが カダム なら での 英国に始めて あつた。 式 0 ないの Щ にこちこちに舗装 Iに城が ばか 例へば、 なつてゐた日 で は 行つて、 建 り気にしてゐない 都市と段 つてゐるコオンワル つて来ることが だから、 々縁が 徒歩旅行でどんな 本の町や てあ 町 中 つ て、 田舎か ある。日 くなつて行くもので、 で犬を飼 州 変に勝手が違ふ気がしたこ の泥 自分の生活に即し 0 湾を眺 道 に遠くま 本の道路は世界一に悪 つてゐると、 には、 め のた時であ で出掛け 石を敷 や火鉢と一 て辺りを眺 ても、 冷き詰 いこ ٤ つに があ めた 8 7 るならば、 Ł 行 う な つ うた 市 な 7 っ

感じられ、 た解説を読 7 が らない n n 11 の海底に眠 しさは、 P てゐる、 5 窓に蝙蝠 なら、 た時の日 その先の のではな み といい へばパ フランスの つてゐる都市などどう受け取 新聞 傘が 本の町に ふ風なことで表される。 大通りに薬酒とスウプの V2 陳列 美し リでは、 の特種記事に似た言葉を並べる他なくなるだらうと思ふ しさがあ 象徴 も、 してある店の 派 道 時代がたつて真黒になつた石 つった。 0 が 詩論 ぬかるみなので 泥道 に従 向うの電 素の に水溶が つたらい 東京とパ 広告 信 品 柱 ŋ が広 が出 リ に的 の違ひ は自転 か解らなくて、 があつた。 確 告塔に貼つて 来てゐれば、曇り にに盛 の建物に挟 で眼 が立て り込める、 の色を変へるの 風情とい ある まれ その道の 掛 け た横丁 ふ言 0 Á 日 てある。 が 本 0 明り 人で B なら、 が が 一家が がそ 谷間 さう なけ ŋ 雨 0

1) 極く普 な 間 0 生活を楽 んし でる たの であ

0)

で鳥のと南 よく本などに書 から生物 7 7 ある。 m スだと が我 6 八間が泥 白 なく 々な思ひ 液 が陸に這 あ 7 々 生物 蜥蜴げそれ にも塩分 ある 7 て、 の話を或る生物学者にして、 から生れたも をし 恐竜 に似た頸 やうである。 つて懐 よりも更 エ いてある。アトランテ び上 が残 ムプソンと はもつと生命の本質に関す 0 卵 しいも って来たといふことになりさうな気がする。 つてゐるのださうである。 の化石だとか に小さな島があつて、 のだ 脚と のな いふ英国 0 か 尾が ~らか 亀 0 は は と鰐と イスの一 一の詩 Va B ふのは 泥 農業の 知 珍し 同じ 0 人によれば、生物は 中 な そこの、 大きっと 部だ る研究を進めてゐるのだと、 いことではな からどん の三尺ばかりの 正確には、海から泥が出来て 題は別とすれば、 の分類学者に任 つたかも知れな からか、 な化 始終泡が立 け いだらうかと言 B 亀かめ 凡て海から生れ 泥からか、 が発 0 陸は、 が 中 つてゐるあをみどろの池 い火山 出 て置け 見 され 7 来 どつ [の跡 初 3 うた 8 たことが から か 42 が は た証拠 ちと言ふ ら、 である島 その 42 沼だ 2 6 な と シ 記 泥 つ K 記録さ イラ な 0) たと 1/2 に 0) 0 中

戻さうとするも 々が 又 我々 の生れ 0 かぎ 64 確 B を恥ぢ のであ かにあるやうで、 てゐるのだらうか。 3 ば か うりで な のたうち廻るとい 3 て、 泥沼には、 何 か さう S 1/2 のは 我々を過去の我々 à 気 陸に、 味悪さも 或は泥沼 伴 à の汚行 B に 0 で 初 に あ 引 3 考 0

よち うである。 なれば足の一種で、長い頸を沼 それでその幾トンあるか解らな してゐて、そして頸と尾が異常に発達 した生物にとつては普通 スとか この光景も、 いる 何十メエトルも 想像して見るのに値する。 0 体の動 から突き出し い体重に堪へる程強い足が必要でなかつたらしい。 の長さがある昔の動物が、その大きな体の割に足がよち か し方だつたらしい。ディプロドクスとか ては、 てゐたのは、泥沼の泥で体を半分支へてゐて、 岸に生えてゐる植物を食べてゐたのださ ギガ 尾もさう

何倍もあるギガントサウルスが古生代の沼で、広々とした背中を泥の中から現してゆ をしてゐたのに違ひないことを忘れる為でもあることを、 が南極洋で跳ねるのを見たものは、それが壮観であると言つてゐる。そしてそれならば鯱 又それ故に恐しいものに思ふのは、その頃の環境も不恰好で、日光ももつと荒 水の中から出て来る所を見たことがある人は、 林に囲まれた沼のあちらこちらに、鯨そこのけ き廻る有様は、 から、 0 筈である。 その頃は、 ディプロドクスの絵などを見ると、 これが日光を浴びて鈍く光つてゐたものと思はなければならない。 沼の蒸気が霞んで照り付ける太陽の熱を加減 河馬とディプロドクスでは形が違ふが、我々が昔の生物を如何にも その環境のことを思ふならば、 かうい この古生代の沼がどんなだつたか ふ動物は艶々した滑かな皮膚の動物が頭と背中だけを出し のどかな感じさへするものではなかつたの 勘定に入れなければならない。 した滑かな皮膚 蘇な 0 お け 動物園で 0 をしてゐたらし てゐたに違 つぼ やうな 不恰好な、祭しが付 ない。続い差し方 つくり 植 ひ 物 0

遅き日に江山 の風 け に花草は香んば て燕子の の麗 7 たまうの しく U る

明日 風に決めてしまふ いつて がな のことに頭を悩まさなかつたことだけは確かである。 も似通ひ、これは海底に紫色の怪物が眠つてゐるのに呼応する。 ゐる所ものどかなものなので、その体がとてつもなく大きいだけに山が昼寝をし いやうでもあるが、 所から、詩の硬化が生じる。 二の吉 、 燕だからのどかで、 川幸次郎博士の書き方 博士の書き方に従った杜甫の詩で、ディ 泥沼の靄の中でディ プテロダクティルではさうでは プロドクスが体を伸ばし デ プロ イ な ドクスとは 口 F" とい ・クス 7

ゼウ 後は二人を神殿の前に生えてゐる二本の木に変へた位だから、 0 スもその幸福を羨んで二人の為に神殿を建ててやり、二人が同時に死ぬことを許 てそれ フ で又思ひ出すのだが、誰だかが未来の人類の為にとい レモンとバウキスといふ、 幸福な生涯の終りに近づいた老夫婦が 神々の食卓にも、 à ので埋め立 住ん 女神 てに掛 :の床に でゐた。 った

花が アク 悲みに堪へず、神々に願つて姿を蛇に変がその為に起つた程のことをしながら、 の復讐も忘れて、幸福に一生を終つたといふのである。 とを考へて見ても 、咲くその辺の丘を這ひ廻り、 タイオンの母、 沼ではない イ プロ クスと、 が、 神々に願つて姿を蛇に変へられ 67 一人はゼウスによつてデ この二人はそれまでは幸福とは言 フィ ここから遠いアドリア海 レモンとバ 湾に寄せる波を眺めて、 ウキ 四人とも非業の最期を遂げて、カドモ えと、 イオニュソスの母になり、 てそのアドリア海の湾に住み付いた。 そし の波 「へなか が温かな湾に砕ける所、 て 序でに、 ヴィ つった。 イナ カドモ スの怒りも 四人の娘のうち、 スとハル 一人は金羊毛の伝説 といふ スとその妻は アル モニアのこ ナミス のだか 一人は して

巨大な蛇になつて、 12 だらうか クスにカドモス夫婦、 の二匹の蛇は、 りだと思ふものもゐるかも 我々の一生も、 大蛇だつたと思ひ 沼に降りて行つて水を飲むのも楽しい。 そして我々である。 振り返つて見れば、 知れ たい。蛇は木のやうに、 いが、 沼にはそれだけの広さがある。 その間に さういやなことばかりではない も年輪を加 フィレモンとバウキス、 -輪を加 ^ て老境に向つて行く。 ^ て成長するのでは ディ いこ

る。 に来た帰りだとすれば、 その 小説にならなかつたのが残念である。 から 服 の前 にあつて、 今までのことは凡て昼の眠さって、さう遠くない所を利根川 て昼の眠さ凌ぎの白昼夢に過ぎなかつたことにな が流れ、 これは昼飯に鰻 の蒲焼を食べ

恐竜展で

清岡卓行

異様に突き出たものがある。 斜め下前方へ一メートルあまり なるほど と幼い子が指で差した。 あれは 股のあいだから 恐竜のオチンチン?

中国の四川省の合川の上野公園にある国立科学博物館へ上野公園にある国立科学博物館へ 日本の東京の マメンチサウル ス・ホチュアネンシス。

巨大な化石の全骨格。 はるばるやってきた 約一億四千万年もかけて 楼古山にあるジュラ紀の地層から 恐るべき珍客

と もし オチンチンがあったとしたら 恥骨っていう骨でね 父は仕入れ あの先っぽの下のへんじゃないかな。 ははははは たばかりの知識を用いる あのとんがりはね

生時の推定体重約四十五トン 全長二十二メー とても小さな頭を載せた頸が 水陸両生 竜盤目・竜脚類のマメンチサウルスは アジア最大の恐竜といわれる 草食 トル 四脚歩行で この すごく長く

父はふと

259

尾は根太く先細りで 四肢は柱のように逞ましく 胴体は気のように 大きくふくらみ やはり長い

ゴルドン ーツシー ッドキ ング ケラトサウルス アボラス ゴモラ バニラ

そんな連中の姿も 恐竜のような 空想の怪獣たち。 テレビ映画に登場の これらは ボーンフリー。 マメンチサウルスそのものに 幼い子がか 47 くらか重なるのか つて熱中した

また 幼い子はにこにこしている なかなか見あきないのか こわいけどね おもしろいよ。

たとえば 少年の日の薪割まで 呼び戻すの連想すべきほかの生物の指がなく 爪の鋭い趾骨の大きさと形に 父のほうが茫然としてい すぐ近くに見える後脚の 呼び戻すのだ。 る。

また 連想すべきどんな悲哀の光もなく 夢のなかの望楼まで 灰色がすこしかぶさった茶色に 後脚 0 優美な曲線の脛 呼び戻すのだ。 骨 0

湖や 底の知れない鏡をかんじる マメンチサウル Jil 人間とは のほとりで ふしぎなものだ! スの亡霊に 集団でくらし

肉食恐竜が襲ってくると 亜熱帯の植物で 一生成長をつづけ

図体に似合わず 優しく 頭だけ出していたというマメンチサウルスは 深い水中にのがれ

子煩悩であったともいうのだが

0

更新世の大茘人の頭骨にいたるまで デボン紀の魚や植物から 恐竜かそれに近いものにばかり 第一室のマメンチサウルスのあとも 入場者の混雑のなかで 父と子は 目を奪われた。

いるかに似た恐竜というが 三畳紀のヒマラヤサウルスは 展覧会に並べられている。 中国でとれた化石が三百七十二点

空を飛ぶ翼竜で 湖の魚が餌食というが 白亜紀のズンガリプテルスは その立姿の全骨格は 草食二脚歩行で 頭上に鷄冠のような突起があり 白亜紀のチンタオサウルスは 背に対の棘板の ジュラ紀のトウジャンゴサウルスは 頭骨だけだがライオンのように怖ろしい。 大きな頭と鋭い歯が密生の 肉食二脚歩行で ジュラ紀のユンチュアノサウルスは 一見恐そうだが 頭・背骨のかけらだけで 大きな沙漠をも越えるスピードだ。 じつは防禦的なのだろう。 見事な全骨格で出ており 話す人間に少し似ている。 姿が浮かばない

大腿骨の化石に そこに置かれた 会場からの出口で 見物のひとびとは 別のマメンチサウルスの

261

恐竜の骨にふれたことを証明します。――あなたが一億四千万年前のこんな文字のあるカードをもらった

会場から公園に出ると 真夏の快晴 正午すこし前。 真夏の快晴 正午すこし前。 緑の空気が熱っぽく 爽やかな その沈黙の深さのなかで 父と子は しばらく 欠と子は しばらく 生命をもてあましていたようだ。 生命をもてあましていたようだ。 生命をもてあましていたようだ。

たがいに声を消していた。その相談が天から降ってくるまで

どんな店に行くか

その父と子はサイクリング帰りだった。

父と子の住居はあった。 り入れて来たところだった。 から、国道の排気ガスと土ぼこりの中を潜り抜け、ようやく自宅まで約一キロの住宅地へ乗 秋も深まったある日曜日、二人は川沿いのサイクリング・コースへ出かけて行った。それ この、 いくらか古い住宅地を抜け、小さな丘の向う、新開地に、

七時をわずかにまわった時刻だが、 晩秋の陽はつるべ落しで、 あたりに闇がひろが つ 7

「どうしたの? 息子の自転車が近づいて来る。 街灯の黄色い光の下、 お父さん」 父親は自転車を停め、 大きく深呼吸

「膝がもうガタガタだ。 ちょっと一服させてくれよ」

「ぼくは平気だよ」

「そりゃそうだろうさ」

る感じなんだが、おれの齢だと、 父親は言い、煙草に点火しながら、苦笑を浮かべる。 寿命縮めるために走ってるみたいなのだからな」 「きみは、 躰をきたえるため走って

ヘッ、もうそんな齢ですかねえ」

「そんな齢さ」

ふーッと煙を父親は吐く。

ずいぶん背が高くなったな。 息子は停めた自転車の上で、サドルにまたがったまま、 両脚交互にぶらぶらさせてい

う幾らもちがいはしない。 父親は思う。 サドルを少し上げてもよさそうだ。 まだ中学一年生だが、 背丈はおれと、

どこか、むっとする動物に近い体臭ー ーそんな感じさえする圧迫感を、 - いや実際に体臭をまきちらしているとい もう、おれに与えやがる存在だ。 うわけで

結婚後数年間の狭い市街地のアパート暮し。 あの頃、 こいつは、 よく泣きわめく子供だっ

それから、 公団アパ ートでの永い生活

265

トリケラトプス

ばらないが。 現在の住いを曲りなりにも手に入れるため、 おれは働き続け、 これからも働き続けなけれ

あ、 どっかでカレーライス作ってる」

息子がいきなり言った。

「腹ぺこだよ、ぼく。 そろそろスター トしようよ。 もう、 すぐじゃない

「そうだな」

父親は苦笑した。

ぶし、ハンドルに手をかけた。 ときに生意気なことを口走っても、 まだ、 やはりこいつは子供だ。 父親は煙草を靴先でつ

「じゃ、行くか」

うん

主だった。 とした光、 まさに、 五、六メー 父と子がペダルに片脚をかけて、前方に目を向け弾みをつけようとした瞬間だった。 ペダルにかけた脚を降し、ハンドルを固く握りしめながら、 筋肉のうごめき、 ブルドーザーか、 しかもその影は、 トル先の十字路を、大地をゆるがせ、 それらをはっきり父子の目に焼きつけて、 いや、むしろ十トンダンプかと言った量感、 一瞬の間ではあるが、 あきらかに動物質のぶ厚い皮膚、 巨大な影がよぎって行った。 父と子は前方を凝視してい 走り去ったのだ。 そして力感の持ち ぬめっ

低い地鳴りのように、それは轟いていた。 街灯の光の中、もうもうたる砂塵が舞っていて、地響きはしだいに遠去かって行く。

やがて、ふっと、その轟きは消えた。まるで、録音テープの音響が、

いきなりカットされ

夕餉のにおい、けたたましいTVコマーシャル、それらが、あたりに満ちはじめていた。 たような、いくぶん不自然な感じの消滅だったが、 とにかく、轟きは消え、赤ん坊の泣き声、

父親が目顔でたずね、息子はうなずいた。 -行ってみるか。

父と子は十字路で自転車を停めた。

る、 数本の街灯が、 ひび割れたアスファルト道路が、 ぼんやり光を投げかけていて、ガス、水道工事の痕跡がいたるところにあ 静まりかえって延びていた。

「どこへ行ったんだろ」

息子が言った。

ああ

父親がうなずく。

二人とも、 やがて息子が言った。 しばらく黙っていた。

「ねえ、 何だと思う?

267

269

「わからないな」

いなんだ。錯覚かも知れないけど、高さは、この塀の二倍はあったみたいで。 「犀かとも思ったんだ。牛にしては大きすぎるでしょ。 三メートルより、 もっと高いし……」 なんか七、八メートルはあったみた そうだとする

「ああ」

しかし、おまえ、あいつ頭に二本、 父親はうなずいた。「犀が動物園から逃げたケースだって、 角を持ってたのを見なかったかい?」 そりゃないことはないだろう。

「角? うん、そういえばあったみたい」

「だとすると犀じゃないな」

「そうだね。最近あまり見かけないが、 「じゃあ、やっぱり牛かな?」 どっかの小牧場あたりから、

「うん」 んじゃないかね」 「ま、とにかく、あの勢いじゃ、 出会いがしらに車かなんかにぶつかると、 雄牛が逃げ出して来た 大事故になるの

は間違いなしだな」

父と子は、あらためて道路の向うを見た。

は何ひとつ伝わって来ない。 耳をすましてみた。だが、 やはり、 夕暮の町の平穏きわまるさんざめき以外、 特別の気配

まるで何ごともなかったかのようだ。

は小休止した。 やがて父と子は黙々とペダルを踏み、家路を急いだ。道は次第に登りになり、 父親は頭を振った。 -―おれひとりが見たのだとすれば、幻覚としか思えなかったろう。 何度か二人

地響きも土埃りさえも、 背後に町がひろがっていて、父と子は振り返ってみたが、異変の気配も、 まったく気配はどこにもなかった。 それ らしい影も、

「ねえ、尻尾は見なかった?」

ぼつんと息子が言った。

「さあ、そいつはどうかな?」

「なかったかなあ。すごく太い尻尾……」 やがて父と子は、 坂を登り切り、わずかに残った雑木林の間を抜ける。

ぞれ灯を点しているが、そこここに見える水銀灯の鋭い光のせいだろうか、 いきなり眼下に、自宅のある新開地がひろがる。新しい町の新しい家々、 てみえるのだった。 ずんぐりうずく それらは、

ほんとに、そんなに大きいの?」

食事の箸を停めて、母親は父と子を見た。

「そうさ。犀かと思ったくらいなんだ」

「それじゃ大変な出来事じゃない。町じゅう大騒ぎになってたでしょ」

「ところが、まるで騒ぎにはならない。走って行く物音だって、ふっと消えちまったしな」

「うん、嘘みたいに消えちまった」

「でも、そんなことってある?あ、そうか。それで二人とも、 めずらしく、 さつきニュ

ス見てたわけね。何かニュースで言ってなかった?」

「ないんだな、 それが。 しかし、まだニュースになるには、 早すぎるかも知れない

きっと、 ぜったいニュースになるよ。だって、七、八メートルは確実にあったし、 高さは

三メートルを越えていたし……」

ほんとに本当?かついでるんじゃない?」 いくら何でもオーバーよ。だって、そんな大きな牛、 見たことも聞いたこともない わ。

かついでなんかいないよ。とにかく見たことは確かなんだ。 とにかく、 あれが牛だとすると、ステーキ五百人分は優に取れるね」 お父さん

やがて父親も、 母親は、けたたましく笑い、父と子は奇妙にあいまいな表情のまま顔を見合わせた。 短く乾いた笑声をあげる。 やっぱり、 かついでるんじゃない」

はなくて、ぐっと大型の動物だったということだけさ。な? られちまったのかも知れない。とにかく、はっきりしてることは、犬とか豚の類い から、こっちの驚きも大きくてね。そのせいで、街灯の影も加わり、ぐっと大きく錯覚させ 「ま、どうだっていい話だがね。いきなり地響きがして、あっという間に駆け抜けて行 そうだよな」 の動物で った

「うん」

幾分不満そうに息子はうなずき、 黙々と箸を動かしはじめる。

ゆらめかしながら、吠えるような、 テレビは歌謡番組を流していた。 いきむような奇妙な声で唄っている。 薄物を身にまとった混血女性歌手が、

けたたましい声で母親が笑った。

「どうしたんだ?」

「だって、 この歌手、 67 ま鼻を鳴らしたわ」

271

わず鼻を鳴らすくせがあるって。あたし、そんなばかなって笑ったけど、ほんとに、 「なによ。きのう、あなた言ってたばかりじゃない。この歌手、 いきんで唄ってるうち、思

273

母親は、ふたたび笑い転げる。 父と子は苦笑し、 首をすくめた。

日、夜半近くまで父親は酒を飲んでいた。

を突っこみ、 すすり続けていた。つけ放したままのテレビ画面が、最後のニュースを始めたが、 妻と息子は眠りについたが、彼だけは寝つかれないまま起き出して来て、居間の炬燵に脚 片肘つき斜めに躰を起した姿勢で、少しずつ注いだウイスキーを、ゆっくりと

それらしい報道は何ひとつない。 ーやはり何かの見まちがいか。

疲労しきった筋肉のすみずみまで、 いつしか、父親はまどろんでいた。 しみとおったアルコ iv が、 ò たり躰を鞣して行く。

しさを増す。冗談じゃないぜ。いくらなんでも、あの歌手はこんな鼻の鳴らし方をしやしな 誰かが鼻を鳴らしている。やがて、それは、さらに荒く、 ひどい夢を見ているものだな。半醒半眠のまま、そんなことを考えていた。 まるでふいごか何か のように

低い、 しかも巨大な洞穴の中でのそれのような、 野太いうなり声が加わって来た。

いや、 ふいに目をひらく。 歌手の声なんかじゃ ない。

うなり声。

いごのような物音。

それらは続いている。

ている。スイッチを切った。 ブラウン管を見た。すでに放映は終っていて、 チカチカする砂嵐のような光、

物音は戸外だった。

カーテンの隙間から戸外を見た。

猫の額ほどの庭に、まばらな雑木の植木があり、 その向うの生垣の上に、 巨大な黒

そして夜目にも鋭く光る目があった。

犀にも似ていた。

似ているものはないようだった。 たが、頭と胴との間にある、めくれあがった兜状のひだは、知っている限りのどの動物にも り、どちらかと言えば野牛に似ていた。長大な二本の角が、 その口から、 だが、鼻の先の角は、 まるで蒸気機関車のように激しく白い息を吐いていた。頭部は躰の三分の一あ 犀よりさらに鋭角的だったし、その下に猛禽の嘴に似た口があ 槍の穂先のように突き出してい n

275

ドアのひらく物音がした。

振り返ると、息子が立っていた。パジャ マの上からズボンをはき、 セーター

ながら、真剣な目で父親を見ていた。

「いるの?」

声をひそめて息子が言った。

「ああ」

父親は顎をしゃくって、戸外を示す。

そして尻、その尻の頂点から垂れているずっしり太い大とかげに似た尾、 と横を向いた。進みはじめる。まるで夜戦に向う重戦車と言った感じに。 巨大な動物は、角の先端で、生垣を二、三回、引っかくようにした。それから、ゆっくり 暗褐色にみえる背 それらが、ゆっく

「牛でも犀でもないよ」

りと視界をよぎる。ぶ厚い皮膚の下の筋肉のうごめき。

息子が喉にからんだ声で言った。

「ああ。どうやら恐竜だ。そうとしか思えない」

「あの恐竜なら、ぼく本で見たことがある。 有名な恐竜なんだ。 アロサウルスでもないし、

スティラコサウルスでもないし……」

「アロサウルスというのは確か肉食だったな? ティラノサウルスなんかとおんなじで、 す

歯をもっ てい る。 いまのやつは嘴はすごく尖っていたが、 歯はたいしてなかったみたい

たし

「嘴みたいな口だったの?」

「そうだ」

の二本と、 「トリケラトプスだ! そうでしょ、お父さん! 合計三本、 角があるでしょ」 三角竜ともいうんだ。 鼻の先の一本と額

「そうか。そう言えばトリケラトプスだ」

ったトリケラトプス。自衛のための、最も強力な武器を保持していた、 ウルスが横行する世界にあって、生存競争のため、激烈な闘いをくり返さなければならなか 約七千万年以前、中世代白亜紀後期、史上最も狂暴だったと推定される肉食獣ティラノサ ゆっくりと目前の路上を歩いていた。 その草食恐竜が、

「出てみるか」

「うん」

った。だが、トリケラトプスの姿勢から見て、前脚を曲げ、 って、ゆっくりとうごめき進んでいた。ぐいと張った兜状のひだで頭部の様子はわからなか 父と子は玄関のドアをすり抜け、戸外に出た。寒気が満ちていたが、風はなかった。 十メートルほど向うを、トリケラトプスの小山のような尻が、電信柱ほどの尻尾をひきず 頭を下げて、あたりの気配に恒

重に身がまえ進んでいる姿は、だいたい想像できるのだった。

276

やがて、トリケラトプスは道路の突き当りに着いた。 場があった。 前方は大谷石の塀、

ー引き返して来るぞ。

ちすくんだ。 父と子はそう思い、自宅の門柱のあいだに身を引こうとしたが、 瞬間、 彼らは声もなく立

つけ根から末端まで、じりじりじりと消えて行った。 トリケラトプスは立ち停らなかった。大谷石の塀に頭をつけ、 首のひだが消え、 前脚とその上の背の部分が消え、 胴が消え、尻と後脚が消え、 なめらかに沈み込んで行

つ母親は言っていたが、彼らは抗弁しなかった。 疲れ切った顔で、 朝になって、会社へ向う父親と学校へ出かける息子は、二人同時に家を出た。 食も進まぬ父と子に、無理なサイクリングなんかするからよと、

ふさがった。 父と子は目くばせをし合い、突き当りの大谷石の塀まで歩いて行く。 塀はずっ

触れてみたが、変化はなかった。

塀の向う、 モルタル塗りの住居の壁、 窓ガラス、 それらのどれにも破壊された部分は何ひ

息子が言った。

「次元断層って話、読んだことあるけど……」

「ああ。あれは、あくまでも仮説だ」

「仮説って?」

「実際には証明できないことを、仮にこうじゃないかと考えてみることさ」

「だったら、次元断層というもの、実際あるわけじゃないの」

ちの世界のね。しかし、 れば、この塀の平面あたりが断層だろうな。七千万年前、トリケラトプスの世界と、 「だから、あると考えてみただけさ。あるかも知れないし、ないかも知れない。あると考え ほかに、どんな考え方だって許されるんだ」

「たとえば?」

見ることが出来るし、 同時に存在しているんだ。だから、 たまたま生じた断層から、 「たとえば、 おれたちの世界とトリケラトプスの世界と、同時に存在してると考えても むこうからも見ることができる。その程度の微妙なずれさ」 出たり入ったりするのじゃなくて、 なにかのぐあいで、おれたちはむこうの世界を透かして わずかなずれがあるだけで、

277 「ふうん?」

だって、 も一、二カ月前からこんなぐあいだった。そんなふうに思えて来たからだ。この家の人びと 家の中にこもってるのに気がついたからさ。 「おれが、そう思ったのは、今朝方、なにか、むっとする、なま暖いような動物のに きっと、 そうにちがいないんだ」 しかも、 これは、 はじめてじゃ ない。 少なくと いが

「トリケラトプスが入って行ったから?」

「そうさ」

「見ることもできる? ぼくたちみたいに」

まう」 to, のさばって来て、気のせいだとか、 う。もし、見たことを一度、二度、 「ああ。……しかし、人間の頭ってものは、 たいてい、自動的にシャットアウトして、見もしないし、感じもしないことにし 一種の防衛本能でね。だから、 妙なことを考えたもんだな? 再認識することになっても、こんどは常識と 何かのぐあいでふっと見えたり、感じたりしたことがら あり得べからざるものは否定しようとするか とか苦笑いし て終ってし いうやつが てしま

「終らなければ?」

「まわりが受け入れてくれないさ。 つまり社会生活ができなくなる」

「病院に入れられる場合もあるね」

そうさ

息子は軽く首を振り、短く笑った。

「どうしたんだ?」

しょ。話したら、どんな目に会うかと思ってさ」 「ううん。ちょっとお母さんのこと考えたからさ。 ゆうべ、 ここで見たこと話さなか

しはは

またま同じ物を見た後でない限りはね」 父親も軽く笑い声をあげ た。「ま、 とに かく、 ひどい目に会うことは確実さ。 彼女が、 た

「友だちにも黙ってなきゃなんないな」

「それは当然さ。 じゃ、とにかく行くか。 帰ってからまた、 ゆっくり話そう

「うん」

父と子は歩きはじめた。

ときおり、何ごとか話し合い、 楽しそうに笑声をあげ なが ò

近隣の人びとに出会うたび、

「おはようございます」

「おはようございます」

弾んだ声のあいさつをまき散らしながら。

279

から父と子は、 ばしば恐竜を見た。

奇妙な角を生やした車がいびきをかいて眠っているようなユーモラスな風景、 息子は出会ってみたいと思っているようだったが、おそらくこの一帯はトリケラトプ ぎって行くのを見たこともあったが、地上の恐竜は、ほとんどトリケラト って泣いている幼児の頭上を、 も適した生息地だろう。通りがかりのガレージの乗用車とちょうど頭部を重ねたかたちの、 プスだった。 、映えの空を振りあおいだとたん、 妙な石頭を持った恐竜、 パキセファロサウルスが同じ時代に生きていたのを調 ゆっくりと通過して行く巨大恐竜、 プテラノドンらしい巨大な翼竜の影が、ひらひらとよ それらはすべてトリ プスだけであった。 道端でむずか ~ スに最 て来て、

ぴるまの路上でも、 その頃は、夜に限らず、父も子も、幾分、 彼らの生態を見ることができた。 薄れ ては みえるに しろ、 光の 降りそそぐ、 ま 5

駅まで走り続けたり、交尾期のせいか、夜通し鳴き交すトリケラトプスのバスー 朝、あり得べくもない花粉のにおいに父子ともども襲われ、大きくむせかえりながら みえるものばかりではない。むっとする動物のに いたりした。 お 13 低 1/2 呻き。 そし て氷 ンに似た遠 0 5 た

母親 がそんなことをいう日もあったが、 なんだか最近、 ぼくと、 お父さん、 息子は、 いやに親密みたい ただニヤッと笑って ね なにかある

~ 、つに?

とい うだけだっ

近郊 彼らは思わず自転車を停め、声もなく立ちすくんだ。 そんなある日、 のサイクリングに出かけた父と子が、丘の上の雑木林を抜け、 やはり日曜の夜、 最初 のトリケラトプスに出会った日ほど遠出では 新開地を見降したとき、

鮮や 幻的な美しさだった。 目をひらくたび ひらくが 町 のあらゆる家という家に、トリケラトプスが重なり合っていて、水銀 かな緑褐色にみえる皮膚を、ゆるやかに息づかせていたのだ。ときおり彼らは薄く目を 、現存の鰐のある種属にみられる、昼間 鮮や かなバラ色に輝く 瞳が 現わ n の光を吸収するロドプシン色素のせい 巨大なホタルのまたたきのような、 灯 の光 0

「やつらの地形と、 この町 の地形が似てるのかな?」

集まっちゃったのかも……」 それとも、 むこうもこっちが見えたり、 感じたりしてい て、 なんとなく暖か い とこ

281

「でも、 なんだか変な感じ。 この 前 0 人は み N な恐竜 0 腹の 中 から会社や学校 \wedge 出 か ま

た腹の中へ帰って来て、ごはん食べたり、 テレビ見たりしてるんだから」

「そういうことだね」

「あ、ぼくの部屋はお尻のあたりだ」

「はは。気にしない、気にしない」

「しかし、ずいぶん平和なんだね。 あんな、 すごい格好してるくせに、 トリケラトプスが闘

ったの見たことないよ」

「走ってるのもめったに見ないし

「そうだ。隣町で最初に見たやつだけだな」

「あれは、どうして走ってたんだろう」

「さあ、どうしてかな?」

「とにかく今は平和なんだね」

平和にこしたことはないさ」

大陸からの黄砂が空を覆い、陽の光を血の色に変えた、いやな気分の日だった。 その日、友人宅から帰る途中、 やはり平和は永くは続かなかった。 丘の上から何げなく国道のあたりを見降していた彼の息子

る十数頭の恐竜を見た。 が、土煙りをあげ、駝鳥に似た奇妙な大またの二本足で、 長い尾をはねあげながら走って

ちゃな前脚でさ。ぐっととがった口のあたり。とにかく、 「あれは、ぜったいティラノサウルスだったよ。すごく太い後ろ脚と、飾り物みたいなちっ 駅前あたりまで走って来たんだ」 ティラノサウルス、 すごい勢いで

ず半眼ひらいてジロッとこっちを見ただけだしさ」 んティラノサウルスの気配も感じなかったぜ。ガレージのトリケラトプスなんかも、 「駅前からだと、こっちはすぐじゃないか。しかし、さっき帰って来る途中、おれはぜんぜ

「でも、たしかに見たんだがなあ」

「この町は素通りして、どっか、ほかの場所へ行ったんじゃないか?」

「でもどうしてだろう。駅前あたりで、どんどん見えなくなっちゃったけど」

それとも……」 父親は腕を組んだ。 「だとすると、 あのあたりに、 やつらが、 まだ群れたままでい

「行ってみようか」

息子が言った。

283

また内緒で何かたくらんでるのね。 そんなふうに母親が声をかけたが、 父と子は笑って手

285

を振り、自転車にまたがった。

うかがってから、父と子はゆっくりと帰りはじめた。 駅まで走ったが、やはりティラノサウルスの影は見えない。駅前広場で、しばらく様子を

ている暗渠が延び、もうひとつの道路のかたちで新開地近くまで続いている。 駅近くから、かつての小川の上にコンクリートの蓋をかぶせ、その上を子供の遊び場にし

「こっちから帰ってみるか」

父と子は自転車を乗り入れた。

「やはり、いないようだな」

りあげるたび、自転車のタイヤは大きく弾み、ガタガタと音を立てた。 ゆっくりとコンクリートの平板の上、父と子は自転車を走らせて行く。

前照灯が右に左に大きく揺れた。

の豚のいななきのようなもので、やがて大地の響きが、加わっているのが分って来た。 自転車を停め、 しばらくして、彼らは奇妙な物音を聞いた。それは激しい水音と、一オクターブ低い 父と子は耳をすました。

うに際限なく、 つらが走っていた。濡れた皮膚を光らせ、ぐいと首を突き出し、 いきなり足元を見た。通気口の鉄蓋まで走った。網状の鉄蓋の下激しく水を蹴立てて、 ティラノサウルスの群は新開地へ向っていた。 まるでベルトコンベアのよ

水路伝いに彼らは来たのだ。

国道の一団は、一部、 別動隊で、 駅前から合流したのだろう。

「ひどいことになりそうだぜ」

「とにかく急がなきゃ」

急いだところで、どうにもならないが、父と子は自転車を走らせた。

遠目には泥水の噴出のように、地上へ踊り出していた。 新開地近く、暗渠を覆う、コンクリートの表面から、無数のティラノサウルスが、まるで

動をはじめたかにみえた。 やがて斜面の新開地の、 あらゆる家々が、 いっせいにぐいと屋根を持ちあげ、 そのまま移

トリケラトプスが立ちあがったのだ。

闘いは始まった。

ィラノサウルスの頸動脈に突き立てた。長い尾を振って離れたティラノサウルスは、消防ホ カギ型の爪で、 ースからほとばしる水のように高々血液を噴出しながら、大きくはねあがり、 父と子のすぐ目の前でも、頭を下げ突進して来たトリケラトプスが、鋭い二本の角を、 一気にトリケラトプスの眼球をえぐり取った。

ラノサウルスが群がって、爪で引き裂いた腹の肉に、 父と子の家の数メートル手前では、横倒しになったトリケラトプスの巨体に、三頭のティ 鋭い歯を立てていた。 あたり一面、

流のような血の洪水だった。

「うちのトリケラトプスじゃない?」

おびえた声で息子が言った。「ほら、 ちょっと右の角に傷があるでしょ。 あれ覚えがある

「どうやらそうだな」

横目で見ながら、父と子は自転車を私道に入れた。 玄関先にはティラノサウルスが倒れていた。その血走った目、 大きく波打つ腹、

いは夜通し続いた。

膚の引き裂かれる音、断末魔の悲鳴、それを聞き続け感じ続けた。 ブラウン管の中の家族歌合戦の笑い さざめきの最中にも、父と子は彼らの雄叫び、 厚 1/2 皮

父と子は、 黙りこくって駅までの道を歩く。

ゆる場所に転がっていた。 尾の先端を動かしている者、 いは、ほぼ終了し、トリケラトプスの、 引き裂かれた腹をひくつかせている者、 ティラノサウルスの、 数知れぬ死体、 それらの巨体が、 あら

だが引き千切られたりしていたが、ティラノサウルスのそれは、 破壊しつくされてはいなかった。 プスの躰は、 ほとんど例外なく、 内臓がさらえられ、 首や腹に刺し傷を見せてい 肋骨が露出し、 のひい

無で、もう闘いを続ける気力もすっかり失ってしまっていた。 そこここに、生き残っている者たちもいた。しかし、彼らにしても、 だから、傷を負って、うごめいている躰のほとんどは、 ティラノサウルスのそれだった。 傷を負わな 1/2 者は皆

ブスの腹部から、 の部分から、 なかば千切れかけた片脚を投げ出し、それでも、自分の倒したトリケラト 内臓を引きずり出して来ては、 むさぼり食っているティラノサウル スが LJ

を食むトリケラトプスを眺めやった。 いない地点で、片方の目から血を流し続けるトリケラトプスが、黙々と草を食んでいた。 がっていて、 ティラノサウルスは、ときおり腹の肉から顔をあげ、 彼の背後には、大きく頸部に穴がうがたれ、乾いた血を全身こびりつかせ その傍ら、つまりは、 生きているティラノサウルスから、 気のせい か 恨みがましい目で、 五メートルと離れて た仲間 の躰が転

おい、そんなものを食うなら、どうして殺した。

そんな声がきこえるように、父と子は感じた。

食いきれ ないのに、どうして殺す。

血の流れてい

まだよかった。 父と子は、 それらを眺めながら、 道路 ないトリケラトプスの片方の目が、そんな感じに見返していた。 いっぱい、 引き裂かれた腹から飛び出したティラノサウルスの大腸が、 ゆっくりと駅まで歩いて行った。 濡れていない死体なら、

287

迂回し のたうちまわったかたちに転がった地点では、さすがに立ちすくみ、ようやく、 て通った。 道路の端を

見やって、靴音高く通り過ぎる。 それら血まみれの光景の間を、 洒落た白い 18 ンタロ ンの女性が、 64 ぶかしそうに父と子を

幼稚園児を満載したマイクロバスが、 空に舞い けたたましいさえずりを乗せて通り過ぎる。

神、空にしろしめす。

恐

げる事もなく、グラウンドの周辺に並んだ闊葉樹 快い静寂が漂っていた。 褐色の土は湿気を帯びているため、 時折西側の山から吹き降りてくる風が、砂埃を巻き上 の小枝をざわめかせるだけで、 あたり一面

止まり、八月の熱気と乾燥が付近を支配する。 太陽が東の空の中程に位置し少しずつ夏の射光を投げ始める頃には、 山からの風が完全に

「ファイト、ファイト、ファイト、ファイト!」

者達が駈け出し、 「あと二日だ、 キャプテンの吉川が真新しいボールを一直線に蹴ると、それを追うように二十人近くの若 馬力だせよ!」 静寂を破る掛声とスパ イクの音がグラウンド一杯に蒔き散らされた。

先頭を走っていた木村がボー ルに追い つい て、振り返り、 足でボールの転がりをくい 止め

恐 竜

勢いよく転がった。 彼の直後に居た五島がボ ールを奪おうと木村に体当りする。 球は五島の足先に当って

「五島、随分はりきってるな」

木村が云うと、五島は陽に焦げた顔を彼に向け て「オゥ!」と答え

キーパーの森はゴー ル前で球を待ちながら大声で言った。

「そいつは合宿になるとはりきるんだ。五島、 お前は合宿好きだな!

身体に似合わぬ森の甲高い声は、彼等の走った所だけにスパイクの跡が残されたグラウン

ドの土に吸い込まれていくようだ。

こうとゴール一杯に身体を伸ばしたが、その時にはグラウンドの端に生えた雑草の間を転々 わしたと思った時、 ねって体の後へ転がし、 全員が構えを解かずに成り行きを見守った。五島は足がボールに触れると素早く足の甲をひ 「あたりまえよ! 森の前方に球を転がす。森はゴール前に中腰で構え、 木村が中心になったフォワードの攻勢が、五島らのバックによる防禦陣 次の瞬間には木村の矢のようなシュートがゴールに向かった。森はそのボールに飛びつ び声とボールの音と静寂は規則的に繰り返されて、 木村の右足が球と足の間に食い込んで、五島の走る方向と逆に球を転が 何か好きでなけりゃ、こん そのままドリブルにはいろうとする。彼が完全に球を足の動きに合 な儲からん商売続 五島と木村がボールに追いつくと、 時折笑い声がそれに加わる。 け 5 n ま らすか を破って、キ つ

カジ 、既にスピードを失って、 緊迫した時間の終りを告げた。

S高校のマークが大きく染め込まれていたが、六日間の合宿で付いた泥に、新しい泥が加え 指令を受けたように全員が吉川の近くに走り寄る。 の地で合宿した結果得た土の養分のように、体内にまで染み込んでいるかと思えた。 られて殆ど判らない。また黒いパンツには所々ボールの型が付いていて、それらは彼等 吉川は少し間をおいて笛を吹いた。 笛の音が青空に向かって拡がると、底 彼等の剝げたブルーのユニホー のない

の部員に何度も怒鳴り声と冷い笛の音が浴びせられた。 太陽が頭上を過ぎて、午後の直射を更に強く受ける頃には、顔面から次々と流れ出す汗を ンの練習に午後の大半を費やしたが、倒れそうに身体をひねってターンする一、 おうともせず、足を素早く動かしてダッシュした。 特に小廻りを必要とするバックは、

「こらあ、ダッシュしろ!」

直進して、彼の身体は伸びきったまま褐色の土の上に転がった。 吉川が叫ぶと一年生の松川は思い出したようにひざを上げて足を速める。彼の姿勢が最も 笛が彼を呼び止める。彼は狼狽して身体を無理に後向かせるが、 足はそのまま

「転べと誰が云った! 足からターンするんだ、 足から!」

恐竜

291

する。 立ち上がろうとして膝を起こす松川に、上級生の罵倒が飛ぶ。 たて続けに笛が吹かれ、 松川はターンを繰り返し、 終いには独楽のようにぐるぐる 彼は再び同じ方向にダッシ

竜

恐

293

向を失って吉川の立っている所に向かって進んでしまい、二人は衝突する。吉川はすぐ起き 上がったが、 かげんに廻った時、笛の音が止む。松川は半廻りしてあわてて走り始 二度目の転倒で立ち上がれない松川は、スパイクに掘り返された土に顔を俯せ めるが、方

たまま、暫く動かなかった。 松川は誰も自分を助け起こさないのを見て自分に怪我のない事を知り、 両手に力を加えて

足を引き寄せると言った。

「すみません」

そして、やっと松川はターンの練習から解放された。

頭蓋を攻め、やがてその痛みも感じなくなる。そして彼等の頭髪に泥が溜まり、 日の予定の最後に組まれていたヘディングの練習は、明快な神経に痛烈に響き、まるで、鉄 し尽くして、乾いた身体を動かせる事を楽しく思えるようになっていた。それだけに、 付かない部分がなくなった時、 の球を頭にぶっつけたように感じさせた。前のヘディングの痛さが消えない内に、 太陽が西の 山陰に姿を隠し、 彼等の一日の練習が終わった。 海からの快い風がグラウンドを通り抜ける頃、彼等は汗を流 体中に泥の 次の球が

と考える。 快い海風と、 乾いた空気を、 まるで老人のように吸い込んでその一日が果された事を漠然

い気持だ。 練習の後は、何てい いんだろう」

誰もがそう考えながら、 誰も何も喋らず、黙々と深呼吸を続けた。

りたく思いながら、 体操が一通り終わると、 ゆっくり歩いて集まった。 吉川はその日最後の笛を吹い た。 皆はすぐ吉川のところに駈け寄

彼等は円陣を組んで、 肩と肩を寄せあい叫び声をあげる。

「ファイト、ファイト、ファイト、ファイト!」

その声を最後に、グラウンドは再び静寂に包まれ、 やがて夜と共にやって来る山風を受け

て騒ぐ闊葉樹の音が聞こえる迄、それが守られた。

「さっき倒れた時、どうもなかったのか?」 彼等は手に手に、ボールや空気入れやネットを持って合宿に戻って行く。

吉川は思い出したように言った。

「ええ、大丈夫です」

松川は笑いながら答えた。

に至るまで、闇が被っていた。 夕陽は完全に山の陰に落ちて、 逆光に照らされた稜線が真赤に染まり、

ころんでじっとしていたが、 風呂と夕食を済ませるとそれぞれが思い思いの休息を取る。 六日目ともなれば、 囲碁やポーカーや雑談に花が咲いた。 合宿が始まった頃は、

居る縁側まで歩いた。 最後まで飯を食っていたが、おおような動きで胡座を解くと、 褐色に焦げた背中を夜風にさらして、五島達は縁側から貧弱な庭をながめて 立ち上がりゆっくり五島達の

「吉川達はどこへ行った?」

「ああ、吉川さん達、海岸でしょう」

一年生の町田が答えた。

そうか」

と言いながら中尾は五島の横に腰を下ろした。

「お前ら、この合宿の間、何回小便した?」

中尾が言ったので、一年生達は少し考えた後一寸不安になって言った。

「そう言えば、僕は一度も行ってないぞ」

五島は声を立てて笑ったが、中尾は真面目に言った。

「大いによろしい。小便に行くような奴は汗を流し足らん奴だ」

「大便は毎朝しますよ」

松川が笑いながら言った。

あたりまえだ。大便だけは、いくら練習しても出るもんだ」

中尾はそれだけ言って立ち上がり、 囲碁をしている二年生にも面白くない冗談を言って部

座を出た。

宿に使っていた。三年生の中尾は旅館の内部はもちろん、付近の地理まで殆ど知り尽くして 彼等が泊まっている旅館は、 海岸は少し離れていたが、旅館を出ると真先に波の音が聞こえ、 先輩の関係している所で、 S高サッカー部が毎年決まって合 快い山風が彼の全身

半月が、その焦げた腕を照らす。 腕に冷たく触れる。 トの堤にぶっつかり、その飛沫の一滴は彼等が坐っている所まで飛んできて、剝き出しの 海岸の防波堤に、 木村はその腕をそっと口の所に持ってきて嘗めてみた。丁度真上に来た 三つの黒 い影が並んでいる。 闇の彼方から押し出される波は、 コ クリ

「今年の合宿は先輩が来なくてよかったな」

森は例の甲高い声で言った。

強くなったら強くなったで、『お前達が強くなったのは俺達のお陰だ』と言いたがる」 「勝手なもんだ、先輩なんて、弱けりゃ弱いでだらしないと言って、『俺達の頃は』だろ。

一度退いた波が打ち寄せて、轟音を立て、再び退くのを待って、吉川は言った。

俺達が強くなったのは、やはり先輩のお陰だよ。 「そう言っても俺達、 うまくいけば優勝できるだろう。 先輩が居なけりゃこんなに一生懸命やる気になっていないだろうし、 やっぱりそれは嬉しいさ。先輩だって寄付だけ取ら 今年は準決勝までは間違いなく進めるだろ

恐竜

295

て部が弱 いんじゃたまらないだろうしね」

「お前には、そういった優しい所があるからキャプテンなど務まるんだな」 森は心持ち声を落として言う。

「俺には、結局俺達が先輩に利用され ているとしか 思えな 1/2 んだ。 俺達が強くなって、例え

いんだ?」 なきゃならないんだ? 顔を立てる事が本当に嬉しいのか? たとえ、先輩が作った強いと じゃないか。一体なぜ嬉しいんだ。先輩にも母校にも顔が立つって言っても、なぜ顔を立て 優勝したとしても、それで何があるんだ。勝った時には確かに嬉しいさ。だけど嬉しいだけ いう伝統があったとしても、なぜ俺達がその伝統を守る事に一生懸命にならなければならな

た。彼はその間一呼吸待って、再び続けた。 森の言葉の終わりの方は、打ち寄せて、 コンクリ ートと衝突する波の鈍い音に搔き消され

俺達に死守させるんだ。それだけさ。俺達はそれを自分の課題だと信じてやっているだけさ。 騙されてるんだ」 「先輩達は、自分達が作り上げたものを崩したくない為に、伝統という大儀名分を分って、

に「騙されてるんだ」という最後の言葉が再生されて、反復した。 森が喋り終わっても、 誰も口を開かない。波の音だけが何度も繰り返され、 打ち寄せる毎

三人の影の上にもう一つの影が重なった。 中尾は三人のすぐ後に立ち停まった。

と木村が声を掛けたので、 それ等は水面に向かってぶらぶら振られていた。 中尾は木村の横に坐った。堤防のコンクリ

「お前だって、 吉川は、 後輩がサッカー部を弱くしてもらいたくないだろう」

空間を動く足先を見つめて言った。

それに越した事はないしね」 俺は後輩達が自分達の本当に信じる方法でやってくれる方がいいよ。 「そりゃ、弱くなって欲しくない。だけど俺の欲望をなぜ後輩に押しつける事ができるんだ。 それでもなお強ければ、

いた。吉川は頭を上げて森を見たが、視線が合うとすぐ、元の足先へ眼をやった。 森は、俯いた吉川の頭の上で喋った。木村は沖の方で時々キラキラ輝く夜光虫を見つめて

と思えなかったな」 「俺達今年の三年生はまとまっているという評判なんだぜ、 今更、森がそんな事を言い

吉川が言うと、すぐ森が答えた。

達がまとまっていて、今年のサッカー部が強いとしても、それが先輩達に作られたものでし の中で、その中のとりきめを守ってきただけじゃないか」 かないし、俺達が本当に強くなりたかったかどうか判らない。 「まとまっているのはいいさ。俺がこんな事言ったって俺達はまとまっているさ。 ただ、 先輩達の作った仕組み

297 恐 竜

森を見ながら言った。 森と吉川の間に交差していた対話に、 中尾のしゃがれ声が割り込む。 彼は木村の肩越しに

「お前はなぜそんなに先輩を気にするんだ? をやっているのは僕らじゃないか。僕らの事をなぜ先輩の話にするんだ?」 _ 寸被害妄想じゃ な いか ? 今実際にサッ 力

ばならなかったか、 だしたんだ」 合、兄貴がサッカー部員だったという理由だけでサッカー部にはいり、 だとも思えない。 「本当に俺達がサッカーをやらなきゃならなかったか、本当にサッカー部を強くさせ 少なくとも、俺は自分の青春を自分で歩んでいると思えないんだ。俺の場 という事だよ。少なくとも、俺は青春を過ごす最もよい方法がサッカー いつの間にか熱中

「そうだろう、 お前は熱中してるんじゃ ない か

中尾は森の言葉を遮るように言った。

作ったデマじゃないか! する。強くならなければならないと信じる。強いことが正しい事だと考える。みんな先輩が は退部を許さな 「俺は先輩達が作った暗黙の仕組みにはいり込んだだけじゃないか。一度部にはいった者に 「なぜ熱中したんだ!」 森の声は次第に高くなって、練習の時のような甲高い声が、波の音以上の響きで伝わった。 67 練習に出てこない奴はみんなで呼び出す。そして強くなる事だけに専心 誰が一体、 強くなる事を正しいと信じるようにしたんだ」

らなかった。 いる。それは、夜光虫が移動しているのか、 見ていた。森もそれを見た。夜光虫は少しずつ移動している。少しずつ輝きが沖に向かって 森の言葉が途切れると、再び波の音が四人の耳に侵入する。 光線の関係で移動しているように見えるのか判 森以外の三人は沖の夜光虫を

「俺はやっぱり強くなる事が正しいと思う」

中尾が言った。森はすぐ答えなかったので、吉川が答えた。

けに作られた仕組みを批判しているんだ。だから、……」 「中尾、森は何も強くなる事が正しくないと言ってるんじゃないんだ。強くならせるためだ

吉川が言葉に詰まった時、森が言った。

てもじっと我慢して、自分が先輩になったら意地悪く後輩に当る。 「悪循環があるだけさ。 お前達も辛くないはずだ』ってね」 次々と先輩が後輩に強制して行くなんて。先輩がどんな無理を言っ 『俺達だって苦労したん

ないのか?」 「だけど、そう言った仕組みがあるから、 僕らは一生懸命やる気になって、 強くなるんじゃ

中尾が言った。

竜

299 恐 じゃないかと言うんだ」 「そう言った仕組みがあるから、 という理由だけ しか、 俺達がサッカー をやる目的が

h

森は速やかに反論した。

「じゃ、 お前はサッカーが嫌いなんだな。やる気がないんだな」

嫌いじゃない。それどころか好きでしかたがないさ。それにやる気だって一杯あ

統を守るだけの犠牲になるのはいやなんだ。そうだろ?」 「森は何もサッカーがいやだって言うんじゃなくて、強くなる為だけに何もかもすてて、伝

なかった。 吉川が言うと、森は頷いた。 その間も木村は黙り続けていた。 木村は喋らないタイプでは

「木村、お前はどう思うんだ」

吉川が言った。木村はその吉川を一寸見て再び沖の微光を見つめた。

「お前には何の不満もない のか?」

吉川が重ねて尋ねた。

「別に不満はない」

一今の話、どう思うんだ?」 木村は素気なく言った。

森が言った。

「強くなる事が正しいさ。 それしか言えない。 だけど、 俺は先輩に強制されているだけだと

思えない」

木村は途切れ途切れに喋った。指を一度口にくわえて、それを引き出す。

「森が言うように、部が強くなる事だけがサッカーの目的だと思わないけれど、

達が一生懸命やる事には、一人一人が自分の中に持っている目的があるんだ」

「それがサッカーでなくてもいいだろうし、サッカーであってもいいはずだ。俺達が、 木村は考えながら話しているように、話を少しずつ区切って言った。

作ったわくにはまっているだけでも、それと自分の問題とは別の事だと思うんだ」 を失うんだ。それは自分だけが、それぞれに持っているものなんだ。現実に自分が先輩達の に夢中にならなければならないだけなんだ。夢中にならなければ、俺達は自分を考える全て

森が何か言おうとして、木村を見たが、木村は喋り続けそうだったので口を噤んだ。

変な夢だ。 夢を見たんだ。昨晩だけじゃない。ここへ来てから毎日、 同じ夢を見るんだ。

首を振り廻して泳ぐんだ」 遠い南の海を、巨大な前世紀の怪物が泳いでいるんだ。そいつは大きな吠え声を上げて、

それが、どうしたんだ?」

森はたまりかねたように言った。

恐 竜

301

その夢を見るとなぜか勇気づけられるんだ。 自分が正しいと信じられるようになる

302 いさ。 んだ。 た。 後には馬鹿馬鹿しいと感じるだけなんだ」 ら一生懸命やっても、吠え廻る恐竜ぐらいの現実感しかないんだ。 の周辺に坐ったまま話合っている下級生達が、 そこに写し出された自分達の影を見ながら。 「松川、お茶もらってこい」 「さっきから、その事を考えて黙っていたのか?」 「いや、その恐竜は 「その夢は、 「現実的でなくてもい 「そうさ、サッカーなんて、恐竜と同じくらいでっちあげの夢でしかないんだ。俺達が 「そろそろ、ミーティングをやらなきゃ。 「色気のない夢だな」 木村は、まだ沖を見つめていた。 森が言った。 坐るなり、 森が言った。 吉川が言った。 と言って松川が立ち上がると、 彼等が合宿に帰った時、既にミーティングの準備が、下級生達によって為されてい 吉川が言った。四人は立ち上がって、歩き始めた。半月に映えた堤防のコ 中尾が言った。 明日にでも、この海岸にやってきそうな感じなんだ」 それは丁度、 なぜか判らない。だけど大海原を吠え廻る恐竜に、 中尾は言った。 毎日同じ 俺達がサッカーをやる時のように、 1/2 なの つも俺に向かって泳いでくるけれど、 い。それが俺達の心の中にあればい か? 五島がその松川 闇と闇を結ぶ水平線を見極めようと努めている様であっ みんな帰らない 彼等を迎えた。 を制して言っ 一生懸命吠え廻って、 なぜって質問したってしかたがな か いんだ」 毎日、 その時だけ欺されてい 俺の方に近付いてくるん

泳い

でい

て、

俺が行ってきてやる」

五島はそのまま廊下へ出る。 皆の視線はその五島を追ったが、 森は苦々しげに呟い

「何だ、あいつ兄貴振りやがって」

「そう言うな、あいつは、 ああするのが好きなんだ_

と吉川が言う。

303 恐

五島が戻ってきて、 大きな身体い っぱ 1/2 に愛嬌を振り舞いてお茶を配ると、 吉川は喋り始

「ところで、合宿もあと一日で終わりだ」

五島が調子に乗って言った。

来ない事だろうと思う。 にあるからだ。この合宿で何とか形をつけなければ、学校が始まってからはあまり練習も出 「飲める事は飲めるが、今年はそうしても居れない。 リーグ戦が一ケ月繰り上が つて、

心としたフォワードだ。ところがうちの弱点は、 今年のリーグ戦の目標を一応明栄高校においている。 五島には悪いが、 敵の戦力は、 フルバックだ」 何とい っても 石黒を中

「へえ、どうも」

と五島が言ったが、誰も笑わなかった。

したって、彼の強引な球捌きにかかると、忽ち抜かれてしまうだろう」 「石黒は馬力があるだけでなく、 横の動きも素早い。うちのバックが、 人ぐらい 0 ーク

の事を考えていた。そして彼もまた真剣な顔を崩す事がなかった。 その場の二十人近い若者達は、真剣な顔で吉川を見つめた。ただ、木村だけは俯い

巨大な身体をうねらせて、 - なぜ、俺は、毎日毎日、恐竜の夢を見るのだろう。何億年も昔からやってきたように 大洋を泳いで行くあいつは、 一体何を求めているんだ? もし本

失って、ただ一頭、大海原を暴れ廻るのは何の為だろうか? 過ごす事ができるのだろう。種族の栄華した時代を遠く離れて、細々とした繁殖の能力すら 今の時代に恐竜が生き残っていたとしても、 そいつは、何によって、今という時代を

が面白くもなかったし、練習が辛いばかりだった。 から叱られたりおだてられたりして、 ら多いのだ。彼は練習をサボッたり、 なるだろうと考えて練習に参加した。 何かやりたいという漠然とした気持で部屋を覗いて、単純にサッカーをやれば、身体が強く 木村がサッカーを始めたのも、他の大部分の部員と同じく、 あいまいな形で続けていた。彼にはそれ程、 止めさせてくれと言ったりしながら、その度毎に先輩 実際にはサッカーなどをやると怪我が絶えず、病気す 一寸した切掛からだ。 その頃

た所に町子が居た。町子はボールを拾って木村に投げ返しながら言った。 近くの高校との練習試合の折、彼が蹴ったボールが、ラインオーバーして、 そんな彼が、サッカーを続ける気になったのは、 町子と知り合ってからだった。 転がって つ

「木村さん、ガンバッテね!」

それから一週間後、 絵画の時間 12 町子と逢った。

「なぜ、僕の名前を知っていたんです?」

恐 竜

305

の上級生達の間で話題になっている女である事を知った。彼には女が、美人であるかどうか そういった取り留めない話から彼等は親しくなった。そして、その後、町子がサッカー 竜

307 恐

じただけだった。 別がつく訳でなく、 ただ、 上級生達が話題にするような女と付き合う事に喜びを感

ただ一人の観客である事もあった。町子は彼の挙げた得点に拍手を送り、 いと言った。彼は更にファイトを燃やし、ゴールに向かった。 町子は彼の練習を見に来て、試合には必ず応援に来た。雨の中で、赤い傘をさした町子が そんな彼を男らし

ていた。 ていた。特にゴール前の球捌きは連盟一と言われ、チームでは重要な位置を示すようになっ 二年生になった時には、彼はS高校不動のセンターフォワードとして 重要な得点源となっ

彼は更に巧くなろうとし、自分の力で、チームを優勝させたいと思うようになった。 練習が進まぬと苛立ち、勝つ事を暗黙のテーゼと認めた。

話を吉川から聞いた事があった。そんな彼には、その時の町子の気持等判らなかったし、 ろうともしなかった。 だけに打ち込んだ。やがて、町子は彼から去って行ったが、先輩が町子に手を出したという 木村の女ファンは町子だけでなくなったが、彼は先輩の戒め通り、 女には近寄らず、 判

どう変わったのだ? 町子を好きになったところで、 留まるべきだったのだろうか? 0

目を上げると、 吉川はまだスピーチを行なっていた。 彼は再び考えた。

鹿騒ぎがあるだけだ。俺の大嫌いな馬鹿騒ぎ、そして先輩のうわべだけの賞め言葉。 立役者になったとして、それが俺に決定的な喜びをもたらすとも思えない。優勝の後には馬 今俺は何を求めているんだ? 今年のリーグ戦にチームが優勝して、

その瞬間が俺は特に好きだ。 俺はサッカーが好きだ。サッカーの何が? ゴールに向かって球を操りながら突進する時

なぜ暴れ廻りたいのだ? 木村の耳の奥では恐竜の叫び声が聞こえ、彼の頭の中の大海を恐竜が暴れ廻って 俺はあの恐竜と同じく、暴れたいのだ。 俺はいつも暴れ廻っていたいのだ。 なぜ?

その時、吉川の声が木村の回想を打ち切った。

「木村、何をぼうっとしてるんだ?」

吉川は木村の焦点のない視線に異様なものを感じながら言った。

副主将からも何か言ってやってくれ。 何だ?」 女の口説き方でもい

全員の視線が木村を捕えた。

「うん。何も言う事もないけれど……」

「まあ、 木村は皆の視線を避けて眼を閉じ、再びそれを見開い これは僕の個人的な考え方だが、 一応僕らは試合を目標に練習しているけれど、 てから喋り始めた。

わった後、この合宿でみんなが何を得たかよく考えてみてくれ」 かと思うんだ。合宿が終わる事と、試合が終わる事は同じくらい大きなけじめだ。 の意味があり、それらが前提となって僕らのサッカーに対する考え方が生まれるんじゃない に試合だけの為に合宿しているんじゃなくて、練習そのものにも僕らの行為に於ける何等か 合宿が終

暫くして吉川は言った。

木村は頷いた。

井が言った。 「じゃ、今日のミーティングはこれで終わる。消灯は10時、明日は8時、 吉川の指示に、全員が快い返事をした。ガタガタ言わせて机を片付けながら、 一年生の酒

「女の口説き方は教えてくれないんですか?」

「女の話はふとんの中で」

と横から五島が答えた。

再びそれぞれが自由時間を過ごし始めた時、 吉川は木村の腕をつかまえて言った。

「さっき、何を考えていたんだ?」

「恐竜の事さ」

「まだ考えてたのか。恐竜が怖いんだな」

笑いながら吉川が言うと、木村も笑って答えた。

「いや、恐竜が好きなんだ」

その顔に、久々のおおらかな満足感が充ちていた。

動かせていたが、六日目ともなると消灯と共に全員が眠りに就いた。 彼等は殆ど一斉に眠った。合宿の初めの頃は、一人二人暗闇の中で疲れた体をもぞもぞと

ていた。 が満ち溢れている。遠く聞こえる波の音も、 荒々しくふとんを蹴り上げ、大きな鼾をかいて眠る彼等には、 彼等の眠りを妨げる事を憚るように低く聞こえ 健康な若者達のエネルギー

木村はその日も夢を見た。

うに見える程静かだ。全てが明快だ。 すます青く冴え亘る。 水平線を境に分かれた空と海は互いに照らし合い、海は空の青を、空は海の青を受けてま 空には太陽が、海には小さな白い波があり、それらは動いていないよ

まま直進したかと思うと、 恐竜が濃い緑の長い首を斜めに振って、尾を海面にたたきつけると、そこに荒々しい波が 四方に拡がる。身体全体を首に合わせてうねらせた後、首を海中に突っ込み、その すぐに勢いよく海面に飛び出す。暗黒につながる海底から閃光の

309 恐 竜

311

び出してポチャッという音を残す。 ように明るい太陽の下に変わる恐竜の視界。巨大な二つの足で水を蹴ると、片足が水面へ飛

グワーオー

前進し始めた。 恐竜は吠えた。己れ て再び海中に潜ると前足を引っ込め、首を一直線に伸ばして海中をかなりなスピードで の背にあるうろこを逆立てて、尾を左右に鋭く振り廻して伸び上が

再び海中に潜り、四つの足を小刻みに動かして進んでいく。 轟音と共に海面にたたきつける。そこから円い波の紋が生じ四方に拡がっていくと、 やがて再び首を海面から振り上げて、大気を一杯吸い込むと、 一気に身体を飛び立たせ、

また、首を出すと、今度も吠えた。

グワーォー

グワーォ!

事を知っているように、残された生命を吠え声によって充たそうとする。 でもない。恐竜は、その種族の終末を既に知っているように、己れが時代遅れの怪物 数億年も昔の海を思い出しているようではない、どこにも居ない仲間を捜し続けて その刹那だけに己れを主張しようとしているようだ。暴れる事で、吠える事で。 己れの一瞬に占める場を拡大しようとしているように思える。歴史から見離された恐竜 暴れ廻る事によっ

嘗て、悪魔の使いと怖れられていた彗星すら、現代文明の中では笑い者なのだ。高々、 楽天地とも、 ねばならない。見せかけだけの反抗と、噓っぱちの自己主張によって、 の恐竜にどれだけの恐怖が発散されよう。それは吠え、暴れる中に、精一杯の羞恥心を示さ ひとかけらを、現代に投げ込み、それが空しく滅びていく姿を、じっと見つめねばならぬ。 ぬかねばならないのだ。 吠え、暴れる恐竜の視界に、緑の一点が加わる。異様な臭気を放つ不気味な陸地、それを そこで破廉恥な己れのみっともない姿を、己れの為に示さねばならぬ。太古が、 地獄とも考えない。それは、時代遅れの恐竜が、最も醜く、最も貧弱に見える 己れの太古をいじめ その

恐竜は緑の一点に向かって一心に泳ぎながら、 更に大声で吠えた。

グワーオ!

、眠っている木村の耳に伝播した。彼は恐竜のように身をうねらせて眼覚めた。

既に朝日が縁側に差し込んでいた。

木村はそっと起き上がると、素早く服を着て庭に出てみた。

遠くから水平線上の一点に認めた山だ。雑木が混然と生い繁り、淡い緑の質素な光景。 や小鳥の鳴き声が聞こえる。彼は振り返り、背後の山々を見つめた。緑の小さな山。 真赤な巨大な太陽が、 海の方向の家並みから昇ってくる。波の音は聞こえず、代わりに蟬

木村は彼の方に二、三歩近寄った。 薄暗く見える屋内から吉川の声が聞こえた。 そして暖かい光の中に吉川の姿が現われると、

「夢はどうだった?」

吉川が言った。

「この海岸にやってきたよ」

木村は真面目な表情をくずさずに言った。

「ほう、それは見物だな」

吉川が笑いながら言うと木村も思い出したように笑った。

「今日は最終日だから練習を早く切り上げて海岸でその恐竜を待とう」 吉川が言った。 木村は吉川の顔をしばらく見つめて言った。

「なぜ、急にそんな事を言い出すんだ?」

「面白いじゃないか、毎日同じ夢を見るって言うのも何か暗示的だし、 俺もその在りもしな

いものを待ってみたいんだ」

君が昨夜言った、 「何も礼を言う事はないよ。みんなが心の中に持っているはずのものを待つだけなんだから。 この合宿で得たものを考える為にね」

声で言った。 吉川はそう言うと、 部員達が顔を洗ったり、 寝間着を片付けたりしている方に向かって大

「今日は練習を昼迄で切り上げる」

何も言えなかった。 中尾は不服そうな顔を吉川に向けたが、 二年生の 「ワー ·ッ! という歓声に押されて

配もなく自分のその一瞬のエネルギーを練習だけにつぎ込んでいた。 海岸で準備体操をして、砂浜をランニングし始めた時、もう部員達は何の不満も、 何の心

その日もプログラム通りの練習が行なわれた。 ターンして足をもつれさせた松川に森の叫

び声が飛ぶ。

「ダッシュしろ!」

ブルを、五島は必死で追う。 木村の巧みなドリブルに喰い 下がる五島、 まるで五島の裏をかいて球を動かす木村のドリ

「五島! 足首を使え!」

吉川が呶鳴った。

グラウンドに響いた時 松川と市川が球を両側 から追って正面衝突する。 生身の身体がぶつかったと思えない音が

恐 竜 恐

315

ファイトだ!」

吉川が言いながら走り寄った。

倒れた松川と市川は起き上がりながら笑う。

全員が吉川の所に集まる。体操を終えて円陣を組むと最後の力を腹の底に集めて叫んだ。 最後にシュ ートの練習を行なって、 一合宿最終日の練習が終わった。

誰も命令しなくても、

「ファイト、ファイト、ファイト、ファイト!」

その声は松林から海岸に飛び出し、 遠く水平線の彼方に進んで行った。

繰り返していた。 は一隻の船も見えず、 波と、 波を作る風だけが白い 光の乱反射の中で規則的な動きを

れたという事だけでなく、もっと自由な、 のだった。 んなに合宿が終わったという解放感が見られる、それは単に練習に縛られ苦痛から解き放た 砂浜に長い足跡が続き、真黒に陽焼けした若者達の顔が 何もかも充たされた時にのみ感じる事ができるも 遠い水平線 に向けられ 7 Va

「何とかリーグ戦でがんばれそうだな」

って投げつけた。 吉川が言った。 五島は砂浜に転がった砂利から平たい石を選んで拾い上げると、

「サッカーか ! それでもサッカーは素晴らしいぞ!

に舞い上がった。 五島が勢いよく腕を振って石を投げながら言った。石は海面に当ってはね返り、

「うん、あのでっかい時代遅れ の恐竜と同じくらい素晴ら しい

木村が言った。

「そうだ、これは木村の夢の中に現われた恐竜と同じだ。 同じ青春の虚像だ

森が言った。

「嘘だ。虚像じゃない。 ちゃんとここにサッ カーのボ ルル があって、 俺達が試合をする。

して勝つ! 実像じゃない か!

五島が言った。

「勝つ事が現実的なだけに、俺達の心には虚像とし てしか受けとめる事ができない のじ

いか?」

みんな黙って森の方を見た。

たいと考えるから虚像を作らなければならないのだ」 現実に勝つ、それで俺達に何が残るんだ。現実的に勝っ たという事を俺達は何か

この森の結論に誰も反論するものは居なかった。 暫く沈黙が続いた。吉川がその沈黙を破る言葉を捜している内、 一番言い たくなかった言

「どうやら恐竜もやって来ないな」

部員達はその言葉に緊張が解かれて笑った。

「海は大きいなあ、俺も、こんな大きな海のような実像を捜していたんだ」 誰かが立ち上がって言った。みんなじっと海の方をみつめていたので誰が言ったのか判ら

なかった。 その時、

「おい! 木村、 あれを見ろ!」

市川が大声で叫んだ。

水平線に、ギラギラ輝く海面を掘り返すように波立たせて、 潜っては首を出し大空に向か

って伸び上がる巨大な恐竜が、 海面に向かって泳いでくる。

グワーオー

グワーォ!

その声は、誰の耳にもはっきり聞こえた。

年月を深海で過ごした恐竜は、 恐竜はその時代遅れの酷い姿をさらけ出すために陸に向かって泳いでいるのだ。長い長い 短い青春をサッカーのために過ごした若者達の虚像として、

そこに姿を現わしたのだ。

筒井康隆

ひとりで旅をしたことなど、中学生の幸夫にははじめての経験だった。 幸夫は、春休みを利用して、網走にある叔父の家に旅をした。そんなに遠くまで、 たった

幸夫がいちばん楽しみにしていたのは、網走原生花園の見学だった。 中学校では、 幸夫は理科が好きだった。 特に、生物が好きだった。 だから、 こんどの旅で

た。晴れた日で、黒い海はおだやかだった。 網走湾を左に見て、叔父の運転する車に乗り、幸夫は海岸ぞいの道路を原生花園に向か 5

幸夫はふと、 車の窓ごしに、 沖あいをながめた。

ワを立てているのだ。 不気味な色をたたえた海の一部分が、ざわざわと黒く波立ち、 わきかえるように、 白いア

317

又なは重さいう、ほこっ「あれは、なんでしょう」

めてだ」 叔父は車をとめ、 海に眼を向けた。 「なんだろうな。 あんなものを見るのは、

も、も、ももももつ。

ちはだかった。 波の表面が、 めくれかえった。 白いく しぶきをあげ、 黒い、 巨大なものが、 2 つ

あ·····

それは、恐竜だった。 幸夫も、 叔父も、 しばらくはものもいえず、 眼を見ひらいて、 それをながめ

海岸めがけて歩いてくるのだ。幸夫たちの方へ、近づいてくるのだ。 竜が、今、 中生代にさかえ、今はもうほろびて、地球上にはいないとされ 幸夫たちの眼の前へ、網走湾の海底から立ちあがったのである。そし ている恐竜が一 て、 それは、 その恐

ただぼんやりしている叔父にしても、 がいなかった。 幸夫には、信じられなかった。幸夫の横で、あんぐりと口をひらき、逃げようともせず、 今、 眼の前に起こっていることが、 信じられないにち

ふたりとも、何も考えられなかった。頭の中が、 短い前肢を胸のあたりにだらりとさげ、 あと肢だけで歩きながら、 からっぽになったようだっ 砂浜にあが

したたらせながら、その恐竜は、幸夫たちの乗っている車の前を、 てきた。からだの大きさは十メートルもあるだろうか。眼を赤く光らせ、からだ中から水を 「ティラノサウルスだ……」 通りすぎていこうとした。

みつけた。 幸夫は、 そのつぶやきが、まるで聞こえたかのように、恐竜は幸夫たちの方を、 ゆっくりと、そうつぶやいた。中世代の爬虫類のことには、幸夫はくわしかった。 ふりかえってにら

「わ・····」

ひと眼見れば、叔父でなくてもふるえだしただろう。 も、もっとも獰猛な肉食の恐竜なのだ。その大きな口からはみ出した、白い、 叔父が、 がたがたとふるえはじめた。ティラノサウルスー それは中世代の爬虫類の中で するどい歯を

その時――

幸夫の頭の中には、恐竜の声が聞こえた。幸夫だけに、 は つきりと聞こえたのだ

「お前は、わたしを知っているのか」

坊の恐竜だ。いったい君は、何のためにあらわれたのだ」 「なんのためだと」幸夫には恐竜が、 「知っている」幸夫も、心の中でそう答えた。「君は、ティラノサウルスという、 白い歯をむきだして、にやりと笑ったように思えた。

「教えてやる。

人間どもに、

ほんとうのことを知らせてやるためだ」

たたきこわしていた。

ちらしながら、牧草地帯の中 幸夫が心の中で、そうたずねかえした時には、すでに恐竜は、車道をわたり、 へ入っていってしまっていたのである。 馬の群を追

何を

逃げよう」

せはじめた。 やっと正気にもどっ た叔父が、 あわてふため 43 て車をUタ -ンさせ、 網走の町 の方 走ら

るというのだろうか……」 いつはいっ た 1/2 何をする気だろう……」 幸夫は考えつづけた。 「人間に、 何を知らせ

幸夫にはそれが、いつまでも気にか か つて いた。

新聞やテレビによって知ることができたのである。 それらの村や小さな町を通りすぎていった。そういったことを、 先ざきの村では、大さわぎになっていたが、恐竜は、 恐竜は、網走に上陸したのち、石狩山を越えて、どんどん西に向か たいした被害をあたえることもなく、 幸夫は、 つて 網走の叔父の家で、 42 た。恐竜 の行く

かった。 やがて春休みも終りに近づいた。幸夫は東京に帰るため、 まず網走から鉄道で、

まわっているという話を耳にした。 次第に札幌に近づいた。 列車の中で、 幸夫は、 あの恐竜が今、 札幌 の町であば

教えることになるんだろう……」 ているんだって・・・・・。 だが、 どうしてだろう。 あばれることが、 人間たちに、 何を

列車は札幌の町に入った。

その時、幸夫は、恐竜の叫ぶ声を、頭の中に 聞い た。 恐竜は、 あば れながら わめ 1/2 7 41

思い知ったか。おれの恐ろしさを」

幸夫がそう考えた時、列車は札幌駅の手前で急停車した。 恐ろしさだって――。そんなことは、誰でもが知っていることじゃ なかっ たのだろうか

へは進めません」 「怪獣が、あばれています」と、車内放送のアナウンサーが叫 んだ。 「列車は、

雷のような咆哮が、 幸夫たち乗客は、停車した列車からレールの上へ、おりなければならなかった。 すぐ 近くでとどろい た。幸夫は顔をあげた。 恐竜が、 0 Ľ

ル

を

「やあ、カイジュウだ。すごいな」列車からおりたばかりの、 小学生らしい男の子と女の子

が、レールの上を、恐竜の方へ走りだした。 「あっ。あぶない」と、幸夫は叫んだ。 「これっ。どこへいくの」母親らしい若い女が、 子供たちを追ってかけだした。

恐竜が、 子供たちの方へ近づいてきた。

321

くくっているように思えた。 まるで、恐竜がいくらあばれようと、子供たちにだけは害をあたえるはずがないと、 あたりにいる、おとなたちは、 子供たちをとめようともせず、だまって見ていた。

「こっちへくるな」と、 幸夫は、 心の中で恐竜に叫 んだ。「そこに子供が いるんだ」

「かまわん」

まったのである。 恐竜はそう答えた。 そして、 その巨大な足で、 子供たちふたりを、 ふみつけてし

- という声が、幸夫のまわりの、おとなたち の中から起こっ

子供たちの母親は、 半狂乱になり、恐竜に叫んだ。

「なんてことするの」

だが恐竜は、その母親さえ、足でふみつぶしてしまった。

「なぜだ。なぜ、そんな、ざんこくなことをしたんだ」幸夫はまた、 自分のそばを、

まわりながら通りすぎていく恐竜に、そう叫んだ。

おれの方へ走ってきた子供たちは、 「いいか、おれは恐竜なんだぞ」と、恐竜の声が幸夫の頭の中に、大きくひびい のことを、話のわかるカイジュウだと思っていた。ほかの、おとなたちも、おれのこと ざんこくなどいう、人間の考えかたはない。 おれのことを、おもしろいと思っていた。その母親も、 わかるか。これが、あたりまえなのだ。

いだったのだ」 ったのだ。お前はおれのことを、よく知っている。 を、子供にだけは害をあたえない、やさしい恐竜だと思っていた。だが、それはまちがい だから、 わかるだろう。それは、まちが

と思っていた。それは、まちがっていた。そのまちがったことを、子供に教えたのは、 ったい、だれかー たしかに、そうだった。恐竜は、もともとおそろしいものなのに、 おとなたちに、恐竜には話が通じるのだという、 一。幸夫は、千歳空港へ向かうバスの中で、そう考え続けた。 まちがった考えかたを教えたのは、 子供たちはおもしろ

た。いや、話しかけているのではなく、それは恐竜が、ただ考えているだけのことなのかも るように、こんどは南へ向かっていた。その恐竜は、ずっと幸夫の頭の中に、話しかけてい しれなかったが、その考えが、幸夫の頭には、なぜか、しみこむように、入ってくるのだった。 手もいるのだということをな。おれは、子供だって、へいきで殺すのだ。おれには、やさし い気持ちなんてものはないのだ。 「そうとも、おれは恐竜なのだ。けっして、おもしろいものではないのだ。恐ろしいも 恐竜は、 おれはそれを、人間たちに教えてやるのだ。話しあいなどというものが、 話のわかるカイジュウなどというものではない。おれには、人間の話など、通じない 札幌の町を、さんざん荒らしまわってから、幸夫の乗ったバスのあとを追 なぜなら、 おれは、 爬虫類なのだ。血の冷たい恐竜なの

325

そうだったのか 一人間たちに、知らせてやるとは、そのことだったのか - 。千歳空港から、ジェット旅客機で東京へ向かい 0 ながら、

し、そして、 の町であばれまわり、内浦湾を渡って函館の町にあばれこみ、 恐竜は、ジェット旅客機のあとを追って、さらに、南へ南へと進んでいた。 津軽海峡を越えて、本州へ渡ろうとしていた。 建物をたたきこわし、 千歳や、 人を殺

まったからにちがいない 東京へ帰ってきた幸夫の頭には、恐竜の声は、もう響かなくなってい - 幸夫はそう思った。 た。遠くはなれてし

うと、東京の人たちは話しあっていた。それはしかし、 かのように、幸夫には見えた。 スリルを楽しむような気持ちで、 いかわらずあばれまわりながら、 しかし、恐竜のうわさは、毎日のように、新聞やテレビで見たり聞いたりした。 東京へ向かっていた。 むしろおもしろがり、 恐竜をこわがっているのではなく、 恐竜がやってくるのを期待している いずれは、東京にもやってくるだろ

ろがったり、カッコいいと感じたりする人間だけを殺しているからだ。もちろん恐竜にして とひどいことになるぞー みんな恐竜のこわさを知らないんだ―― ば、逃げていく人間を追いかけなくても、 ―なぜなら、恐竜は、自分をこわがる人間には手出しせず、おもし 幸夫は悲しくなった。このままでは東京は、 彼を見ようとしてやってくる人間を殺すだけ きっ

42 つば 64 だっ たの か もし れ ない。 それ ほど、 恐竜をこわがらない 人間はたくさん 42 た

てきて、それは次第に、頭の中で大きくひびきはじめた。 恐竜が、東京 に近づいてくるにつれ、 幸夫にはふたたび、 恐竜の 声 が 聞こ えるようにな

ウルスなのだ。 こそおれは、恐竜としての権威を、とりもどすのだ。怪獣などではない。 くる、オモチャのようなカイジュウとは、わけがちがうのだ。わかったか。 今こそおれは、巨大な爬虫類とし 知れ。おれは、ほんとのおれは、映画や、テレビや、SFマンガ ての、トカゲの先祖としての力をとりもど おれはティラノサ わかったか。今 の中に出て

そして彼は、 ついに東京へあばれこんできた。

話せばわかりますと叫んで、子供たちが殺されているくせに、 たたき殺されてしまった。なぜ、そんなにあばれるのかと、いろいろ質問し、カイジュウを ジュウにキャラメルをやって、仲よく遊ぼうと思い、かけよってきた子供たちは、ぜんぶ、 てやろうという考えから、 ビ局などの建物も、第一番にふみつぶされた。恐竜を写真にとって、コマーシャルに使っ 東京タワーなど、テレビの電波を送る高い鉄塔は、まっ先に、片っぱしから倒され してやろうと考え、やってきたおとなたちも、ひとり残らず、 かけつけてきたカメラマンは、いちばん先にふみ殺された。カイ なおも対話しようとやってき ふみつぶされてしまった。

恐竜と道化

327

た母親たちも、すべてふみにじられ、 ぺしゃんこにされてしまった。

たき殺された。 れでもまだ、殺すのはかわいそうだと叫ぶ人たちがいた。そんな人たちは、 やっとのことで、 あのカイジュウを殺せという声が、あちこちから、あがりはじめた。 つぎつぎと、 た

とうとう、 自衛隊が出動し、ミサイルで恐竜を殺すことになった。

しかし、そんなことをいった人たちも、 ったことを後悔した。 ミサイルなどを使うと、 いっしょに、 たくさんの人が死ぬから、やめろという声もあった。 恐竜からいよいよ殺されそうになった時、 自分のい

たのである。 に向けて、ミサイルを発射した時には、 さらに、 いくつもの建物がこわされ、 すでに東京の町は、 何百万人もの人が死んだ。自衛隊が、 廃墟のようになってしまってい いよい

恐竜は、 胸にミサイルを受け て、 倒れ

いていた。 死んでいこうとする恐竜の、 さいごのつぶやきが、 幸夫の頭に、 かすかに、 かすかに 0 75

だ……恐竜とは、 「そうだ……それでいいのだ……。 はじめから、 こうして、殺されるべきだったのだ……そう……これでいい やっと、わかってくれた……人間は、そうあるべきなの

恐竜と道化

井辻朱美

工 ル トの断ちくずよりも色あざやけき丈夫なりしと物語は

頁岩とまじりあいたるよろこびに椎骨ながき陽を浴びい たり

暁きっ

新世の岩棚にふるき尾を垂らし風にふかれていし異星人

脂色にけぶりてあれよ顎骨のむかしの風を食みたるかたちに常い

太陽はむらさき色のコロナする しわ深きまぶたの見上げしシュロの葉

あたたかき肉塊の中に牙うめて生命はかくも赤きと思うあけぼの

みどり濃き森に棲むゆえ身をめぐる体液は指の先までおそろしき赤

波の痕なだらかにある岩にきて膝つけば暗きリンパの記憶名をデナ

歯を抜きし三日はたえず口中に血の味ありきわれもジュゴンも

体の道化が踊りつつゆくかユラ紀の森の

ヘピッパ

パッセズ〉

風奔るつかのまわれによみがえり硅石のごときあの世の太陽

釘のごと歯を鳴らしつつ過ぎたれば

そは大いなる帝王竜なり

水晶球投げ上げるとき全宇宙が吸いこまれたり あなにやしエオン

むらさきの穂先もて刺す水晶の岩床にきて擦られたる風

高熱にきらめきふくれるガラス液 ハドロサウルスのくちばし聖き

両棲類のあわき肺胞陽にけぶりピアノの音にたたかれてゆく

肉厚き声帯もちていたりしが共鳴孔のみ残る頭骨

凹凸のかすかにいまも陽をはじく恐竜の皮膚の他界の思い出

あたたかき毛をそよがせる恋人ら 見よ帝王竜の亡霊とおる

なだらかな砂漠に沈みしランボーの一本の足 海竜の耳骨

卵色の手袋ひらきちかづくは道化の幽霊 ユラ紀の夜の風

血の色のサボテンのように生えているこの世の辻の四角いポスト

サーカスの天幕のさきとがりいて星を刺したるままに揺れたり

肉茎をさしのばしたるかたつむり 他界の温度を感じていたり

こはたれの心臓なりしか薔薇水晶 水よりあげればピアノがひびく

大いなる海鰐の尾の旋転を恐れて泣けば真夜中の雲

唇をもつことのなかった竜たちはざらざらの顔で月を食いたり

339

見られた「恐竜」造形の一大カタログなのである。

さまざまにデフォルメされた恐竜たちの姿態を眺めていると、

いやでもひとつの事実に気

顎骨のひとつが月を浴びている あれは道化のおもちゃであった

素手よりも風の織り目にふれやすき指なし手袋かざして道化が

棍棒をたずさえてゆくかの道化 時空の辻をユラ紀へ折れる

収録作品解説

東雅夫

私は迷うことなく大きな声で、次の書名を告げるだろう。 数多ある「恐竜本」の中で、 とりわけ印象深い座右の一冊を挙げよ、 と求められたなら、

SCRAPBOOK Citadel Press, 1980) -ドナルド・F・グルートの『恐竜スクラップブック』(Donald F. Glut THE DINOSAUR

が渉猟しスクラップした……要するに同書は、 さらには、ミニチュア玩具やプラモデルの類に至るまでを、在野の「恐竜博士」グルート あるいは、映画やテレビのスチルから、 草創期の復元図から、パルプ・マガジンの挿絵やコミック、 博物館・テーマパー 大衆文化のヴィ アニメ、 ジュアル・イメージとし クの陳列模型スナップまで。 商業広告まで。 て夢

づかされる。

最新の科学的研究成果が造形に反映されるようになるのは、近年になってからの傾向であ しかも、造形の対象となる恐竜の種類が一部に限られている、という点である。

パーク」公開以後といってよい。 ルに代表される小型肉食恐竜が人気アイテムとなったのは、それこそ映画「ジュラシック・ た水棲爬虫類や、鎧竜(アンキロサウルスなど)、禽竜(イグアノドンなど)、帆立竜(ディ 倒的多数を占め、 メトロドンなど)あたりはアクセントに追加される程度。「ラプター」ことヴェロキラプト ……すなわち獣竜、 ティラノサウルス、アパトサウルス、 首長竜(プレシオサウルスなど)や魚竜(イクチオサウルスなど)といっ 雷竜、 剣竜、角竜、翼竜という慣用の「和名」を代表する五大恐竜が圧 ステゴサウルス、 トリケラトプス、プテラノドン

決めつけるわけにもゆくまい。 もっとも、これを一概に、 画一的な商業主義の弊害であるとか、子供だましの所為ゆえと

以降の出来事なのだから。 揺るがされる「恐竜ルネサンス」の激震がアカデミズムの世界を襲ったのは、一九七〇年代 U バート・T・バッカーを筆頭とする革新的恐竜学者の出現で、旧来の恐竜観が根底から

そしてまた、それら画一的で、 の恐竜造形は、 少なくとも私の目には今なお、 多くの場合、 非科学的でさえある「中世暗黒時代」 このうえなく魅力的に映るのだ。

なぜだろうか?

想の反映を読み解く愉しみも、無論のこと、ある。 それらのディテールに、各時代、あるいは各分野に生きた人々が「恐竜」に託した夢や妄

れているからではあるまいか。 竜の特徴的姿態が、さまざまなヴァリアントを許容し誘発する「元型」としての魅力にあふ しかしながら、 その根本的由来は、恐竜たちのフォルムー とりわけ、先に挙げた五大恐

言ではあるまい。 「ゴジラ」をはじめとする怪獣たちの造形に圧倒的な呪縛力を及ぼしてきた獣竜の卓越した フォルムは、人類が発見(発掘!!)した「幻想涵養装置」の最高傑作のひとつといっても過 かれた剣竜の異形、西欧的デーモンのプロトタイプともいうべき翼竜の幻怪……なかでも なだらかな山容を思わせる雷竜の優美、重戦車を連想させる角竜の重厚、過剰の美学に貫

ない、右に指摘したような「幻想涵養装置」の機能は活字メディア、とりわけ文学の世界に ヴィジュアル・イメージとしての恐竜について、冒頭から長々と綴ってきたのはほかでも ても十全に発揮されてきたと思われるからである。

を集大成する試みといえよう。 その意味で本書は、恐竜という名の幻想涵養装置が、 極東の島国で生み出した文学的所産

なす「恐竜文学」の基本テーマである。 想的な光景は、恐竜が隠れ 現代の大都会を恐竜たちがのし歩く……「街角のロ 棲む秘境での冒険行を描い た「ロスト・ワールド参入」と双璧を スト・ワールド」とでも形容す

同テ 念があふれている。その裏には、愚かしくも卑小なホモ・サピエンスに対する痛烈な諷刺と れるはるか以前に、 いまは亡きショー 絶望がこめられているわけだが……。 、ーマのエッセンスを抒情豊かに描き尽くした小さな大傑作。 人類には及びもつかぬ長大な期間、 かかるアイディアを思いついたのも恐るべし、だが、それにもましてこ トショ トの岳父・星新一が遺した本篇は、 その対比が、寥々と胸に迫る。 地上に覇を唱えた大先達に寄せる畏怖と敬愛の 「ガイア」の観念が提唱さ 凝縮された語り口 と構成で

危険水域 井上雅彦

の恐竜たちー イ・ハリーハウゼンから、フィル・ティペット&デニス・ミューレンの 「キング・コング」(三三)のウ ク」(九三)コンビに至るまで、 本物さながらのリアルさで咆哮し躍動するその勇姿は、 イリス 銀幕の魔術師(特撮監督)たちが生み出したスクリーン ・オブライエン、 、「恐竜1 0 大衆文化における恐 「ジュラシック・パ 万年」(六六)のレ

竜イメージ醸成に決定的な影響を与えてきた。

映画』(九七)から抜いた本篇は、レイ・ブラッドベリの傑作恐竜短篇「霧笛」(五一)の異 形の後日譚であると同時に、 からなるオマージュともなっている。 星新一の衣鉢を継ぐアイディア・ストーリーの名手である作者のモンスター映画フリーク **夙に有名だろう。その真骨頂を示したムービー・ホラー連作集『1001秒の恐怖** かれらヴィジュアル・エイジの恐竜創造者たちに捧げられ

どこか異星人グレイを連想させる頭部に、つるんとしたトカゲ男めく無気味な容姿で来館者 を出迎えているとか。 「恐竜人類」を御存じだろうか過去の翳・豊田有恒 ? カナダ自然博物館に展示されている等身大復元モデル

的な夢想に科学的裏付けを付与しようとする試みは、 (七七) 中での言及が点火役とな 新恐竜伝説』参照)。 もしも恐竜が絶滅することなく、 って、一気に学界に広まっ 高度な知的生物へと進化を遂げていたら……とい カール・セーガン『エデンの恐竜』 たのだそうである (金子隆一

ストーリーということになるー してみると、 セーガンの著書に先駆けて構想・執筆された本篇は、 世界初の

行人類が存亡をかけて闘う歴史改変テーマの長篇SF ることを申し添えておこう。 ちなみに作者には、本篇のアイディアをさらに発展させて、恐竜から進化した未来人と現 『ダイノサウルス作戦』 (七七)

大相撲の滅亡 小林恭二

読抱腹絶倒必至な「変格」恐竜SFの極致というべきケッサクに登場願おう。 初期の 同時代における恐竜科学の尖端的知見を意欲的に取り込んだ「本格」恐竜SFに 『小説伝』 から三島賞受賞の近作『カブキの日』に至るまで、奇想と不条理 0

激に突出しているのが、 を描き続ける作者には、 本篇を含む短篇集『日本国の逆襲』(九二)といえよう。 巧まざるユーモリストとしての一面がある。そうした嗜好が最 でも過

「巨大妄想」をめぐって示唆に富む考察が展開されている。 まとまった形としてはおそらく史上初の恐竜文学論の試みであり、本篇の要諦ともいうべき 本篇についてもいち早く言及されている巽孝之の『恐竜のアメリカ』(九七)は、 併読をお勧めしたい。

クラシック・パーク 景山民夫

「ジュラシック・パーク」変じて「妖怪ランド」と化す成りゆきも胸ときめかすものがある 恐竜幻想に仮託して末世の日本国を笑いのめす、機略縦横の傑作パロディ をもう一

以来の「恐竜愛」を貫いてみせた。 作者はさらにもうひと捻り、ダメを押すことで、 代表作『遠い海から来たCOO』(八

たのである。このアイロニーは、 た「開発+イベント」は、欧米における化石発掘=恐竜学発展の大きな原動力ともなってき れた狂騒絵巻は、 バブル景気華やかなりし頃、「町おこし・村おこし」の美名のもと列島各地で繰り広げら いまとなってはいっそ懐かしい感すらあるが、 なかなかに奥が深い。 思えば十九世紀中葉このか

○竜レストラン 荒俣宏

される運びとなったのだ。 ドナム移築にともない、恐竜たちの実物大模型を点在させた史上初の となった「イベント」としてもよく知られている。五四年、万博会場となった水晶宮のシ 一八五一年に開催されたロンドン万国博覧会は、大衆文化における恐竜イメ 「恐竜パ ージ形 が の端

監修責任者となったリチャード・オーエンは、「恐竜」という呼称の生みの親でもあ 博物学幻想の巨人アラマタの著作の中でも、とびきり美しい本のひとつである『図鑑の博 そんな恐竜幻想草創期の熱気と興奮が息づいている。 の片隅から拾い上げた、 この涙なくしては読めないささやかなエピソードに つった。

347

イグアノドンの唄 中谷宇吉郎

けよう。 滋味掬すべき……という形容がいかにもふさわしい、 恐竜随筆の知られざる逸品をお目に

旺盛なる「理科系の好奇心」を発揮し マにも臆することなく筆を進めた。 寺田寅彦の学統を継ぐ物理学者に して達意のエッセイ て、 しばしば心霊 で U スト M A であ つ (未確認生物) などのテ た作 者 は、 師 匠 10 n

その白眉たる本篇は、 の原風景を、静かに、 子供たちと、 細やかに、 子供 一抹の哀感をたたえて綴って、 の心を忘れ ない大人たちが抱く まさに余すところ 口 スト

水中生活者の夢 種村季弘

してやまなかった中井英夫……幻想文学の先達にも隠れ恐竜ファンは数多い 動作が怖いんだよなぁ」と映画「キング・コング」におけるW・オブライエンの手腕を称賛 右に出るものは少ないだろう。白水社版『現代ドイツ幻想小説』に編者みずから訳出収録 ・ワールド文学に関して、おりにふれ瞠目すべき見解を披瀝してきたという点で、作者の ドラコニアを自称し、「化石は生きていた」の新聞記事を丹念にスクラップし 「ティラノサウルスがちいちゃな前肢で、こりこりって首のあたりをひっかく、あ が、内外のロス

き恐竜ショートショートの佳作だった。 たマヌエル 『怪物の世界』で幕を開けたのは、伊達ではないのだ! ・ヴァン ・ロッゲム「窓の前の原始時代」(五八)も、 河出書房新社版〈種村季弘のネオ・ラビリントス〉 「午後の恐竜」に比肩すべ

古生物幻 想の作家・香山滋の 本質に迫る本篇は、 その最良の一例である。

湖上の怪物 W・A・カーティス (佐川春水訳)

した。少年時代の乱歩に忘れがたい感銘を与えた(江戸川乱歩「怪談入門」参照) 全国ン千人 (……ン百人!!) のハードコアな恐竜文学マニアの皆さま、 堂々の初復刻であります。 お待たせ ٤ 42 11 . う噂

御一読いただきたい ガジン」に発表された怪奇SFの先駆というべき作品である。 本篇の原題は The Monster of Lake LaMetrie で、 本篇発掘の栄誉は、 詳しくは両氏の共著『新・日本SFこてん古典』の「第二講 のだが、とりわけ會津氏による執念の探索ぶりには敬服するしかない。 ひとえに横田順彌&會津信吾の「こてん古典SF」コンビ 一八九九年、 米国 失われた世界 の「ウィ ンザ へ」を是非 せ 5

換期に活動した米国の大衆作家で、本篇のほか、 Us なるソ 作者のウォードン・アラン・カーティス (Wardon Allan Curtis 1867-1940) ロモ ンの封印」(一九〇一)、東洋風ファンタジーと怪奇ミステリーを融合させ アラビアン・ナイト風のファンタジ 一大

『ミドルトン氏の奇怪な冒険』(〇三)などを残している。

当時、正則英語学校・法政大学の英語講師の職にあり、本書に先立ちコナン・ドイル原作の 本 訳者の佐川春水に関しては、明治四十(〇七)年に本篇が英和対訳本として出版され 『銀行盗賊』を公刊していたということしか分からない。

我が れていたとは!「過去の翳」といい、本篇といい、 それにしても明治末に、このような恐竜ホラーの怪作が、 国は欧米の恐竜先進国にも決してひけをとらないと思うのだが……如何? こと「文科系の恐竜学」に関し ほとんどリアルタイムで紹介さ

楢ノ木大学士の野宿(抄) 宮沢賢治

ション(?!)を満喫していただこう。 きには、『春と修羅』の詩人が鉱物幻想の極致をたおやかに詠いあげた本篇で、 読みやすいとはお世辞にもいえない明治の文語文(と、 その奇ッ怪な内容) に疲弊 リラクゼー

なく、 らす夢幻の光輝をかくも純度高く描いた作品は、海外にも例がないように思う。 恐竜文学史の劈頭を飾るジュール・ヴェルヌ『地底旅行』(一八六四)を持ち出すま 地底世界幻想とロスト・ワールド憧憬は因縁浅からぬ関係にあるが、その交錯がも いでも

物たちの愉快な宴の光景も、 紙幅の制約から涙を呑んで割愛した「野宿第一夜」と「野宿第二夜」に描か 機会があれば是非目を通していただきたいものである。

冶 吉田健一

作「ファンタジア」(これまた「幻想涵養装置」がフル稼働された一例だろう)をゆく 名品を、もう一篇。 くも想起せしめるところがある。 地質学的夢想が喚起するロスト・ こちらは、その壮大さと疾走感において、初期ディズニー・アニメの名 ワールドの幻景を描い て読む者を陶然たる境地へと誘う りな

怪物・謎の動物』(六四)を嬉々として著す茶目っけたっぷりな一面があった。 た作者には、ネス湖の怪物や雪男、マンモスなどの怪しい消息を綴ったUMA随筆集 英文学の深い素養に裏打ちされた特異なスタイルの散文で、戦後文学に独自の地歩を占め 『謎の

がうかがえるに違いな 融通無碍という言葉を絵にかいた如き趣の本篇からも、 その恐竜怪獣フリー ク んぶり

恐竜展で 清岡卓行

夢と』(八二) 夢」をモチーフとする詩や散文の紡ぎ手として定評のある作者は、 恐竜たちは現代詩の世界にも、 のあとがきで、次のように記している。 こんな愛すべき足跡を刻している。 本篇を収めた詩集 幼幼

それは、

中年も終りに

351

近い父が、 えて感じる、寂しさだろうと思われます」 幼い末っ子と同じ地球のうえであとどれだけい っしょに生きられるだろうかと考

れるべきものだろう。 この「寂しさ」は、 「地上の過客」たる恐竜と人類、 それぞれ の行く 末にも重 ね合わせ

ケラトプス 河野典生

父と子と、 恐竜の物語を、 今度は散文で味わっていただこう。

もある。 田正紀の長篇『竜の眠る浜辺』(七九)と並ぶ「街角のロスト・ワールド」テーマの傑作で る非現実の世界を活き活きと描き出した現代版「驚異博物誌」であり、「午後の恐竜」や山 本篇を含む連作短篇集『街の博物誌』(七四) は、都市生活者の日常をひそやかに侵犯す

する恐竜たちの群れ)を見おろして息を呑むシー 就中、 サイ クリング に出かけた父と子が、丘の上から新興住宅地 ンの描写は、 このうえなく美しい ٤ 重なり合っ 7

恐竜 野浩

一時期、 ペキュレイティヴ・フ その代弁者として論陣を張った作者が、 ィクショ ン」という言葉が 魅力的な輝きを放っていた、 おりにふれ世に問うた物語の中 には、 の懐か

粗削りだが一読忘れがたい原石の輝きがしばしば含まれ ていた。

は過ぎ去った「日本SFの青春」 青春の鬱屈と断末魔の恐竜の咆哮が、驚くべき大胆さで が息づいているのだ。 つかのま交錯する本篇には、 61 ま

ここに恐竜あり 筒井康隆

限りなく頽落 悍な獣竜型から滑稽なカエル型へと変貌していった。 に思えてならない。ひかえめだった前肢は人間並みの太さと長さに進化 第一次怪獣 していった過程は、図像的には、その「恐竜性」の喪失として顕れていたよう ムの終息期、 怪獣王ゴジラが、 核時代の恐怖の権化から幼児の愛玩 ? 頭部は精 へと

間である私ですらそうなのだから、当の恐竜たちがその惨状を目撃したら、 慨することだろう……といったような、 で結ばれるかもしれないが)共有の「思い」を、 そんなゴジラの変質は、子供心にもなにやらん腹立たしく情けない気がしたも したのが、 本篇である。 怪獣ファンと恐竜ファン(しばしば両者はイコー 作者ならではの強靭無比なファ さぞかし悲憤慷 ルス Ď だ が、人 0

と本書を通じてのグランド の意味でこの作品は、 国産怪獣文学と恐竜文学の集大成をもくろんだ前著『怪獣文学大 . フ イナ レにふさわしい物語といえるのではなかろうか。

恐竜と道化 井辻朱美

右することにもなりかねない。 エンディング・クレジットの背後に流れるテーマ音楽の良し悪しは、 その映画の印象を左

る次の一節を引いて、 ンタジストの手になる幽艶な恐竜短歌ほどふさわしいものはあるまい 作者の恐竜エッセイ「水族あるいは Otherness」 D ースト ・ワールドの夢へと読者を誘うララバ 結びに代えよう。 イも から、 しくは鎮 ロスト・ 魂歌として、 ワー ルドの暗冥を触知 当代きっ てのファ

それは博物館のしんと冷たいわずかホルマリンくさい空気とあいまって、 存在するはずではなかったものを見てしまっていることの異質さが。昼日中の亡霊。 ness を発散しながら、 したちはこの生き物から生まれてきたのだ。それを思うと、 くなるような何億年もの過去から、現在にひきずりだされたものの、おそろしい いるばかりだ。 しかもまぎれもなくそれは人間とにかよったかたちなのだー かれらにはわからないのだろうか。このことの意味、 らやか n らには肉も 歯茎を失った口にたけだけしい歯をむきだし、 わたしたちを見下ろしている。親子づれが平然とその前を通り過 血も な 67 黒ずんだ骨格標本として、 わたしは目先がくらくらし、 あってはならぬこと、 博物館の片すみにたたずん ―をかたむけて、 うつろなゆがんだ頭骨 背すじにぞうっ Other-気の遠 わた

崇高とはこれかもしれぬと、わたしはイグアノドンや高さ二十五メートルのブラキオザウ ルスを見あげながら感じる。ヌミノーゼ。ある絶対的な存在を前にしたときの、 とするものを走らせる。 まったくの Othernessの感じ。 崇高 の定義 のなかに恐怖をくわえた美学者は正しかったと思う。 畏敬と恐

九九八年九月

ここに恐竜あり(筒井康隆)「西日本新聞」一九六九年四月三日号恐竜(山野浩一)『X電車で名といる 著書子 恐竜展で(清岡卓行)「文藝」一九八一年十月号 楢ノ木大学士の野宿(宮沢賢治) 生前未発表 十字屋書店版全集第五巻 湖上の怪物(W・A・カーティス) 『湖上の怪物』建文館 一九〇七年九月 水中生活者の夢 恐竜レストラン(荒俣宏)『図鑑の博物誌』リプロポート 一九クラシック・パーク(景山民夫)「小説新潮」一九九三年十月号 トリケラトプス(河野典生) イグアノドンの唄(中谷宇吉郎)『イグアノドンの唄』文藝春秋新社 大相撲の滅亡(小林恭二)「小説新潮」一九八九年新春号 過去の翳 危険水域 午後の恐竜(星新一)初出誌・単行本一覧 (吉田健一) (井上雅彦) (豊田有恒) 「群像」一九五七年三月号 (種村季弘) 香山滋『海鰻荘奇談』解説 桃源社 一九六九年十二月 「奇想天外」一九七七年三月号·四月号 「日本版ファンゴリア」一九九六年一月号「竜のいる風景」改題『午後の恐竜』早川書房 一九六八年十月 『午後の恐竜』早川 「SFマガジン」 一九六五年十二月 一九八四年三月 一九五二年十二月 一九四〇年十二月



恐竜文学大全

東雅夫

九九八年一一月四日 初版印刷 初版発行

発行者 河出書房新社

〇三-三四〇四-八六一 (編集) 東京都渋谷区千駄ヶ谷二-三二-二 振替口座 〇〇一〇〇-七-一〇八〇二

デザイン 栗津潔

印刷·製本 中央精版印刷株式会社

ISBN4-309-40554-1 ©1998 Printed in Japan 落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。 定価はカバーに表示してあります。

フランス怪談集

日影丈吉[編]

46066-6

古代の女神像ヴィーナスに突如霊が宿ったのか? ある日人が殺される……短編の名手メリメによる古典的傑作「イールのヴィーナス」をはじめ、ジュリアン・グリーン「死の鑵」の本邦初訳など12篇を収録。

イギリス怪談集

由良君美〔編〕

46070-4

イギリスは怪奇幻想譚の本場であり、怪談の名手を数多く生んだ。ブラックウッドの「空き家」、ウェルズの「赤の間」、ストーカーの「判事の家」など、名品19篇を精選した豪華版傑作集を新訳でおくる。

ラテンアメリカ怪談集

鼓直〔編〕

46080-

ボルヘス、コルターサルを始め、アンデルソン=インベル、ムヒカ=ライネスなど本邦初訳10編を含む15作品が描き出す、ラテンアメリカの不思議な怪。「魔法の書」や「断頭遊戲」など未体験ゾーンをあなたに!

中国怪談集中野美代子/武田雅哉〔訳〕

46095-X

食人の記録から壮大なSF宇宙論、天安門事件の共産党声明文まで幅広く 取り上げ、中国的感性の途方もない巨大さを丸ごとすくいあげた異色のアンソロジー。 現実がフィクションを食いつくす中国の恐怖記録。

東欧怪談集

沼野充義[編] 46136-0

吸血鬼を生んだ魔術的世界へようこそ。ポトツキ「サラゴサ手稿」バシヴィス(I・シンガー)「バビロンの男」等異色の作品からマケドニア等本邦初訳の作品まで、原語直訳の待望のオリジナル・アンソロジー。

くるみ割り人形とねずみの王様

E·T·A·ホフマン 種村季弘〔訳〕

46145-X

チャイコフスキーのバレエで有名な「くるみ割り人形」の原作が、今、新 しい訳でよみがえる。「見知らぬ子ども」「大晦日の冒険」をあわせて収録 したホフマン幻想短編集。冬の夜にメルヘンの贈り物を!

怪獸文学大全

東雅夫[編]

40545-2

ゴジラ、モスラ、マタンゴ、ガブラ、マグラ……怪獣を主人公にした、幻の名作を集大成した決定版アンソロジー。純文学からホラーの元祖、さらには哲学的な考察まで、荒々しくも孤高な怪獣たちの夢の饗宴!!

不気味な話 1

江戸川乱歩

40433-2

人間は遠い昔から「不気味なもの」に深い恐れと憧れを抱きつづけてきた。 日本を代表する作家たちの残した幻想短篇を集大成したシリーズ第一弾。 人外の恋、異形楽園、犯罪幻想、真の乱歩の世界がここにある。

不気味な話 2

夏目漱石

40442-1

遥かな異郷の地の血腥い伝説、自らの夢の深層に蠢く暗い欲望の流れ、そして臨死体験……。われわれが見慣れた、国民作家・漱石ではなく、異形の世界に住む幻視者・漱石の姿がここにある。漱石幻想短篇のすべて!!

世界幻想名作集

澁澤龍彥[編]

40488-X

「ウンディーネ」「フランケンシュタイン」等、 澁澤龍彦選による幻想小説 の名作十篇を、種村季弘、中井英夫、河野多恵子、大庭みな子、後藤明生 等が語り直すアンソロジー。併せて澁澤による「幻想美術の流れ」を付す。

暗黒のメルヘン

澁澤龍彥[編]

40543-6

異界への果てしなき夢、ノスタルジー、禁断の幻影……澁澤龍彦が選ぶ非 現実と幻想の時空。16名の著名な作家の短篇をまとめた珠玉のアンソロ ジー。現代日本文学のひとつの頂点を示す幻想パノラマの世界。

契丹伝奇集

中野美代子

40467-7

蜃気楼、砂漠、迷宮の都市……。広大な中央アジアを舞台に繰りひろげられる、時間と空間を超えた奇想天外な不思議の世界。古今東西の正史秘史に精通した、中国文化史家・中野美代子の初の幻想小説集。

薔薇十字の魔法

種村季弘

40368-9

謎の秘密結社として知られる薔薇十字団。世界救済のみちびき手としてた えず待望されつづけたこの不可思議な幻の集団の教理を分析しながら、そ の正体にせまるエッセイ集。

謎のカスパール・ハウザー

種村季弘

40502-9

十九世紀初頭のドイツに突然現れた一人の野生児。彼こそは死んだはずの 王子なのか? それとも詐欺師か? びんの中の謎の手紙で幕を開け、殺 人によって終わりをとげた怪事件の真実に挑むスリリングな評伝。

錬金術とタロット

R・ベルヌーリ 種村季弘〔訳〕

47235-4

C·G·ユング主宰の『エラノス年報』に発表された錬金術とタロットに 関する有名な論文に編者種村季弘の関連エッセイを付したオカルティズム 論集。残された豊富な図像を解読しながらその思想大系を解明!

突然変異幻語対談

筒井康隆/柳瀬尚紀

40390-5

『文学部唯野教授』を執筆中の小説家と、ジョイス『フィネガンズ・ウェ イク」訳出中の翻訳家が、数回の往復書簡と対談でくり広げる、空前絶後、 一読驚愕の文学原論。言葉芸と虚構の本質をつくレクチュア。

筒井康隆の文芸時評〔文藝コレクション〕

筒井康隆

40475-8

小説の読み方、書き方がわかる!「断筆」の理由はここでしか読めな い! 筒井流「感情移入批評」を実践し、数々の小説を読み説いた、読ん で楽しい、話題爆列!最初で最後の文芸時評。

驚愕の曠野 (文藝コレクション)

筒井康降

40515-0

おねえさんが子供たちにきかせる「天井まで届くほどの長い物語」の目眩 く断片の万華鏡。ファンタジーの終りから始まる終りなき夢の鎖を紡ぎな がら、書物の曠野に時を超えてめぐる新しい小説空間をひらいた実験作。

吸血鬼幻想

種村季弘

40046-9

文学、映画、絵画などに出現する吸血鬼の影を追い求めながら、戦慄すべ き血とエロチシズムにみちた夜の世界、死と生が交錯する境界領域を縦構 に考察するエッセイ集。種村版〈吸血鬼大全〉。

アナクロニズム

種村季弘

40109-0

UFO、地球空洞説、魔術など、かつて熱狂的に信じられ、今や文化的ガ ラクタとして周辺におとしめられてしまった古ばけたイメージの数々に再 びスポットをあてながら、その魅力を物語る種村版《締想の博物誌》。

怪物の解剖学

種村季弘

40179-1

ゴーレム、機械人間、巨人伝説など、人間の夢と欲望を凝縮した人工生命 の系譜を歴史の闇から再生させ、神と人間の間に介在した幻想の生物のな かに、蘇るべき祝祭空間をさぐる綺想の現象学。

悪魔礼拝

種村季弘

40214-3

古代ギリシャから現代に至るヨーロッパ悪魔学の系譜をとりあげながら、 悪魔礼拝をめぐる奇怪な習俗・信仰を紹介し、悪魔払いとしての近代文学 が成立する過程を論ずる異色作。

詐欺師の楽園

種村季弘

40279-8

「詐欺とはインテリの犯罪である」――口八丁、手八丁、モト手いらずの 才覚だけで、人々を煙に巻きつづけたヨーロッパのペテン師たちの神出鬼 没の活躍を描き、トリックスターたちの肖像を活写する痛快エッセイ!

影法師の誘惑

種村季弘

40323-9

幼少年期に強く心ひかれた幻想、魔術、見世物、覗きからくり、映画、時 計、人形、といったオブジェやイメージの眩惑の秘密をめぐって、少年が 意識する自己の分身としての影を考察する夢幻的なエッセイ集。

恐竜の謎

J・N・ウィルフォード 小畠郁生[監訳] 25039-4

最初の恐竜化石の発見から最新の情報まで、恐竜に憑かれた男たちの数々のドラマをおりこみながら描く、ビュリッツアー賞受賞の科学ジャーナリストによるユニークな恐竜発見史!

恐竜 地球環境からみた恐竜の進化と絶滅の物語 Mr. & Mrs. ツェルカス 小畠郁生〔訳〕 25055

世界的に有名な恐竜イラストレーターの新作90枚をもとに、最新の学説 をふまえ、恐竜の発生から絶滅までを、地球的視野から物語る恐竜本の最 高傑作! 失われた驚異の世界へご祝徒

肉食恐竜事典

G・ポール 小畠郁生[訳]

25061-0

恐竜のなかでも最も興味深く進化史上でも多くの謎をひめた捕食恐竜を全てとりあげて解説する恐竜ジャンル別事典!! 第一部で全体像を解説。第二部で別種目別の全恐竜を詳細にデータ化する!!

恐竜 過去と現在 (1・2)

S・J・ツェルカス/E・C・オルソン 小畠郁生 [監訳] 25069-6 25070-X 恐竜はどのようにイメージされ描かれてきたか。過去100年にわたる恐竜画を収集し、イメージの変遷をたどりながら恐竜観の変化をあとつける。あわせて恐竜研究の最先端を紹介する。

オウムガイの謎

P·D·ウォード 小畠郁生[監訳]

25074-2

先史時代からの「生きている化石」を捕らえるため、生命を賭して太平洋 の深海に挑んだ科学的冒険の記録。謎にみちたオウムガイの生態を解明す る感動の科学ノンフィクション。

シーラカンスの謎

K·S·トムソン 清水長〔訳〕

25081-5

八千万年前に滅んだとされていた「生きた化石シーラカンス」は、人類を含む高等脊椎動物の進化のジグソーパズルを解く重要な鍵である。その謎に挑んだ科学者たちの驚異の物語。